

602

602-241



1200501530681



著シマアラツケ
ルネン ト
篇ニ外

譯吉豊秦



版出社潮新



解 説

作者ベルンハルト・ケッラアマンは千八百七十九年(明治十二年)三月四日、獨逸フュルトに生れた。父は小官吏。學歷はミュンヘン工科大学に通つた事があるだけである。外國旅行に費したる日多く、伊太利、佛蘭西、英國、米國、日本、波斯、印度等足跡普く、歐洲戰爭中は從軍記者として西部戰場に活躍し、獨逸文藝院會員に推舉された。現住所はエルデル・アン・デル・ハアフェル。

ケッラアマンの作品は、「エステルとリイ」(熱望の小説、千九百四年)、「インゲボルグ」(長篇、千九百六年)、「痴人」(長篇、千九百九年)、「海」(長篇、千九百十年)、「日本の散歩」(旅行印象記、千九百十年)、「さつさ・よ・やつさ」(日本の手踊研究、千九百十一年)、「トンネル」(長篇、千九百十三年)、「西部戦線」(從軍記、千九百十五年)、「アルゴンネルワールドの戦」(皇太子キルヘルム序、千九百十六年)、「十一月九日」(長篇、千九百二十年)、「聖なる人々」(中篇、千九百二十二年)、「シユエデンクレーの經驗」(中篇、千九百二十九年)、「シエレンベルグ兄弟」(長篇、千九百二十五年)、「ミュンステルの再洗禮者」(五幕物戯曲、千九百二十五年、初演千九百二十五年十月十六日、デツサウ、フリードリヒ座)、「波斯の隊商の道にて」(旅行記、千九百二十八年)、「神々の道、印度、小西蔵、シヤム」(旅行記、千九百二十九年)等がある。

なぜこの三篇を選んだか

長篇「トンネル」は作者ケッラアマンの最も代表的の作品である。その著作時期は大戦前であつて、今日から見れば多少舊作とも思はれるが、大戦後の小説に於て、「トンネル」を凌駕するだけの力作はない。しかもケッラアマンの全作品を通じて「トンネル」程最も尖端的にこの作者を現すものがない。「トンネル」は今日に於ても、獨逸で最も愛讀されてゐる長篇大衆小説の一つである。その版数を重ねた點については、戦前の「トンネル」戦後の「西部戦線異状なし」と並稱される位である。ケッラアマンの作品には、短篇又は比較的短い中篇がないので「トンネル」に配するに、他の小説を持つてくる事は甚だ困難であつた。そこで、本書一冊の一定した分量上、且つ「トンネル」が純歐米的の題材であるに對して、この異國的な作者の見たる日本を紹介することにした。但し「日本の散歩」の一篇から、譯者は最も興味ある都市のみを抜萃して冗長を避けた爲に、これは「日本印象記」といふ名で紹介する事にした。

ケッラアマンは大衆作家なり——譯者は、この「トンネル」の讀者に對して、ケッラアマンは大衆作家であつて、この全集に收められた多くの他の藝術主義作家とは異なるものであり、従つて「トンネル」もまた大衆小説であることを念頭に置かれることを切にお願ひしたい。大衆小説と藝術小説とは、その價値にどんな上下があるか。これは又別の問題である。

二十世紀の初めに柏林第一流の出版商のフィッシュヤア書房では、多くの有望と認められた新進作家の作品叢書を發行した。その中に數へられた顔觸には、ヘルマン・ステエル、トオマス・マン、エミール・シュトラウス、ヤアコップ・シャッ

フナア、ヘルマン・ヘッセ、フリドリヒ・フッフ、エツアルド・フォン・カイザリンク、ヤアコップ・ワッサアマン等があつた。かういふ作家が華々しく打つて出た獨逸文壇で、しかも右のやうな人達が純藝術主義派であつた間に、幾分でも大衆性を帯びた作家にワッサアマンがあり、更に以上に大衆作家であるのがベルンハルト・ケッラアマンであつた。ケッラアマンを之等の作家達に比べて、最も優れた點は、極めて熟練した技巧と、讀者心理の巧妙なる把握と、作品の效果に關する驚くべき知識である。こゝに於てケッラアマンを批評して、名人と呼ぶ人が多い。同時にケッラアマンの缺點とされる處は、その作品の内容性である。ケッラアマンの才筆は他の多くの作家を凌駕してゐる。けれどもこの作家は餘りに才筆を濫費して、甚だ表面的に走つた批難も少くない。例へばカイザリンクの精神的な基調、ステエルの内面的苦悶は、ケッラアマンの作には多く見られる處ではない。大衆作家としてのワッサアマンに比べても、なほ皮相的のそしりを受けるであらう。けれどもケッラアマンは、かういふ純獨逸作家に比べれば、その取材の範圍に於て、その構想の大きさに於て、その描寫の明快さに於て、その色彩の國際的なるに於て、すべて他の作家に見られない異色を示したものである。特にケッラアマンはもつと重大な意味に於て他の作家と異つてゐる。それは常に藝術に對して甚だ窮屈過ぎる獨逸小説壇に於て、甚だ大規模な且つ大膽な通俗小説家、大衆小説家として名乗り出た事である。ケッラアマンは偉大なる藝術主義者ではないかもしれぬが、好ますべき大衆作家である。他の作家がすべて象牙の塔に籠り勝なるに反して、ケッラアマンは易々として街頭大衆の中に投じたのである。獨逸文壇では、この頃でこそ大衆作家は珍しくない。けれども今から二十五六年前に於て、この舉を敢てしたケッラアマンの非獨逸性は、決して看過すべきものではない。

ケッラアマンの作品には、北塊の作家クヌウト・ハムズンの影響が多いと見られてゐる。ハムズンの小説「飢ゑ」の激

越な感情の自然性が甘くされて、ケッラアマンの小説「インゲボルグ」の洗練された美しい感情生活となつたと説く人もある。初期の作品「エステルとリイ」や「インゲボルグ」は、今日の大戦後の青春男女諸君の興味を牽くものではなからう。けれども、その華々しい甘美な恋愛小説は、また大戦前の「エルテル」と見ても好いが、この初期の時代に於てすら、この作家の豊富な才能の浪費を以て、ケッラアマンの弱點として惜まれたものである。

「エステルとリイ」や「インゲボルグ」には、叙事詩的筋書に乏しく、一種の戀愛讃歌に出来上つてゐるに反して、第三の小説「痴人」は、甘美な光に色どられた抒情詩的感情の渦巻が、はじめて叙事的な筋によつて整頓されるに至り、「痴人」に於てこの作家の人間の並に藝術家的發展が評價されたと言つてよい。この小説はハムズンの小説「神祕」ともよく比較されるもので、その人物もハムズン型だと言はれてゐる。この小説に於てもケッラアマンの抒情詩的情緒は、最後に至るに従つて濃くなつて来て、「インゲボルグ」に現れたケッラアマンの詩人としての姿が、再び顔を出してゐる。ハムズン型も、この小説を以て最後としてゐる。

「痴人」の次の「海」では、この小説家の旅行家としての姿が次第に現れて来てゐる。この作品は、小さなブルタニエの漁村を題材とし、主人公は遠い世界の端へ出掛けようとして、前の作品に見られる戀愛小説的古さは悉く捨てられ、國際的作家としてのケッラアマンの面影が、漸く顯著となつて来てゐる。極めて潑刺とした印象主義的色彩に富んだ作品だ。「海」には思想、苦惱は認められないで、外面的な體驗と束縛されない衝動的享樂を列べたものとするのが、この作に對する非難である。

その次の小説が「トンネル」である。「トンネル」は、ケッラアマンの作品の中で、最も好評を得たものであり、獨逸で最も多くの讀者を獲た作品の一つである。その構想に至つては、ケッラアマンの従來の作を初め、この時代の作家に

到底見られない野心的なものであり、來るべき機械時代に於ける人間の偉力と金力を縦横に描寫して、その空想的なる點に於て、しかも今から十數年前に於て、今日の科學觀から見て少しも荒唐でない觀察をしてゐる點を見れば、ケッラアマンの叙事的才能が、決して單なる達筆に終始してゐるものでない事を知るのである。大西洋の海底にトンネルを貫通して、之に依つて歐米間の交通を目論む事は、ツエッペリン飛行以前に於ける歐米技術家の一大野心であつたかも知れない。然しこれを小説化さうとした大膽と、その具體的事實の適確さに於て、ケッラアマンの空想は誠に驚嘆すべきものである。これ丈の構想を敢てただけでも、この作家は明かに純獨逸的な狭小な眼界に動いてゐる他の小説家とは比べられない、動的な國際性を持つてゐる。今日の獨逸で、これ程の構想の作品を探すならば、テア・フォン・ハルボウの「メトロポリス」でも持つて來なければならぬ。「メトロポリス」の非現實性に比べて、「トンネル」の現實性がどれ程科學的に組立てられてゐるか、これは讀者の容易に知られる處である。一つの科學小説としても、冒險小説としても、獨逸には他に見られないケッラアマンの最大傑作として、今日に至つても尙讀者を絶たない所以である。

歐洲大戦の間ケッラアマンは「伯林毎日新聞」から派遣されて、西部戦線に従軍記者として活躍して、優れた戦線記が「西部戦線」といふ本になつて出てゐる。大戦後の獨逸の混沌たる經濟生活中に苦んでゐる二つの型として、飽く事なき金と享樂の搾取者と、自己犠牲的な人道主義者を描いてゐるのが、「シエレンベルグ兄弟」である。この小説は映畫化されたが、コンラッド・フアイトが一人で性格の異なる兄と弟とに扮した。唯この小説の範圍は、戦後の獨逸の特殊な生活の爲に、外國の讀者には感銘が乏しい。この小説と並んで世に現れたものは、獨逸革命を題材とした「十一月九日」である。この二篇の小説は、いづれも計畫的に筋を追うて一直線に進んで行つて、讀者の頭にはごく入り易い。それだけに精神的理想的なものに乏しいかも知れない。けれどもその時代の問題と情緒を捉へ、今日の讀物を

提供する大衆作家としてのケッラアマンの機敏と才能には、誰しも驚かないものはない。

ケッラアマンの全作品を通して見て、これを燦爛たる花火に比べた批評家がある。それは眩惑的な曲線となり、瀧となつて、読者の心の空に打上げられる。読者はその瞬間を樂むけれども、次の瞬間はまた闇の空を見るとの意である。ケッラアマンは偉大なる不世出の藝術家ではない。けれども今日の読者に必要なる、一般大衆の需めんとするものを提供する作家である。大衆は常に巨大な彫像のみを鑑賞するものではない。一瞬にして消える花火をも娛むものである。ケッラアマンの作が見上げるばかりの巨人像でないと云つて非難するのは當らない。燦爛として空に耀く花火は、誰の目にも入り、誰の位置からも眺められ、誰の耳にも快く聞える音を響かせ、誰も共に見て、これを娛み嘆賞し得るものである。飽くまで大衆を喜ばせる作家である。獨逸には甚だ數の少い大衆作家として、ケッラアマンの右に出づるものは、先づ無いと考へてよい。

日本に來たケッラアマン——ケッラアマンを日本の讀者に結び付けるものは、この作家の書いた二篇の日本印象記録である。しかもこの二篇は、他の多くの外國人の日本旅行記に比べて、全くその種類を異にした記録である。

ケッラアマンは戰前千九百九十九年に西比利亞鐵道で日本へ遊びに來て、東京、横濱、京都、宮島、大阪等お定りの見物旅行をやつてゐる。こゝまでは決して珍しい旅行家でもない。けれどもこの日本旅行の間で、結局どこが氣に入つたかといふと、稿の財布も空になるとさへ言はれた丹後の宮津である。この小さな海邊の町の藝者が大に氣に入つて、旗亭荒木屋で大盡遊びをやつたものである。今から二十年前の宮津の事であるから、定めて西洋人は珍らしかつた事であらう。けれどもケッラアマンには、狡猾な東京大阪の女よりも、無邪氣で親切な田舎藝者の方が、異郷を放浪する

旅客には、大いに安心と親しみを感ぜさせたものであらう。その證據には「日本印象記」にも「さつさ・よ・やつさ」に於ても、獨逸人特有な悪意の觀察は少しも認められない。殊に「さつさ・よ・やつさ」は、この田舎藝者を相手にした日本手踊りの研究書である。しまひには、この大きな獨逸人も、メリンスの振袖の半玉と一緒になつて、さつさ・よ・やつさと踊り廻つてゐる。これ程日本の讀者に親密を感じさせ、しかも外國人の皮肉と自負を見せてゐない、愉快な旅行記は未だ嘗てない。この愉快な、氣取らない獨逸人は、獨逸人の性格としても甚だ稀に見る國際性を持つてゐる。英米人には絶對に見られない愉快な獨逸人である。尤も丹後の宮津で現を抜かしてゐたケッラアマンは、年僅かに三十歳の遊び盛りで、すでに「インゲボルグ」、「痴人」、「海」を著いた後の新進作家として、勢の好い時代であつた。「トンネル」はこの日本旅行を終つて歸國した後の第一作である。「トンネル」の中には一人の日本人技師も出てくるが、その忠實なる仕事振を褒めた一節も、ケッラアマンの日本の好印象の一端だと考へてよい。

長篇「トンネル」は、大西洋の海底をぶち抜く世界的大難工事である。讀者も定めて疲勞なさに相違ない。そこでその間には一息つく積りで、吉原でも、奈良でも、花魁道中でも、日本印象記について見物下すつて、或は丹後の田舎藝者でよろしければ、「さつさ・よ・やつさ」と踊らして御覽になるのも、亦一興かと思はれる。(秦 豊吉)

目次

トンネル……………一

さつさよやつさ……………三二

日本印象記……………三六二

カゴの繪——「トンネル」の主人公マツク・アラン。

トンネル

ベルンハルト・ケツラアマン作
秦 豊 吉 譯

第一編

この季節第一の呼物は、何と云つても、マヂソン・スクエア會堂の新築落成披露音樂會であつた。これは古今を通じて超特級の音樂會の一つであつて、オオケストラの樂士の數が二百二十名、その中のどの樂器も、夫々世界的名聲のある音樂家が之を受持つて、指揮者として拔擢されたのは、現代で最も尊敬されてゐる獨逸の作曲家某氏で、僅か一夕の出演に、六千弗といふ未曾有の謝禮を貰つたのである。

入場料には、流石の紐育つ兒も、度膽を抜かれたものである。三十弗以下ではとてもこの場所も手に入らない。そこへ抜目のない切符仲買の連中が、到頭、棧敷券一枚を二百弗からそれ以上に迄せり上げてしまつた。苟も音樂愛好

者を以て任ずる程の者は逸してならぬ大演奏會であつた。もう夕方の八時頃には、二十六丁目、二十七丁目、二十八丁目、マヂソン通りは、爆鳴を發しながら待ちきれずに身を震はしてゐる無数の自動車で、すつかり封鎖されてしまつた。切符を取次いで賣る連中は、轟々と詰め寄せる自動車のタイヤの間に命を任せて飛び込んで、十二度の寒さと云ふのに大汗を掻いて、弗の紙幣束を手に、氣違ひのやうに走つて来る自動車の無限の激流めがけて、眞向から無茶苦茶に飛び込んで行く。さうしては車の昇降臺と云はず運轉手席と云はず、屋根の上へまで跳びついて、その囁がれ聲で吼え立て、モオタアの急射撃を、更に幾倍にもさせようとするのである。

「いりませんか。御用はありませんか。平土間が二枚、列は十番目、棧敷席が一枚。平土間が二枚……」

斜かひに吹きおろす霰は、機關銃の彈丸のやうに往來の上へ叩きつける。

トンネル

一

どれかの自動車の窓がちやんと鳴つて、「此方へくれ」と云ふ聲がすると、忽ち賣子達は目にも止まらず潜水夫のやうに、復た車の間へ躍り込む。けれどもその賣買が済んで、金をポケットに押込んである間に、この連中の額の汗の滴は、もう凍りついてしまふのである。

音楽會は八時に初まる筈であつたが、八時を過ぎる事十五分になつても、まだ見渡しきれない自動車の列が、際さへあつたら、夜霧と燈光の中に毒々しく赤く輝やいてゐる會堂の玄關口へ乗りつけようと待ち構へてゐる。切符賣の連中の喚聲、モオタアの爆鳴、玄關屋根へ叩きつける鼓の音の中で、矢つぎ早やに入れ替つて来る自動車が、後から後からと新しい人間の束を吐き出してゐる。物見高い群集は、黒い垣を作つて取り巻いて、来る車、来る人を大いに緊張して待ち構へてゐる。贅澤な毛皮の外装、躍る髪容、光る寶石、絹の光澤に包まれた腿、惚々するやうな白い靴の足、笑ひ聲と小さい叫び聲……

紅鱒の赤さと金色に飾られて、壯麗を極めて、のぼせ上る程蒸し暑い大廣間は、ボストン、フィラデルフィヤ、バッファロオ、シカゴの第五丁目のあらゆる富を蒐め、演奏の冒頭から最後まで、幾千の聴衆の忙しくひるがへす扇で震へ

るかと思はれる位である。女の見物の白い肩や胸のあたりからは、むせ返るやうな香水の雲霧が立ち昇つてゐる。時この匂ひに交つて、突然に鼻を掠める變に臭い匂ひは、この新築の廣間に使用された漆と石膏とペンキの平凡な臭氣だ。天井の格子からも圓天井からも、無数の電燈が方々に群を成して、燦爛と輝いてゐる。餘程頑強な健康な人でもなければ、この燃えるやうな光線には耐へられない程きらきら光つてゐる。粹な巴里の衣裳屋はこの冬の流行に、つばの無いヴェネチア風の帽子をはやらせた。淑女諸君は、これを髪の上へ、少し後へずらして召しておいでだ。衣裳といへば、レエスや、金糸銀糸織り交せて、それに纓、モール、眞珠、ダイヤモンド、高價な材料の飾り物をつけてゐる。しかもさういふ連中が絶え間なしに扇を震はして、絶えず頭を軽く動かしてゐるので、このぎつしり詰つた平土間の上は一面に燦爛として、ダイヤモンドの火花が、幾百幾千と到る處から輝いてゐる。

この音楽會場と同じやうに豪華と新奇を見せてゐる聴衆の上を、疾の昔に流行遅れとなつた巨匠連の音楽が吹き抜けて行くのである……

技師マック・アランとその若い細君のモオドとは、オオケ

ストラの直ぐ眞上の小さな棧敷に入つてゐた。アランの友達で、この新マゼソン・スクエア大宮殿の建築者であるホッピイの計らひで、この棧敷の席に金を出さずに入れて貰つたのである。けれども、アランがわざ／＼自分の製鋼所のあるバッファロオから此處までやつて来た目的は、音楽を聴かうといふのでは無い。アランには音楽の理解は少しもなかつた。その目的は、鐵道王で大銀行家であるロイドと、十分間ばかり話をする事で、それはアランには、何よりも大事な相談であつた。ロイドといふのは、アメリカ合衆國最大の有力者で、又世界で屈指の富豪の一人であつた。

この日の午後、汽車で来る途中から、アランは或る軽い昂奮を抑へきれなかつた。つい今數分間前までも、同じやうな特別な不安に襲はれてゐたのである。それは丁度向側の棧敷がロイドの棧敷で、そこに誰も來てゐないのを目見て確かめたからであつたが、今はもう、すつかり平靜に復つて、もう一度この事柄を見直す事が出來た。

ロイドは彼處に來て居ない。恐らくいつまで経つても來ないのだらう。又ロイドがやつて來たところで、まだ何事も決りません——ホッピイが寄越した電報には、もう半ば成功したと云はんばかりの文句があつたが。

アランは腰かけてゐる。或る物を期待し、しかもその期待に必要な忍耐を十分持つてゐる男のやうであつた。幅の廣い肩を椅子の後にもたせかけて、棧敷一ぱいに足を踏ん張つて、靜かにあちこちを見廻してゐた。アランの體格は大きいといふ方ではなかつたが、丁度拳闘家のやうながつしりした骨組を持つてゐる。頭の周圍は大きく、細長いといふより四角だ。やゝ粗野な感じのする無髯の顔の色は、特に暗鬱であつた。この冬の最中ですら、頬にはそばかすの痕を見せて、世間並みに綺麗に分けた頭の髪は、栗色で軟らかく、電燈の反射で銅色に光つてゐた。兩方の眼は、しつかりした額の下に溝のやうに窪み、明るく暗碧色の光を湛へて、いかにも人の好ささうな子供らしい表情であつた。全體から受ける印象は、たつた今航海から戻つて來たばかりの船のオフィサーと云つたやうなところで、新鮮な空氣を腹一杯吸ひ込んでゐるが、今日は思ひがけなく燕尾服を着込んで、それがどうも體に付かないといふ格好である。どう見ても、一個の健康な、少し粗笨ではあるが、人の好ささうな人間だ。智的教養も無いといふのではないが、何れにしても大したものではない。

アランは出来るだけ退屈しないやうにした。この男に對

して何の魅力も持たない音楽は、考へを纏め深めるかほりに、放散させ逃げてゆかせた。アランはこの廣大な廣間の容積を目測して、天井と、周圍を取り巻く棧敷の構造とに驚嘆した。それから平土間にきら／＼と震へ動く扇の海を見渡して、兎に角この國にはうんと金があるのだから、此處で今自分の考へてゐるやうな事が、計畫されない筈はないと考へた。又ごく實際的な事ばかりしか考へない男であつたから、この音楽堂で一時間の照明に要する費用を勘定し初めたものである。それは完全に一千弗は費る勘定であつた。それから續いて、一人々々の男達の研究に移つてみた。もともと女性に對してはまるで興味をもたない男で、やがてもう一度、ロイドの誰もゐない棧敷へ眼をやつてから、オオケストラの方を見下した。アランの席からはその右側が見渡せた。これで音楽にまるで理解のない連中と同じやうに、この男を啞然たらしめたものは、オオケストラを動かしてゐる機械的正確だつた。アランは少し半身を乗り出して、指揮者を眺めようとしたが、指揮棒を振つてゐる手と、その腕とが時々オオケストラ・ボックスの縁を越して見えたに過ぎない。この瘦せこけた弱々しい有名な指揮者に對して、一晚六千弗の金を支拂ふといふ事は、アラン

にはまるで不可解な謎であつた。アランは、その男をぢつと注目した。外見からして尋常外れの男である。鈞鼻に、小さい生々とした眼、固く結んだ唇、それから薄くなつた髪が後の方へ逆立つてゐる様子は、禿鷹を思ひ出させた。まるで骨と皮ばかりで神経以外には何も無いやうに見えるが、音と騒音との混沌たる眞中に平然と突立つて、思ふがまゝに、棒の上一下で處理して行く、その白い、見たところ力も無さうな手。アランは魔法使を目前に見たやうに驚嘆した。尤もその魅力と祕密の中へ踏入つて見ようといふやうな心持はなかつた。アランにはこの男が、遠い大昔の特殊な、不可解な、もう滅亡に近付いてゐる異人種としか思はれなかつた。

丁度この瞬間である。瘦せこけた指揮者は不意に、両手を高く差し上げて、狂氣のやうに振り廻した。その両手には忽然として、超人の力を宿したやうに見えた。オオケストラは爆發し、ぱつと燃え上つたと思ふと、一擧に静まつた。

拍手と喝采の聲は雪崩の如くに場内に湧き返り、壯大な建物も揺かんばかりに轟き渡つた。アランはほつと息をつきながら身繕ひをして、起ち上らうとした。けれども、そ

れは思ひ違ひで、下では、その時既に木管楽器が緩徐調を初めてゐた。隣り棧敷の方からは、こんな會話の終りも傳はつて来た……「二割の配當さ。どうだね。——とても素敵な仕事ぢやないか、まるでこれは……」

アランは仕方なく復た腰を降ろしたが、もう一度周圍の棧敷の構造を研究し初めたものである。この構造は、アランにはよくのみ込めなかつた。ところでアランの細君の方は、まだほんの初歩ながらピアニストであつたので、身も魂もこの音楽に打ち込んでゐた。夫と並べて見ると、モオドはいかにも華奢で小造りである。美しい栗色の髪の毛の型頭を、眞白な手袋をはめた手で支へながら、透き徹るやうな綺麗な耳は、上下と云はず左右と云はず、八方から流れて来る高低さまざまな音律の波を吸ひ込んでゐた。二百餘りの楽器が空氣に傳へる無数の振動は、モオドの全身のあらゆる神経を揺り動かさずにはゐなかつた。その眼は大きく開いて、瞬きもせずに遠い空間を見詰めてゐた。この若い細君が受けた感激は極めて強くて、軟かい、滑かな兩の頬は、圓く赤く染まつてゐた。

モオドはこれほど深い感動をもつて音楽を聞いた事はなかつた。第一これまで一度も、かういふ素晴らしい音楽を

聞いた事が無かつたのである。ほんの短いメロディや、つまらぬモチイフでさへ、モオドの魂へ今まで夢にも知らなかつた、或る輝きを喚起した。一つ／＼の音調でさへ、生れてから初めての、匿された歡喜の脈管を燃え立たせ、それがぱつと流れ出て、心の底から魅惑し盡す勢であつた。この音楽がモオドの心に滲み込ませたあらゆる感情は、最も純粹な喜びと美しさであつた。音楽が見せてくれるすべての幻影は、モオドの心には、尊い光明の中に浮び出て、いかなる現實よりも美しいものであつた。

モオドの生活はその姿の通りに、有りの儘で單純であつた。これと云つて大きな事件も無ければ、別段に問題となる程の事も無く、世間有り觸れた若い娘や人妻と同じやうな生活をしてゐるのである。生れた土地はブルックリンで、父はそこに印刷工場を持つてゐた。それから、バクシヤイ・ヒルの別荘に連れて行かれ、其處で生粹の獨逸人である母親の膝下に甘やかされて育つたのである。學校教育も立派に済まして、二夏續けて、シウトウクの夏期大學で講義も聞いたし、小さな頭にうんと學問と知識とを詰め込まされたが、之は直きにまた忘れてしまつた。別に普通以上の音楽的才能があつた譯でもないが、ピアノは立派に仕上げ

て、ミュンヘンや巴里での稽古は一流の教師に就いたものである。それから母親と一緒に方々を漫遊した。その頃にはもう父親は死んでしまつてゐた。又スポーツをやつて、若い男達と他愛ない噂を作つた事も、若い娘に有り勝の例に洩れない。かうして青春の樂みは十分堪能したのだが、今はもうそんな事なぞまるで忘れてゐる。それからモオドは建築技師ホッピイの戀を斥けて、現在の夫である技師マック・アランと結婚したのである。その理由は、ホッピイを愛したのは、たゞ一個の友達として過ぎなかつたが、アランを愛したのは、何となく蟲が好いたからである。この結婚式がまだ擧げられない先に、大事にしてゐた小柄の母親が死んで、モオドは悲嘆の涙に暮れた。それから子供が生まれたのは、結婚後二年目で、女の子であつた。モオドはこの子を何よりも可愛かつた。モオドの今日迄の生活はこれだけである。今は二十三で、幸福な生活を送つてゐるに過ぎない。

モオドが今うつとりした好い心持になつて、この演奏に聞き惚れてゐたその間に、胸の中に咲き開いて來たものは、豊富な色々の思ひ出であつた。取り止めもなく勝手氣儘に消えたり現はれたりする思ひ出ではあるが、不思議に總て

が明瞭に、著しく暗示的であつた。同時に自分の生活が、急に神秘的な、深い、豊富なものに思はれ出したのである。眼前に現はれて來た小柄な母の姿は、無限の崇高さと善良さを持つてゐた。けれども、さう考へても何の悲哀も伴はずに感じられるものは、たゞ云ひ現はし得ない情愛と悦びだけであつた。まるで、母親がまだこの世に生きてゐるやうな心持である。それと一緒に、今度はバクシヤイ・ヒルの景色が浮んで來た。少女の頃によく自轉車で横切つた處だが、今思ひ出の中に甦へて來た風景は、神秘に満ちた美しさと思議な光に包まれてゐる。モオドはホッピイの事を思ひ浮べた。すると同時に、自分の少女時代の部屋の有様が、眼の前に現はれて來た。様々な書物が一杯に並んでゐる部屋だ。やがてピアノに向つて稽古してゐる自分の姿が見えて來た。けれどもさうすると直ぐその後から、再びホッピイの顔が浮んでくる。それはテニスコートの片端のベンチに、自分と並んで腰かけてゐるホッピイである。もう大分薄暗くなつてゐて、コオトに引かれた白いラインだけがやつと見分けられる頃だ。ホッピイは脚を組んで、ラケットで白い靴の尖端をこつ／＼と叩きながら、何か喋べつてゐる。この時の自分の姿が、モオドにはあり／＼と思ひ

浮んできたのである。それは、戀に夢中になつてゐるホッピイが突拍子もない事ばかり云ふので、笑ひ出してゐる自分の姿だ。けれども今度は朗らかな自負と幾分か嘲笑さへ交へた心持が、このホッピイを掻き消して、次にモオドの心に呼び起したものは、あの楽しいピクニックの記憶である。それはマック・アランと初めて會つた日であつた。それはバク・アロオのリンドレエ家を訪問した日で、時候は夏であつた。森の中で止まつた二臺の自動車には、總勢で十二三人の男と女が乗つてゐた。モオドはその一人々の顔さへ、はつきりと思ひ出せた。暑かつたので、男達はシャツ一枚になつてゐた。地面は燻きついてゐた。やがてお茶を沸さうといふ事になると、リンドレエは、

「アラン君、君ひとつ火を起してくれんかね。」と云つたので、アランは答へた。

[All right]

此處まで考へてくると、モオドはもうあの時分からアランの聲が好きであつたやうな氣がした。深みのある温かい聲で、胸に滲み透るやうな調子を持つてゐた。今度はアランが火を起してゐる様子が見えて來た。黙々として、一人ぼつちで、枝を折つたり割つたりして働いてゐる姿に、續

いて、シャツの袖を捲くり上げて焚火の前に踏み、用心深い格好で火を吹いてゐる姿である。すると不意に、アランの右腕に、藍色の襷せた文身があるのを發見したのもその時である。それはぶつちがひの斧の繪で、傍にゐたグレエス・ゴルドンに注意すると、この婦人はびつくりして、モオドの顔を見ながらかう言つたものだ。

「あら、あなた、御存知なかつたの。」

(この婦人は、最近に夫婦の間に一騒動起した人であつた) それからこのマック・アランが「アングル・トムの馬丁」であつた事や、この栗色に日燻けたそばかすの出來た青年の子供時代の色々なロマンスを話してくれた。その時肝心のアランは、がや／＼喋り合つてゐる上機嫌な連中にはお構ひなしで、相變らず踊んだまゝ一心に火を吹いてゐた。モオドがアランに好意を持ち初めたのは、この瞬間からであつた。確かにさうであつたに違ひないのだが、自分では、今日の日までそれに氣がつかずにゐたのである。さうしてこれ以來、モオドはアランに對する感情の赴くまゝに、すつかり心をまかせた。それから一風變つたマックの結婚の申込が思ひ出されて來た。續いて婚禮が済んで、二人の夫婦生活の初めの幾月。やがて娘の小さなエディスを腹に宿し

てから生れる迄の月日、この時代に見せてくれたアランのあの何事をも犠牲にした優しい心盡しは、モオドに取つて恐らくは一生忘れられないものであつたらう。實はその時代こそ、あらゆる女に取つて、自分の夫の情愛の深淺を測る尺度ともなるべき時期である。さう思ふと、不意に、アランが世にも思ひやりの深い、内氣な男であつたといふ事がしきりと思はれた。決してモオドはこの時代の事を忘れ切れまい。アランが本當に親切な男である事を知つたのはこの時代であつたからである。モオドは、胸一ぱいに溢れ迫つて來る情愛の切なさに眼を閉ぢた。すると幻と思ひ出は掻き消されて、音楽はモオドの心を又連れていつてしまつた。一切を忘れてしまつたモオドは、全身が感覺だけであつた……

そこへ突然に、石垣の崩れるやうな爆音が、モオドの耳を貫ぬいた。モオドは我に返つて深く呼吸した。シンフォニーが終つたのである。アランはもう起ち上つて、両手を手すりにかけて伸びをしてゐる。平土間では、破れ返るやうな騒ぎだ。

モオドも起ち上つた。一寸頭がくらく／＼としたが、はつと氣を取り直すと、いきなり両手に力を入れて拍手しはじ

めた。

「あなたも手を叩いて頂戴よ。」

と、まるで夢中で大きな聲を出した。その顔は昂奮して眞赤になつた。

アランは細君の異常な昂奮ぶりを笑ひながら、二三度はち／＼と大きく手を拍つて、その機嫌を損ねまいとした。

「Bravo, Bravo」

とモオドは晴れやかな高い聲で叫びながら、半身を乗り出すやうにして棧敷の欄干から下を眺めた。その眼は昂奮に濡れてゐた。

オオケストラの指揮者は、瘦せて疲勞に蒼ざめた顔を拭きながら、幾度も幾度もお辭儀をした。それでもまだ喝采が止みさうにもなかつたのを見ると、今度は両手を擴げてオオケストラの方を示して見せた。かうした謙遜の態度には、無論聴衆に媚びる氣持がある事疑ひない。これを見るに豫て持論としてアランの抱いてゐた藝術家の心持に對する疑ひが、急に目を醒ましてきた。この男に云はせると、藝術家などといふ連中は、斷じて完全な人間並みには扱へないものであり、極端に云へば、無用の長物に過ぎない。けれども細君の方は、まるでもう有眞天になつて、また湧

き上る喝采の嵐に加つてゐた。

「ちよいとあなた、手袋がこんなに裂けちやつたわ。とても素敵な藝術家ねえ。素晴らしいと思はなかつて。」

モオドの唇は身も世も忘れた喜びに震へ、その眼は琥珀のやうに輝やいてゐた。アランは、恍惚としてゐる細君の顔を、常になく美しいものに見た。アランは微笑して、

「全くだね。素晴らしい男だよ。」

と、思つてゐるよりは冷淡に返辭した。

「あの人、天才だわ。」

と細君は大きな聲で云つて、また一生懸命に手を拍ちながら、

「巴里や倫敦や伯林でも、これ位の音楽を聞いた事がありませぬわ。」

と云ひかけて、扉口の方へ顔を向けた。丁度建築師ホッピイが、この棧敷席へ入つて來たからである。

「まあ、ホッピイさん。」

モオドはかう大きな聲で云ひながらも、まだ拍手の手を休めなかつた。他の幾千の聴衆と同じ氣持ちで、もう一度あの指揮者を呼び出さうと思ひながら、

「ホッピイさん、手を叩いて頂戴よ。もう一度今の指揮者に

出て來て貰ふのよ。Bravo, Bravo……」

ホッピイは両手で耳を抑へて、不良少年がよくやるやうに口笛をびい／＼と吹いた。

するとモオドは、

「まあ、あなたは、よくそんな眞似なさるわねえ。」

と言つて、モオドは痛癢でも起したやうに、片足で床をばた／＼蹴つたところへ、汗だくになつたさつきの指揮者が、頸筋のあたりにハンケチをやりながら、もう一度現はれて來た。拍手はもう一度激しく爆發した。

騒ぎが靜まるのを待つてから、ホッピイは、

「この連中と來たら、まるで狂人だ。」

と愉快さうに笑つて、

「何でもないですよ。僕が口笛を吹いたのは、一寸騒がしてやらうと思つたに過ぎません。ときにお嬢さん、御機嫌は如何ですか。それから此方の御老體、お變りありませんか。」

やつと此處で、眞面目に挨拶を取交す暇を見つけることが出來たのである。

この三人の間柄は、お互ひに胸襟を開いた、稀に見る親密な友情であつた。ホッピイが今の自分の妻のモオドに對して昔どういふ心持を抱いてゐたか、無論アランもよく承知

してゐた。それに就いてはお互ひに一言も云つた事は無かつたが、さういふ経緯があつた爲めに、反つてこの二人の男同士の間柄は、特別な温かみと異様な魅力とを感じ合つてゐるのである。ホッピーにしてみると、今でもまだモオドには多少の愛を感じてゐるのだが、調子のいゝ惻巧な男の事だから決してそれを氣取られるやうな眞似は見せない。唯モオドの女らしい確かな本能だけは、欺き了せなかつたのである。モオドはホッピーの戀心を感じて、人知れぬ勝利の感じを味はつてゐた。その氣持は時々この女の温かい栗色の眼付に讀むことが出来たが、それと共に肉身の姉のやうな率直な愛情で、ホッピーの戀に報いてゐた。この三人は、三人とも異つた境遇に在つたので、心から喜んでお互ひに利用し合ひ、世話をし合つてゐた。殊にホッピーのお蔭を大いに蒙つてゐるのはアランである。例へば數年前に、或る工業上の實驗と、その工場の設立の爲めに五萬弗を調達してくれて、自らこの金額の保證人になつてくれたのもホッピーで、更に先週來アランの要件で鐵道王ロイドに會つて前に云つたやうな會見の機會を作つてくれたのも、このホッピーである。アランの才能に敬服してゐたホッピーは、自分出来る事なら何でもしてやる氣でゐたのである。アラン

がまだ僅かにアラニットといふダイヤモンド鋼を發明した位の時分にでも、ホッピーは自分の知り合と會ふ毎に、「君は一體アランといふ男を知つてゐるか。あのアラニットを發明した男だよ。成程、君もあの男の事は聞いてゐるんだね。」と云つたものである。二人が逢ふ機會は、年に二三度しか無い。それはアラン夫婦の方から紐育へ出掛けて來るか、ホッピーがバッファローの二人を訪ねて行くか、どつちかである。毎年夏になると、規則正しく三週間を、バアクシャイア・ヒルに在るモオドの小さい農園の別荘で、三人の共同生活が初まるのである。かうして、一緒に會ふといふ事は、いつでも三人に取つて大きな喜びで、三つ四つ若返つたやうな氣持になつて、三人一緒に楽しく打ち解けて暮したあらゆる時間が、何かといつては生々と思ひ出された。

ところが今年是多中會ふ機會が無かつたので、それだけに三人の喜びは一層大きく、お互ひに相手を上から下まで見上げ見下して、まるで子供が大きくなつたのを見た時のやうに、お互ひの無事を快活な調子で祝ひ合つたのである。モオドはホッピーが穿いてゐた洒落たエナメル靴を見て笑つた。爪先のところ、本物の犀の角をつけて、びか／＼光る鞞皮の靴だ。又ホッピーは、流行衣裳屋のやうにモオド

の衣裳とアランの新調の燕尾服を品評したものである。そこでまるで長い間逢はなかつたやうに、後から後からと矢繼早やに訊いたり答へたりしたが、別に何かに就いて立ち入つて話した譯ではない。ホッピーは相も變らず珍妙な本當に出来ないやうな冒險談を次々と散々に喋つた揚句に、やつと今夜の音樂會の事、毎日の話、友達の消息などを話し初めたのである。

「どうだい、この音樂堂は。」
とホッピーは、得意さうな微笑を浮かべながら訊ねた。ホッピーは、二人がどんな返辭をするか心得てゐるのである。アラン夫婦は讚辭を惜まず、何もかも褒めちぎつた。
「あつちの表支關は、どんなものだね。」
「大したもんだよ。」
「たゞこのホオルだけが、あたし、何だか少しけば／＼し過ぎるやうな氣がしますわ。もつと落ち着いた裝飾の方が好いわ。」

と口を出したのがモオドである。
建築技師ホッピーは人の好い微笑を浮かべて、
「それに違ひないのですがね、然し此處へ來る人が悉く音樂だけを聴きに來るのなら、それも好いんですが、中々さ

うでもありません。此處へ來るお客といふのは、唯何かにびつくりしたいか、誰かにびつくりさせて貰ひたくつて來るのです。そこでこの會社の方では、僕に向つて、是非ひとつ、思ひきつて素晴らしいものを造つて見せてくれ、これでもつて今迄のあらゆる音樂堂をぶち壊してやりたいんだから、と言ふぢやありませんか。」

アランの意見もホッピーと同じである。けれどもこのホッピーの造つた會堂で、先づ第一に驚嘆したものは、裝飾上の豪奢ではない。寧ろ如何にもゆつたりと浮き上つてゐる周囲の棧敷の、思ひきつて大膽な構造だつた。

アランがその意見を述べると、ホッピーは我が意を得たりとばかりに眼を細くして、
「こいつには全く苦勞したよ。とても、頭を悩ましたものさ。何しろこの棧敷を振釘で緊める間は、一足歩いても棧敷全體が揺れたものだからね、こんな位に。」
と云ひながら、爪立つて體を上下に揺ぶつて見せた。
「だから職人達は、とてもびく／＼ものだつたよ。」
さう云ひかけると、モオドは思はず、
「あら、こはいわ。」
と本當に怖さうに云つて棧敷の欄干から身を引いた。

ホッピイは微笑しながらモオドの手に觸れて、「大丈夫ですよ。僕は職人達にも云ひましたがね、まあ、この周囲の輪がすつかり繋ぎ上つてしまつてから見ろつて云ひましたよ。——ダイナマイトでもぶついたら分りませんが、大抵の事ぢや大丈夫ですよ……」

かう云ひかけたホッピイは、ひよいと平土間の方を見下して、だしぬけに「おゝい、」と呼んだ。誰だかホッピイの知合ひが、メガホンのやうに今夜のプログラムを巻いて、口に當てて呼びかけたのである。それから棧敷と土間とで何か話が初まつた。これと同時に到る處に同じやうな不作法な怒鳴り聲が聞えてゐなかつたら、ホッピイの大きな聲は、會場到る處に聞えたに違ひないと思はれた。

何處へいつても人の眼を惹くのはホッピイの頭だ。この會場全體の中でも一番明るい色の髪の毛といつたら、矢張りこの男であらう。やゝ銀色がよつて輝く金髪は、綺麗に左右に分けて撫でつけてあるし、氣輕さうな細長い顔は、何處か茶目な處のある云はずと知れた英吉利タイプで、少し上向きの鼻と、殆んど眞白といつてもいい位の睫毛を持つてゐる。すらりとした華奢な女のやうなこの男の格好は、アランとは好い對照である。忽ち四方八方から望遠鏡の先

が、ホッピイの上に集まつて、其處からも此處からもこの男の名前が叫ばれた。ホッピイはこの紐育中でも最もポピュラーな人間の一人で、社交界での人氣者の一人であつた。この男をこんなにも早く有名にしたものは、生來の無遠慮さと、その天賦の才幹であつたのである。殆んど毎週といつてもいい位に、この男に關する奇談逸話の類が、紐育の新開紙上を賑はしてゐる有様だ。

ホッピイは四歳で花の繪の天才となり、六歳で馬の繪の名人となり、疾驅する馬の大群でも、五分間でスケッチしてのけた位である。それから今は、鐵とセメントの天才となつて、摩天樓を建て初めたのである。又女との出入りでも、この男らしい幾つもの戀愛沙汰を持つてゐたし、二十二歳の時には十二萬弗といふ大金を、モント・カルロの賭博場ですつてしまつた。現在金髪に銀色が交る年になつても、まだ法外な収入がある癖に、年が年中借金で首が廻らないでゐる。それでゐながら、更にそんな事に懸念するやうな男ではないのである。

朗らかに晴れ渡つた或る日に、プロオドエイの大道を、象の背に跨がつて悠々と乗り廻した男もホッピイである。一年ばかり前に例の「四日大名」の豪奢遊びをやつて、イェ

ロオストンバクへ警澤列車を走らせた揚句が、牛追ひに成り下つて舞ひ戻つて來たのも、この男である。又、連續ブリッジの骨牌では、四十八時間といふレオオドを持つてゐるし、電車の運轉手は皆馴染になつて、お前、おれ、と云ひ合ふ仲であつた。それにこの男の警句や洒落と來たら實に無盡藏で、生れながらの滑稽家で奇行家である。全亞米利加を擧げて、この男の洒落に笑ひこけた事がある。それは例の紐育、桑港間の競争飛行の時だ。ホッピイは、有名な百萬長者でスポオツマンのゾンダアスティフトの操縦する飛行機に搭乗したのだが、その飛行の間、人の集まつてゐる場所を覗いては、八百米突乃至千米突位の高所から、「おい、此處まで昇つてこい、僕達は君にちつと云ふ事があるんだよ。」と書いたビラを撒き散らしたものである。この洒落がまたホッピイ自身にも餘程氣に入つたと見えて、二日間に互る長い空の旅の間中、倦きもせず繰返してやつたものである。これはつい四五日前の事だが、ホッピイはまたも、素晴らしいと同時に天才的な計畫を發表して、全紐育を面喰はせたばかりである。曰く、紐育をして亞米利加のエネチアたらしめよ、といふのである。ホッピイの提案によると、商業地域の地面はもうこれ以上金を出す餘地は

ないのだから、ハドソンと東リヴァと紐育灣へ大きな摩天樓を建て、コンクリイトの角材で何本も大道路を造り、道路と道路との連絡には、吊橋を架けたら、大洋航海の大船舶にも別段邪魔とならず、樂に通行することが出来る、といふのである。この魅力に富んだホッピイの設計の見取圖が發表されたのは「ヘラルド」紙で、この男の計畫は、全紐育を酔はせてしまつた。

従つて、六十人ばかりの新聞記者が、ホッピイ一人のお蔭で食つてゐるやうな譯である。この男は、日夜せつせと働いては、自分自身の爲めに、「喇叭を吹いてゐる」のである。間斷なしに自分といふものの存在を、社會に確めないでは生きてゐられない男であつた。

ホッピイはこんな男で、その上に紐育中の最も天才的な、最も得易からざる建築家であつた。

やがてホッピイは、平土間との會話を打切つて、またアラソ夫婦の方へ體を向け直して、

「ときにごうです、奥さん、エディス嬢ちゃんは。」と訊いたが、實はもう先刻一度、自分が名附親になつてゐるその子供の事は聞いたのだつた。

けれども母親モオドの身にしてみると、何度訊かれても

この事以上に心を動かされる質問は無い。だからホッピーの一言で、「手もなくまるめられて」しまつて、頬を赤くしながら、温か味のある栗色の眼に、うつとりとした感謝の心持を籠めて相手を見ながら、

「さつきも申上げたでせう、もうあの子は、一日増しに可愛くなるばかりですよ。」

と優しい母親らしい口調で答へたが、その眼は包みきれない満足の色で一ぱいであつた。

「いや、いつも可愛いお子ですがね。」

「ええ。でもね……あなたにはまるでお分りにならないわ……あの子はともお伶俐なのよ。もう口を利くやうになりましたの。」

其處へ亭主のアランが口を出した。

「おい、あの牡鶏の話でもしてみたらどうだい。」

「さうね。」

とモオドは、幸福に輝やく眼を光らせて、ちよいとした滑稽な話を初めた。勿論その話の中の大事な役は、子供のエデイスと一羽の牡鶏で、三人はそれこそ子供のやうに笑ひ合つた。

やがてホッピーは、

「僕も近い中にまた拜見に出掛けたいなあ。二週間以内に訪ねするよ。さもないとバッファロオは、とても退屈で耐らないとか仰つたつねね。」

「退屈で死んぢまひさうだわ。全く倦き／＼してるのよ。」

と早口に云つたモオドは、美しい眉をひそめて、その瞬間本當に情ないやうな表情を見せながら、

「あなたも知つてゐらつしやるでせう、リンドレイさんのところで、モントリイルへお引越しになつてしまつたんですもの。」

と云つた。

「そいつは頗る残念ですね。」

「グレエス・コサットさんだつて、秋からずつと埃及へ行つてゐらつしやるんでせう。」

と思つてゐる事をすつかり相手にしやべつて、かうした一日といふものがどんなに退屈だか、また同じやうに夜がどんなに退屈で耐らないか、と話した揚句に、冗談めかして非難するやうな口調で、かう附け加へたものである。

「ねえ、あなたも御存知でせう、家の人ときたらお付き合ひなんてもの、とても駄目なのよ。この頃は以前よりもつとあたしの事なんか構つてくれないんですもの。どうかす

ると、まる一日工場から出て来ないのよ。それにまた近頃は、立派な道具がちゃんと揃つてゐる上へ、試験に使ふ鑽孔器をたんと買つてきてね、明けても暮れても花崗岩だの、鋼だの、それから何の彼のつて、いろんなものに孔を開けてばかりゐるのよ。そのまた機械を、家の人はまるで病人扱ひして大事にしてゐるのよ。夜になると、その機械の夢を見るんですつて……」

此處で笑ひ出したのがアランである。

ホッピーは、

「まあまあ、やりたい事をさせてお置きなさいよ。」

と云ひながら、白い睫毛をばち／＼やつて、

「この人には自分のする事がよくわかつてゐるんです。だからまあ僕に免じて、そんな二三本の鑽孔器なんかを嫉くのはお止しなさい。」

「でもその機械がとても憎らしいわ。」

と答へたモオドは、少し頬を赤らめて、
「だつてあなたもさう思ふでせう。家の人がかうして一緒に紐育まで来たのだつて、自分の用事が此處にあつたからこそですわ。」

「まあ何だ、そんな事を。」

とアランは細君を静めるやうに云つた。

ところがホッピーの方では、モオドが冗談半分に云ひ出した非難で、大事な用事を思ひ出した。實はその事をアランに話さうと思つてゐたのである。そこで、急に考へ深さうな顔をして、アランの燕尾服を手で引張つて、少し小聲にかう云つた。

「君、ちつとまつい話なんだが、折角バッファロオからやつて来ても、今日は無駄足になつたぜ。ロイド老人ちよいと體の具合が悪いのだ。一時間ばかり前に娘さんのエセルに電話かけて見たがね、令嬢にも、來られるかどうかまだ分らないつて挨拶だつたよ。本當に間の悪い話だが。」

「いや何も今日に限つた話ぢやないから構はんよ。」

とアランは平然と答へたが、實は腹の中では尠からずがつかりしたのである。

「兎に角僕は悪魔のやうに先生の隙を窺つてゐるからね、先様もこれぢや油断も隙もならんわけだが。ではこれで一寸失敬するよ。」

と言つたかと思ふと、もうホッピーの姿は、元氣のいゝ挨拶と一緒に隣の棧敷へ割り込んで行つた。其處には、三人の赤い髪の女連が、母親らしい婦人と腰かけてゐた。

その時不意に、例の瘦せこけた禿鷹のやうな顔付の指揮者が、また臺上に立つた。微妙に盛り上つてくるやうな音響が、大太鼓から湧き起つて来た。それに相和して、ファゴットは呼びかけ訴へるやうな甘美なモチーフを奏し初め、同じメロディを繰り返しながら次第に高まつてきて、最後に急激なヴァイオリンの音色に、そのモチーフを奪はれ、移されていった。

モオドはまたその音楽に聴き惚れてゐる。

けれどもアランの方は、冷淡な眼付をして自分の椅子に腰かけてゐた。この男の胸の内は、内心の緊張で大きく動いてゐた。こんな場所へ出掛けて来たことを後悔し初めてゐるのである。音楽會場の棧敷で、一寸お目にかゝらうと云ひ出したロイドの提案も、滅多に自分の邸宅へ人を迎へない、この富豪の奇癖を思ひ合はせて見れば、其處に別段不思議とする程の事もなかつたので、躊躇なくそれに同意したアランであつた。それに又、相手が本當に病氣だつた場合には、此方から詫びを云はうといふ心持さへ持つてゐた位である。けれども自分の今度の計畫に就いては、飽くまでも最大の顧慮と敬意が拂はなければならない。この偉大なる計畫には、考案者である自分自身でさへも時に茫

然たる事があるではないか。五年間といふ長い日子を、晝夜の別なく努力して、漸く考案したこの計畫は、今日に至るまでも唯二人にしか打ち明けてない。その一人が、ホッピーである。喋つて差支へない事は、舌を抑へつける事の出來ない限り喋り散らす代りに、一旦沈黙を守るとなつたら何一つ口外しない男であつた。もう一人はロイドである。細君のモオドではなかつた。そこでアランは、ロイドが何事を措いてもこのマヂソン・スクエア音楽堂に足を運んで來る事を要求したのである。或はせめて何か通知でも寄越して、後日の面談の機会を約束して欲しかつたのである。萬一それさへ怠るやうなロイドならば……宜しい、おれは斷じてそんな我まゝで病弱な金持なんぞ相手にせん。アランはさう腹を据えてゐたのである。

激しくふるふる音響と、むせ返る香水、眼も眩む光線の流れ、耀く寶石の稲妻、かういふものに満ち溢れて、温室のやうな會場の空氣が、アランを熱で圍んで、その考へをどこまでも明瞭にさせていつたのである。アランの頭は敏速に、しかも極めて精確に働き出してゐたが、實はこの時或る強烈な昂奮がだしぬけにこの男を襲つて來た。それは「この計畫が最後」だといふ考へであつた。この計畫を抱

いて立つか、さもなければ、この計畫を抱いて斃れるか。」といふ覺悟だ。アランは今日までに、實驗と研究と幾度となく準備した仕事のために、自分の全財産を犠牲にしたばかりではない。萬一この計畫が遂行されなければ、明日は初めつからやり直さなければならなかつたのである。この計畫が、アランの生命であつた。自分の掴み得る機會を、代數の問題のやうに計算した。この問題では、一つ一つの項が、前に出た結果の解答であつた。アランは今度の計畫の第一着手として先づ鋼鐵トラストを關係させることに成功したが、やがてこのトラストは、シベリア鐵道の競争で、ひどい目に會つた爲め、前代未聞の恐慌を蒙つて、休業状態となつてゐた。そこでこのトラストは、アランの計畫に十中八九飛びついてくるだらう。さもなければアランがトラストを敵に廻して、最後の血路を見出すまでは戦ふ外はなかつたのである。アランは世間の所謂大資本家のモルガン、ワンダアビル、グールド、アスタア、マッケイ、ヘエザメエヤア、ベルモント、ホキトネエその他の金持連中を、

片端から襲撃することが出來た。大銀行團を掴まへることも出來た。それでも尙、一切が失敗に終つたら、最後の手段として、新聞社と手を結ぶことも出來た。

かうしてアランは廻り道をして、自分の目的に達することが出來た。これから考へれば、何も、ロイド一人なんぞを必要とはしなかつたのであるが、ロイドと結んでゐるといふ事は、既に勝つた戦であつた。これが出來ないとなると、この先へ進出する事に非常に骨が折れる。僅か一尺四方の地形を占めるにも、その一つ一つを手に入れて行かなければならないからである。

アランには、周圍の光景も物音もまるで分らなかつた。險しく眼を半ば閉ぢたまゝ、頻りに自分の計畫の進出策を、微細な點まで考へてゐた……

その時急に發作のやうに、物音ひとつなく音楽に魅せられきつてゐた會場の空氣を揺がしたものがあつた。一齊に聴衆の頭が動いた。寶石は益々きら／＼輝いた。あつちこつちに眼鏡が光つた。丁度音楽は、ごく穩やかに低く流れてゐたので、場内に起つたかすかな囁きを聴きつけた指揮者は、怒つたやうにその方へ眼をやつた。何か持ち上つたに違ひない、今夜の聴衆に對して、二百二十名の樂士よりも、指揮者よりも、不滅の作品を残した作曲家よりも、もつと強い魅力を働らきかけたものが、何かはじまつたのである。

アランの隣り棧敷で、抑へつけたやうな低い聲で、かう云つた者がある。

「あの女の寶石は、薔薇ダイヤですぜ……アブヅウル・ハアミットの寶物の中で……二十萬弗だ。」

この聲で、ふとアランは眼を擧げた。向側の棧敷は暗かつたが——其處に來たのは、ロイドであつた。

暗い棧敷なので、はつきりとは見えないが、そこに優しい上品な横顔を見せてゐるのは、紛れもなくロイドの娘の評判の高いエセルであつた。ほの暗い薄明りの中でも、その輝く金髪が見分けられた。聴衆の方に向けた左の頸顛のあたりに光つてゐるのは、薄紅い火のやうな、大きな寶石であつた。

「見給へ、あの頸の邊と襟脚を。」

低くひそめた男の聲が、その隣りで囁いた。

「君、今迄にあれ位の襟脚を見たことがあるかい。人の話では何でも、建築家のホッピイが……さうさ、つい今しがた傍に居た、あの金髪の男さ……」

「さうかい、そいつは考へさせるね。」

と、よその男の聲が囁くやうに答へた。純粹な英吉利流の發音だ。續いて忍び笑ひの聲が起つた。

ロイドの棧敷の後は、カアテンで仕切つてある。エセルの身の科しから察して、アランはこのカアテンの蔭にロイドが居るのだと睨んだ。それで脇の方へ半身を曲げるやうにして、

「でもやつと來たよ、ロイドが。」

と、細君モオドの耳へ囁いた。

ところが生憎と細君の耳は、音楽の方で塞がつてゐたから、アランの言葉は通じなかつた。百萬長者ロイドの娘エセルが棧敷に現はれて、例の「薔薇ダイヤ」をびか／＼させてゐる事に、まだ氣が付かないでゐた者は、恐らく廣い會場内で、モオド一人位であつた。モオドは音楽によつて煽りつけられた一瞬の心の昂奮から、思はず小さな手を、探すやうにアランの方へさし延べた。アランはその手を握ると、機械的に撫でたが、この男の脳髓の中では、幾千の大膽俊敏な考へが活動してゐて、その耳は、ぢき近所でひそ／＼やつてゐる言葉の斷片をも逃さなかつた。

「ダイヤモンドかい。」

と、さ／＼やくやうな聲が訊くと、

「さうさ、人の噂では、あいつ、こんな具合に初めたんだ。濠洲のキャンプで。」

と、つぶやくやうな聲が答へる。

「ぢやあ一か八か、つてわけだね。」

「あいつ流儀だね。あいつはもと繩匠の主人だつたのさ。」

「だが、鑛山の權利はなかつたつてぢやないか。」

「ところが、あいつ獨特の權利だね。」

こゝでひそ／＼笑ふ聲が洩れた。

「僕には君の言ふ事がまるで分らないな。」

「かういふ評判があるのだ。あいつの鑛山ではね、と言つたつてあいつが一錢も金を出した譯ぢやないがね……坑夫達の身體検査がとて嚴重なのださうだ、君も聞いている通りにね……ダイヤモンドを腹へ呑み込んで出てくる奴があるんだ……」

「そいつは全然初耳だね……」

「そこで曰くさ、あのロイドつて男は……酒屋の主で……」

ウスキイの中へ何か薬品を交せて飲ませるのだ……そこで坑夫が船に酔つたやうになつて、腹のものをダイヤモンドと一緒に吐き出すんだ……あいつの鑛山で……」

「へえ、まるで嘘のやうだね。」

「専らさう云ふ噂なのだよ。ところで今はあいつ、大學や天文臺や圖書館なんか、何百萬て金を寄附してゐるんだか

ら……」

「やれ、やれ。」

と、すつかり感心したのは、小さい聲を出してゐた方である。

「だからとてもあいつは頑固で、人嫌ひなんだ。邸の周圍は、一米突もあらうつていふ厚いコンクリートの壁で取り巻いてさ、外の音がまるで入つてこないやうにしてゐるんだ……何の事はない、まるで囚人だよ……」

「へえ、さうかね……」

こゝで、「しつ」と云つて、腹の立つたやうに聲のする方へ頭を向けたのがアランの細君だ。小さい聲はぱつたり止んでしまつた。

休憩時間になると、例のホッピイのびか／＼光る金髪の頭が、ロイドの棧敷へ入つてゆくのが見えた。エセルは、まるで仲の好い友達のやうに、この男と握手してゐる。

「どうだい、僕の云つた通りぢやないか。」

と、大きな聲で言つたのは、アランの隣りの棧敷の深い聲であつた。

「ホッピイて男は全く果報者だよ。尤もあそこにはワンダァステイフトも居るがなあ——」

暫くするとホッピイが此方側へやつて来て、アラン夫婦の
 棧敷へ首を突込んで、

「さあ、来て貰はう、あの御老人が君に會はうと仰しやる
 よ。」

と大きな聲で言つた。

二

「こちらがマック・アラン君です。」

ホッピイはかう云ひながら、アランの肩を叩いた。

ロイドはその時薄暗い棧敷の中で、顔を下に向けて、背
 中を丸くして、腰を掛けてゐた。此處からは、笑ひさゝめ
 く紳士淑女諸君で満員の、周囲の棧敷の眩しい一断面が見
 渡せるのである。ロイドは、ホッピイに紹介されても、顔さ
 へ挙げようともしなかつた。まるで今の言葉が通じなかつ
 たやうである。暫らくしてから、用心深いやうな、ぶつき
 ら棒な調子で、嘆かれた、雑音の交る聲でアランに言つた。

「お目にかゝれて何よりです。わしは既にあなたの計畫は、
 詳細に研究しましたが、いや、中々思ひきつた御計畫で、
 えらい事業です。可能性は十分ありますぞ。わしに出来る
 ことなら、お引受けさせよう。」

かう言つて、初めてアランの方へ手をさし出した。それ
 は短い四角な手だ。軟かい、疲れた、絹のやうにしなやか
 な感じだ。それから顔を、こちらへ向けたのである。

豫てホッピイから聞かされて、十分覺悟はつけて置いた顔
 だが、それでも尙ほアランは、下腹へうんと力を入れて、
 この大富豪の顔から襲ひかゝつてくる恐怖の心持を、隠さ
 うとしなければならなかつた。

ブルドックを想はせる顔だ。下の歯が少し突き出て、鼻の
 孔はまるく、涙を溜めてゐるやうで、火のついたやうな小
 さい眼が、まるで斜についた傷痕のやうだ。皮膚は枯れき
 った蒼色の、無表情極まる顔である。頭はまるで禿げて、
 頸筋から顔、頭へかけて、厭らしい痣の痕が食ひ散らし
 て、かさ／＼にしてゐて、骨の上に辛うじて、煙草色した
 皮と萎びた筋肉とが張つてゐた。かういふ人間の顔は、恐
 るべき力を持つてゐる。大抵の人間なら、これを見て色を
 失ふ者から氣絶をする者も出来るであらう。こんな顔に面
 と向つても平氣でゐられるのは、よほど強い神經を持つて
 ゐる連中だけである。ブルドックに髻髻とした悲喜劇的の顔
 だが、同時にこんな顔から發散する感じは、生きた骸骨の
 やうな恐怖である。アランは、印度土人の木乃伊を思ひ出

した。ポリギアの鐵道工事の際に目撃した木乃伊だが、ど
 れもこれも四角な箱の中に蹲つてゐて、頭はどれを見て
 も乾からびてゐて、萎び切つた唇の奥には、上下の歯が剝き
 出してゐた。眼の球は、白と暗色の石で自然のままに象箱
 されてあつたが、實に氣味悪く本物のやうに出来てゐた。

ロイドは自分の顔が話相手にどんな効果を及ぼすか、そ
 んな事は十分に知り抜いてゐる。そこで今アランに與へた
 印象に満足を感じながら、濡れた小さい眼で、アランの顔
 をしげ／＼と見廻して、やがて、

「實際にあなたの御計畫は、わしが今日まで聞かされた中
 では一番大膽なものです——しかも實現出来る計畫です。」
 と繰り返して云つた。

アランは丁寧にお辭儀して、ロイド氏のやうな富豪が、
 自分の計畫に興味と關心を寄せてくれた事を光榮とする、
 といふ意味を述べた。しかも今自分の一生の浮沈が決定す
 るといふ大事な瞬間に立つてゐながら、少しも動かない自
 分の心持には、我ながら驚嘆せざるを得なかつたのである。
 最初この棧敷へ足を踏入れた時は、さすがに心が躍つたが、
 今はもうすっかり落ち着いて、ロイドが發する短い精密な
 質問に對しても、てきばきと正確に答へることが出来た。

又アランはこの亞米利加切つての有力者を向うに廻して、
 これと云つて確かな根據を擧げること出来ないが、何か
 自分の立場の確實さを、瞬間的に感じたのである。勿論ロ
 イドの様子、經歷、富の程度は、ほかの人間ならそれに感
 壓されて間違つたかも知れない。

「ではあなたの御用意は、餘程出来てをりますか。明日
 にでもその計畫を掲げて、世間へ打つて出ることが出来ま
 すか。」

ロイドは最後にかう質問した。

「いや、まだ三ヶ月程の準備が必要で。」

とアランが答へるのを聞いて、

「ではあなたは片時もぐ／＼して居つちやいかん。萬事
 はすつかりわしにお任せなさるがよい。」

かうロイドはきつぱりと云ひ放つてから、軽くアランの
 袖を引くやうにして、娘の方を指しながら、

「これが娘のエセエルです。」

と云つた。

アランはエセエルの方へ眼をやつて挨拶した。令嬢はさ
 つきから話の濟むまで、アランをぢつと見守つてゐたので
 ある。

「How do you do?」

と活潑に云つたエセルは、相手の顔を見つめながら、いかにも亞米利加娘らしい自然さで、氣輕に手をさしのべた。それからちよいと間を置いて、何となく惡戯じみた美しい微笑を浮かべながら、

「では、この方なのね。」

と云ひ添へて、アランに對して抱いてみた自分の興味と關心とを匿さうとした。

アランはお辭儀したが、すつかり面喰つた。こんな若い令嬢を相手に、どうあしらつていゝものか、まるで分らなかつた。

その中にアランは、エセル嬢の化粧が人並でない厚化粧であるのに氣づいた。何となくバステル畫を思はせるやうな姿である。ごく優しく柔らかな感じのある色彩だ。金髪の色、眼の紺碧、若さに輝やく唇の赤さ。その挨拶ぶり、まるで世馴れた貴婦人そつくりだが、聲を聞くと、何處か甘つたれた子供らしいところがある。ホッピーは十九歳だと教へたが、それどころか、ほんの十二歳位にしかならなかつた。

そこで何か口の中で、丁寧な極り文句の挨拶を言つてゐ

たアランの口許には、軽い狼狽の微苦笑が残つてゐた。それでもまだ令嬢の眼は、アランの顔から離れなかつた。まるで勢力のある貴婦人が、わたしの眼にとまつたお前さんは果報者よと云はんばかりの様子と、まるで子供らしい好奇心とが相半ばした眼付であつた。

エセル嬢は、亞米利加美人の見本である。すらりとして、輕快で、しかも女らしい。房々として豊かな髪は、稀に見る美しい金髪である。之を嫉む貴婦人令嬢連が、いつも「あれは染めてるんだわ」と言つてゐた。それに睫毛も著しく長いので、白粉の痕がくつ着いてゐる。暗碧色の眼は、澄んで明るい、睫毛が長いので、軽く掩はれる。その横顔、額、耳、襟脚、すべてが貴族的で、種族的な新鮮さを持つてゐる。けれどもその右側の頬には、父親の顔を醜怪にさせた、あの恐るべき惡疾の痕が現はれてゐた。頤から唇の角にかけて、木の葉の纖維のやうな線が、明るい栗色に何本か走つてゐるが、厚化粧の白粉に塗り隠されて蒼黒い黒子のやうな色に見える。

此處でまた口を開いたのがロイドだ。

「このわしは、自分の非常に興味を感じた事柄に就いては、娘ともいろ／＼話しますのが好きでしてな、この娘にあな

たの御計畫を洩らした事も、決して悪くならんで頂きたいな。これはごく口の固い女ですしな。」

「えゝさうよ、あたしおしやべりなんかしませんわ。」

とエセル嬢は活潑な調子で言つて、微笑しながら美しい頭で頷いた。

「あたし達ね、あなたの御計畫を研究するのに、何時間も何時間もかゝりましたのよ。あたし父と長い間その事でお話してゐますうちに、到頭父ですつかり夢中になつてしまひましたの。今夢中になつてゐらつしやるのね、お父さんは。」

ロイドの顔は相變らず無表情だ。

「ねえ、アランさん、家の父はあなたをととても尊敬してますわ。是非あたし達の宅へもお出掛けになつて頂戴、いかが。」

かう云ひながら軽く睫毛で掩はれた瞳で、アランの眼にちつと見入つた令嬢は、美しく震へる唇に、朗かな若い微笑を浮かべた。

「いろ／＼御親切に有難う御座います。」

とアランは輕い微笑で、娘の熱心さと活潑なおしやべりに答へたのである。

この微笑が、またエセル嬢の氣に入つた。令嬢は遠慮のない態度で、アランの白い強さうな齒並を見つめてゐたが、やがて唇を開いて、何か云ひかけようとする、この瞬間に管絃樂が軋々と鳴り出した。令嬢は父親の膝を軽く揺ぶつて、もう少しおしやべりしてもいゝわねえ、とせがんだ。ロイドも非常な音楽好きであつた。それから令嬢は、アランの耳に口を寄せて、何か大事な話でもするやうにかう囁やいたのである。

「ねえアランさん、あたしあなたのお味方してるのよ。父が心變りしないやうに、きつとお引受けしますわ。御存知でせうけれど、父は時々そんな事をしますの。でも大丈夫だわ、無理に押しつけても、あたし萬事すら／＼、運ぶやうにして上げますわ、では又ね。」

アランは慇懃にお辭儀して、エセル嬢と握手したが、やゝ無頓着らしく頭をうなづかした態度が、令嬢には多少物足りなかつた。——兎も角その場の話はこれで終つた。この話こそアランが畢生の事業であり、歐羅巴と亞米利加の新舊二大陸の連絡に、一新紀元を劃する事業を決定する話であつたのである。

アランの計畫の第一歩は成功した。この最初の勝利が心

の奥に喚び起した考へや感情が心の中に湧き返つて、何か強く輝やく心持で、アランはホッバイと共にロイドの機敷を出ようとした。

その時に扉口で、二人に突き當りさうになつた、二十歳にもまだならぬ位の若い男があつた。それでもまだ飛び退いて、立ち直るだけの餘裕は持つてゐたから、突き飛ばされずには濟んだ。この若い男は、確かにロイドの機敷の中の様子を窺はうとしてゐたのである。その若い男は笑つて自分の無禮な振舞を述べて詫びたが、これはヘラルド紙の探訪記者で、今夜の音楽會から、何か社會面のニュースを拾ひ出さうとしてゐたのだ。そこで遠慮もなくホッバイの前に立ち塞がつて、

「やあホッバイさん、一體こちらの紳士はどなたで。」と切り出したものである。

ホッバイは足を止めて、頗る上機嫌で眼をぱち／＼させながら、

「おや、君は知らないのか、この人を。」と、訊き返へして、

「これこそバッファロオのアラン鋼鐵工場長マック・アラン君だよ。有名なるダイヤモンド鋼アラニットの發明者である」と

共に、グリーン・リワアの拳闘選手だ。世界有数の人物だよ。」

新聞記者は大聲で笑ひ出して、

「なぞと仰しやつて、あなたは御自分をお忘れですな。」

と答へて、頗でロイドの機敷の方をそれと示しながら、

「何かニュースでもありませんか。」

と恭々しく、しかも何か聞き出したいやうに小さい聲で云つた。

「大有りとも。」

と笑つて答へたホッバイは、歩き出しながら、

「君等は度膽をぬかれるぞ。何しろ、千呎もあらうつていふ途方もない絞首臺をぶつ建てるんだよ。これで、七月四日を期して、一齊に紐育中の新聞記者の首を吊つてやるんだ。」

ところがこのホッバイの冗談が、本當に翌日の新聞に書き立てられたばかりではない、間違つてはゐたが肖像の寫眞まで一緒に掲載して、「チャアルス・ホレエス・ロイド氏の機敷に招かれて、驚くべき大事業計畫の交渉を遂げたるアラニット・ダイヤモンド鋼の發明者、マック・アラン氏」といふ説明までも麗々しく書き添へてあつた。

三

細君のモオドは、相變らずいまだに音楽に聴き惚れてゐる。けれども今はもう先刻のやうな淨い敬虔な心持で、耳を傾けることは出来なかつた。この若い細君は、ロイドの機敷の中の様子をよく見てゐたからである。勿論何か新しい事業を初めるのに忙しいのだといふ事も、それが夫のいふ通り「大事業」である事も心得てはゐる。けれども、それがどんな風の發明なのか、どんな種類の計畫なのか、決して夫には訊ねなかつた。モオドに云はせれば、機械とか技術上の事柄位、自分に縁の遠いものはない。又自分の夫に取つては、このロイドと手を握り合ふ事が、どれ程大事だかもよく承知してゐたのだが、然し何も、今夜といふ今夜をそんな會談に當てなくともよさうなものだと、腹の中では夫に對して不満を感じてゐた。長い冬の間のたつた一晚を、夫婦揃つて音楽會に出かけておきながら、第一かういふ音楽の最中にそんな職業上の事務や要件を考へ出すなんて事が、モオドにはまるで想像もつかない。どうかするとこのモオドは、自分の性質が亞米利加といふ國の風習にうまく合はないのではあるまいかと考へた事もあつた。こ

の國では何でもかんでも事務で、しかも事務のみである。休養の時と事務の時間を區別する事を辨へてゐる歐羅巴の方が、自分には幸福だつたのではあるまいかと考へるのである。けれども、モオドの心を不安にするものは、それだけでない。それはこの愛すべき細君の永久に目覺めてゐる繊細な本能だ。それはロイドの所謂「大事業」といふものが、自分の夫を獨占してしまふだらうといふ懸念であつた。この事業に夫が愈々取かゝるとなれば、さぞ夫は現在に輪をかけて自分なぞ構ひつけまい。現在すでにバッファロオの工場と仕事すらも、モオドには尠からぬ不満なのである上に。

モオドの楽しい心持に、一抹の暗影を投じたものは、この不安である。いつか額に深い皺が寄せられてゐた。けれども暫らくすると、急にその顔は、靜かに晴々して來た。それはフウゲのやうな、戯れるやうな輕快な、早い音楽の一節から、急にはつきりと子供の事が心に浮んで來たのである。實に謎のやうな聯想であつた。モオドは一人の幸福な母親として最も楽しい自分の立場にあることを思ひ起すことが出來たのである。そこでこの音楽の中に、自分の小さい娘の將來の豫言を聞き出さうと思ふ考へが、若い母親

の心を誘惑した。初めは何もかも素晴らしくゆくやうに思へた。娘のエディスは、この音楽のやうに幸福なものにならなければいけないわ、エディスの一生は丁度あのやうでなければいけないわ、と考へてゐる内に、その戯れるやうな朗かな晴々した心持は、急に困窮と不吉な豫想を喚び起すやうな、重苦しく引きずる調子に移つていつたのである。

モオドの心臓は次第に緩くりと鼓動して來た。「おゝ厭だ。可愛いあの子の一生が、こんな音楽みたいになつては堪らないわ。あたしは、あの子と子供のやうに遊んだり、経験のあるお母さんのやうに氣をつけてやつてゐるのに、おゝ厭だ、そんな莫迦々々しい事を考へたりして、あたし、とてもどうかしてるわ。」モオドは頭の中で、自分の子供を抱き庇つて、その可愛らしい體を、この重苦しい緊めつけるやうな音楽に對して防ぎ護らうとした。暫くしてから漸くこの厭な考へを、別の方向へ轉換させることが出來た。

そのモオドを救つてくれたのも、矢張り音楽の力であつた。また急にモオドの心は、澎湃たる音の流れに、あてどもない憧憬の世界へ連れてゆかれたのである。その憧憬は熱烈で壯麗で、一切の考へを窒息させてしまつた。モオドはかうして又體中を耳にする事が出來た。息をも繼がせず、

奔躍する情熱で、音楽は進んでいつた。これを指揮するものは、誘惑するやうな熱い聲だ。モオドは暴風に吹き飛ばされる一枚の木の葉に過ぎなかつた。するとこの時である。荒い呼吸に喘いでゐた情熱が、突然に何か知れぬ障礙にぶつかつて碎けた。巖に當つた大浪が碎け散つたやうであつた。それから轟々と押し寄せた激浪は、震へ戦く恐怖の悲鳴に碎け飛んでいつた。モオドは急に立ち止つて、自分には何だか譯の分らない、祕密な、知らないものを無理にも考へなければならぬやうな氣がした。息づまるやうな暴風の後の静寂は、平土間にそよいでゐた扇が、一齊に動かなくなつた位に、異様な、人の心を縛りつけるやうな力を持つてゐた。やがて、また曲は續けられて、頼りないおどおどした不協和音が聞えて來た。それと共に、扇も動き初めた。そこで壓迫され、苦しめられてゐるやうなこの音は、重苦しく、やつとの思ひで韻律の形式を作らうともがいてゐるやうで、モオドの心持を、陰氣に考へ込ませてしまつた。フアゴットは嘲けるやうに下から呼びかけ、セロは正直に苦しんでゐる。モオドはまるで自分の全生涯が、今ここで急に分つたやうな氣がした。わたしは幸福ではなかつた、いくら夫がわたしを大切にしてくれて、わたしは又夫

を偶像のやうに愛してゐても——いえない、決して幸福ではない、何か不足してゐるものがあるのだ……

かう思つた瞬間である。丁度其處へアランが、肩を叩いて、耳許でかう囁やいた。

「ねえ、おい——お前とおれとは、水曜日、歐羅巴へ行くんだよ。それにはバッファローへ戻つて、まだうんと用意をして置かなければならぬ事もあるんだが。どうだね、今から行けば、夜汽車にはまだ間に合ふが、お前の考へはどうだい。」

モオドは返辭をしなかつた。黙つて身動きもせず腰掛けてゐる。逆流した血が、肩から、頸筋から顔に上つて來た。次第に涙が眼に溜つて來た。二三分経つた。この瞬間ほど自分の夫を憎らしいと思つた事はなかつた。自分の用事がいかにさし迫つてゐるからと云つて、折角一心に聴き惚れてゐる音楽會から、わたしを連れ出さうとするなんて、何てひどいやり方だらう。さうとしかモオドには思へなかつた。

アランは、妻が深い溜息をついたの聞き、兩頬が眞赤になつてくるのを見た。自分の手はまだ女の肩に置いたまままだ。アランは細君を愛撫するやうにその手を動かして、

宥め謙すやうに、

「ぢやあ、好いよ、此處にゐよう。今のはたゞ訊いて見ただけなんだから、なに、明日の一番列車だつて、差支へはないさ。」

と囁やいた。

けれどもモオドの機嫌は、根こそぎ傷つけられてしまつた。それに音楽の方も、今は心を苦しめるばかりだ。緊めつけるやうな不安を抱かせるばかりだ。モオドは今夫の言葉に従つた方がいゝか悪いか迷つてゐた。其處へふと眼についたのは、例のロイドの愛嬢エセルであつた。令嬢は無遠慮にモオドの方へ望遠鏡を向けてゐた。之を見た瞬間に、モオドは起ち上つて、行かうといふ決心がついた。モオドは無理に微笑を作つて、エセルに見せつけようとした。まだ濡れてはゐるが、急に變つたやさしい細君の眼付に、アランは少からず驚いた。

「さあ、参りませうよ。」

モオドは、さう云つて立ちかゝると、夫のアランが慇懃に手を貸してくれたのを悦びながら、晴れやかに微笑して、いかにも幸福この上ない心持をわざと見せるやうにして、棧敷の外へ出て行つたのである。

四

アラン夫妻が中央ステーションへ着くと、丁度、汽車はプラットホームから出て行つた。

モオドは、小さい手を毛皮の外套のポケットに突込んで、深々と立てた襟の奥から、アランの顔を覗くやうにして、「汽車が出ちまつたわ。」

と笑ひ聲で云つた。出て好かつたと思ふ満足を感じずのは、何も難しいことは無かつた。

二人の背後に立つてゐるのは、下男のレオンだ。年寄りの支那人で、誰も彼もリオンと呼んでゐる男である。そのリオンが旅行鞆を擔いだまゝ、羨びきつた皺くちやの顔の愚鈍らしい表情で、出て行つた汽車を見送つてゐる。

アランは時計を出して見て頷いて、

「残念だつたなあ。」

と、人の好さうな口振で、

「リオン、ホテルへ逆戻りだ。」

アランは自動車に乗つてから、汽車に乗り遅れたのはお前の爲めにも反つて厄介な事になつたよ、といふ理由を説明して、

「もつと、うんと荷造りをしなくちやならなくなるよ。」と云つた。

細君はにこりとして、

「どうして。」

と訊き返しながら、夫の顔を見て、

「だけど、なぜあたしがお伴するつて事に、決めてらつしやるのよ。」

アランは驚いたやうに細君の顔を見て、

「お前は必ず一緒に行くとはつかり思つてたがなあ。」

「でもあたし本當に分らないんですもの。エディスを連れてこの寒空に旅行なんかしていゝでせうか。さうかと云つてあの子を置いて行くのは、あたしどうしても厭ですわ。」

アランは考へながら、自分の前を見詰めてゐたが、

「そいつは一才氣がつかなかつたね。」

とためらふやうに暫くしてからこの男は云つた。

「成程さう云へばさうだが、然しどうだ、兎に角やつてみようぢやないか。」

モオドは返辭をしなかつた。その次の言葉を待つてゐたのである。今度は、さう簡単に片附けられる問題ではない。暫くするとアランが云ひ添へた。

「船だつてホテルと同じ事だよ。それに船室も特等にしようと思つてるのだから、別に不自由はあるまいよ。」

モオドには夫の氣持がよく分つてゐる。これ以上に立ち入つて、一緒に来いと言ふ夫ではない。さう言つて頼む夫でもない。もうこれ以上くどくど云ふこともあるまいし、自分に取つても、萬一夫が一人ぼちで出發するやうになつた處で、決して氣を悪くすることはない。

モオドは、夫がもうこの邊で妥協して貰ひたがつてゐることを見て取つた。

アランはすつかり考へ込んで、がっかりしたやうに自分の前を見詰めてゐた。細君の拒絶が喜劇に過ぎないといふ事に、氣のつくやうな男ではない。この年になるまで一度として喜劇の味を知らぬ男だ。モオドの方がいつも呆れ返る位に、性格がごく單純で律義だ。

夫の困りきつた様子を眺めてゐたモオドは、急に胸が一杯になつて来て、夫の手を握り、

「嘘よ、嘘よ。わたし無論お伴しますわ。」

と言ひながら、優しい眼許に夫を見た。

「やつぱりさうだらう。」

アランは嬉しさうに細君の手を握り返した。

モオドは今までの厭な心持をどつかへやり、急に暗々とした氣持になつて、早口に元氣にしゃべり初めた。ロイドとエセル嬢の事を話して、

「ねえあなた、エセルさんて、餘程好い方でした。」

と訊くと、

「とても好い人だつたよ。」

「あの方をどうお思ひになつて。」

「おれには、ちつとも飾り氣のない人に思へたね。天真爛漫で、ちつと無邪氣過ぎて、子供らしい處があるね。」

「まあ。」と細君は笑ひ出した。自分にはどうしてだか分らないが、それでまた夫の返辭でちよいと不愉快な氣持になつた。

「いやね。あなたはまるで女つてものが分らないのね。あのエセルさんが天真爛漫だなんて。何處を探したら、そんな無邪氣なところが。おほムム。」

さすがにアランも笑ひ出さずにはゐられなかつた。

「おれにはさう見えたがな。」

と云ひ張らうとした。

すると躍起となり出したのがモオドの方だ。

「いゝえ、違ひますわ。」

と大きな聲を出して、

「わたし今迄にそんな滑稽な話聞いた事がありませんわ。男つて、みんなさうなのね。あのエセルさん位飾り氣の多い人はありませんわ。あの天真爛漫が奥の手なのよ。エセルさんて方はね、あなた、よく聴いて頂戴よ、とてもずるいコケットな人で、何でもかんでも打算してかゝるのよ。男つて男は、片つ端から丸めてしまふ人よ。本當の話よ。わたしよく知つてますもの。あなた、あの方のフィックスのやうな眼を御覽になつて。」

「いや。」

と、アランは本當の事を云つた。

「あら、さう。だつてあの人、マアベル・ゴルドンさんに、かういふ事を言つたことがありますのよ。御自分の眼はフィックスの眼ですつて、皆さんがさう仰しやいますつて。そんな人をあなたは無邪氣な人だと思つてゐるのね。あんな可愛い顔をして、とても野心家だわ。それにね、毎週毎週とも一遍は、あの方の寫眞が新聞へ出ますわ。それで、御自分ではかう言つて……兎も角晝でも夜でも、自分の宣傳をなすつてゐらつしやるんですわ。まるでホッピーさんそつくり。おまけに、慈善事業をするのだつても、みんな自家

廣告よ。」

こゝでアランがふいと、
「だがあのお嬢さんも、本當はいい人なんぢやないかね。」
と口を出した。

モオドはまた笑つて

「エセルさんがですか。」

と言つてから、急に夫の眼の色を讀まうとした。丁度乗つてゐた自動車は、爆音と一緒に激しく揺られたので、ニッケルの握りをしつかり握まへながら、

「エセルさんて、本當にそんな綺麗なお方なの。」

「本當に美人だよ。だがおれにも分らんのはね、あのお嬢さんがとても厚化粧をしてゐる譯だ。」

モオドは當てが外れたやうに、

「何だかあなたは、あのお嬢さんに惚れたやうなのね。よその男の方と同じやうに。」

わざと心配らしい顔つきをして、何氣なく訊いてみた。

アランは笑ひ出して、細君を自分の方へ抱き寄せながら、
「何を莫迦な事をいふ。」

と、しみじみ言つて、細君の顔を自分の頬に押しつけた。かうなると、またすつかり満足したのは細君である。ど

うして今日は、こんな小つぽけな事に、一々拗ねたかつたんだらう。あんなお嬢さんなんて、相手にとつて不足だわ、と思ひながら。

モオドは暫らく黙つてゐたが、やがて眞面目な調子で、
「でもねえ、エセルさんだつて、本當はいい人なのかも知れませんか。わたしもさうは思ひますわ。」

と云ひ出した。

けれどもかう云ひきると同時に、氣がついてみると、自分では一向エセル嬢の善良さを本當に信じてはゐないのである。そこでもう、今夜は何事も、あの令嬢の事は考へまいと思つた。

ホテルの食事は自分達の部屋へ運ばせた。それが済んでから、ぢきに細君は寢床に入つたが、夫のアランはサロンに残つて手紙を書いてゐた。寢床に横になつても、モオドはすぐに寢つかれない。この日の朝は早くから起きてゐたので疲れてはゐるのだが、ホテルの部屋の乾いた暑い空氣のせいで、軽い熱が出た。今日一日で経験した種々な興奮、旅行、音樂會、群衆、エセル・ロイド嬢、かういふ一切のものが、疲れきつた頭に、もう一度浮び上つて來た。もう一度耳の中で、音樂や唄が聞え初める。自動車の疾走する

響。喇叭の音。何處か遠くに高架鐵道が騒がしく通る。モオドがうとうととして眠りかけると、今度は、暖房装置の中ではちんといふ音がして眼が覺めた。同時に、ホテルの昇降機が低く歌ふやうな音で昇つて來るのが聞えた。扉の間が、まだ明るく見えてゐる。

「あなた、まだ書いてらつしやるの。」

モオドは殆んど唇も開かないで訊くと、アランは、
「さあ、行つてお寢なさい。」

と答へた。けれどもその聲がひどく下の方から聴えて來たので、細君は軽い熱でうとうとしてゐる中にも、思はず笑はずにはゐられなかつた。

細君はぐつすり寢込んだ。ところが、俄かに體中がぞくぞくして來て、また眼が覺めたのである。胸一ぱいの不安と、不思議な恐怖に襲はれながら、自分を戰慄させた原因が何であつたか、それを考へ出さうとした。それはすぐに分つた。夢を見てゐたのである。子供のエディスの部屋へ入つて行つたら、人もあらうに、あのエセル・ロイド嬢が、其處にゐた夢であつた。眼も眩むほど美しいこの令嬢が、例のダイヤモンドを額の眞中に飾つて、小さいエディスをやさしく寢かしつけてゐた——丁度、エディスの母親氣取で……

夫のアランは襦袢の袖をまくつて、長椅子の端に腰をか
けて、手紙を書いてゐた。かたりと扉の方に音がしたので、
見ると細君のモオドだ。寝巻のままで、眠さうな眼を眩し
げに燈火の中に向けて、ぼち／＼やつてゐる。

頭の髪がきら／＼と光つて、その形は青春の盛りはなはの少女
のやうに見えた。何か新鮮な感じが、その體から迸はなはするや
うだ。けれどもその眼を見ると、不安な色に燃えてゐる。
「どうかしたのかい。」

とアランが訊くと、細君は慌てゝ微笑して、

「いゝえ、何でもないので、とても莫迦な夢を見たのよ。」

と答へながら、安樂椅子に腰を下して、頭の髪をさつと
撫で、

「どうしてお休みにならないのよ。」

と訊き返した。

「この手紙は、ぜひ明日の船に間に合せないといけないか
らね。それよりもお前、風邪を引くよ。」

細君は首を振つて見せて、

「大丈夫よ、風邪を引くどころか、この部屋はとても暑う
と云つてから、初めてばつちりとさえてきた眼で夫を見

て、
「ねえあなた、なぜわたしには黙つてらつしやるのよ、ロ
イドさんと一緒にお始めにならうつて事を。」

アランは微笑して、ゆつくりとかう答へた。

「お前だつて今迄そんな事を訊きもしなかつたぢやない
か。おれもこの事がまだ海の物とも山の物とも決まらん間
は、話してみる氣はなかつたのさ。」

「そんなら今、話して下さらなくつて。」

「聞きたければ話すともさ。」

そこでアランは、この事業がどういふものであるか、細
君に向つて説明し初めた。長椅子に凭りかゝつて、人の好
ささうな微笑を浮かべながらゆつくり／＼と、今度の計畫と
いふのを解り易く説明した。丁度東リプアに橋でも架ける
位にしか考へてゐない程度だ。寝巻のままで坐りこんで聽
いてゐたモオドは、驚いたが呑み込めなかつた。けれども
段々分るに従つて、益々驚いて来て、眼はいよ／＼大きく
なり、その輝やきを増して来た。頭の中はすつかり熱した。
こゝで初めて、今日までの夫の努力、研究、模型、種々の
山なす計畫書類の意味がはつきり分つて来たのである。又、
今初めて、夫が何の爲めに出發を急いでゐるのかも分つた。

夫は一分間の時でも、猶豫してはゐられなかつたのだ。今
書いてゐる手紙が、どうして明日の船に間に合せなければ
いけないかも分つた。モオドはまるで夢を見る心持であつ
た……

アランが説明を終つて見ると、細君の眼は大きく張つて
輝やいてゐた。それは情熱と嘆賞そのものであつた。アラ
ンは、

「さあこれで分つたらう、お前にも。」
と云つて、細君を寢床へ連れて行かうとした。すると、
モオドは夫の前にか／＼と進み出て、あらん限りの力で
夫を抱き緊め、その唇に熱く接吻した。

「あなた、あなた。」
と吃るやうに云つた。

アランはもう一度モオドに、早く行つてお寢みと言ふと、
モオドはそれをすぐ肯く氣になつた。頭の中はまだ酔つた
やうな氣持だ。今急に、夫アランの事業が、形こそ違ふが、
今夜聽いたあのシンフォニーと同じやうに偉大なものであ
る、といふ考へが閃めいて来たのである。

けれども五分と経たない内に、また細君はアランのゐる
處にやつて来た。アランはびつくりした。するとモオドは

毛布を持つて来て、

「お書きになつて頂戴よ。」

と囁やくやうに云ひながら、アランの脇へ、その毛布に
くるまつて、長椅子の上に横になつて、夫の膝を枕に寢込
んでしまつた。

アランは一寸手を休めて細君を見て、腹の中で、あゝ綺
麗な、可愛い女房ぢやないか、この女の爲めなら、自分の
生命を千倍にして捧げても惜しくない、と考へながら、ま
た熱心に手紙を書き續けた。

五

次の水曜日である。アラン夫婦と小さなエディスとが、歐
羅巴行きの獨逸汽船で、大西洋を三日で乗り越す船に乗り
込んだ。ホッピーも一緒である。この男は「八日間だけ一緒
に居る」約束であつた。

モオドの氣持は、驚くべきほど上機嫌だ。晴れやかな氣
持で、少女時代のやうな快活が復活したのである。この上
機嫌は、不愛想な冬の大西洋の航海中續いてゐた。尤もア
ランが始終傍にゐたわけではない、夫の顔を見るのは、食
事の時か夜ぐらゐであつた。絶えずにこ／＼と笑つて面白

さうに喋りながら、毛皮の外套にくるまつて、軽いエナメル靴で凍りつくやうな甲板のプロメナドをあつちこつちと飛び歩いてゐたのである。

この汽船の中の一番の人気者は、ホッピーであつた。船醫や會計の船室から、神聖視されてゐる司令塔に至るまで、この男は我家のやうに心得てゐた。朝早くから夜遅くまで、船内到處に、この男の開けつ放しな、いくらか鼻へかゝる聲を聴かないといふことは無い。

アランの方はこれと反對に、人と話しもしなければ顔も見せなかつた。一日中忙しうであつた。この快速船のタ イピストは、二人とも航海中ぶつ通して、アランの手紙を書くので手が塞がつてゐた。何百通とも知れない手紙を書いて、一々それに宛名を記入したのが、アランの船室に山となつてゐた。これはアランの大計畫の第一線に對する準備であつた。

今度の旅行は、先づ巴里から初まつて、其處からカレエとフォルクストンへ向つた。フォルクストンでは、海峡の海底にトネルを掘つてゐる最中で、英吉利はこの工事を、萬一の場合に敵の襲撃に利用されることを恐れて、容易に承諾しなかつたものである。尤も之は笑止な話で、そんな

敵襲は僅かに一箇中隊の砲列で十分撃退し得る筈だ。アランはこのフォルクストンに三週間程滞在した。それからロンドン、ベルリン、エッセン、ライプチヒ、フランクフルトを通つて、また巴里へ戻つた。巴里には二三週間滞在した。アランは午前中を自分の仕事で過して、晝飯を終るとすぐ會議へ出た。會議には、大會社の代表者、技師、工業家、發明家、地質學者、地理學者、海洋學者、統計學者を初めとして、各般に互つての有力な代表者を網羅し、しかもこの會議は毎日のやうに開かれた。出席者の國籍を云へば、佛蘭西、英吉利、獨逸、伊太利、諾威、露西亞等、歐羅巴各國の智力を一堂に集めたものである。

それから夕飯は、細君と差向ひで喰べるのだが、それもうまく來客が來ない時だけである。

モオドの機嫌は、相變らず好い。夫のアランを取巻いてゐる仕事と計畫の雰圍氣が、モオドを生き／＼させるのである。二人が結婚をして間もない頃で、今から二三年前であつたが、殆んど今度と同じやうな旅行をした事があつた。その頃のモオドは、夫が一日の大部分を他人との會談や、理解出來ないやうな仕事で潰してしまふ事を黙つてはゐられなかつたものである。ところが今はもう、かういふ會議

や仕事の意義を、十分にのみ込んでゐるので、一切の趣がまるで變つてしまつてゐた。

モオドは暇がたつぷりあつたので、この有り餘る時を綿密に區切つて、一日の時間の一部分だけは子供のために費し、後は博物館や寺院その他の決りきつた、所謂見物をして廻つた。新婚當時の旅行では、餘りかういふ見物をする氣にはならなかつた。尤も夫のアランは細君の方で行かうと言へば何處へでも連れて行つたものだが、モオドの方で、かういふ立派な繪畫、彫刻、古い織物や裝飾品などの美術品に對しては、夫が餘り興味を持つてゐないことに氣が附いたからである。アランの好んで見たがるものは、機械であつた。工業的製作物であつた。大規模な技術的裝置、航空船、工業博物館であつた。しかも細君の方はそんなものには一向知識も興味もない。

ところが今度は、たつぷり暇な時間があるので、モオドは到る處に幾千の見事な美術品を鑑賞して歩いて、歐羅巴大陸の尊さをしみ／＼と味はつた。モオドは、機會あるごとに、劇場や音樂會へも出かけた。亞米利加はそろ／＼鼻についた。或る時は何時間も古い大通りや狭い露路をあつちこつちとぶらついて、これは面白いと思ふと、一寸した商

賣店とか横に曲つた古い家の破風などをカメラに収めた。それから色んな本や、美術館陳列品の複製寫眞、新書様々の建築物の繪葉書などを澤山に買ひ込んだ。繪葉書の方は、ホッピーから頼まれたのである。かうしていろいろな材料を拾ふのに一生懸命であつたが、愛するホッピーの爲めにも、どんな努力も厭はなかつた。

モオドは巴里で、八日程一人であつた。アランはナントの近く、ビスケイ灣の海岸のレサブルへ、數名の測量師や、大勢の各専門代表者達と一緒に調査に出かけたのである。それが済むと今度は、モオドも一緒に、測量師や技師を初め大勢の代表者と、アゾオル群島へ船で出掛けた。アランはこの群島で、フヤアル、サン・ヨルゴ、ピコといふ島々で三週間以上に亙る調査をしてゐる間に、子供のエディスと一緒に待つてゐた細君は、今までに嘗て覺えなかつた位に美しい春を楽しむことが出來たのである。それから今度はアゾオルから貨物船で、大西洋を斜めにベルムダ群島に向つた。この時にモオドの心を何よりも喜ばせたのは、この貨物船の乗客が自分達だけであつたことである。やがて目的地へ着いてみると、群島中のハミルトン島で、思ひがけなくもホッピーと出逢つた。この人氣男は、態々夫婦を迎へ

る爲めに、此處まで出掛けて来たのである。アラン夫婦は大いに喜んだ。ベルムダ群島の用事はさつさと済んで、六月にはみんな亞米利加へ引返へした。アランはブロンクスに別荘を借りたが、やがて、倫敦、巴里、伯林と同じやうな活動が、この亞米利加でも初められた。毎日アランは、合衆國中の各大都會からやつて来た代表者、技師、科學者と會議をした。同時に、アランとロイドとの長時間に互る會談が度重なる、一般社會の注意も自然そこに向けられ初めて、新聞雜誌の連中は、まるで死骸の匂ひを嗅ぎつけた狼のやうに、血眼になつて秘密の正體を看破しようと奔走し初める。何か分らないが大冒険の大事業が計畫されてゐるに違ひない、といふ噂が紐育全市の人氣を沸騰させたのである。

けれどもアランは素より、その計畫を打ち明けられた連中も、みんな沈黙を守つてゐる。そこで搦手からと、細君のモオドに色々やまをかけて見るが、これも笑つてばかりゐて、一向要領を得させない。

いよく準備行動が終つたのは、八月の末であつた。大合衆國の有力者ロイドは、資本家、大工業家、並に大銀行家の一流代表者を網羅した三十名に對して、お目にかゝつて

お話申上げたいといふ招待狀を發送させた。しかもその招待狀は、ロイド自身が書いて、それを配達するにも特別な使ひに、受取る人に手渡しすることを命じて、この會合の重大な事を分るやうにしようとした。

そこで愈々この記念すべき大會議は、ブロードウェイのホテル・アトランチックで開かれた。九月十八日である。

六

その二三日の紐育は、熱の波に浮かされてゐるやうに暑かつた。アランも決心して、會合の場所を、ホテルの屋上庭園と決めたのである。

招待された名士連は、大部分紐育には住んでゐなかつたが、その日の内にみな集つて、中には昨日からもうこのホテルへ来てゐる人もあつた位である。

この人達は埃だらけになつた大型の旅行用自動車へ、細君や娘や息子まで乗せて、夏の別荘地のヴェルモント、ハムシャイヤ、メエヌ、マッシュウセツツ、ペンシルヴァニア等から駆けつけた連中であるが、大仰な事の嫌ひな人や一人でくる人は、殆んど各驛無停車の特別急行列車で、セント・ルイス、市俄古、シンシナチからやつて来た。かういふ連中の

贅澤なヨットは、みんなハドソン・リヴァアの船渠に入つた。それから特別航空路によつて、市俄古——紐育中央公園間七百哩の空を、八時間で飛んで来たのが、市俄古の名士、キルガラン、ミュレンバッハ、及びシイ・モリスの三人である。スポオツマンとしても知られたワンダースチフトは、午後になつてから單葉飛行機を操縦して、アトランチック・ホテルの屋上庭園に着陸した。續いてもう一組、餘り目立たぬ旅行者の格好で、ホテルの表玄関へと歩いて、各自に小さい鞆を提げてやつて来た連中もあつた。

これでみんな揃つた。ロイドは、極めて重要な問題であるからと云つて招いたのだが、體の血よりも金の方をもつと多く拵へようとして團結した連中だから、その招待に出ないなんて事は許されなかつた。またこゝで一つの仕事を嗅ぎつけたので、誰も彼もやつて来たのでもない。(やつて来て反つて金を出させられるやうな事さへあるくらゐだ)。かうしてやつて来た第一の理由は、何かの企業の計畫の第一歩を援助することが出来ると共に、その計畫は自分達を大きくした企業慾を満足させると期待したからである。この神祕的な計畫を名づけてロイドは通知狀の中に「古今を通じて最も偉大にして最も大膽なる」と云つたのである。

勢くともこの言葉だけでも、招待を受けた連中を地獄から引張り上げるに十分であつた。所謂新事業の計畫といふ事にかけては、生活それ自身のやうに考へてゐる連中だからである。

無論財界の巨頭連が、これだけ揃つて動いては、一般社會の注目を惹かずにゐるわけがない。どの一人を引き出して見ても、その一舉一動は絶えず八方から注目されてゐる人物ばかりだ。既にその日の朝の内に、取引所は僅かながら熱狂した。一寸聞き込んだ事が本當なら、それ一つで立派な財産が儲けられる今日だ。新聞紙はアトランチック・ホテルに集まる紳士といふ紳士の名前を、片端から報道して、その一人々々がどんなに社會的價值のある富豪であるかも知れずに書き加へた。夕方の五時頃には、もうその總額が數十億圓に上る金持が集まつた譯である。ともかく何か分らないが、唯事でない事件が起らうとしてゐる。大規模な資本戦だ。或る二三の新聞紙は、まことしやかに次のやうな記事を掲載して、まるで記者がロイド氏と晝餐を俱にして、記者は報道すべきニュースを喉まで一杯持つてゐるが、遺憾ながら、ロイド氏はその發表を固く禁じた、といふやうな報道を出したものである。又その他の二三の新

聞紙では、親愛なるロイド君が食後の果物の際に特に打ち明けた言葉として、「別段大した事ではない」と書いてゐた。その外急行単軌電車が、市俄古からサンフランシスコまで延長されるとか、航空路網を合衆國全體に擴張して、例へば今日ボストン行、市俄古行、バッファロー行、セントルイス行と云ふやうに、何處へでも旅客の好きな都會へ飛んで行く事が出来るやうになるのだとか、書いたものもある。例の人氣男ホッピイの所謂「紐育をしてアメリカのヴェニスたらしめよ」といふ理想が、今すぐにも眼の前に事實化して現はれる、と書いたものもあつた。

ホテルの周圍に眼を光らしてゐる探訪記者の連中は、まるで犯人を追跡し初めた警察犬である。誰も彼も、炎熱でふやけたプロオドエイのアスファルトが、靴の踵で穴のあく程力み返つて、ちつとアトランチック・ホテルの三十六階もある天邊を睨み上げては、きら／＼光る白壁の反射に眩まされて、みんなの頭の中に一種の錯覺を起させた。一人の機敏な男は素晴らしい智慧を出したものである。電話線の工夫に化けてホテル内に紛れこみ、あはよくば財界巨頭連の部屋まで入り込んで、室内電話機でもいち／＼廻しながら、何か一言でも耳に入れてやらうといふのである。ところが

この男もホテルの支配人に見つかつて、「電話の故障は一本も御座いませんから。」と、いやに丁寧な言葉で追拂はれたものである。

燃えるやうな暑氣と、逆上るやうな昂奮とが煽りつける眞中に、眞白な大きな塔のやうなホテルが黙然として突つ立つてゐる。日が暮れると共に、愈々沈黙してゐる。今日の午後の例の電話工夫になり損ねた男は、口髭までくつ附けて、飛行家ワンダースチフト氏の飛行機職人を裝ひ、機體検査と稱して屋上庭園へ紛れ込まうとしたが、これもすぐごと引返へして來た。例の支配人に鄭重な笑顔で「ワンダースチフト様のマルコニ機は、少しも異狀が御座いませんから。」と斷られたからである。

ところが、その男は、往來へ出て來ると、急に跳び上つて、何處かへ姿を消してしまつた。何か新しい手段を考へついたのである。果してそれから一時間ばかりすると、今度は、各國ホテルのラベルを一杯貼りつけた旅行鞆と一緒に、自動車に納まつてホテルの表玄関に現はれたものだ。世界漫遊客といふ觸れ込みで、一番上の三十六階の部屋を要求したが、三十六階はホテルの雇人や従業員達の泊るところだつたので、結局この男は三千五百十二番といふ部屋

で我慢する事になつたのである。支配人はいかにも愛嬌たつぶりの商賣人らしい顔付で、「そのお部屋ならば空いて居ります」と云つた。此處でこの男は、屋上庭園係りの支那人ボオイを買収して、コダック位の大きさの、眼に立たないマイクロフォンを、屋上庭園の鉢植の木の蔭に忍び込ませようとした。ところが、流石の智慧者も、アラニット鋼がいかなる弾丸も貫くことの出来ない堅い鋼であることを忘れてゐた。

ともかくアランが、一流の綿密な命令を與へて置いて、それを又ホテルの支配人が責任を以て引受けてゐるのだから、敵はない。即ち、招待された代表者の全部が屋上庭園へ集まると同時に、昇降機は三十五階まで止められてしまふ。それから給仕のボオイ達も、集まつた出席者の最後の一人が出てしまふまでは、この屋上庭園を出る事は許されなかつた。唯一つの例外として、七名の新聞代表者と三名の寫眞撮影師が列席することを許された。かういふ連中がこの日の大立物であるアランを必要としたやうに、アランの方でも、かういふ連中が必要であつたのである。けれどもそれも、會議の進行中は、絶対に外部との連絡を取らない、といふ固い約束をして、初めて許したのである。

やがてアランは、屋上庭園へ出て來て、自分の命令通りやつてあるかどうかを確かめた。丁度九時數分前である。ところがアランはすぐに、月桂樹の植木鉢に潜められてあつた無線電話の装置を發見したのである。おまけにそれから十五分の後には、この無電装置が綺麗に紐でからげられ封印までされて、至急小包となつて、三千五百十二番室へ送り返された。——勿論この男も驚かなかつた。この部屋で受話器で聞いてゐると、幾らか怒氣を含んだ聲で「君、この器械をどけてくれ給へ」と言つたのが、はつきりと耳に入つたからである。

九時になると昇降機が活動し初めた。招待された名士連は、汗を流し息を切らしながら、ホテルから屋上へ出て來た。冷却装置は十分にしているのだが、ホテルの部屋の中はとても燃えるやうに暑い。ところが屋上庭園もそれに劣らぬ位暑い。まるで地獄から出て來て淨罪の劫火の中へ飛び込むやうなものである。誰も彼も昇降機から吐き出されたと思ふと、其處に待ちかまへてゐた暑氣の壁にぶつかつて、たじ／＼となる。そこですぐに上着を脱ぎ捨てしまふ。その場に婦人が居合せようが、そんなものに丁寧な斷りを言つてゐる暇はない。この婦人とは

別人ならぬアラン夫人のモオドである——晴れやかに、雪白のドレスを着けてゐる姿は花のやうである——それからもう一人は、ブラウン夫人である。この方は小柄の貧相な婆さんで、黄色い顔に意地悪さうな眼を光らせた、耳の遠い吝嗇家だ。それでも合衆國第一の女金満家で、有名な金貸である。

招待された連中は、誰も彼もお互に知り合の間である。ありとあらゆる競争場裡で出會つたことのある同士だ。何年となく肩を並べて活躍した同士もあれば競争相手となつて戦つた覚えのある連中もあつた。お互ひの間では餘り大した敬意を持つてゐない癖に、それでも表面はともかく丁寧である。誰を見ても胡麻鹽頭でなければ眞白で、秋の如くに、冷靜で品があつて、澄まして慎重な様子をしてゐた。大部分の人は、人の好きさうな、親しみのある、子供のやうな眼を持つてゐる。かういふ連中が、あつちこつちに一團を造つては、冗談を云ひ合つたり無駄談をしてゐる。さうかと思へば、二人位づつ、あつちこつちを歩き廻つては小さい聲で話し合つてゐる。一人ぼつちの人、沈黙家は、さつさと安樂椅子に腰を下して、冷たい眼で考へ深さうに、いくらかむつとりした顔付で、床に敷いてある波斯絨毯を

見詰めてゐる。時々みんなが時計を出して見ては、昇降機の方へ眼をやつてゐる。まだ續々と遅れた連中がやつてくるのである……

遙か下の方では全紐育が煮え立つてゐる。そこから立ち騰る濁気が、この暑さを更に煽り立てゝゐるやうだ。紐育はまるで角力をとつた後の力士のやうに汗を掻いてゐる。三百哩を走り續けて、停車場のホオムに一息入れた機關車のやうに喘いでゐる。無数の自動車も、ぐにやぐに溶けて來たアスファルトにべたつきながら、兩側から建物の迫つたプロオドエイを唸り吠えてゐる。それに電車がたて込んで、行列になつて、無暗にベルを鳴らす。何處かしら遠くの方で、けたましましい鐘の音がわめき出したかと思ふと、地面をさらつてゆくやうに消防自動車も飛んで行く。まるで巨鐘が空中でぐわんぐわん鳴つてゐるやうである。それに交つて遠くから來る喚聲は、何處か遠くで、人間の一隻團が虐殺でもされてゐるやうに聞える。

ぐるりと周圍には、濃い群青に沈んだ暑い夜に、燈火がびか／＼光つてゐる。一寸見たのでは、この燈火は空のものか地のものか分らない。この屋上庭園から見ると、二十基米突の長い溪谷のやうなプロオドエイの断面圖が眺めら

れる。紐育全市はプロオドエイで左右に眞二つになつてゐるのだ。それは白熱しきつて、大きな口を開いた熔鑪だ。その中には様々の色の焰が動き、その底に、芥子粒の灰の塊がうよ／＼と蠢めいてゐる。それが人間だ。直ぐその傍の横通りは、まるで溶かした鉛の川のやうにぎら／＼光つてゐる。ずつと向うにある斜かひの道には、明るい銀色の霧が煙つてゐる。或る廣場の電燈の灯の中に、白く二三本、幽靈のやうに立つてゐるのが摩天樓だ。それに續いて、ごちや／＼に塊まつた塔のやうな建物が、黒く、黙つて、大きな墓石のやうに突立つて、落ち窪んで、消え入りさうに並んでゐる十二階か十五階の小さい建物の上に聳えてゐる。遙か向うの空には、十二三ばかりの高い建物の窓硝子が、鈍く光つてゐる。其處此處に聳えてゐる四十階の高い塔の上には、幽かな光がち／＼見えてゐる。これはレジス、メトロポリタン、ワルドルフ・アストリア、リパブリック等の屋上庭園である。地平線にぐるりと輝やいてゐる重苦しい火は、ホボカン、ジェルシイ・シテイ、ブルックリン、東部紐育だ。ぼんやり見える二つの摩天樓の中間に、一分ごとに二重色の光の流れが明滅する。これが第六丁目の高架鐵道だ。まるで、絶縁壁の間を飛ぶ電氣火花の縫合線の

やうだ。

このホテルの周圍には、盛んに花火が揚つてゐる。間斷なしに發射される光の噴水だ。五色の光線の束が往來から空へ向つて跳び上つてゐる。さつと走つた閃きが、高い塔を下から上へと掻き裂いたかと思はれる間に、途方もない大きな靴の花火だ。家が燃え出したかと思はれば、その焰の中から眞赤な牡牛の姿が現はれる。ブル・ダルハム、煙草だ。火箭のやうな花火がすると中空に延びて、爆發すると人寄せの文句になる。董色の太陽が狂氣のやうに、高く宙で廻轉しながら、マンハッタンの上で火を吐く。探照燈の蒼ざめた光芒が、地平線の方へ延びて、眞白な建物の沙漠を照らす。高い空には、蒼ざめて影も薄くしよんぼりと弱り果てた星と月とが、火花を吐く紐育を見下してゐる。

砲臺の方から昇つた廣告の飛行船が、微かにプロペラの唸り聲を立てながら、梟のやうな大きな眼をして現はれてきた。この怪物の横腹には、こんな文句が現はれたり消えたりする。「健康—効果—暗示—富—ブイン町十四番地。」

この時アトランチック・ホテルの三十六階の遙か下には、このホテルをめくつて帽子の大量である。探訪記者も代表者も、プロオカアも見物人も、きら／＼八方から照らしつ

ける光の流れの中にあるから、影ひとつ無い。誰も彼も眼を廻しさうに緊張し切つて、見上げてゐる先は、屋上庭園の光の花輪である。ホテルは熱に浮かされたやうな聲に取巻かれて、その騒ぎを抜けて、プロオドエイの鼠と云はれる新聞賣子が、はつきりした聲で囁き散らしてゐる。

「號外、號外。」

『ウォールド』紙は、最後の瞬間といふ時に、最後で、最大の勝利を占めて、他のすべての同業者を負かしたと思つた。『ウォールド』紙は何も彼も知り抜いてゐて、財界の巨頭連が、今この屋上庭園で汗だくになつて、計畫を進めてゐる内容を、精細に知つたといふのである。即ちそれは、海底の郵送事業で、A・E・L・M——アメリカ、ヨーロッパ間の電送郵便だといふのである。丁度今日地中の管を通す氣壓の力によつて、數通の手紙が、紐育から桑港へ押し出されたのである。そこで強大な通風管をケエブルのやうに海底へ埋めて、歐羅巴へ發送しようといふ。まづベルムダとアゾール群島を通過して、三時間以内に歐米間を連絡するのだといふ事である。『ウォールド』紙は、アランが辿つた旅程を精確に調べたことが分る。

屋上庭園の方でも、さすがに誰よりも冷靜な神経の男ま

でも、蒸すやうな暑氣と、熱し、燃え、輝く紐育の街上の影響とを蒙らないわけにはいかない。誰も彼も、待たされる時間が長びくにつれて、多少なりと逆上せて来た。するとそこへ金髪のホッピーが頗る眞面目くさつた態度で、開會の挨拶を述べ初めると、一同はつと救はれたやうに感じたのである。

ホッピーは一通の電報を振り廻して、ロイド氏が病氣の爲め外出が出来ない、従つて諸君にお目にかゝつて御挨拶申上げられない事を頗る遺憾に存じて居る、といふ意味を傳へた。それからロイド氏の依頼によつて、此處に諸君の前に御紹介申上げようといふのは、多年エヂソン工業會社の一員として活動され、且つダイヤモンド鋼アラニットの發明者として知られたマック・アラン氏である、と述べた。

「此處に居られるのが同君です。」

とホッピーはアランの方を指さした。アランは、細君と並んで籐椅子に腰かけて、ほかの人達と同じやうに襯衣一枚になつてゐた。

ホッピーは更に言葉を續けて、

「アラン氏は、是非皆様のお耳に入りたい計畫を持つておいでで、それを此處に御提案なさらうといふので御座いま

す。この計畫たるや、ロイド氏の言葉を以てすれば、空前絶後の最も偉大にして最も大膽なる計畫で御座います事は、諸君も既に御承知の事かと存ぜられます。アラン氏は、該計畫を完成するに十分なる天分才能を持つて居られるが、たゞ然し、これを實現するには、その資金を必要としてをられるので御座います。」

とまで言ふと、今度はアランの方を向いて、

「さあこの先は君に、マック君。」

と言ふと、アランは立ち上つた。

するとホッピーは、一寸待てといふ合圖を與へ、ちらりと前の電報へ目をやつて、次のやうに開會の辭を述べ終つたのである。

「私は忘れてをりました……今夜御出席の諸君がマック・アラン君の計畫に御賛成下さる場合には、ロイド氏自身に於ても、二千五百萬弗の出資をすると申して來られたので御座います。」

かう言つてアランの方を振返つて、

「さあ、君だ。」

アランはホッピーと替つて進み出た。蒸暑い息詰まるやうな沈黙だ。遙か下の街の上は、愈々雑沓し、熱狂し、喧騒す

るばかりだ。一同の眼はアランの上に集まつた。何か途方もない計畫を發表するんだと言つてゐたのは、あの男だつたのか、と云ふ眼だ。——モオドの唇は、極度の緊張と不安とに大きく開いてゐた——アランはこの聴衆に向つて、決して自家廣告がましい言葉を述べなかつた。極めて落ち着いた會衆を見廻したこの男の態度には、何處にも、殆んど興奮の様子は窺はれなかつたが、實は内心では、妙からぬ動搖を感じてゐたのである。元來、かういふ連中の頭を呑み込んでかゝる事は中々樂でない。それにアランは、何もかも分つてゐるのだが、雄辯家ではなかつた。又、所謂名士の連中の前で辯じるのは、これが初めてであつた。けれども愈々始めてみると、その聲は、落ちついてはつきりしてゐた。

そこで、ロイド氏の言葉から、諸君は、多大な期待をなすつておいでだらうが、却つてそれでは諸君を失望させることに終りはしまいかと恐縮してゐるが、大體自分の計畫はそんな空前絶後といふ大したものでもなく、せい／＼バナマ運河か乃至は、セイロン島と印度とを結びつけたロオヂャア卿のバアク・ストリート・ブリッジに比較される位が關の山で、よく見れば甚だ單純な考へなのである、と述べたの

である。

で、太いズボンのポケットから、白墨を一本出して、背後に立てた黒板へ二本の線を描いた。

「此方が亜米利加で、彼方が歐羅巴だと致します。私はこの兩大陸間に、十五年計畫で一本の海底トンネルを開鑿し、二十四時間で亜米利加から歐羅巴へ汽車で走れるやうに、致したいと考へるので御座います。これが私の目下の計畫で御座います。」

かう言つた瞬間である。寫眞師の焚くマゲネシウム之光がぱつと燃え上つた。アランは一寸言葉を切つた。街上からはわあつといふ喊聲だ、屋上庭園の會議の愈々始まつたことが分つたのである。

初めはこのアランの計畫は、兩大陸の歴史に一大紀元を爲すものであり、この進歩した現代にも、決して平凡なものではなかつたが、それでも之を聞いてゐる人達には、一向感銘を與へなかつたやうな様子であつた。大部分の連中は失望さへしたやうであつた。何處かで一度聞いた事のある計畫のやうに思へたのである。どうも世間によくある雲を掴むやうな計畫に考へられた。これがまだ五十年前か、或は二十年前でも、かういふ計畫を持出す男があれば、誰も

笑はずにはすまなかつた事であらう。こゝに來てゐる連中は一寸時計を巻く間にも、多くの人間が一ヶ月かゝつて稼ぐ以上の金を儲けるやうな人達である。明日といふ日に全地球が爆彈のやうに破裂しようとして、顔色一つ變へないやうな人々が、此處にゐるのである。その代りには、退屈を我慢してゐられるやうな者は、一人だつてゐない。この連中は誰もこの退屈を恐れてゐた。ロイド氏さへも、今日はやつて來ない位である。そこで今日はこの若いアランが、何か古臭い事でも持ち出して、例へば、サハラ沙漠に灌漑設備をして、其處を田か畠にでもしようとか、そんな類の事を言ひ出さないものでもなかつたのである。然し今述べ立てた計畫は、尠くとも退屈ではなかつた。それだけでも聴く方には、大助かりであつた。殊に、例の一人ぼつちの連中と沈黙家とは、ほつとして息をついた。

ところでアランの方では、この聴衆を自分の計畫で壓倒してしまふ事は、決して考へてゐなかつたので、自分の説明が與へた感銘で、すつかり満足してゐた。さし當りこれ以上要求することは出来なかつた。自分の理想を徐々に築き上げて行く事は、やれば出来たかも知れないが、アランはわざと散彈のやうに自分の考へを聴衆にぶつけてしまつた

のである。表面にはわざと無關心を装つて、どんな雄辯家でも辟易させるやうな、鈍重、訓練、倦怠、打算、自己防禦等の厚い鎧を、一舉に打ち破つてしまはうとしたのである。アランは、この七十億の資本家に、自分の計畫を是非とも聽いて貰はうとしたのである。それが自分の第一の使命で、それ以外には何も無い。しかもそれが今成功したやうに思はれた。何處かで革張りの椅子が鳴つて、二三の者は樂に體を延ばして凭りかゝらうとし、葉巻に火をつけたものもある。耳の遠いブラウン夫人は、「つんぼの聞える機械」を取上げ、紐育中央銀行のキッタースタイナーは、銅の方の重鎮モオルズの耳に何か囁いた。

アラン自身は、益々勇氣が出て來て、次のやうな事を勢ひよくしゃべり続けるのであつた。

このトンネルは紐育の南百キロメートルのニュー・ジャアシイの海岸を發端として、ベルムダ及びアゾール群島を経由して佛蘭西のビスケイ灣の海岸で陸地へ出てくるのである。途中の大西洋上に在る二つの中繼地は、ベルムダ及びアゾール兩島で、これは技術上の見地から、どうしても必要で、この二ヶ所と、亜米利加の一ヶ所、歐羅巴の一ヶ所、合計五ヶ所の地點が、トンネル開鑿工業の起點となるのである

る。更にかういふ海洋上の中繼地を作るといふ事は、トンネルの利益から見ても、重大な價值があるもので、ベルムダ島の方は、旅客輸送の全部と、メキシコ、西印度、中部亞米利加及びパナマ運河等からの郵便物輸送とを一手に吸収する。一方アゾール島の方では、南部亞米利加及び亞弗利加方面からの輸送を引受けるのである。そこでこの中繼地點は、紐育及び倫敦に取つては重要な、世界交通上の樞軸となるに違ひない。又亞米利加及び歐羅巴に設けられた三ヶ所のステーションが、將來全世界の上で、如何に重要な地點になるか、これは何等の説明を要しないほど明かである。某々二三國の政府は無理にもこのトンネル建設に許可を與へなくてはなるまい。アラン自身に於ても、之等の政府が自國の工業に損害を與へまいと考へる限りは、このトンネル會社の株を、その國の取引所へ出す事を是非とも承認させずにはおかない。

アランは更に言葉を續けて、
「ペエリング海峡のトンネル工事は既に今日から三年前に着手されてをりますし、又ドオプア、カレイ間のトンネルも、本年中にその竣工に近づく筈で御座います。之等の例に徴しましても、海底トンネルの工事は、最早最近の技術

を以てすれば、敢て難事とするに足りぬといふことが、十分に證明されたので御座います。ドオア、カレイ間のトネルは、全長約五十キロメートル、私のトネルは全長五千キロメートルの概算で御座います。私の任務と致しませぬは、今日までの英國人並に佛蘭西人の仕事を単に數百倍するに過ぎません。と申しましたも、これを實現する上に、決して大なる困難がないとは考へてをりません。然しながら、皆様に對しまして、事新しく申すまでもないとは存じて居りますが、今日、我々が一箇の機械を据えつけ得るとすれば、既に我々は何の心配も持ちません。唯財政上から見て、この計畫の遂行如何は、偏に皆様の御賛同の有無に繫つて居ります。先刻ホッピー君は、私の必要とするものが皆様の金であるかのやうに申されましたが、それは當つて居りません。私はこのトネルを、亞米利加と歐羅巴、否全世界の金によつて建設致します。技術的見地から致しまして、この計畫を十五年以内に實現する事は、皆様御承知の私の發明に係るアラニット鋼の力によるのみで御座います。アラニットと名づけました鋼鐵は、最も硬度の高いダイヤモンドに比べても、僅かに一度ほど硬度が劣るだけでありまして、このアラニットを使用致しますれば、如何

なる固い岩石工事も可能でありますと同時に、又、どのやうに無數の穿孔機でも、意のままの大きさに、しかも甚だ安い値段で製作出来るので御座います。」

聽衆は黙つて聽いてゐた。大分居眠りを初める連中が出て来たが、それがまた、正にアランの計畫を承知した證據に見えたのである。胡麻鹽や白髮頭の大部分が前の方へこごんで来て、汗に光つた二三人の顔だけが、仰向いて天を見上げてゐる。その空には星が硝子の破片のやうに光つてゐる。唇をとがらして葉巻をぐるりと廻轉させて、アランの方を見上げながら、八の字を寄せた男もある。頻りに頷いては、顎へ手を當て、考へ込んだやうに、自分の前を見てゐる男もある。人の好さうな子供らしい表情はもう誰の眼を見ても無くなつて、考へ込んだやうな、朦朧とした目に變つてゐる。中には幽靈のやうに凄く開いた目もある。アランの口許を睨みながら、鋭い、嘲笑するやうな、怒氣を含んでゐるやうな口付をしてゐるのが、例のブラウン夫人である。この三十人の奴隷支配者の頭腦めがけて、アランは自分の理想と議論を叩き込んで、一同を棒杭のやうに釘付けにしたのであるが、この時聽衆の頭は動揺して来た。それは金が、鐵が、鋼が、銅が、木材が、石炭が考

へ出されたのである。アランの計畫は中々平凡な仕事ではない。よく考へてみる價值はある。こんな計畫は毎日その邊に轉がつてゐるものではない。しかもアランの計畫たるや決して容易なものではない。これは五六十萬石の小麥や二百萬袋の棉花どころの問題ではない。濠洲に於けるキング・エドワード・鑛山會社の株式どころの問題ではない。もつともつと途方もない大きな問題だ。一面から見ればアランの事業は鐵と鋼と石炭とに對する特別の危険のない金の山だ。これを決定するのは決して頭を拵る程の事ではない。けれども別の一面から見れば、その金には非常な危険が伴ふとも云へる。ところが今此處には、もう眞面目に話に乗らうとする人が出来てゐるのである。それは外でもない。つまりロイドである。黄金魔のやうに創造し蹂躪して全地球上を濶歩する、あの全能のロイドがこの計畫の黒幕になつてゐる。ロイドは、自分のする事を眞によく心得てゐる男であり、その男にこのアランが推されてきて、又アランもロイドを推さうとしてゐるのである。ウォオルストリイトで、鑛山株と鐵工業株の莫大な取引が行はれたのはつひ先週である。——かう考へ合せてくると、彙人形を躍らして、全軍を進出させた黒幕の軍師は、やつぱりロイドで

あつたといふ事が、此處にゐるみんなにも分つて来た。今頃は金庫にでも納まつて、葉巻の煙を輪に吹いてる事だらうが、もう數週間以來賣方に廻つてゐたのが、ロイドであつた事は明かである。さうしてこのマック・アランが、あの男の拳固になつてゐたのである。いつも拔駈けをするのはロイドであり、相場の急變動がやつて来た時でも、いつでも最も好い權利を握つてゐるロイドである。けれどもまだ遅れたスタートを少し取り返す時間はあるさうだ。この會合が終つたら、直ぐに今夜の中に電報を世界中へ打つておけばよい。明日の朝では、もう遅過ぎる。

兎に角何かとこの氣持でゐなければならぬ……

頭の中で、こんな考へが忙しく廻り出した二三人は、アランといふ男を、もう少し蟲眼鏡でよく見た上で、この計畫に参加しようと思つたのである。アランはトネルの構造や、坑道の掘り方、通風の仕方などを説明してゐる。それを注意深く聞きながら、アランの穿いてるパテント・レザアの靴から觀察し初めたのである——眞白なネルのズボン、革帶、シャツ、カラア、ネクタイ——それから上へいつて、しっかりとした額骨、それを越して、滑々とした赤銅色に光る頭。顔は汗で青銅のやうにぴか／＼してゐる。けれども

一時間前に見た時とはまるで變つて、少しの緊張を缺いた處もない。それどころか、愈々生々^{いき}と精彩を放つて來てゐる。眼もはじめ口を開いた時は、子供らしい、人の好ささうな色をしてゐたが、今はもう汗の流れる顔に、大膽明徹な光を放つて、ダイヤモンドより僅か一度だけ硬度が低いといふ例のアラニットそのまゝの硬い光澤と輝きを持つて來てゐる。アランは減多にこんな眼付を見せるものではない。アランがあつた堅い胡桃^{くるみ}を食ふ時でも、決して胡桃割りなんぞは用ゐない。またその聲ときたら、まるで胸廓^{きょうかく}の中で一度槌の如くに打ち、吼えてから出て來るやうである。アランは、黒板の上に略圖を書き初めた。そこで今度は、例のぶつちがひの斧を文身^{ぶんしん}した腕が、研究の對象になつたのである。栗色に日に燦^{きら}けたその腕は、どう見ても立派に叩き上げた庭球選手か劍客の腕だ。この連中は、アランをまるで、自分達が賭けようと思つてゐる拳闘選手の積りで眺めてゐるのである。この男なら大丈夫だ、勝利は疑ひなしと思へる。たとへ賭けて損をしたつて少しも見込外れ^{みこぼれ}を恥ぢる必要はない。流石はロイドの眼識^{がんしき}だ。——かうして觀察してゐる連中が、アランに關する知識と云へば、先づアランが十二歳の時に或る炭坑の馬方小僧^{うまかたこぞう}をしてゐた事、

のである。

此處でもう一つこの連中の氣の付いた事は、アランがしやべつてゐる間に、まるで笑ひもしなければ冗談の一口も言はなかつた事である。ユウモアといふものは、まるでこの男の知らない事らしい。尤もこの聴衆は唯一度だけ笑ふ機會があつた。それは寫眞師が何か激しい仲間喧嘩を始めた時で、アランは、

「おい、そんなナンセンスは止めて。」
と制した時であつた。

愈々講演の最後に讀み上げたものは、全世界一流の人物が、この計畫に對して寄せた意見で、その中には技術家、地質學者、海洋學者、統計學者、經濟學者等が網羅され、紐育、ボストン、巴里、倫敦、伯林から寄越したものである。

この資本家連中が最も興味を惹き起したのは、ロイドが書いたこの企業^{きぎや}の簡單な要領であつた。それはこの計畫の金繰り方法と収益とを書いたもので、アランは一番最後にこれを読み上げた。三十人の頭腦は、最大の速さと精密さでそれを考へてみた。

暑さは急に三倍位になつたやうであつた。安樂椅子に納まつた連中はまるで湯を浴びたやうに汗が流れて、拭いて

その後二十年経つた今日では一躍、八百メートルも深い地下の坑道から、この壯麗なアトランチック・ホテルの屋上庭園へくるまでに出世した事等である。これだけでも容易な事ではない。それからこれ程の大計畫を作り上げた事だけでも、確かに偉い。けれどももつと驚嘆すべき偉大な事は、アランがたつた一日でも大資本に値すべき財界の一流どころを三十人も揃へて、しかも一定の時間に態々^{たて}此處まで集めた上、華氏九十度といふ暑さに自分の講演を強制的に聴かせたといふ事だ。三十名の大資本家連中には、眼前の事實が、何か珍らしい芝居のやうに思へて、まるで誰かこの硝子の山を登つて自分達の方へやつて來て、自分の立場を要求し辯護しようとしてゐるやうにさへ見えたのである。アランは言葉を續けて、

「トネル坑道内の管理並にその電車の運轉に必要とするものは、あのナイヤガラ水力電氣會社が持つてゐる電力に略匹敵する電力で御座います。然しながらナイヤガラ瀑布を利用する事は最早不可能で御座いますから、私は、私のナイヤガラ瀑布を建造したいと考へてをります。」

これを聞くと、聴衆はめい／＼勝手な事を考へてゐたのが、俄然破られて、一同は思はずアランの顔を見詰めたも

も拭いても、汗は顔をだら／＼と流れ落ちた。冷却装置も諸所の鉢植の灌木や植込の後に設けてあつて、冷たい、オゾンを含んだ空氣が間斷なしに吹き送られてきたのだが、それ位では一向に涼しくならない。まるで熱帯地^{ねつたいち}の暑さである。涼しさうな雪白の麻服を着た支那人ボオイが、幾人も足音も立てずに、椅子の間を歩いては、リモネエドや、ホオスネック、ジンフイーズ、氷^{アイス}、水を配つてゐたが、そんな事も一向駄目である。暑さは街上から蒸氣のやうに湧き上つて來て、煮えるやうな大氣となつて、手で觸れても感じる位にこの屋上庭園の上を轉げ廻つてゐた。鐵骨コンクリートとアスファルトで出来上つた紐育は、まるで、何千とない電槽で出來てゐる蓄電池で、この二三週間の電熱を、今一時に吐き出してゐるやうだ。しかも、熱し切つたプロオドエ^{プロオドエ}の建物の谷は、遙かに深く下の方で、吠え、唸つてゐる。三千哩の海洋と三千哩の大陸との間に、人間の力で築き上げられた、休息を知らぬこの紐育は、自ら何處までも大きくならうとし、未曾有の發展を遂げようとして、自ら鞭撻し、激勵し、要求してゐるやうに見える。紐育は亞米利加の腦髓だ。何とも分らない途方もなく老大な考へがあつちこつちに轉がし、何かを生み出さうと考へてゐるや

うに見える……

この瞬間にアランの聲が止まつた。殆んど突然に、話の中途である。尤もアランの話は、何處までいつても切りがない。何處まで行つてもぐる／＼廻つて、昇りつめると元へ歸る。そこでこんな風に話を止めてしまつたのは、全く意外であつた。誰も彼も席に着いたまゝ、耳を傾けてゐたのに、當人のアランはさつさとこの席を退いて、この計畫を討議に任せようとしたのである。

そこへ廣告用の飛行船が斜かひに屋上庭園の上を横切つて、マンハッタンの上へかけて、こんな文字が現はれた。

「二十五箇年の生命延長……保證致します……ブルックリン・ドクトル・ジョスチイ。」

七

アランは、細君のモオドと一緒に夕食をしに、十階まで降りて行つた。まるでびた／＼の大汗であつたので、何もかもそつくり着替へなければならなかつた。ところが着替へてもすぐに又大粒な汗の玉が額に浮び出た。アランの眼は大きく開いて、瞬きもしない位に、まだアランの力は緊張してゐた。

細君はまめ／＼しくアランの額を拭いてやつたり氷水で絞つたナフキンで、額顔を冷やしたりした。

そのモオドの顔は、實に晴々としてゐる。包みきれぬ感激に、獲りでしゃべつたり笑つたりしてゐる。何といふ素晴らしい晩であつたらう。今夜の會合、電燈裝飾、屋上庭園、見渡す限り魅惑的な紐育、この光景を恐らくモオドは一生忘れ得まい。今夜集まつた人達の名前は、細君がごく小さい頃から幾千度となく聞かされたものである。それを聞いただけでも、富と、権力と、天才と、大膽と、センセエションの空氣が出来てくる名前であつた。さういふ偉い人達がおとなしく腰を掛けて、夫アランの講演を謹聽してゐたのだから、細君はどこまでもアランの妻であることが得意になつた。夫の大成功に、すつかり感激してしまつて、もう夢にも、この結果に就いて疑ふ氣は起らなかつた。

「でもねえ、あなた、あたしどんなに心配してたか知れなくつてよ。」

と抑へきれないやうに言つて、

「ただどあなたの御演説ねえ、あたし何だか夢みたやうな氣がしますわ。本當にお目出度う。」

モオドはアランの頸を抱いた。

アランは笑ひ出して、

「あんな連中を相手にするよりも、まだ悪魔を集めてしやべつた方が樂だよ。本當だよ。」

「でも今度はどの位かゝるんでせうか。」

「一時間かな。それとも二時間か。いや、ひよいとしたら徹夜かも知れんよ。」

細君はびつくりして口を開けて、

「あら、徹夜ですつて……」

「かも知れないのさ。だがあの連中だつて、我々にゆつくり晩飯を食ふ位の時間は呉れるだらうさ。」

アランは今ももうすつかり落着いて來た。手の震へるのも止まつたし、眼付も穏やかな色になつてゐる。アランは夫として又紳士としての禮儀を忠實に務めて、細君の前へ、牛肉の一番旨さうなのを置き、それからモオドの好きならまいアスパラガスと青豆を置いてから、ゆつくりと、自分は自分の食ふ方に取かゝつたが、汗は相變らず大粒な玉になつて、アランの額に光つてゐる。食べ初めてから氣がついたが、實は猛烈に腹が減つてゐた。ところがその反對にモオドの方は、饒舌に忙しくつて、喰べる暇もない有様だ。今夜の會合に招待された名士連を一人々々槍玉にあ

げては、キッターアスタイナアは實に驚くべき程好い頭だとか、キルガランの若々しい様子は女好きがするとか、鑛山王のジョン・アンドラスは河馬に似てゐるとか、銀行家のシイ・ビイ・スミスはまるで灰色の狡い小狐のやうだとか、あの年をとつたブラウン夫人はよく／＼見てゐると、女の生徒のやうだとか、そのブラウン夫人は本當の吝嗇から、家では燈火もつけなといふが、本當かしらとか……かうして夫婦が食事をしてゐる最中に、ホッピーがやつて來た。見れば大膽か無茶か、ホッピーはシャツ一枚で昇降機で此處まで降りて來たのである。

之を見ておやと思つたのはモオドである。

「どんな御様子でして。」

と頭から叫んだのである。

ホッピーは笑つて、どしりと安樂椅子へ腰を下して、「いやはや、何とも彼とも、こんな事は生れて初めてですよ。向うの連中はまるで喧嘩でさ。選挙の後のウォオルストライトそつくりの光景ですよ。シイ・ビイ・スミス君が引上げようとしてすね——まあ、黙つて僕の話の話を聞いてゐらつしやい。スミス君は引上げようとしてね、こんな危険千萬な事業には關係したくないつて言つといて、昇降機へ乗

つたと思ひ給へ。さうすると大勢が後から飛んでつてね、上衣の裾を捉んでまた引ずり出してしまつたんですよ。嘘ぢやありません。ところが急にその真中へ出て来たのが、キルガラン君だ、君の置いて行つた意見書を振り廻してね。『諸君、これに反対しようたつて駄目です、これに反対の意見は、何も言へませんぞ。』つて、まるで客引きのやうな大きな聲を張り上げたものぢやないか。』

「キルガランならやりさうな事だ。あの人には反対する譯が一つもないからな。」

と初めてアランが口を出した。キルガランは、製鋼トラストの頭株であつたのである。

ホッピイは更に續けて、

「それからブラウン夫人だがね。寫眞屋が居合せて丁度好かつたよ。この夫人の容子と來たらまるで、有頂天になつちまつて、ぼかんと突つ立つてるところは、案山子さ。まるで氣違ひになつたんだね。危なくアンドラス君の眼玉を引掻くところだつたよ。それが夢中になつて、のべつ幕無しに、唵鳴り散らして、アランさんはこの世に又とない偉大な人物です、この計畫が實現されないやうなことがあつたら、それは亞米利加の恥辱です、とかうなんだよ君。」

「へえ、あのブラウン夫人が。」

とびつくりして眼を据ゑたのは、細君の方である。

「だつてあの人は、燈火もつけなかつて昏聩な方ぢやありませんか。」

「ところがですよ、奥さん。」

と、ホッピイはまたほち切れさうに笑つて、

「悪い奴に限つて、人を見抜く力があるんですよ。あの婆さんとキルガラン君と、この二人できつと君の計畫は實現するよ。」

と答へると、アランはホッピイに向つて、

「君、一緒に飯を食はないか。」

と訊いた。アランは鶏の腿の肉を噛みながら、ホッピイのしやべるのを注意して聽いてゐたのである。

「え、それが好いわよ。こつちへいらつしやいよ。」

とモオドは皿の支度をした。

けれどもゆつくりしてゐる暇のないホッピイである。元來この仕事には大して關係がないくせに、その逆上せ具合はアラン以上である。ホッピイはまた、そこから飛び出して行つた。

それからホッピイは殆んど十五分おき位にやつて來ては、

屋上の情報を持つて來た。

「おい君、ブラウン夫人が一千萬弗申込んだところだ。いよ／＼始まつたぞ。」

「まあ。」

と細君は鋭い叫びを擧げて、おどろいて思はず兩手を打合せた。

昂奮しきつてゐるホッピイは、腰を下すことも忘れて部屋の中をあつちこつちと歩き廻りながら、ポケットから出した葉巻の尖端を噛みきつて、兩手を動かしながら火を點けて、

「それでだね、あの婆さん、手提げの中から手帳を引張り出したんだ。ところがそれが恐ろしく汚らしい手帳でね、僕なら火箸で摘むのも眞平な代物だが——とに角一千萬弗と書いたのさ。さすがにしいんとしちやつたね。誰も彼も眼を据ゑたよ。やがて婆さんに續いて、外の人達もポケットへ手を突込む。キルガラン君がぐる／＼廻り歩いて、その書付を集める。もう一言も口をきく者はない。寫眞師連は眼が廻るやうな忙しさだ。おい、君は立派に成功したぞ。僕はこんな嬉しい事はないぞ……」

かう言つて出て行つたホッピイは、その後いつまで經つても姿を見せなかつた。一時間ばかり過ぎた。

モオドはやつとおしやべりをやめて、胸をどき／＼させながら椅子に腰かけてゐた。何か思ひがけぬ事件が突發し

さうな氣がして、耳を澄まし、眼を見張つてゐたが、かうした時間が長びくにつれて、細君の不安は段々昂まつて來た。一方のアランは、安樂椅子に腰を据ゑて、何か考へ込むやうに、パイプを啣へてゐた。

とう／＼モオドの方がもうぢつとしてゐられなくなつて「ねえあなた、もしあの方達の決心がきまらないとしたら、どうなさるの。」

と小さい聲で訊ねた。

アランはパイプを口から離して、微笑を浮べた眼を擧げて細君を見ながら、

「さうしたらもう一度バッファローへ歸つて、おれのアラニットでも製造してゐるさ。」

と、落着いて、深い聲で答へた。けれどもすぐ自信のあるやうに強く頭を振つて、

「大丈夫だよ、決心するに違ひないよ。」

と言ひ添へた。

その時急に電話の呼鈴が鳴りだした。ホッピイの聲である。

「大急ぎで上つて来てくれ給へ。」
 アランが屋上庭園へ現はれると、待つてゐたやうに進み寄つて来たのが、製鋼トラストのキルガラン氏である。キルガランは、アランの肩を叩いて、
 「君、大成功でしたぞ。」
 と言つた。

アランの勝利だ。アランは赤い制服を着た使ひを呼んで、一東にして電報を渡した。使ひは昇降機で降りて行つた。それから二三分後には、屋上庭園には誰もゐなくなつた。誰も彼もぐづぐづしてゐないで自分の仕事に取りかゝつてゐた。ホテルの召使連中は植木鉢や椅子を片づけて、ヴァンダアスチフト氏の飛行機の爲めに、離陸場所を掃へた。
 ヴァンダアスチフトは飛行機の操縦席に昇つて、スキッチを入れた。プロペラが廻轉し初めて、巻き起つた強い風で、ホテルの召使連中は隅の方へ吹き寄せられた。十二三歩ほど滑走したかと思ふと、もう宙に浮び上つた。この眞白な大鳥の影は、紐育の光の霧に向つて飛んで、やがて消えてしまつた。

八

た。

各新聞社は夜通し晝間のやうに明るく電燈を輝かし、輪轉機は最大限度の速力で動き出した。ヘラルド、サン、ウォールド、ジャアナル、テレグラフ、及び紐育に存在してゐた各國新聞、英語、獨逸語、佛蘭西語、伊太利語、西班牙語、猶太語、露西亞語等の新聞紙は、悉く發行部敷を數倍して印刷した。それから、この何百萬とも知れない新聞紙が、夜の明けると共に全紐育に撒布された。ざわつく昇降機の中、歩道の人ごみ、高架鐵道の騒々しい階段。満員の車臺めがけて一個の空席へ坐り込まると、毎朝激烈な競争をやる地下鐵のプラットホーム、その他、幾百の渡船、幾千の電車等々、砲臺から二百丁目に至るまで、あらゆる場所に、まだ印刷インキの乾かない新聞紙を我れ勝ちに手に入れようとする大争闘が起つたのである。町の何處へ行つても號外の噴水が、犇めき合ふ群集と、さし延ばした手の上に噴き上つた。

この報道ほど人氣を呼んだものはなかつた。空前絶後だ。奇想天外だ。大膽不敵だ。

マック・アラン……とは何者だ。どんな經歷の男だ。何處から来た人間だ。一夜の中に幾百萬の大衆の前に現はれた

會合が終つて十分の後に、電信はニュー・ジャアサイ、佛蘭西、ベルムダ及びアヅォル群島に發せられた。それから一時間の後には、アランの代理人が二千五百萬弗で方々の土地を買ひ上げた。

この買ひ入れた土地は、トンネル工事に出来るだけ有利な位置にある土地で、豫てアランが數年前から眼をつけてゐた處である。土地としての價值から云へば、とても悪い、最も廉い地面で、砂地、荒地、泥沼、禿山の島、暗礁、淺瀬になつた洲である。これが二千五百萬弗とは、實は莫迦安の値段で、これだけの土地全體の廣さが、一公國の領土くらゐの廣い。これに包括されてゐるのが、間口二百米突でハドン河に接して、廣々としたハバクンの大きな低地である。買ひ上げられた土地は、何處も大都會から懸け離れてゐて、アランに言はせれば、そんな大都會なんぞはまるで用がないのである。荒野と砂地が、やがて將來の大都會となるべき資格を持つてゐるのである。

世間がまだ眠つてゐた間に、アランの電報は有線無線の電信によつて、全世界の取引所を襲つたのである。夜が明けると、紐育、市俄古、亞米利加、歐羅巴、全世界が、「大西洋トンネル・シンヂケエト」といふ言葉に、震へ上つて驚い

この男は、抑もどういふ人間だ。

いや、どういふ男でも構はない。兎に角、今日も明日も同じやうな騒ぎを繰り返してゐた紐育を、軌道から抛り出してくれたアランだ。

新聞を擴げて見てゐる人々の眼は、このトンネル事業に關して、各意見を電報の形で述べてゐる一流名士の説に吸ひ着けられてゐる。

シイ・エチ・ロイド氏曰く、
 「歐羅巴は將來亞米利加の郊外となるであらう。」
 煙草王エチ・エフ・ヘルプスト氏曰く、

「ニユ・オルレアンスからセント・ペテルスブルグへ一貨車の貨物を輸送するのに、途中の積換を要しないではないか。」

大富豪エチ・アイ・ベル氏曰く、
 「わたしの娘が嫁つてゐる先は巴里です。これからは、娘の顔を見るのも、一年三回どころか、十二回も見られるわけですね。」

交通大臣ド・ラ・フォレスト氏曰く、
 「該トンネルが各ビジネスマンに齎す利益は、省約し得たる時間だけ生き延び得るといふ事である。」

世間では詳細なニュースを要求した。要求する権利を持つてゐた。各新聞社の前の廣場にくると、通行人の足が止まってしまうので、電車の運転手は、靴の踵で必死に警鐘を踏みつけて、辛うじて電車を通した。もう数時間も前からぎつしり詰まつた人間の塊りが、眼ばかり光らせて、ヘラルド・ビルディングの二階に出てゐる掲示板を見つめてゐる。尤も其處に出てゐる寫眞は、数時間前と同じものである。それはマック・アランとホッピイと、その他昨夜の屋上庭園で會合した富豪連の寫眞である。

「七十億の人類を代表せる人々。」

「マック・アラン氏、自己の計畫を述べ。」(之は映畫で)

「ブラウン夫人、一千萬弗の申込をなす。」(之も映畫で)

「昇降機から引戻されたシイ・エチ・スミス氏。」

「ヴァンダースチフト氏の屋上庭園に到着の光景を、着陸の刹那まで示し得るものは當社寫眞のみである。しかも當社の寫眞師は機體に觸れて大負傷した。」(同じく映畫で)「無數の窓の點々たる、眞白な紐育の摩天樓。其處から薄い白い煙が昇つてゐる。やがて白い胡蝶が現はれる。それが小鳥となり、颯となり、遂に一臺の單葉飛行機。飛行機は、屋上庭園の上を掠めつゝ、曲線を描いて舞ひ降りる。やがて巨

大な翼は、動揺しながら近づいてくる。映畫終り。續いて一枚の肖像寫眞。シイ・ジイ・スピネウエイ君、即ち我社の撮影技師。ヴァンダースチフト氏の機體は、同君を床上に引懸け伏して、重傷を負はしめた。」

それから最近の撮影にかゝる、

「マック・アラン氏事務所へ行かうとして、夫人及び愛子と、ブロンクスで別れの光景。」

その後には、これと似たやうな映畫が幾組も寫し出された。

すると不意に、十一時近くである。映畫がぱつたり止まつてしまつた。何か新しい事でも起つたのかと、群集の顔は上の方へ向いた。

肖像寫眞が現はれて來たのである。

「東區二百二十二丁目三十七番地居住の仲買人ハンター氏は、只今、紐育、歐羅巴間の處女運轉に對する旅客券の申込を終りました。」

之を見た群衆は笑ひ出して、手に／＼帽子を振つて、喊聲を擧げた。

電話交換手は疲労し盡した、地上と地下の電信も、もうこれ以上働くことが出来なくなつた。全紐育何萬の事務所で

は先を争つて電話から受話器の奪ひ合ひだ。誰も彼も電話を繋いだ相手と、このトネルの話をしようとした。全マシオンハットンが熱にうかされた。葉巻を口にくはへて、麥藁帽子を阿彌陀に、ワイシャツをまくり上げて、汗をたら／＼流しながら、立つてゐる者、腰かけてゐる者、叫ぶ者、身振り澤山でしゃべつてゐる者。銀行員。仲買人。代理人。事務員。株式申込をして、出来るだけ利益のあるやうに、しかも敏速に割り込まなければいけない。素晴らしい大軍隊が目の前に迫つてゐるのだ。資本の國民戦だ。ぐ／＼日和見なんぞしてると踏み付されてしまふ。この途方もない事業の金繰りは、誰がやるのだらう。——一體先はどういふ事になるだらう。ロイドだと。誰だ、ロイドで言つたのは。なに、キッターアスタイナアだと。誰か少し知つてる奴はゐないか。マック・アランといふ悪魔は一體何處の馬の骨だ。一晚の中に二千五百萬弗の地所を買ひ上げた奴は。この地價は三倍にも五倍にも騰貴するぞ——何、何だつて。——百倍になるつて。

一番に熱狂してゐたのは、大西洋汽船會社の上品な重役室である。マック・アランは、大西洋旅客運輸事業に致命傷を與へる人殺しに違ひない。トネルが完成した曉には、

しかもこの男の事だから、いつかは必ず完成するに決つてゐるが、その時こそ、今日の四十萬噸といふ船は消えてしまふ事になる。そこで贅澤船の旅客運賃を、三等客の運賃まで引下げるのも一案だ。船を空氣療養の病院船に改造して、肺病患者でも收容して見るか、亞弗利加へやつて黒人相手に經營を續けて見るか。——かうして僅々二時間の中に、トネル建造反對同盟といふものが、電話と電信による相談で纏まつたのである。續いて、この同盟は、各國の政府に宛てる質問を起草した。

紐育にはじまつたこのトネル騒ぎが、市俄古、バッファロオ、ピッツバーク、セントルイス、サンフランシスコにまで及んでくると、一方にこの狂熱は、既に海を超えて歐羅巴へ、倫敦、巴里、伯林までも襲ひ始めたのである。

今日も紐育は、白晝の炎熱に輝やいて、群集が再び大通りに流れ出した時に、あらゆる往來の角から、途方もない大掛りな廣告が群集めがけてやつて來た。

「十萬人の勞働者募集。」

漸くこれで、このトネル・シンデケエトの事務所の場合が分つたのである。それはプロオドエイ、ウォオルストリイトである。

そこには、目も眩むやうな真白な、竣工半ばの塔型の建物が立つてゐる。その三十二階あたりでは、まだ職人達が群り働いてゐた。

この大廣告が紐育街頭に溢れ出してから、まだ三十分位しか経たないのに、このシンヂケエト事務所には職を求むる労働者が石灰のひつかゝつた板の敷いてある大理石の階段に押し合ひへし合ひして詰めかけた。この當時五萬と言はれた失業者の大群が、ありとあらゆる往來から、下町のプロオドエイめざして轉げ出して來たのである。かういふ失業者群が、我れ勝ちに事務所の一階へ雪崩れ込んで、アランの代理人の處へ詰めかけて來た。まだその邊は梯子や脚立や塗料を入れた桶が轉がつてゐる——代理人といふのは、奴隸商人のやうな素早い眼付をした、冷淡さうな、經驗を積んだ若い男ばかりである。この連中が、押しかけて來る失業者を片端から検査して、衣服の上からでも、骨格、筋肉、髓を見て取つた。例へば、肩の格好、腕の彎曲を一目見れば、その男の體力は見別けられるのである。わざとらしい姿勢や、顔に何か塗つたり、髪を染めて來りしても、この検査の眼を晦ますことは出來ない。白髪頭や弱い體力のやうに、紐育の殺人的労働にもう搾取されきつた肉體は、落

第だ。かうして検査が、ごく短かい時間に、何百人といふ人間を見るのだからといつて、一度匆ねられたのが、もう一度やつて來ても、検査をする男の眼の冷たさは、まるで脊骨の髓までも凍らせるやうで、頭から振り向かれもしないものである。

九

その同じ日である。アランの計畫で決定されたトンネルの五箇のステエション、即ち佛蘭西、西班牙及び亞米利加沿岸の三驛と、ベルムダ島及びアゾール群島のサンジョルジオとに、一團の人々が現はれた。みんな馬車や貸切自動車に乗り込んで、道といふ道のない處を徐々と車を進めながら、泥沼にはまり込んだり、海岸の砂濱をよるけたりして進んで行くのである。やがて或る一定の場所になると、其處も別に周圍の土地と變つた處もないが、兎に角其處までくると、乗込んでゐた連中が皆飛び降りて、水準器、測量具、束にした標尺桿を車から引きずり出して、仕事にかゝつたのである。落ち着いて、熱心に、照準し、測量し、算定してゐる。それがまるで庭でも設計してゐるやうな様子とか見えない。汗は滴となつて、皆の額から流れてゐた。や

がて或る地域へ境界線の棒が立てられ、その線が精密に確定された角度で、海と反對の方向を示し、それが、遠く奥地へと引かれて行つた。それが終ると、みんな方々へ散り散りばら／＼に離れて、それ／＼仕事に着手した。

するとこの荒野の中に、二三輛の馬車が浮び出て來た。梁材、板、屋根にするスレエト紙、その他種々の道具類を積んだ馬車である。この馬車は全く偶然に此處へ來合せたものらしく、此方で働らいてゐる測量師や技師も知らん顔をしてまるで關係がないらしかつた。その馬車が止まると、梁材や板は、地面へ投げ下され、シャブルは暑い太陽の中に光り、鋸は軋み、金鎚の音は響き出した。

暫くすると、今度は自動車が一臺よち／＼やつて來た。すると一人の男が自動車から飛び降りて、大聲擧げて手を振つてゐたが、やがてその男は束にした標尺桿を抱へて、此方の測量師の方へ走つて來た。瘦せた、それは明るい金髪の子、ホッピーであつた。亞米利加ステエション驛長ともいふべきホッピーであつた。

ホッピーは「おゝい」と呶鳴つて、笑ひながら、汗を拭いた。浴びたやうな大汗だ。ホッピーは大聲で、「一時間の内に料理番がやつてくるからね。トム河の方で

は、キルソンがまるで野蠻人のやうになつてますぜ。」かう言つて指を二本口に突込んで、びいと鳴らした。すると、車の方から、標尺桿を擔いだ男が四人ばかりやつて來た。

「さあ、此處にお居での人達から聞いて、君達の仕事を始めるんだぜ。」

さう言つてホッピーはまた馬車の方へ引返して、今度は材木の積み上げてある中を、あつちこつち飛び廻つてゐる。

さうかと思ふと直きにまた自動車へ飛び乗つて、レエクハアストの方へ姿を消した。其處で電話線の臨時架設工事を急いでゐる人達の具合を見廻りに行つたのである。その途中でも、このトンネル・シンヂケエトの境界柵を横斷してゐたレエクハアスト、レエクウッド間の鐵道線路に沿つて、自動車を飛ばせながら、呶鳴つたり叱つたりして行つた。丁度その真中あたりだ。牝牛や牡牛があつちこつちで草を食つてる牧場の邊に、二輛の機關車が五十臺の貨車を引ばつて盛んに煙を吐いてゐた。するとその後から五百人の労働者を満載した列車がやつて來た。丁度もう五時である。この五百人の労働者を雇入れたのが、今日の午後二時で、三時にはハバクソンの停車場を出發したのである。誰の顔を見

ても、明るく上機嫌だ。みんな、茹で殺されるやうな紐育から離れて、廣々とした曠野の自由な空気の中に仕事を見つけたことを喜んでゐるやうであつた。

労働者達は、この五十臺の貨物列車に飛びついて、板、ナマコ板、屋根用の厚紙、料理用竈、食料品、天幕、毛布、箱、囊、まるく束ねたものを、この牧場へどしどしと投げ下した。監督してゐるホッピーも、呶鳴つたり、口笛を吹いたり、猿のやうに貨車や板を積み上げた上へ飛び乗つて、大聲を擧げて命令を傳へてゐる。一時間ばかりたつと、野外炊事場が出来、今度は料理番が忙しくなつた。二百の労働者は大急ぎで、今夜のバラックを急造してゐる間に、一方では残りの連中はまだ貨物の積下しを續けてゐた。

やがて暗くなると、ホッピーは、部下に向つて夜のお祈りを上げて、横になれと言つた。それ程に萬事が都合よく捗つたのである。

それから、ホッピーは測量師や技師連中の方へ引返して、紐育へ電話で、自分の報告をした。

それが済むと今度は、技師連中と一緒に砂濱へ水を浴びに出かけた。其處から戻ると、着のみ着のままで、急造バラックの板の床の上へごろりとなつた。少しでも眠つてお

て、夜が明けると共にまた活動に取りかゝらうといふのである。

午前四時だ。材料を満載した百輛の貨物列車が到着した。それから半時間ばかりすると、今度は五千人の労働者が送られて来た。この連中は汽車の中で夜を明かして、腹を減らして疲れきつたやうな様子をしてゐる。夜がしら／＼明けける頃からもう炊事場は大多忙で、麵麩焼き小屋は、盛んに蒸氣を吹いてゐた。

ホッピーは時間正確に現場へ出掛けた。仕事が愉快で耐らないのである。睡眠時間はごく僅かでも、とても上機嫌だ。そのにこ／＼した顔がまた労働者團にも好感を與へた。この男は馬を一頭用意させて、それに乗つて一日中疲れもせずに彼方此方と跳び廻つた。灰色の毛並をした白馬であつた。

鐵道線路の傍は、種々雑多な材料品の山だ。八時になると二十臺の貨車を連結した列車が到着した、それに満載されたものは、枕木、軌條、トロッコ、及び狹軌鐵道用の可愛らしい機關車二臺である。續いて九時には、二番目の列車がやつて来た。今度は、技師と技手連中の一團だ。ホッピーは幾千人の労働者達を督勵して、狹軌鐵道線路の建設に

着手させた。其處から約三キロメートルばかり隔つてゐる建築事務所へ連絡を執らうといふのである。更に夕方着いた貨物列車が運んで来たものは、二千人分の野外用鐵製寢臺と、毛布だ。ホッピーは電話で呶鳴りこんで、人夫の方をもつと澤山寄越してくれと頼んだ。アランの返辭には、明日二千人の労働者を送る、とあつた。

その約束通り翌日の朝まだ薄暗い内に、二千名の人夫が到着した。しかもその後からは、何百臺とも知れぬ貨車が材料を満載してやつて来た。流石のホッピーも恨めしかつた。アランは文字通りこの男を材料で埋めてしまひさうである。けれどもその後で、與へられた運命に飽までも獻身の努力をしようとホッピーは悟つた。アランのこのテンポが、ホッピーにはよく頭に入つた。これこそ、殺人的亞米利加式テンポだ。しかもこのテンポは現代に至つて殆んど狂氣に近くなつてゐる。ホッピーは息つく暇さへなくなりながら、このテンポには、敬意を表せざるを得なかつた。さうして自分の努力を愈々大にした。

三日目には、一回も顛覆しないで、この汽車は建築事務所まで走つて行つた。その日の夕方に小さい狹軌機關車は、汽笛を鳴らしてキャンプの眞中へ到着した。誰も彼も思は

ず「萬歳」を叫んだ。この汽車で引張つて来た無數の小型貨車に満載した品物は、板と梁材とナマコ板である。二千の人夫は、死物狂ひの速力で、バラックと、野外炊事場と、倉庫を建てた。ところがその晩に、猛烈な暴風雨がやつて来て、このホッピー市は滅茶々に破壊されてしまつた。

ホッピーはこの天の惡戯に、思はず長嘆息して、取敢へず紐育のアランに二十四時間の臨時休止を頼んだところが、アランは一向お構ひなしで、後から後からと材料を満載した貨車を送りつけたので、流石のホッピーも、眼の前がまっ暗になつた。

この日の夕方七時頃である。モランは、細君のモオドと一緒に自動車飛ばしてやつて来た。其處ら中を乗り廻して、盛んに呶鳴り散らし、叱言を食はせて、何もかも愚圖愚圖してゐると罵り、シンヂケエトは君達を只で使つてゐるのぢやない、最大能率の労働を要求してゐるのだと捨て科白を残して、さつさと自動車で引上げてしまつた。後では一同感心したり驚いたりするばかりであつた。

けれどもホッピーといふ男は、さうすぐに勇氣を無くすやうな人間ではない。この十五ヶ年に選るべき、盲目的な競争意識を持ち續けてやらう、と腹を決めると、忽ち惡魔の

やうな元氣で動き初めた。アンソンの一流のテンポは、この男をも引張つていつたのである。

労働者の一團は、レクタッド方面の鐵道線路基礎工事で大多忙である。これは正規の汽車を通すための建設工事である。赤錆のやうな埃の雲が、この仕事の進路を示した。

第二團の労働者は續々と到着する材料満載の貨車に跳びついて、目が廻るやうなテンポで積み下しては積み重ねてゐる。それは枕木、レール、電柱、機械である。第三團は坑道のやうな大穴を掘つてゐる。第四團は、トラックを建造してゐる。之等の労働者團を指揮してゐるのは、技師達だ。技師連中は間斷のない叫喚と昂奮した身振とで、労働者團を激励した。

灰色がかつた白馬に跨がったホッピイの姿は、何處へ行つても眼に入つた。労働者達はホッピイに「陽氣なホッピイ」と綽名をつけた。アランが「マック」で、技師長をしてゐたハリマンは單に「牡牛」だ。この男は、全生涯を、地球上のあらゆる大建築工事々務所に過した程で、いかにも牛のやうな太い頸を持つた陰鬱鈍重な男であつた。

かういふごちやくした人間の間に、測量機械を持つた測量師の連中は、そんな騒動には眼も呉れず、この廣い地

面に、赤白の色の棒と杭とをばら撒かうとしてゐる。

この土地に最初のシヤブルを入れてから三日目には、このトンネル都市は、鑛山のキャンプ團となつた。それが野營地となり、一週間の後には、驚くべきバラック町に變つた。そこには二萬の人間が生活し、屠殺場、牛乳屋、麵麩屋、日用品市場、酒場、郵便局、電信局、病院、墓地が出来た。このバラック町の横にはもう完成した家の大通りが出来てゐる。それはエヂソン式の組立家屋で、立ち所にどんな場所にも二日間完全に組立て上るのである。

町全體は、厚い塵埃を被つて、まるで白い町である。僅かばかり残つた草原や、方々の草叢は、まるでセメントの山になつてしまつた。大通りはレールと枕木だ。扁平なバラック街は、電信柱の森の中に沈んでしまつた。

八日の後である。不意にこのバラック街の眞中に眞黒な、咆哮と叫聲を發する怪物が現はれた。亞米利加の巨大な貨物車索引のトラクタアだ。大きな眞赤な車輪だ。これが何十臺とも知れない貨物車を引張つて來た。それが廢墟のやうな曠野に白い蒸氣を吐き散らし、ぎら／＼と光つてゐる日輪めがけて黒雲のやうな煙を噴き上げる。誰も彼もこの巨大な怪物を見て、絶叫し、感激して咆哮せずにはゐら

れなかつた。これこそ亞米利加だ、トンネル都市へやつて來た亞米利加だ。

翌日になると、この眞黒な煙を吐く怪物は、群をなして押し寄せた。一週間後には大集團となつた。その腹から噴き出す蒸氣の音は空氣を震はして、その後には續く長い貨車の大蜥蜴を揺ぶり、その髻と鼻の孔から白い蒸氣と黒い煙を噴上げた。流石に老大なバラック街も、この黒煙の中に見えなくなつてしまつて、時にはその黒煙が厚く濃い爲めに、その眞暗な中へ電光を放射するので、暗れ渡つた目でも、このトンネル都市の上には、雷が鳴るやうな音がした。叫喚。悲鳴。叱咤。爆音。電鳴。轟音。この中に全トンネル都市があつた。

この狂亂し、煙を吐いてゐる白い塵芥都市の眞中から、晝夜の別なく立ち昇つてゐる巨大な砂塵の柱がある。それが雲のやうな形になつて、まるで火山が爆發でもする際に觀測されるやうな格好をしてゐる。それが上空の氣層から壓迫されて、茸のやうな形に頭が扁平になり、無數の斷雲が、その邊から氣流の動きに従つて流れてゐるのだ。

これは風の吹き次第で、どうとも變化するが、この砂塵の柱を海上の汽船から眺めると、數キロメートルも廣い石

灰岩のやうに白く光つた島に見えるのである。又、どうかすると、このトンネルの砂塵が紐育の空へ、細かい灰の雨を降らすこともあつた。

丁度其處が、トンネル工事の土工現場である。現場は四百メートルの廣さで、眞直に五キロメートルも陸地の奥へ延びてゐる。それは階段のやうに掘られて、一段ごとに深くなつてゆく。トンネル坑道の口へ行くと、その段々の最下底の床は、水面下二百メートルの深さに達してゐるのである。

今日はまだ荒れた砂地に、赤白の棒や杭が立つてゐたと思ふと、明日は立派な砂床となり、明後日は砂利を敷きつめた溝道となつてゆく。岩石を割る。礫岩の巨大な凹みが出る。砂利。粘土。石灰。最後に孔道が出来る。その中にはまるで蛆蟲のやうに無數の労働者が蠢動してゐる。一番上の段階から見ると、ほんの小さく、砂と埃で白く灰色になつてゐる人間だ。灰色の顔。灰色の髪。灰色の睫毛。口の中には砂塵の粥だ。晝夜兼行で、この坑道へ突入してゐるのは、二萬人の労働者である。海面のやうにきら／＼と輝やくのは、鶴嘴とシヤブルである。喇叭が響く。すると、一時に砂塵がどつと渦巻き上る。石の巨人が急に崩れて、

倒れ、碎ける。ごちゃ／＼に塊つた人間が立ち昇る砂塵の雲の中でころげ廻る。齒ぎしりするやうな悲鳴を擧げる浚漉機。間斷なしに唸りがちやつくバケットポンプ。ふらふらする起重機。空氣を裂いて走る車。無数のポンプが夜となく晝となく吸ひ上げる汚水は、大の男が通り抜ける位の管の中を、激流のやうに噴き上げてくる。

例の小さい機關車の一隊は、無数の浚漉機の下をくゞつては走る。ころがつてゐる岩石の間を縫ひ、積み上げられた砂丘の上をよち／＼と通つてゆく。けれども一旦坑道外の自由な道へ出て、堅牢なレエルの上へくると、忽ち滅茶苦茶に笛を吹き、がん／＼ベルを鳴らしつけて、トラック街を工事の現場へと突進する。そこへ砂と石とを持つてゆくのである。其處から今度は、セメントの袋を山と積み込む。此方の労働者は大きな兵營式の大きな建物を建てようとして大いに忙しい。四萬人の人間をこの冬には是非收容しようといふ建物である。

坑道から五キロメートルばかり離れた地點へくると、其處には、油と熱氣と煙の雲の中に、四臺の黒い機械が、まだごく新しいレエルの上に立つて、盛んに煙を擧げながら待つてゐる。

その車輪の前では、シヤブルや鶴嘴がびか／＼動いてゐる。大汗でびつしよりの一團が、地面を掘り下げて、片端から其處へ石塊や砂利を投げ込んでゐるのだ。貨車の上を斜めになると、さういふ石塊や砂利は、がら／＼と雪崩れ落ちる。石と石との間へ枕木をねかす。まだタアルがべとべとしてゐる枕木だ。枕木が階梯のやうに据ゑられると、その上からレエルをネヂで堅く緊めつける。かうして五十メートルづつレエルが据ゑ付けられると、四臺の眞黒な機械が蒸氣をしゆつ／＼と吐いたり音を立て、三四遍位づつ鋼鐵の關節を動かすと、もう直ぐにまたシヤブルと鶴嘴の光つてゐる傍で立ち止る。

かういふ風にこの四臺の眞黒な怪物は、毎日少しづつ前進を續けて、或る日は、山のやうに兩側に積み上げられた砂利の間で立ち止り、或る日は、峻しい粘土の壁に圍まれた大きな煖爐の中のやうな場所、階段の遙か下に立ち止つて、一つしかない眼玉をぎよ／＼つかせながら、目前につき立つてゐる屏風のやうな岩壁を凝視してゐる。そこから三十歩ばかり離れて、二條の巨大な弧形が見える——それがトンネルの入口であつた。

第二編

—

亞米利加のトンネル都市と同様に、佛蘭西でも、フィンステラでも、大西洋中の二つのトンネル停車場でも、汗水垂らした何萬といふ人間が、地下へ地下へと掘り進んでゐた。晝となく夜となく、猛烈な煙と塵埃の柱が地球上の五つの場所から噴き昇つてゐた。募集に應じて集つた十萬の大労働者團の中には、亞米利加人も、佛蘭西人も、英國人も、獨逸人も、伊太利人も、西班牙人も、葡萄牙人も、黒人と白人の混血兒も、黒人も支那人もゐた。あらゆる現在の國語が入り混つてゐる。技師連中は、初め大部分亞米利加人、英國人、佛蘭西人、獨逸人だったが、やがて間もなく全世界の工業専門學校から多數の技師達が押し寄せて来て、無報酬でも働かうといふ事になつた。日本人、支那人、スカンヂナヴィヤ諸國の人、露西亞人、波蘭人、西班牙人、伊太利人が参加して來たのである。

ムダ群島アゾレ群島等の各地へも、アランの技師連中と労働者群が現はれて、あの五つの主要な工事現場と同様、大掛りな掘鑿工事を始めた。この連中の仕事はアランのナイヤガラと言はれる發電所を作ることであつた。その動力を用ゐて亞米利加から歐羅巴へ列車を通したり素晴しく長い地下道の照明と通風とを得ようといふのであつた。獨逸人のシュリック及びリップマンの改良法に基いて、アランは大貯水池を作らせた。此處へ満潮時を利用して海水を流れ込ませ、更に一段と低く掘り上げた第二の貯水池へ瀑布のやうに落下させる。その落水の勢ひは澤山のタアピンを廻轉させ、このタアピンによつてダイナモから電流が流れ出るといふ仕組みである。そして海水は干潮時に再び海へ戻されるのである。

ペンシルヴァニア、オハイオ、オクラホマ、ケンタッキイ、コロラド、ノオサムバアランド、ダルハム、南エエルス、瑞典、エストファアレン、ロオトリンゲン、白耳義、佛蘭西等、各地の製鐵場や精鍊所は、アランから莫大な注文を受けた。又、各國の炭鑛は採炭を急ぎ、輸送と熔鑛のため石炭需要が増大したのに應じ始めた。銅、鋼鐵、セメントは空前の騰貴をした。亞米利加と歐羅巴の大きな機械工場

は、いづれも時間外労働を行った。瑞典、露西亞、匈牙利、加奈陀では、森林がどしどし伐り倒された。

いつも何百隻といふ貨物船や帆船が佛蘭西、英吉利、獨逸、葡萄牙、伊太利各國とアゾール群島との間や、亞米利加とベルムダ群島との間を通つて、皆材料品や労働者を工事現場へ輸送した。

シンヂケエトの汽船が四隻、大西洋上に浮んでゐた。これに乗つてゐるのは一流の學者で、大抵は獨逸人と佛蘭西人であつた。トンネルは今迄に知られた海洋學的測量に基いて計畫されたのであるが、そのトンネル曲線を具合よく導かうとし、又出來た部分を再び調査しようとして、三十海里づゝの範圍に互り、錘を下して測定するのであつた。

五箇所のトンネル停車場、各地の工事現場、汽船、工業中心地などから晝夜發せられる連絡の糸は、プロドエイ、ヲオルストリイトの一角に立つトンネル・シンヂケエト、ピルディングに集まつて、更に其處から、たゞ一人の手に、アランの手に集まるのである。

僅か數週間の懸命な努力によつて、アランは全世界を動搖させるに至つた。アランの事業は地球全土を包圍しようとしてゐる。つい最近迄は全く知られてゐなかつたこの男

の名前が、今はまるで流星の如く人類の頭上に輝いてゐる。數千の新聞記者連中は大車輪に働いて、アランの生立ちを調べ上げたから、暫くの後にはもう各新聞の讀者で、この男の経歴に通曉しない者は一人も無くなつてしまつた。けれども、この男の経歴は斷じて平凡なものではなかつた。十歳から十三歳までのアランは數百萬の隠れた大衆の一人であつた。地の底で目を送り、しかも何人からも顧みられない大衆の一人であつた。

西部の炭鑛區に生れ、今でも忘れることの出來ない最初の印象は火焰だつた。夜になると空の各所に火が燃え上つて、見てゐる子供のアランには、まるで恐ろしい巨大な身體に澤山の頭がくつ着いて、その頭が皆火を吐いてゐるやうに思はれた。その火はあつちの方の爐から、火の山のやうな形で現はれて來た。その火の山をめぐり、焰を浴びた數人の男が八方から水をかけると、やがて何も彼も大きい白い水蒸氣の雲となつて消え失せた。

この地方の空氣は、うすい煙や濃い煙や、工場の汽笛の叫び聲で一杯だ。煤の雨が降つて來る。時には夜の空がすつかり眞赤に燃えて見えた。人々はいつとも塊まつて、眞黒に煤けた煉瓦の家の往來を

歩いてゐる。行くにも歸るにも大勢塊まつてゐる。どの一人を見ても黒ん坊のやうに眞黒で、日曜日にはさへ、石炭屑が眼の中にはひつてゐる。かういふ連中の會話に、きまつて出て來る言葉は「アングル・トム」である。

マック・アランの親爺も、兄貴のフレッドもアングル・トムで働いてゐる。この邊の連中は皆其處で働くのである。

マック少年の成長した町は、殆んど年中黒光りのする泥沼同然であつた。その傍を浅い小川が流れてゐた。岸に生える僅かばかりの草も青い色ではなく、眞黒であつた。第一その小川からして汚ならしく、大抵は、油が浮いて、いろんな色に光つてゐた。小川の直ぐ向うには、コオクスを焚く爐が長い列を作つて並んでゐる。その向うに突つ立つてゐるのは眞黒な足場で、鐵や木で出來た足場である。その足場には間斷なく小さい箱が上下してゐる。マック少年が一番大好きだつたのは、空中にかゝつてゐる一つの大きな本當の車輪であつた。この車輪は時々一寸休む。直きにまたぶんぶん廻り初める。どしどし早くなつて、車の輻はてんで見えなくなる。急に再び車の輻が見出えて、空中にかかつた車輪の廻轉は緩くなり、やがてびたりと動かなくなる。暫くすると又再びぶんぶんが始まる。

マックは五歳になると、兄貴のフレッドや近所の馬丁小僧などから、これといふ固定資本なしで金の儲かる祕術を教はつた。花を賣る。馬車の扉を開けてやる。落したステッキを拾つてやる。自動車を呼んで來る。電車道に散らばつた新聞紙を集めて、それをまた賣る。マックは夢中になつて、かういふ町つ兒の仕事をした。一錢でも儲けた金は皆フレッドに渡したが、その代り日曜日毎には馬丁小僧とも一緒に「酒場」に入り込むことを許されたものである。その中にマックは、氣の利いた小僧なら一錢も使はず一日中遊べる方法を考へつく年頃になつた。まるで寄生蟲のやうに、何でもかでも自分の眼の前に轉がつて來たもので、少しでも自分の足しになる者に取つ付けて生活した。もつと大きくなると、マックは自分の商賣を手廣くして、一本立ちで働くことにした。新築された家へ行つて、麥酒の空き罎を拾ひ集めて來て賣るのである。「うちの父つゝあんと言ひ付かつて來たよ」と言つて賣つた。

ところが到頭その最中に取捉まつて、ひどくぶん殴られて、この素敵な商賣も梟が付いてしまつた。

八つになるとマックは、父親から灰色の大黒帽子と大きな長靴を買つた。いづれもフレッドのお古である。ところでそ

の長靴は、とても大き過ぎる代物で、マックが穿いて一寸で足を振らうものなら、忽ち部屋の隅へ飛んで行くのであつた。

父親はマックの手を引いて、アングル・トムの所へ連れて行つた。この日は、少年マックに取つて一生忘れ難い日である。今日も尙あり／＼と思ひ出すのであるが、マックは、びく／＼しながら、興奮しながら、父親の手につかまつて、騒がしい鑛山の敷地へ這入つて行つた。アングル・トムは活動の眞最中だつた。空氣は叫び聲や汽笛の響きで震へてゐる。小さな箱が上へ下へ空中を走つて行く。鐵道貨車がごろ／＼通る。何もかも動いてゐる。そして上の方、高い所で唸つてゐるのは捲上機の車輪だ。もう數年來マックが遠くから見知つてゐる車輪である。コオクス爐の後には、焰と眞白な煙の雲とが立ち昇る。煤と石炭の粉が雨のやうに降つて来る。樂に大の男が通れる位の太い導管の中では、ぶん／＼しゆう／＼音がしてゐる。冷却装置からは、瀧のやうに水が落ちる。太く高い工場の煙突からは、眞黒な煙が間斷なく空へ噴き出してゐる。

煤けた煉瓦作りの工場の窓硝子は、皆破れてゐる。その建物に近づいて行くと、騒ぎは益々大きくなり荒々しくな

つた。まるで空の何處かで何千人の子供達が折檻されてるやうである。地面はふる／＼震へてゐる。

「あの泣いてるのは何だい、父つゝあん。」と、マックは訊いた。

「石炭が泣いてるんだ。」

石炭が泣くものなどは、マックはちつとも知らなかつた。

父親は大きな絶えず震へてゐる家の階段を登つて行つた。壁も龜裂だらけであつた。それから父親は大きな扉を一寸明けた。

「今日は、ジョシア。うちの小僧にお前んとこの機械を見物させようと思つてね。」

と、中へ呷鳴るやうに云つてから、くるりと後を向いて階段へ唾を吐いた。そしてかう言つた。「来いよ、マック。」

マックが覗いて見ると、其處は石疊みの敷いてある綺麗な大きい部屋だつた。ジョシアといふ男は背中を見せてゐる。坐り心地のよさうな椅子に腰かけて、びか／＼光る槓杆に兩手をかけて、身動きもせずに、部屋の奥の大きな圓筒を睨んでゐる。何處かで合圖の鐘が鳴る。そこでジョシアは一本の槓桿を動かす。すると大きな機械があちこちの太い棒を左右に動かし始める。マックには家ぐらゐの高さに見

える大きい圓筒はだん／＼激しく廻り出して、その周囲でも、眞黒い、腕ぐらゐの太い鐵の綱が廻り出す。

父親が説明して呉れた。「第六坑道へ籠が行くんだ。石を抛り込むより速いぞ。下から引奪られるやうなものだぞ。ジョシアさんは今千八百馬力で動かしてゐるんだ。」

マックの頭の中はすつかり混亂してしまつた。

圓筒の前にある白い棒のところでは、矢が何本も上つたり下つたりしてゐた。その矢が一番手前の邊へ來た時、ジョシアはもう一つの槓桿を動かした。すると唸つて廻つてゐた圓筒は、ゆつくりし始めて、やがて動かなくなつてしまつた。

マックは未だ嘗て、この捲上機械のやうに、素晴らしい力のものを見たことは無かつた。

「ジョシア、どうも有難う。」と父親はお禮を云つたが、ジョシアは振向きもしなかつた。

親子は機械室を廻つて、狭い鐵梯子を登つて行つた。マックは大きな長靴を穿いてゐるので、登るのが實に大變であつた。登るに従つて、子供の泣くやうな鋭い叫び聲はひどくなつた。上へ行き着くと、騒がしい音は非常に激しく、お互ひの言葉は殆んど聴き取れない。途方もなく廣い部屋

だ。薄暗く、石炭の埃が一杯で、鐵の箱が幾つもがらがら動いてゐる。

マックは胸が苦しくなつた。

この場所では石炭が悲鳴をあげてゐたのであるが、此處で父親は眞黒に煤けた男達にマックを預けて、其儘さつさと歸つてしまつた。マックがあたりを見て驚いた事には、石炭の川が流れてゐる。幅が一メートルばかりの長い帯の上を、間斷なく石炭の塊が走つてゐる。その先には、床に穴が開いてゐて、其處から鐵道貨車の中へ落ち込む。まるで眞黒な瀧のやうに續いて落ちる。この長い帯の兩側には眞黒に煤けた子供達が並んでゐる。みんなマックと同じ位の小僧である。それが石炭の流れに素早く手を突込んで、何か或る形の塊を掴み出しては、鐵の箱の中へ抛り込んでゐる。

一人の小僧がマックの耳の傍で呷鳴つて、よく見ると言ふ。このちびも眞黒に煤けた顔だつたので、暫く見てマックはやつと、その三つ口で思ひ出した。直ぐ近所の子供だつたので、昨日マックはこの子の後から綽名の「兎」と呷鳴つたので、殴り合ひの喧嘩をやつたばかりだつた。

「おいマック、俺達は駄目な石を拾ひ出してゐるんだ。」と「兎」は金切り聲で、マックの耳の傍で呷鳴つた。「石がまざつて

「ちや、賣物にならんからな。」
翌日になるともうマックは、他の子供と同様に、どれが石炭でどれが石であるかを、見分けるやうになつた。裂け目と、光澤と、形で見分けるのであつた。それから八日経つと、まるでもう四五年も長くこの騒がしい石炭だらけの眞黒な部屋に住んでゐたやうに、すっかり慣れてしまつたものである。

休む時なく流れて来る石炭の小川を覗き込んで、眞黒な手に「山」と云はれる石を探しながら——まるで二年間毎日毎日定められた自分の場所、上から五番目の持場にマックは立ち續けた。何千噸といふ石炭が一度は皆、マックの小さな敏捷な手の下を通つて行つたものである。

毎週土曜日には賃銀を貰つたが、それを皆、ほんのちよつぱりの小遣だけを残して、父親に渡さなければならなかつた。マックは今や九歳で、一人前の人間だ。用のない日曜日に、例の「酒場」へ行く時は、糊で固めたつばのある帽子を冠つて、カラアを着けた。だぼは、ゼ見たいな口にパイプをくはへて、ゴムをくちや／＼噛んでゐるので、舌と上顎の間はいつも唾と涎の貯水池であつた。一人前の男だから、一人前の口を利いた。たゞ聲の調子だけが、よく

徹る子供の金切り聲で、毎日々々騒がしい仕事部屋で暮す少年工の聲であつた。

かうした少年労働者が扱つてゐるのは地上に掘り出された石炭だつたが、マックはそれは固より、他のあらゆる事情にも通じてゐた。父親よりもフレッドよりもよく知つてゐた。この炭鑛にゐた少年工の中には、一年経つてもまだ、石炭といふものが何處から出て来るのか、貨車の中にごろごろ這入る、この際限の無い石炭の流れが何處から来るのか、まるで見當も付かない連中が何十人もあつた。堅坑の鐵の扉は夜晝鳴り續けた。汗水垂らしてゐるやうな運炭籠は夜晝少しの休みもなく、四つの鐵の箱車を吐き出して、一度に五千磅の石炭を吐き出した。夜も晝も鐵の箱は、仕事部屋の鐵板をがら／＼通つた。それが夜も晝も、床の穴の上の一定の場所に来ると、まるで串刺しの鶏のやうに、くるりと宙返りして、石炭を下の方へぶちまけて落すと、空つぽになつて向うへ行つてしまふ。ところがその穴から抛り込まれた石炭は、珠數つなりの澤山の籠に入れられて再び上へ運ばれて大きな篩に揺ぶられることになる。石炭が悲鳴を擧げるのは此處である。大きな石炭は採掘炭として、貨車に積み込んで運び出される。無論此處までは他

の少年工も知つてゐたが、然しそれ以上の事は知らない。ところで、這入つてからやつと一ヶ月のマックが言ふのは、この仕事部屋を／＼行く鐵の箱車は、とても石炭を皆運びきれぬものぢやないと言ふ。その通りだつた。毎日貨車は何百臺も集まつて來た——アングル・トム第二工場、第三工場、第四工場、と各工場からやつて來て、みんなアングル・トム第一工場へ集まるのである。この第一工場ばかりで、精洗や、焼きや、「化學的操作」などが行はれるからである。始終抜目なく周圍を見てゐたマックは、何もかも分るやうになつた。篩の目から落ちた石炭が、珠數つながらに籠のぶら下がつた鏈ポンプで、精洗所へ運び出されることも知つてゐた。精洗所へ行くときの中を通るが、この釜の水は石を洗ませ、石炭を洗ひながら先へ送るのであつた。それから今度は色々な大きさの穴を持つた五つの篩を通つて、途方もなく大きい圓筒へ送り込まれる。その中でひどい音を立てながら、ぐる／＼廻つて掻きまぜられて品分けが行はれる。かうして出て來た或る二三種だけが、管によつて色々な漏斗に送り込まれ、それから坑炭と呼ばれ、混合炭一等二等三等と呼ばれて、鐵道貨車へ抛り込まれ、運び出されるのである。だが細かい石炭は、かけらや

塵のやうな石炭は——これを皆捨て、しまふものと諸君は思ふか。十歳の少年技師マックに訊いて見給へ。かう答へるであらう。石炭は、もうそれ以上何も取れない位に、すっかり「絞り取られる」ものだ、といふ返事だらう。残つた石炭屑は、鐵の空洞の梯子を昇つて行く。この巨大な空洞梯子は、薄汚ない色に汚れて、一寸見ると靜止してゐるやうだけれど、よく見ると、靜かに——實にゆつくり動いてゐる。一階昇るのにまる二日かゝる位の緩やかさで、一階昇つてはくるりと廻つて、石炭の塵をこれも巨大な漏斗の中へ振り落す。この大漏斗からコオクス爐へ這入つて行つて、コオクスとなる。そして、その際に蒸發する瓦斯は、眞黒なの、つぼの管の中で沈澱させられて、タアル、アムモニアなど、凡そ生産される限りの色々なものになつてしまふ。アングル・トム第一工場で作つてゐる「化學的操作」といふのがこれである。そして、マックはこれらの事をすつかり心得てゐた。

十歳になるとマックは、父親から黄色い布の厚い仕事服と、毛の頸巻を貰つた。そしてそれと同じ日にマックは始めて這入つて行つた——石炭の出る場所へ、這入つて行つた。

鐵の函がぎし／＼軋む。鐘が鳴る。運炭籠が降り始める。初めはゆつくりだが、それがだん／＼早く猛烈な勢ひになると、マックは自分の坐つてゐる函の床が裂けるのではないかと思ふ。一時は眼の前が眞暗になつて胃の腑を締め付けられるやうだつたが——やがて氣持がよくなつた。耳を劈くばかりの鋭い音を立て、鐵の籠は凄じい勢ひで、八百メートルの地底へ落ちて行く。籠は揺れながら鐵の索條にぶつかつて、物凄しい音を立てる。今にも粒々に砕けさうである。水が撥ねかゝつて来る。びつしより濡れた眞黒な坑道の仕切り壁が、眼の廻るやうな早さで上へ／＼飛んで行くのが、カンテラの灯影に、籠の扉口からよく見える。マックは肚の中でこんなものかなあ、と思つた。マックはもう二年間といふもの、毎日々々交替の休み時間に、カンテラを掲げた坑夫や人夫達、あの仕事部屋へ現はれると螢のやうに見える人達——運炭籠から出て来たり、籠と一緒に落ち込んで行つたりする光景を眺めてゐたが、その間に事件が起つたのは僅か二度であつた。一度は、籠が天井にぶつかつた爲め、乗つてゐた坑夫達の頭が砕けてしまつた事件で、もう一度は、籠を上げ下げする索條が切れて、二人の坑夫と一人の技師が泥沼のやうな底へ落ち込んだ事件である。

これは起り得る事件ではあるが、といつて減多にある出来事ではない。

不意に籠が止まつた。第八炭坑である。急にあたりがひっそりした。其處へ、眞黒で誰が誰やら分らない半裸體の人間が、二三人迎へに出て来た。

「おうアラン、小僧を連れて来たのか。」

「さうよ。」

マックがはひつて行つたのは熱いトネルだつたが、堅坑に續いてゐる入口の所だけは、薄ぼんやりカンテラが點いて、その先は直きに眞暗闇となつてゐた。暫く行くと、向うの方にちらつと火が見える。白馬が一匹現はれて、その傍に馬丁小僧のジェイが——もうマックとは長い馴染のジェイがやつて来る。その後には石炭を一杯積んだ鐵の箱車を二十臺も引張つてゐる。

ジェイは齒をむき出した。「よう、遣つて来たな。」と呷鳴る。「おいマック、俺は昨日もな、自動ボオカアで三杯分儲けたぞ。こら、どう、どう、止まれよ。」

マックはジェイの助手にされて、まる一ヶ月、すっかり覚え込む迄は、まるで影のやうにジェイの傍に付いて廻つた。それからジェイは何處かへ行つてしまつて、マックは獨りで仕

事をする事になつた。

第八炭坑に暮して、マックは上機嫌だつた。そして十歳位の子供が、馬丁小僧とは違つた何かになれようなどとは、てんで夢にも考へなかつたものである。最初の中はあの眞暗闇、又それ以上に物凄しい静けさなどが、マックにはこはかつたものである。こんな地の底では、四方八方から突つかれたり、叩かれたりするのではないかと考へたものだつたが、なんとといふ莫迦だつたらう。そんな事をする者は、一人もゐなくつて、墓場の中のやうにまるで静かで、口笛を吹けば、それがちやんと聞えるのだ。と言つたら、讀者は本當とは思はないかも知れない。たゞ少し騒がしい音を立てゝゐるのは、堅坑と石炭層の處だけだつた。堅坑の方では例の運炭籠が走つたり、二三人の男たちが箱を籠の中へ押込んだり、籠から引出したりしてゐた。石炭層では、マックに見えない所で、坑夫達が石と石の間にべつたり身體を挟んで、石炭を切り出してゐた。この二箇所が一寸騒々しかつた。尤もたつた一箇所、物凄いやうな音響を發してゐる場所がこの第八炭坑にもあつた。それは即ち掘鑿機が活動してゐる場所である。瓦斯を使つた掘鑿機で、それを二人の男が肩に支へて岩壁に當てがつてゐた。この二人は

もうとづくに聾となつたに違ひない。此處では一語も言葉が分らないのである。

第八炭坑内には百八十人も働いてゐた——しかもマックは減多に一人にも會つたことがない。時に會ふのは誰か坑夫か坑夫長ぐらゐのもので、他にはさつぱり人に會はない。もしも暗い地下道の何處かにカンテラが光つて、走つて来る一人の足音でも聽えたら、それは必ず何かの事件が起つた時である。マックはこの淋しい眞暗闇のじめ／＼した道を辿つて受持の時間をあちこち廻る。石炭層やトロコ軌道の所から、石炭が一杯の箱車を集めて、それを堅坑の方へ曳いて行く。其處でマックは用意してあつた一列の車に馬を附け替へる。この一列は空の箱車だの、掘り取つた鑿脈の穴を塞げる石材を積んだ箱車だの坑道を修理する爲めの角材や板などを積んだ車から成つてゐる。さうして馬を附けてからマックは、この車をそれ／＼適當な場所に曳いて行く。

まるで迷宮のやうな地下道をすつかり覚えてしまつて、何處と何處の梁が山の重みで折れ曲つてゐるかはずきり知つてゐたし、又どの石炭層も一々見分けて、それにデオヂ・ワシントン達の陽氣な叔母さんだの、でぶのドリイだの、いろんな綽名をつけたものである。マックは又、テントがあると、

それは重たい炭坑内の毒瓦斯が出て来る場所だとも知つてゐたし、「棺桶の蓋」と云はれるものが何處にあるか、それもよく知つてゐた。これは岩の中に混つてゐる短い柱のやうなもので、うっかりその岩を砕かうものなら、だしぬけに飛び出して来て、その男を壁へ釘付けにしてしまふものである。それから通風孔の事もよく知つてゐた。其處の戸は只開けようとしたのでは、いくら力自慢の男がかゝつても開きはしない。先づその戸に付いてゐる小窓を開けて、戸を壓迫してゐる空気をこちらへ呼び込んでから開けると、樂に戸が開いて——空気が氷のやうな突風となつて冷たくはひつて来る。けれども、坑道内には重苦しく熱い空気が満ちてゐるから、直きに又汗が顔から垂れることになる。さうして、他の大勢の馬丁小僧と同じやうに、マックも亦、受持ちの時間には、何回となくこの寒い地下道から暑い地下坑道へ出入りをしたものである。

受持ちの時間が過ぎると、マックは仲間と一緒に、運炭籠に乗込んで、矢のやうに音を立て、上へ登つて行く。やがて又再び炭坑に降りて来る。その出入りの氣持はまるで、事務所へ行つたり、事務所から街上へ出たりする爲め、昇降機に乗る事務員の氣持で、殆どなんにも考へてはゐな

かつた。

マックはこの第八炭坑の地下道で、ナポレオン・ボナパルト、略してボニイ、と近付きになつた。これは受持つた馬の名前である。ボニイはもう何年も地底の暗闇に居たから、半ば盲目になつてゐる。脊骨は弓形に曲り、首は地面へつきさうである。天井の低い地下道内で、年中首を曲げてゐたからである。ボニイは狭いレールの間の水溜りで蹄を割つてしまつたので、今はもう菓子みたいな、柔かい蹄である。もう盛りは過ぎてゐて、毛が大分脱け始めてゐる。眼と鼻の孔の周圍には、輪の形に赤い肉が見えてゐて、餘り感心した顔付ではない。けれどもボニイの歩き振りは堂々としてゐた。肥つて脂ぎつて重々しい馬となつてゐた。歩くのはいつもきまつた早足である。ボニイの頭が考へる事はたゞ早足ばかりと見えて他にどう變化させることも出来ないであつた。或る時マックは箒を擔いでボニイの鼻先を踊つて行つた(箒に就いては直きまた話がある)——けれどもボニイは別に少しも急がないのであつた。今度はボニイを毆つて見た——すると、その時ばかりはさすがに老いぼれ馬のボニイも、更に馬力をかけた様子をして、決心の程を表はして見せ、頭を激しく振りながら、威勢よく泥水を

撥ね飛ばしたのだが——足の方はやつぱり相變らずであつた。

マックのボニイに對する扱ひ方は、別にひどく優しいとは言へなかつた。ボニイを供に連れようと思ふと、ボニイの腹を脹でぐんと衝く。ボニイと來たら何しろ、歩き出さうと思つて兩方の耳を突立てても、肋骨の所をぐわんと遣られない限りは、どうしても動かない馬なのである。時々居睡りをするが、そんな時は、拳固で鼻面を毆り付ける——これはマックの仕打ちに無理は無い。マックは運搬するのが役目であつて受持ちの箱車をすつかり始末出来ない日には、早速首になつてしまふからである。だから遠慮會釋はしてゐられないのであつた。いろ／＼こんな事はあつたけれど、マックとボニイは仲好しの友達だつた。時々アランが自分の受持の仕事を片付け終つた時は——ボニイの頸をそつと叩いて、こんなお喋りをする。「おいボニイ君、今日はどうだね。素敵な元氣かね、君。」

ボニイと知合つてから半年もすると、やつとマックはボニイがひどく汚ない事に氣が付いた。この暗闇の中でこそ、カンテラに照らされてこそ、白馬のやうに見えてゐた。萬一この馬が外へ引き出されたなら——Indy Gee——ボニイ

自身でさへ恥かしくつて顔を赤くしたらう。

マックはいきなり駈け出して、馬糞を一本買つて來た。可哀さうに、ボニイの頭の中には、もうこの樂しみの記憶さへ無いんだ、とアランは考へた。ボニイが首を振つたからである。自分の足許で爆發が起つても、つひぞそんな眞似をしなかつたボニイである。けれどもやがてボニイは、便々と垂れ下つた腹を嬉しさに揺つて、ブラッシをかける快感を味はつた。又マックは、ボニイを眞白な馬にしようと思つて、水で／＼と擦り始めた。ところが水を掛けられるや否や、ボニイはまるで電流にでも觸れたやうに脇腹をふる／＼させて、不愉快さうに足を踏み交はした。この状態は乾いた櫛を入れる事になつても止まなかつた。それからマックが長いこと櫛を入れてやると、急に老いぼれボニイは頸を伸ばして、震へ聲で悲しがつてゐる犬の遠吠えみたいな聲を出した——嘶きの名残りといふ譯である。そこでマックは笑ひ出した、地下道中に響き渡るほど大笑ひに笑つた。

マックは確かにボニイを可愛がつてゐた。今日でもまだこの男は、老いぼれの、背中曲りの、肥つた白馬といふのに非常な興味を持つてゐて、時々白馬と見ると往來で立止つて、

その馬の頸筋を叩きながら、妻のモオドにかう言ふのである。「ボニイも丁度こんなだつたよ。實によく似てゐるんだよ。」ところがモオドは、いろ／＼に違つたボニイを見せられるので、果してどれが本當のボニイに似てゐるものやら、さつぱり分らなくなつたものである。元來マックは、全然繪を解しない男で、繪などの爲めには一文も使はなかつた。さういふ男なのに、そのマックの身のまはりの物の中から、モオドは幼稚な筆つきの、年取つた白馬を描いた繪を一枚見付け出した。話は變るが、マックが老いぼれの白馬に大いに興味を持つてゐる事は、結婚後二年以上経つた時、始めてモオドに氣が付いたのである。バアクシャイア・ヒルでの事であつた。急にマックは自動車を止めて、

「一寸御覽よ、あの白馬を。」とマック・アランは言つて、一頭の老いぼれた白馬を指さした。その馬は百姓車につけられて、道傍に立つてゐた。

モオドは笑ひ出さずにはゐられなかつた。「だつて、あなた、あれは幾らでもゐる、普通の老いぼれの白馬ぢやありませんか。」

勿論、それはマックもさう思つた。だから頷いた。「それはさうさ、だが俺はね、昔あれとそつくりの白馬を持つて

たことがあるんだよ。」

「あら、何時の事。」

「何時つて、お前。」と言ひながら、マックは妻から眼をそらした。自分の昔を言ひ出すのが、マック・アランには一番辛い事だつたからである。「それは、お前、ずつと昔の事だよ。アングル・トムにゐた時さ。」

ところでもう一つ、アングル・トムから記念に貰つた事がある。それは、猛禽類の鋭い叫びのやうな、「ヒエイ、ヒエイ」といふ掛け聲である。——それをマックは、誰かが自動車の前にうる／＼してゐると、ついうつかり口から洩らすのである。この掛け聲は、アングル・トムの炭坑で習ひ覚えたものである。ボニイを歩かせようと思ふ時には、この掛け聲で追ひ、車が一臺レエルの外へ飛び出した時には、やはりこの掛け聲でボニイを止めたのであつた。

マックが第八炭坑に勤めてかれこれ三年となり、アングル・トムの地下道内を、ざつと地球半周位の距離を走り廻つてしまつた時、今日尚思ひ出す人の多い、あの炭坑惨事が起つた。それは二百七十二人の命を奪つたものだつたが、又、マックの運はこれから開けたと言つてよい。

聖靈降臨節から三日目の夜、朝の三時近く、アングル・トムの一番底の炭坑に、炭化水素の爆發が起つた。

マックは、ジョンソンの「酒場」の蓄音器が、毎晩嘯鳴り散らしてゐた流行歌を口笛で吹いて、空つぽの箱車を一列、後に引いて戻る所だつた。鐵の箱車のがら／＼いふ騒音の外に、突然、遠雷のやうな音が響いたから、思はず知らず振り向いて見たが、まだ口笛は止めなかつた。見ると、支柱や梁木が、まるでマッチの軸でも折るやうに挫けて、山が落ちかゝつてゐるではないか。マックは、力一杯ボニイの手綱を引いて、金切り聲で耳の傍へ嘯鳴つた。「ヒエイ、ヒエイ、急げ——急げ。」ボニイは驚いた。後には支柱の碎ける音がするのだから、ギヤロップで飛ばうとした。老いぼれボナパルトは肥つた身體を思ふさま伸ばしたので、まるで平べつたくなつてしまつた。何しろ構はず四脚を衝き出して無茶苦茶な最後の頑張りをしようとする——崩れて來た岩の下敷きとなつて見えなくなつた。マックは氣違ひのやうに走り出した。後から山が追ひ蒐けて來るんだから堪らない。逃げるが勝た。けれども驚いた事には、前の方でも支柱と梁木が碎けて、同じやうに天井が墜ちかゝつて來るではないか。そこでマックは兩手で頑頸を抑へながら、二三度獨樂の

やうにくる／＼廻つて、それから横の坑道へ飛び込んだ。地下道全體が轟然と碎けてゐる。横坑も勿論碎けるのである。だからマックは落ちかゝる岩石に追はれるやうに、夢中に敏捷に、其處を一目散に飛び出した。やがて到頭、どうすることも出来ないで、兩手を頭に當てた儘ぐる／＼逃げ廻つた。そして大聲に泣き出した。

マックは身體中がふる／＼顫へて、すつかり力が抜けてしまつた。氣が付いて見ると、馬小屋の中へ走り込んでゐた。あの崩れて來た山の下敷きにさへならなかつたら、ボニイも矢張り此處へ遁げ込んだ事だらう。マックは腰を下さずにゐられなかつた。我慢にも立つてはゐられない。其處へべつたり坐り込んで、恐ろしさで頭が痺れきつて、一時間ばかりはまるで何にも考へられなかつた。やつとカンテラを探し出すと、心細い灯がちよろ／＼點く。周圍を照らして見た。石ころや石炭に閉ぢ込められてゐる有様である。どうしてこんな事になつたのか。原因を考へ出さうとしたが、何一つ思ひ出せない。

かうして長い間坐つてゐた。絶望と不安に耐らなくなつて泣いたけれど、やがて心を取直した。チユウインガムを一つ口へ抛り込んだ。するとどうやら元氣になつて來た。

炭化水素が炭層が爆発したのだ、確かにさうだ。ポニイは山崩れでやられてしまった——だが俺は、多分今にみんなが掘り出してくれるだらう。

かう考へてマックは小さなカンテラの傍に坐つて、ちつと待つてゐた。二三時間も待つてゐると、急に氷のやうな冷たい不安に襲はれた。どきりとして跳上つた。カンテラを擱んで、地下道の中を右に左に歩きながら、石ころを照らして、何處かに逃路が明いてはゐないかと探して見た。何處にも無い。ではやつぱり、待つてゐる外は無い。飼料槽の中を調べてから地面に腰を下して、ぼんやりと、色々な空想の走るに任せてゐた。ポニイの事、一緒に炭坑へ入つた父親とフレッドの事、ジョンソンの酒場の事。それから蓄音器の流行歌だ。ジョンソンの酒場の自動ボオカア器械の事。それからマックは、空想の中で幾度もマックの勝負をした。五錢玉を投げ込んで、把手を廻して手を放すと——不思議にいつもマックの勝だ。フル・ハンドが付く。ロオヤル・フラッシュユが付く……

こんな空想の勝負をしてゐると、急に妙な音がした。しゅうばちくと、電話器のやうな音である。マックは一生懸命に耳を澄ました。けれど何にも聞えない。あれは空耳だつ

させたこんな氣違じみた動作は、やがて直ぐ止んでしまつて、そろ／＼手探りしながら元の柵の方へ戻つた。さうして、燕麥をまた噛み始めて、しきりに涙をこぼした。何時間もさうしてゐた。何一つ動くものは無い。皆の者は俺の事を忘れてしまつたのか。

マックは腰かけて、燕麥を噛みながら考へてゐた。小つばけな頭は働らき始めて、すつかり冷靜になつた。こんな恐ろしい目に遭つてゐる最中こそ、俺の値打を見せなければならぬ。果してマックは、立派にその値打を見せたのであつた。

急に又再び跳び降りた。そして拳固を宙に振り廻した。「あいつ等が迎へに来ないんなら。」とマックは呟鳴つた。「俺は自分で掘つて出て遣るぞ。」

けれども直ぐ穴掘りには取掛からなかつた。また柵に腰かけて、長い間、用心深く考へてみた。先づ、馬小屋の近所の坑道の地圖を、頭の中に描いてみた。南の地下道を行つたのでは駄目だ。萬一助かるとすれば、それはたゞ、陽氣な小母さんといふ緯名の石炭層で、バッタアスン受持の石炭層を抜けるより外は無い。その石炭層の空坑までは、この馬小屋から七十、八十、九十歩位ある。この邊の事は

た。あたりは静かである。耳は眠つてしまつたやうだ。それにしてもこの静けさは遣りきれない。そこで両手の人差し指を耳の穴へ突込んで、掻き廻してみた。咳拂ひをしてみたり、大きな音で唾を吐いてみたりした。それからまた坐り込んで、頭を壁に凭せ掛けて、ぼんやり前を見ると、薬がある。ポニイの爲めに敷いて遣つた薬だ。結局、その薬の上にごろりと轉がつて、どうしやうもない絶望の悲しい氣持で、その儘に寝入つてしまつた。

眼が覺めた。二三時間も眠つたらしい。身體が濡れてゐる。これで眼が覺めたのだ。カンテラは消えてゐる。一足歩いてみると、水溜りへ足を突込んで飛沫が飛んだ。腹が減つてゐたので、燕麥を一掴み頬ばつた。それからポニイを繋ぐ柵に腰かけて、身體を丸くして暗闇の中で眼瞬きをしながら、一粒々々噛んでゐた。その間にも耳を澄まして氣を付けたが、叩く音も人聲一つも聞えない。水の流れる音と滴る音ばかりだつた。

恐ろしい暗闇だ。暫く經つてから急に跳び降りて、齒を噛みながら、頭の毛を掻き捲りながら、まるで氣違ひのやうに駈け出した。壁にぶつかつた。二三度頭をぶつくと、無茶苦茶になつて石を拳固で叩き廻つた。けれども絶望が

實によくマックは知つてゐた。陽氣な小母さんの石炭は、岩山の重みで碎け易くなつてゐる。これが何よりの付け目である。丁度今日の一時頃だつた。マックは上の方を向いて、バッタアスンの方へ呟鳴つた。「おうい、バッタアスン小父さん、ヒッキンズさんが言つてたぞ、がらくたばつかり掘つてちや駄目だつて。」

するとカンテラの明りの射す中へ、バッタアスンの汗だらけの顔が出て来て、怒り猛つてこんな事を呟鳴つた。「ヒッキンズの莫迦野郎。俺がかう言つたと野郎にさう言つてくれ、マック。ヒッキンズの野郎、くたばりやがれとな。陽氣な小母さんには、がらくたの外は何にもねえや。山に壓し潰されちまつたからな。ヒッキンズの野郎、黙つてやがれつてさう言つてくれよ、マック。もうちつと丈夫に拵へてくれつてな。」

バッタアスンは、その石炭層へ新らしい丈夫な支柱を何本もしつかり當てがたつた。山に壓し潰されては大變だと思つたからである。この石炭層は絶壁のやうであつた。五十三メートルも高く、第七炭坑のトロコ軌道まで續いてゐる。

マックは足で計り始めた。七十まで數へると、緊張で身體が凍つたやうになつた。そして八十五と數へると、岩に衝

き當つた。マックは嬉しさの餘り、思はず大聲を擧げた。力を籠める餘り、身體中を冷たくして腿も筋肉も硬ばらせて、マックは直ぐ仕事に取り掛かつた。膝まで水に漬りながら一時間ばかりすると、岩に大きな窪みが出来た。ところがもう疲れ切つた上に、悪い瓦斯で胸がむか／＼して來た。少し休まなければいけない。暫くして又再び働きた。ゆる／＼と、しかもよく考へ／＼して。頭の上と左右の石を絶えず手を探つて、崩れ落ちる心配がないかどうか確かめる。石の破片などが、今にも落ちさうにぶら下つてゐる大きな岩の間にあると、それを一々どけて、馬小屋から支柱や板などを持つて來て支へる。大きな岩の破片を押し轉がしたりする。一時間ばかりの間、咳をしながら、短い熱い息を吐きながら、マックはこんな仕事をした。それからすっかり疲れ切つて、柵の上に眠つた。眼が覺めると直ぐ、あたりに耳を澄まして見る。やつぱり何一つ聞えない。また仕事に取りかゝつた。

かうしてゐる中にふと氣が付いた。掘り始めた石炭層の入口に來てゐる。細かな石炭層が手に觸るのだからそれに違ひない。滑り落ちた石炭からかういふ層が出来るものだ。マックはポケット一杯に燕麥を押し込んで、その石炭層に飛び込んで行つた。支柱は大抵しつかりしてゐる。崩れ掛かつた岩山は、この層の石炭を大して遣つつけてはゐなかつた。崩れ落ちた石炭は僅かなもので、しかも容易に取りのける事が出来ると思つた時、マックは喜びに震へた。もうあと五十二メートルどうにかして昇れば、それから先は大丈夫と思つたからである。支柱から支柱へ移つて、眞黒な石炭層を上へ／＼攀ぢ登つた。一步毎に進路を崩して進むのであるから、もう後へ戻る事は出来ない。だしぬけに、手に觸つたものがある。長靴だ。皮が磨り切れて、ざら／＼する。それですぐ分つた。バッタアスの長靴だ。眼の前には、バッタアス爺さんが石に埋められて、横になつてゐる。餘りの事に驚き恐れて、マックは身體中が痺れたやうになつて、やゝ暫くちつと其處にしやがんでゐる外は何も出來なかつた。今日尙マックは、この時の恐ろしい事を思ひ出す勇氣がないのである。さてマックは再び我に返つて、ゆつくり攀ぢ登り始めた。普通なら樂に半時間位で登り切れる

石炭層である。けれどもマックは疲れ切つてゐたし、それに何噸といふ石炭を一々取り除けねばならなくなつて、又、支柱が大丈夫かどうかを綿密に調べてかゝらなければならぬのだから、随分長い時間がかゝつた。やつとトロッコ軌道に着いた時は、汗だく／＼で綿のやうに疲れ切つてゐた。このトロッコ軌道は第八炭坑から直接第七炭坑に通じてゐた。

マックは轉がるなり、其處へ眠つてしまつた。やがて又眼が覺めると、そろ／＼レエル傳ひに登つて行つた。

到頭昇りきつた。其處の地下道は人つ子一人ゐない。マックはちつとしやがんで、燕麥を噛んだり、濡れた手を舐めたりした。それからやつと堅坑の方へ歩き出した。第八炭坑と同様に詳しく、この第七炭坑の地理にも通じてゐたマックであるが、處々が滅茶々々になつてゐるので、その度毎に道を變へなければならぬ。何時間とも知れず迷ひ歩いてゐる中に、耳の中で血が鳴り始めて來た。堅坑へ行き着くんだ、堅坑へ行くんだ——そして合圖の綱を引張るんだ……

けれども、突然——もうその時は、こんな處に閉ぢ籠められるのかと、恐ろしくなつて顫へ出した時——マックの眼

に付いたのは、赤いやうな火の光だ。カンテラだ。三つ見える。

マックは、口を開けて叫ぼうとした——けれども一言も口へ出せないで、氣を失つて倒れてしまつた。

マックは何か叫んだに違ひない。三人の坑夫の中の二人までは別に何も聞えなかつたと言つたが、後の一人は、どうしても低い叫び聲を聞いたやうな氣がすると言ひ張つたのであるから。

マックは夢現の中に、誰かゞ自分を擔ぎ上げたと思つた。それから今度は、動き出してゐる運炭籠にゐるやうな氣がして、やがて籠がゆつくり上つて行くので眼が覺めた。誰かに毛布を掛けて貰つて、もう一度擔ぎ上げられて——と此處まではどうやら記憶に残つてゐたけれど、それから先はもう覺えがない。

マックは、自分では、炭坑にゐたのは三日位だらうと思つたが、實は九七日といふ間、閉ぢ籠められてゐたのである。

第八炭坑で救はれた者はマック一人きりであつた。粉碎された炭坑の底から、まるで幽霊のやうに、この馬丁小僧はあがつて來た。當時の亞米利加と歐羅巴の各新聞に、この話が掲載された。アングル・トム炭坑の馬丁小僧。その肖像

や、毛布を被せて擔ぎ出された時、小さな黒い手がだらりと下がつてゐる有様や、病院の寢臺にきちんと坐つてゐる寫眞などが、ありとあらゆる新聞に出た。

マックが正氣ついて最初に言つた言葉は、全世界を笑はせ、泣かせた。マックは醫者にかう言つたのである。「小父さん、少しチウインガムを下さい。」——人は笑つたが、當然すぎるほど當然な言葉は、自然にかう出て來たのである。マックの咽喉は乾き切つてゐたのだから、水をとつてもいゝ所だつたが、チウインガムの方が先に出て來たのである。

マックは八日で恢復した。それから、父親やフレッドの事を訊ねて見た。それに答へる返辭は皆遠慮勝ちだつたが、その返辭を聞くと、マックは瘦せ細つた手を顔に當て、泣き出した。急に世界にたつた獨りぼつちとなつた十三歳の子供であつて見れば無理もない。獨りぼつちにはなつたが、それ以外の事では、マック少年の幸福は素晴らしかつた。毎日の食物には事を缺かない。世界中からお菓子やお金や、葡萄酒が贈られるのである。だが、その際に、市俄古の或るお金持の貴婦人が出て來なかつたら、恐らくはアランの經歷も此處まで終つてゐたかも知れなかつた。その貴婦

人は、孤兒となつた馬丁小僧の運命に同情して、この子を引取つたのであつた。そして將來の教育を引受けたものである。

さてマックの氣持では、坑夫の外には何もなりたくないといふので、後援者たる貴婦人は、鑛山大學に入れて遣つた。卒業して技師となつてから、アンクル・トムの炭坑へ戻つて、此處に二年勤めた。それからポリギヤのホアン・アルズレスといふ銀山へ行つた——人氣の荒い地方で、いつ何時拳固のお見舞を受けるか分らない所だつた。この銀山は爆發したので、その後マックはポリギヤ、アンデン間の鐵道のトンネル工事を監督した。この時からマックの「考へ」が始まつた。ところで、この考へを實現するには、先づ從來の岩石掘鑿機を改良しなければならぬ——といふ事から、マックは仕事にかゝつた。何よりも好いのはダイヤモンド掘鑿機であるが、そのダイヤモンドの代りに、もつと廉い物質で、しかも略ぼ同じ位の硬度のものが欲しい。そこでマックは有限責任エヂソン工場の試験工場に入つて、極端に硬度の高い鋼鐵を拵へようとした。辛抱強く研究を続けると、どうやら、所期の目的に近づいたので、エヂソン工場を退いて、獨立した。

マックの發明したアラニット鋼は非常に儲かつた。その時分にモオドと知合ひになつた。元來、女の事に頭を悩ます暇は無かつたから、女なんぞ何とも思つてゐなかつた。ところがモオドを見ると、一目で氣に入つた。栗色の髪で、可愛らしいマドンナのやうな顔。温味のある大きな眼。太陽に照らされると琥珀色に輝く眼だ。少し考へ込んだやうな様子。(實はその頃母親を亡くして、モオドは喪中であつた。) 燃え易い、しかも喜び易い性格。かういふものが皆マックに深い印象を與へた。特に強く心を惹いたのは、モオドの肌の色であつた。マックが今迄に見た中で、最もきめの細かい、最も美しい、最も白い皮膚であつた。マックはかういふ女こそ、ほんの一才した風にも耐へられない女だらうと思つた。それにマックがひどく感心したのは、この女の人生の首途に立つ雄々しさであつた。モオドは當時バッファロオでピアノを教へて、朝早くから夜晩くまで忙しく暮してゐた。マックは一度、音楽や美術や文學に就いてのモオドの話聞いた事がある——どれもこれも皆マックには全然分らない事柄ばかりであるが——そしてモオドの學問と聰明さに、途方もなく感嘆してしまつた。それから型の如く、すつかり惚れ込んで、かういふ事になつた男が誰でもする

莫迦な眞似をしたものである。最初の中は、勇氣が無い。ひどく絶望して幾日幾時を過ごす。ところが或る日、モオドの眼の中に一種の眼付が見えた——どんな眼付であつたか、諸君はよく御存知だ——この眼付がマックに勇氣を與へた。すぐに決心して申込みをする。その後二三週間経つと、結婚式が行はれた。この後更にもう三年間、マックは自分の「考へ」を實現するために、倦むことを知らない不斷の努力を續けた。

今ではもう、たゞマックとさへ言へば誰にも分る人間となつた。町端れの寄席藝人の唄にも出て來るマックである。

二

トンネル事業が始まつてから最初の二三ヶ月間、モオドは滅多に夫の顔を見なかつた。

モオドにはもう最初から、夫の今度の事業は、バッファロオの工場の仕事とは全然性質を異にしたものであることが分つた。賢い女で氣の勝つた女だつたから、何とも言はず、夫の事業の爲めに自分を犠牲にした。夫の顔さへ見ない日が幾日もあつた。アランはトンネル工場の現場か、バッファロオの試験工場か、又は緊急會議に出掛けるのであつた。

朝六時から仕事を始めて、時には夜晩くまで続けた。すっかり草臥れるので、時々ブロンクスに歸るのが億劫になつて、事務室の革張りの長椅子に寝て、夜を明かすのであつた。

モオドはこれも諦めて許してゐた。

かういふ場合、夫の氣持が、多少でも好いようにと思つて、モオドはシンヂケエト・ビルディングの中に、浴槽付きの寢室と食事部屋とをこしらへてやつた。小さな立派な住宅だ。煙草もパイプも、カラアも肌着も、一口に云へば、必要とする物なら何でも其處に在つた。それからリオンといふ支那人のボオイを付けて、これに一切夫の事を任せてしまつた。この老人ほど、アランの相手として適當な者は無かつたからである。リオンは東洋人でなければ出來ない藝當の、何遍でも同じ事を平氣で——しかも必ず或る短い間を置いて言つた。「御飯です、旦那様——御飯です、旦那様」忍耐を忘れたこともなければ、氣持を悪くすることもないリオンであつた。何時も其處に控へてゐるが、まるで目には付かない。よく油を差した機械のやうに、音一つ立てず、いつも同じやうに働いてゐて、しかも萬事萬端さちんと整頓して置くのである。

アランと顔を合はせることは益々稀となつたが、モオドは我慢強く辛抱してゐた。天氣の好い夕方には、シンヂケエト・ビルディングの屋上で、一寸した晚餐をモオドが肝煎りて開いた。屋上からは素晴らしい紐育の全景が見渡せた。アランが仕事仲間とかういふ晚餐をすることは、モオドには大いに嬉しかつたから、午後の時間は全部、その準備に潰したものである。どうかするとアランはほんの五六分ぐらゐしか、席に出て來ないのであつたが、それだけでもモオドは満足した。

然し日曜日には、アランは必ずブロンクスに來て妻と娘のエディスの傍にゐた。その時は一週間の怠慢を取り返さうとするやうに、妻と子供の言ひなり放題となつて、明るい顔で、無邪氣な顔で、まるで大きな赤ん坊であつた。

それから又、時々の日曜には、モオドと一緒にニュー・ジャアシイの工事現場へ自動車を出掛けて、「ホッピイに元氣を付けて遣」つた。

やがて一ヶ月間、會議ばかりの事があつた。シンヂケエトの發起人、大株主など、會議することもあれば、財政方面の人や、技師、請負師、衛生學者、建築家など、會議することもある。ニュー・ジャアシイの工事は猛烈な水の氾濫に遭

つてゐるとか、ベルムダ島では蛇紋石を貫通するトンネルが意外な難工事となつてゐるとか、フィニステラでは労働者の素質が劣等だから、もつと善いのを雇入れなければなるまいとか、いろんな事があつた。その上に、工事が進むにつれて、一日々々と問題は殖えるばかりであつた。

アランは時々一日二十時間づゝ何日も仕事をした。そんな日には勿論、モオドは夫に何の要求もしなかつた。

アランは妻に向つて、二三週間経てば、必ずもつと暇が出來ると言つた。細君の方でも、最初の突進さへ終れば、と言つた。モオドは辛抱した。たつた一つの心配は、アランに仕事疲れが出はしないかといふことであつた。

マック・アラン夫人である事、これがモオドの誇りであつた。この誇りを胸に秘めて歩き廻つた。各新聞が、アランの事を「海底大陸の征服者」と書き立てて、その計畫の天才的な事と大膽極まる事を述べ立てると、モオドは實に嬉しかつた。一體モオドは、夫が急に有名な人物となつたので、まだ少し面喰つてゐる形であつた。時々、夫の顔をつくづく眺めて、驚嘆と尊敬の眼を丸くした。けれどもよく見れば、矢張り昔とちつとも變りはない。眞面目一方のアランである。だからモオドは心配になつた。この質朴愚

直が世間の人に知れ渡つたなら、アランの社會的榮光は忽ち薄れてしまふだらうと思つたのである。又モオドはトンネル事業、及びアランに關する、あらゆる評論や新聞記事をせつせと集めた。時には、偶然通りかゝつた映畫館に這入つて、「アランの夫人」がトンネル都市で自動車から降りる所や、派手な塵除外套の風に翻へる所を見物する。新聞記者はあらゆる機會を捉へて、モオドに面會する。そしてその翌日の新聞に、「アラン夫人の言ふ所によれば、アランは紐育中、最も理想的の夫であり、父である」などといふ記事があれば、素晴らしい上機嫌で死にさうに笑ひこけるのであつた。

モオドが何か買物に出掛けると、店中の人々が好奇心の眼でこつちを見る。これは、モオドの誰にも言はない、獨りで得意に思つてゐる事である。そしてモオドの一生の思ひ出となる、一番得意だつたのは、エセル・ロイドがユニオン・スクエアの角で自動車を停めて、モオドの方を指さして友達に教へたことである。

お天氣の好い日には、エディスを立派な乳母車に乗せて、ブロンクス公園を散歩する。そこでいつも動物園に這入るか、何時間も猿の檻の前に立ち止まつて、モオドまでが子

供と同じ位嬉しがつて見てゐるのである。けれども秋になつて、ブロンクス一帯の湿地から霧が立ち昇ると、この楽しみも終つてしまふ。

アランは、クリスマスになつたら、丸三日間、全然仕事を休んで、妻や子供の傍で暮すと約束した。だからモオドはその二三週間も前から大悦びであつた。二人が結婚してから最初に迎へたクリスマスと同じやうにしよう、二日目にはホッピイも招待して、三人でトランプのブリッジをする、へと／＼になるまで続けよう、といふ事になつた。モオドの拵へ上げた、この三日間のプログラムは、とても大したものであつた。

ところが十二月に入ると、アランは殆ど顔を見せなかつた。毎日のやうに、財政専門家との相談で縛られてゐたのである。新年早々に開始される大々的經濟戦への準備なのである。

何よりも先づ第一に、アランは三十億弗といふ莫大な金が入用であつた。しかもこれだけの金が必要と出ると確信してゐたのである。

何週間もシンヂケエト・ビルディングは新聞記者連中に包圍されてゐた。新聞社は大トンネル工事といふ大きなセン

セイションを起す記事でうんと儲けてゐたからである。どんな方法でトンネルは建設されますか。その管理方法は。トンネル内の通風装置は。トンネル曲線はどういふ計算から出来ましたか。少し迂廻してゐるのに、海洋航路よりも五十分の一ほど距離が短縮されるのは何故ですか。地球に針を一本通すんだよ、それで分つたらう。かういふ質問がどし／＼浴びせられて、一般民衆は何週間も期待に胸を躍らせてゐる。結局、トンネル企業のは非に關する論戦がもう一度はじまつたのだ。各新聞ではまた新たに「トンネル可否論」が戦はされた。その烈しさとやかましさは、最初の時とすつかり同じ位であつた。

この論戦に古臭い理論を又再び引張り出して來るのは反對派の新聞である。こんな事を言ふ。花崗岩と片麻石で出來てゐる、この恐ろしく長い距離を掘鑿し貫通する事は、何人にも不可能である。海面四千乃至五千メートルの深所といふものは、あらゆる人間の活動を拒絶し、その恐るべき熱と巨大なる壓力には如何なる物質でも耐へ得られるものでない——これらの理由により、トンネルが悲惨なる失敗に終る事は、火を賭るよりも明かである。

一方には又、好意を寄せてゐる新聞があつて、讀者に向

つて何遍もトンネルの長所を説明したものである。それはこんな事を言ふ。時間。時間。時間。正確。安全。列車が安全に走れる事は、陸上の列車と些かも異なる所がない——寧ろ、一層安全である。もう、天候や霧や、波の状態などに左右される事は無い。大洋の上で魚の餌食となる危険も除かれる。あのタイタニック號の遭難を思ひ出して見給へ。千六百人の命を失つたではないか。又、コスモス號の運命はどうであつたか、四千人を乗せたまゝ、大洋の眞只中行方不明となつたではないか。

航空船などは、もう大量輸送機關としての價値が考へられなくなるだらう。しかも實際今日までに、大西洋横斷に成功した航空船は、僅かに二隻ではないか、などいふのである。

當時、どの新聞どの雑誌を取つて見ても、「トンネル」といふ文句や、それに關した挿繪か、寫眞にぶつからない事は無かつた。

十一月に入ると、トンネルに關する報道が少くなり、やがて全然現はれなくなつた。シンヂケエトの印刷部は全く鳴りを靜めた。アランは工事現場の出入を嚴禁したので、新しい挿繪などの出よう筈が無くなつてしまつた。

世人に對して新聞のあふり立てた熱は去つてしまつた。二三週間も経つ中には、トンネルはもう昔癖になつて、誰の興味も惹かなくなつてしまつた。丁度この時新計畫が現はれた。それは世界一周飛行である。

その代りトンネルは忘れられてしまつた。

これがアランの覗ひ處だつた。アランは世間の人間といふものをよく知つてゐた。最初の感激がいくら大きくても、百萬弗も集めることは出来ないと、ちゃんと承知してゐた。適當な時期が來たなと思つたら、直ぐ第二回目の感激を、アラン自身の手で煽り立てる積りであつた。今度の感激は、人氣などいふ浮かれ切つたものに頼らない、もつと人心をくつと掴むものだ。

十二月になると詳細な説明入りの報道が各新聞紙上に現はれた。この報道たるや、アランの計畫が必ず實現されるといふ豫感を與へるものであつた。曰く「ピッツバク熔鑛精鍊會社は、千二百五十萬弗を投じて、トンネル工事繼續期間中に於て發掘されたる、鑛業的に用ゐ得べき一切の物質に關する權利を獲得したりと。」(この會社の株は、トンネル工事開始第六年には、六割騰貴したものである。)この報道と同時に又次のやうな記事も掲載された。曰く「エヂ

トン活動寫眞協會社は百萬弗を提供して、工事全期間を通じて、トンネルの寫眞撮影、映畫撮影、及びその發表に關する獨占權を獲得したり。」

エヂソン・ビオ會社は、くわしい廣告を出して、「本社は、このトンネル工事最初の鋤の一撃より、歐羅巴行超特急列車の處女運轉に至るまでの経過を撮影して、人類最大の業績たるトンネル完成の歴史を、子々孫々未來永劫に傳へんとするものである。」この會社の豫定では、先づこのトンネル映畫を紐育で一齊封切をして、それから全世界三萬以上の各劇場へ配給しようといふのであつた。

まつたく、トンネルの宣傳としては、これ以上のうまい方法は考へられない。

エヂソン・ビオ會社は、即日から仕事にかゝつた。さうして紐育二百の會社直屬の劇場は、何處も満員の盛況であつた。

エヂソン・ビオの映畫は、先づ最初がアトランチック・ホテルの屋上庭園、有名な會合の光景だ。續いて、五箇所の工事現場の猛烈な塵埃の柱。それからダイナマイトの爆發で噴き上げられる岩石。十萬の勞働者への食料配給。勞働者軍の朝の出發。續いてスクリーンに現はれた一人の男は、

胸に岩が當つて蟲の息であるが、やがて死んでしまふ。更に又、トンネル都市の墓場が出ると、十五箇の新しい土饅頭が見える。加奈陀に於ける木樵の働き、アランの爲めに森林一つ、すつかり伐り倒してしまふ。——更に又、いろいろなものを満載した貨物列車。貨車には、皆A・T・Sと、アトランチック・トンネル・シンヂケエトの頭文字が、書いてある。

この光景の條りは、十分ばかりも續いたが、その題は味も素つ氣もなくたゞ『鐵道貨車』といふのであつたが、この條りが最も強い印象を、全く人を壓倒する印象を與へたのである。出るのも、出るのも、貨物列車ばかりである。瑞典、露西亞、埃太利、匈牙利、獨逸、佛蘭西、英吉利、亞米利加の貨物列車である。満載した貨物は、鑛物、木材、石炭、レエル、鐵骨、管——その他數限りもない、いろいろなものだ。機關車がもくもくと黒煙を吐くと、一切皆進み出す——皆進んで行く——間斷なく後から後から進んで行く。見てみると、お仕舞には、そのごろ／＼ごと／＼言ふ音が本當に聞えるやうであつた。

最後に一寸映されたのは、アランとホッピーが、ニュー・ジャアシー工事現場を歩いてゐる光景であつた。

エヂソン・ビオ會社は毎週新しい「トンネル映畫」を見せたが、その映畫はどれも必ず最後には、アランの姿が色々な所に現はれて來た。

今日は拍手で迎へられたかと思ふと、明日は頸の骨を折つてしまつて、明後日は忘れられてしまふやうな飛行記録保持者のはかない名聲。昔こそは、このはかない名聲にも及ばなかつたアランの名前であるが、今はもうこの名前と、あの事業は確く結び付けられて、トンネルといへばアラン、アランといへばトンネルといふ風に、誰も直ぐ合點が行くやうになつた。

クリスマスの四日前の事である。紐育その他合衆國の大都會には、家具運搬の車ぐらゐるの、素晴らしく大きなボスタアが處々に張り出されて、その前には黒山のやうな群集がたかつてゐて、クリスマス週間の賣出し騒ぎも忘れ果てた有様である。このボスタアの示すものは、妖精の國の都市である。空の眞上から見下した家又家の大海である。人は誰一人として、こんな光景を實際に見たことも無ければ、夢に見たこともない。明るい色に描き出されたこの都市は霧も深い、陽も出てゐる朝の紐育をつくりであるが、その中央にあるのは、素晴らしい大停車場で、これに比べては

ハドソン・リアア・終點驛や中央停車場やペンシルヴァニア停車場なども、ちよいとした子供の玩具である。この大停車場の足下から無數の線路が出て、三角洲を成してゐる。主な線路はトンネルの入口に通ずるものであるが、その他の線路と同様、それに跨がつて無數の橋が架けられてあり、その線路の兩側は皆、噴水のある公園や、花咲き亂れた高臺である。停車場廣場の周圍は、ぎつしり並んだ高層建築で、それは皆何千といふ窓のある建物だ。ホテル、商店、銀行、事務所ビルディングだ。遊歩道、並木道、群衆がうらよる。自動車、電車、高架鐵道がそれを縫つて走る。

眞四角な家が限りも無く續いて、地平線の靄の中に消えてゐる。前景左手には、得も言はれぬ美しい港が見える。倉庫、船渠、波止場。そのどれも仕事の眞最中であるし、港には汽船が一杯で、煙突と煙突、橋と橋がくつき合つてゐる。前景右手は陽の照つた砂濱が見渡す限り續いて、ずらりと並んだ藤椅子に、その後ろは蒼澤極まる海水旅館が堂々と建ち並ぶ。そしてこの如何にも美しい都市の下の方には「十年後のマック・アランの都市」とある。

途方もなく大きいこのボスタアの上の方三分の二は、日光の輝く空である。ずつと上、縁に近く一臺の飛行機が飛

んでゐる。鷗ぐらゐの大きさである。ところで、よく見ると、この飛行機の操縦士は、片手で何か外へ投げ出してゐる。最初その何かは、砂粒のやうだが、段々にどしどし大きくなつて、風に翻へるやうになり、ピラとなる。そのピラの何枚か、都市の直ぐ上に来てゐるのは、もう相當に大きくなつて、それに書いてある「地所を買へ」といふ字がちやんと讀める。

この圖案を考へ出したのは、ホッピーだ。一寸頭を叩きさへすれば、素敵もない事を考へ出すホッピーである。

矢張り同じ日に、同じ圖案の廣告が適當な大きさに、各大新聞に折込まれて来た。殆んど、紐育全市にはこの廣告で蔽はれた。諸官廳、會社、料理店、酒場、呑み屋、列車、停車場、渡船等の到る處で、この都市の繪が見られた。アランが砂を固めて作らうといふ奇蹟の都市である。誰も彼も、これを見て一寸笑ひ、驚き、嘆賞した。さうしてその日の夕方には、もうマック・アランの都市の様子を知らない者は無くなつて、紐育全市民は、既に實際マック・アランといふ都會が存在してさへゐると思つたものである。

このアランといふ男は、まつたく、どうすれば人の噂に上るやうになるか、その秘術を心得てゐる男だ。

「こけ嚇しだ。こけ嚇しさ。いかさまだ。世界中この上もないこけ嚇しさ。」

「こけ嚇し。」と呷鳴る人間が十人ゐると、その十人の中の一人は、必ず手を揉み合はせたり、相手の男の肩を揺ぶつたりしながら、青くなつて、こんな事を呷鳴る。

「こけ嚇しだつて、つまらん事を言ふな。脳の味噌をもうちつとどうにかしろい。マックはきつと遣り逐げる。まあ長い目で見ようぜ。マックと來たら凄いな奴だ。口に出したことは何でも遣つちまふ奴だよ。」

だが將來果して、こんな大都會が出來得るものだらうか。これが即ち、誰も彼も頭を悩ました疑問であつた。

忽ち翌日は、各新聞紙上には、最も著名な統計學者、國民經濟學者、銀行家、大工業家等の解答が掲載された。F氏曰く——といった形式で發表されたが、その意見は皆、次の點で一致してゐた。即ちかうである。トンネルの管理及び技術方面だけでも、既に何萬といふ人間が入用であるから、この人數が既に相當な都會を形成する。これは誰も一致した意見であつたが、亞米利加、歐羅巴間の旅客の中、何分の一がトンネルを利用するかといふ事に就いては四分の三と言ふ名士もあれば、十分の九と主張する人もあつた。

さて、現今では、毎日約一萬五千の旅客が、兩大陸間を航行中である。トンネルが開通すれば、交通は六倍に達するだらう。十倍になると言つた人もある。だから今の旅客の數字は益々増して、とても大變なものにならう。それから毎日、各トンネル都市に這入つて來る人間の數は、實に多くなつてくる。であるから、やがて二十年、五十年、百年後のトンネル都市は、果してどれ位の大きさとなるものか。今の時代の人間の、ちつぽけな尺度を以てしては、到底考へることが出來ない。大體こんな意見であつた。

アランは一撃又一撃と續けた。といふのは……

翌日、地所の値段を公表したのである。

誰しも思つてゐた事は、アランはひどい男ではないから、マンハッタンあたりの地價のやうに、一メートル平方に何千弗のひどい値段は、まさか付ける事はあるまいといふのであつた。誰もさう思つてゐたのに、アランの發表した値段は實に法外なものであつた。およそ物に動じない連中さへも、開いた口がふさがらない始末であつた。地所の周旋屋達は、毒でも飲んだやうにきり／＼舞をした。指や口に火傷でもしたやうな格好をした。帽子を、べこ／＼に叩き付けて呷鳴る奴もある。

「ちえつ、畜生。マックといふ野郎、一體何處にゐやがるんだ、出て來やがれ。折角、此處二三年の中に一身代作らうと思つてゐたのに、あの野郎のおかげですつかりおじやんだ。あいつ、一體どんな權利があつて、世界中の金をうぬ一人の財布に浚ひ込まうとしやがるんだ。」

誰が見ても、どう見ても、今度のアランの遣り口は、各時代を通じての最大無鐵砲の地所投機だ。圖々しい野郎だ、このアランは、一町歩いてくると只みたくに買込んだ砂つ原を、一メートル平方いくらと切り刻んで賣りやがる。まだてんで何處にも出來てゐない町のくせに、そのいかさま都市の一番安い地面でも、奴は何百倍と金儲けをする。一番高い所では、何千倍と儲けやがる。

投機業界は一寸も手を出さない。(けれども個々の投機師連中は、お互ひに胡散臭さうに見張つてゐた。こつそりと變な事を、トラストやコンツェルンを企らみはしないかと思つたからである。)そしてまるで密集方陣の構へで、厚顔無恥なアランの要求に敵對した。アランの方は平氣でもう一押し、この特價提供は三箇月限り、とばかり嘯いたものである。何とでも言ひたい事を言へ。今に見ろ、その内に分つて來らあ、一體そんな汚い泥沼に、金を出す物好きがあ

るものか、無いものか——へ、へ、へ——莫迦か阿呆でなきや、たゞの水を貰つて、ウイスキーの値段を拂ふ奴は無
いさ——

その内に分ると言はれたが、その内に起つて来たのは、
次のやうな事であつた。

アランを蛇蝎視してゐた汽船會社は、目抜き地所と波
止場と船渠を申込んだ。ロイド銀行も、こたま買ひ込むと
ワナメエカア倉庫會社がそれに倣つた。

かうなると誰も彼も、先を争つて申込む。毎日の各新聞
は新しい購買者を發表する。高い金を拂つて、何を買ふか
と言へば——砂だ、石ころだ——しかも出来るか出来ない
か分らない、いかさま都市の地所だ——けれども誰も彼も
申込む、遅れては大變とばかり大慌てに慌てゐる、世の
中は分らないものだ。何がどうなるか、見當は付かない。

主よ、御許に近づかん——登る道は十字架であらうが、
何だらうが、もう一步も後へ引いてはならぬ……

アランはかう考へて、押しの手を少しも休めなかつた。
世間の熱狂を此處まで引上げて来たのだから、この熱狂を
一つ大いに利用しようと思つたのである。

一月四日には各新聞へ全面廣告で、第一期三十億弗を天

下に募つたのである。總額の中三分の二は亞米利加に、三
分の一は歐羅巴に割當てる。又その形式は、十億弗が社債
で、残りの二十億弗は株券といふ事であつた。

この加入勧誘廣告には、トンネルの建設費と開始時期や
収益、利子の支拂方法、償却方法など、必要な事柄がすつ
かり書いてある。一日平均三萬の客があるとすれば、それ
だけでももうトンネル事業は利益を擧げる。ところで、どう
見積つても、日に四萬以上の客は必ずある。その上、貨物、
郵便、取捨空氣による超特急郵便、電信などで這入る金が
莫大なものである。

この廣告に並べられた數字といふものは、今まで誰も見
たことのない大變なものだつた。ごちや／＼と、うるさい
やうな、不氣味なやうな數字で、一々見てみると息が詰ま
る、頭がぐら／＼する。

勧誘文の最後に「ずらりと並んだのは、シンヂケエトの發
起人や大株主の連中だの、合衆國一流の名士だの、著名各
大銀行の名前であつた。紐育つ兒の吃驚仰天した事には、
財政部長として現はれたのは、誰あらう、「ロイドの右腕」と
謳はれたS・ウルフ、これ迄「ロイド銀行」の頭取だつたS・
ウルフである。

三

S・ウルフは、ロイド自身の推擧によつて、このシンヂケ
エトの幹部となつた。そこでS・ウルフの名前とトンネルと
は、永遠に結び付けられることになつた。

夕刊に寫眞が出た。威嚴のある、謹直な、やゝ肥満した
東洋型の紳士だ。唇は厚ぼつたく、鼻は大きく、鈎鼻であ
る。髪は短く、眞黒で、縮れてゐる。髯は眞黒なのを短く
刈込んでゐる。眼は暗い色の少し出眼であるが、一寸憂鬱
な光を帯びてゐる。

「古着商人を振出しに——今は年俸二十萬弗のA・T・Sの
財政部長。十二箇國語に堪能」

古着をどうかうしたといふのは、全くの作り話で、以前
S・ウルフが冗談に自分からそんな事を言つたのである。け
れどもS・ウルフの出が下層社會であることは確かである。
十二歳迄はザムエル・ラルフゾンといふ名で、匈牙利のツ
エンテスで育ち、小さな小屋の埃りを蹴散らかして、玉葱
を食つて大きくなつた。父親は死體を洗ふ人夫であり、墓
穴掘りであつた。十三になると、ブダペストに行つて、銀
行の給仕になつたが、五年間この町にゐた。このブダペス

トで始めて、窮屈な上着を着ることになつた。S・ウルフの
言ふ所によれば「上着にいちぢめられる」やうな氣がしたので
ある。さてS・ウルフは名譽心に燃え、絶望と恥辱に苦しみ、
權力が欲しいと喘ぎ、いろ／＼な野望を抱いて、まるで病氣
のやうになつた。そこで決心を堅めて、思ひ切つた事を始
め出したのである。今に見ろ、きつと俺はえらくなぞ、
と心に誓つて、ザムエル・ラルフゾンは夜晝せつせと働ら
き出した。齒を喰ひしばつて、猛烈な馬力をかけた。とい
ふのは英語、佛蘭西語、伊太利語、西班牙語、露西亞語、
波蘭語を習ひ始めたのである。ところがどうだ。この男の
脳髓はまるでインキを吸ふ吸取紙のやうに、これらの國語
を、大した困難もなく吸収した。會話を習ふために、あら
ゆる人間に、絨毯商人、蜜柑賣子、食堂給仕、大學生、掏
摸など、相手選ばずに近付いた。目ざす處は維納であつ
た。直ぐ遣つて行つたが、此處でも上着にいちぢめられた。
まるで革紐に縛り付けられてゐるやうな氣がした。今度は
伯林を目ざした。ザムエル・ラルフゾンはちやんと旅程
を立てゝゐた。記憶の中へ、更にもう一萬ばかり單語を叩
き込んで、外國語の新聞をいろ／＼買つて、一生懸命精讀
した。三年の後には到頭目的が叶つた。やつと食へるか、

食へないか位の俸給だったが、ある仲買人の通信員となつて、伯林に遣つて来たのである。けれども伯林でも上着に閉口した。それに此處へ来ると、急に、匈牙利系の猶太人として、ひどく輕蔑された。これはどうしても倫敦へ渡らなければいかん、と考へて、三度方向轉換をやつて、倫敦の銀行に宛て、片つ端から申込を試みた。皆駄目である。倫敦の連中はそんな男はいらないと言ふ。でも俺は、ザムエル・ラルフ・フゾンには、あの連中の方から頭を下げて雇ひに来るやうにして見せるぞ、と思つてゐる中に、どうも何とは無しに支那語が遣りたくなつた。S・ウルフの頭腦は、この困難な國語さへも覺え込んだ。發音の先生は支那人の留學生だつた。御禮には郵便切手を集めて遣つた。當時のこの男、ザムエル・ラルフ・フゾンの生活と来たら犬よりひどかつた。心付なぞ一ペンニヒだつて遣つたことは無い。伯林名物、給仕の露骨なあてこすりなどを聞いても、平氣でゐるだけの勇氣があつた。又、電車に乗らない。勇敢に歩き廻るが、その實、情無い扁平足は底豆だらけで、とても痛い。一時間四十ペンニヒで語學の教授をし、又翻譯をした。金が欲しい。いろ／＼な野心を逞しうしてゐると、身體がふる／＼して来る。名譽心に燃えて齒噛みをする。

途方もなく素晴らしい將來の事を思へば、頭がくらくらする。休息も、保養も、睡眠も、戀愛も、そんなものは一つも無い。これ迄の苦しい生活で、屈辱を受け、折檻をされ通しであつたが、骨抜きにされてしまふやうな意氣地無しではない。背を曲げて、すぐ又すつくと立上がるのである。負けるか勝つかだ。或日突然、大決心をした。職を投げ出してしまつたのである。齒醫者に行つて、三十マアク出して、齒齒を填めて貰ひ、齒をすつかり掃除して貰つた。上等の靴を買つた。一流の裁縫師に命じて英國風の服舞を調へた。そして、堂々たる紳士として倫敦へ出發した。倫敦に來て、四週間も無駄な努力を拂つた後、銀行家のテイラア及びテイリの所へ行くと、矢張りラルフ・フゾン型の一人の人物に出逢つた。尤もこの方のラルフ・フゾンは、もう一寸した人物で昆蟲で言つたら一皮剥けて成長したやつである。これが又、各國語を操つて、丁度同じ位であつたが、若い高慢ちきな奴の鼻を明かさうと、一つ惡戯をして見た。けれどもザムエル・ラルフ・フゾンは凹まなかつた。そこで認められて、今迄味はつたことの無い幸運に有り付いたのである。その次第といふのはかうだ。一かき大きい方のラルフ・フゾンは、若者を困らせようとして、支那人の通譯を呼ん

だのであるが、二人は早速ちやんとした會話をしたものだから、すつかり吃驚仰天したといふ譯である。三日経つとザムエル・ラルフ・フゾンは再び伯林に現れたが、憚りながら今度はそんな處に住まうといふのではない。今はもう、倫敦からのS・ラルフ・フゾン氏で、名前の綴りからして違つてゐる。會話も英語一點張りだ。そして伯林に着いたかと思ふと直ぐその夕方に上海へ立つた。無論一等客で寢臺車の給仕を頼んで使ふといふ景氣である。上海に着いてからは相當に好い氣持であつた。決して下を見ず、いつも空と地平線ばかり見てゐた。だが、それでも尙、まだ少し上着に閉口した。色々に苦心して俱樂部の連中を眞似てみるのだが、どうしても英國人と見て貰へない。その面當てに誰にも勧められなかつたが、洗禮を受けて、カトリック教徒になつて遣つた。又その内に貯蓄が出来た。(父親のラルフ・フゾン老人はお蔭で死體を洗ふ商賣を止める事になつた。貯蓄が出来て亞米利加へ渡つた。そしてやつと伸び／＼と息をしたものである。やつとだぶ／＼の上着を着て、實に好い心持となつた。自由な道が開けた。今迄は、物事をどし／＼遣つてしまひたい性分が抑へられ抑へられてゐたのであるが、今はもうその性分を思ふさま發揮してもいゝ事になつた。

そこで敢然と、自分の姓名の終りの綴りを捨てた。まるで蜥蜴が尻尾を棄てるやうな具合で、此處にサム・ラルフと名乗ることになつた。けれどもラルフでは獨逸人臭くつていけないとばかり、Oの字を一字入れて、ウルフと讀ませる手段を取つた。英國訛りを出さない事にして、又英國風の口髭も剃つてしまひ、亞米利加式の鼻聲で喋べる事にした。精神も身振りも大仰に愛嬌たつぷりにして、上着を脱いで襯衣の袖を振つて街を歩き始めた。さういふ流行のトップを切つたのである。又、靴磨きの高い玉座のやうな椅子に乗る時は、いかにも生粹のヤンキイらしく振舞ふのであつた。さて然し、もう好い年頃である。他人の好き勝手に、三角でも四角でも丸くでもなる時代は過ぎてしまつた。S・ウルフは足を止めて思案した。今迄境遇に應じて色々に變形したのは、外でもない、自分自身を作り上げる爲めであつた。此處らが丁度いゝ句切り所だと考へて二三年は市俄古の棉花市場で働いたが、その後紐育に出て來た後から考へて見れば、ぐるつと地球を一周して、初めて自分の落着く場所へ辿り着いた譯だつた。知識、才能、物凄い活動振りなどによつて、S・ウルフの地位は忽ち鱈上りに上がった。そして今度は持前の扁平足をがつしり踏まへて、構はず人の肩を踏

み付けた。今まで他人に押へ付けられた返報といふ形である。仲買人口調の高聲は止めて、何處となく威厳が付いて来た。自然、この男は、もう一廉の人物になりおほせて、好き自由な眞似の出来る人間だといふ事の證據に、全然人と違つた獨特の顔付を考へ出した。といふのは、短い頬髯を生やし始めたのである。

やがて二度目の幸運が、數年前の倫敦のとよく似た幸運が、見舞つて来たのも、この紐育であつた。もう一人のS・ウルフと出逢つたのであるが、これは又途方もなく大きい大口徑のS・ウルフである。とは即ち、ロイドである。當時ウルフは聯合取引所に居たが、決して重要な位置ではなかつた。ところがその内、運の好い事には、ロイドを相手の一寸した一勝負で、S・ウルフは指揮を承はつた。そして二つ三つ、駒捌きの器用な所を見せたものである。するとロイドは、かういふ盤上の掛引は何でも心得てゐる練達の士であつたから相手の男は並々ならぬ人間だと早速感付いた。あれはと、W・P・グリフィンの手ではなしと、T・レキスの手でもなしと——そこでロイドは穿鑿して見た。所が、遂にS・ウルフと判明した。そしてロイドはこの偉物を引つこ抜いて、自分の銀行に入れた。それからのS・ウルフの、物凄

い程の進出ぶりは、頂上を極めるまでは停止しないといふ勢ひを見せた。さて今や大西洋トンネル・シンヂケエトの大立物となつた時は、丁度四十二歳、少し肥り過ぎて、喘息持ちで、名譽心に燃え熾つてゐた。

S・ウルフは、今日迄にたつた一度一寸休息をしたことがある。その休息は未だに何故あんな事をしたかと癢に觸つてならないのである。市俄古にゐた頃、維納生れの美人に戀して、それと結婚した。ところが、それ程ウルフが夢中になつた維納女の美しさは、忽ち色も香も無くなつて、跡に残つたのは、唯、喧嘩つ早い、傲慢な厄介千萬此上も無い女房であつた。それに又うるさく焼餅をやく女であつたから、ウルフはいつも嘔鳴り付けた位では濟まざなかつた。丁度六週間前その妻君が亡くなつたが、S・ウルフは別に悲しみもしなかつたものである。男の子が二人あつたのを、宿舎に預けた。歐羅巴なんぞへ遣つたのではない。ポストへ遣つた。自由な氣象の、教養のある亞米利加人に育て上げようといふ譯だ。又一方、明るい金髪の瑞典女を世話して、聲樂を習ふといふその女に、ブルクリンで小さい住居を當てがつてある。——さて、これだけすると、ほつと一息ついて、シンヂケエトの仕事に掛かつたのである。

最初の第一日目には、副支配人、課長、出納掛、簿記係、書記、タイピスト、など大變な人數になるが、その顔と名前を紹介された。二日目には一切の締め括りを自分一人の手にすつかり收め、三日目には、既に數年間もその位置に就いてゐたやうに、どし／＼采配を振つた。

ロイドが、サム・ウルフを推薦したのは、ロイドが今迄に見た中で、最も有能な財政實際家と認めたからである。アランは又S・ウルフの人物を全然知らなかつたし、會つて見ても大して氣心が合ひさうもないと思つたが、二三日経つと、アランはS・ウルフを評して、非常なと言へない迄も少くとも、嘆賞に値する活動家であると言つた。

四

豫約加入勧誘書が公表されると、トンネルはずる／＼呑み込み始めた。

社債は一口千弗であつた。株券は百弗、二十弗、十弗と三通りだ。

紐育株式取引所のがらんとした大廣間は、株券發行の即日には破れ返るばかりの騒ぎになつた。これ迄市場に現はれた株券で、このトンネル株ほど先の見えない株券は無か

つた。未曾有の暴騰を示すかも知れないが、また一錢の價値もないまでに下落するかも知れない。投機業界は興奮の極に達した。だから誰も手を出さうとはしない。最先に買付ける勇氣は、誰にも無かつたからである。然しS・ウルフはこれより先何週間も、ずつと寢臺車に暮して、方々を駈けずり廻つて、トンネルと最大の利害關係を持つ鐵工業界のシンヂケエトに對する態度を、すつかり探索した。S・ウルフは元來、相手が確かな人間でないと、決して註文契約をしない男である。探索の序に、それを見せて遣つた。だから鐵工業の代理者達は、正十時にどつと押寄せて、買付の火蓋を切つたのである。そして約七千五百萬弗のトンネル株を買つてしまつた。

堤は切れた……

けれども、アランの第一に目指すものは民衆の金であつた。一部の資本家や、機械業者の力によつて、トンネルを建設したくない。トンネルは民衆全體の所有物であり、亞米利加の否全世界の所有物とならなければならないのである。

ところで、愚圖々々とお出漕るのが、民衆の金である。民衆はいつでも大膽と富を嘆賞する。大膽は死に打ち勝つ勝利であり、富は餓ゑを壓倒して捷つ。しかも死と餓ゑは、民

衆の最も恐れるものである。

見込がないときまつてみるものでも構はない、誰かが何か考へつくと、その考へに向つて民衆は押寄せる。それによつて熱狂し、夢中になり、自分達の無氣力と退屈とを忘れようとするのである。民衆とは新聞讀者である。日に二三度は、自分と全然無關係な人間の運命に心を熱く躍らせる。又、民衆とは見物人である。自分達の無力と貧困に深い憤りを感じながら、時々刻々に現はれて来る同胞の飛躍と顛落を見て楽しむものである。極く一部の選ばれたる人々のみ、贅澤をし、何かを體驗出来るのである。大部分の人間には、時と金と勇氣が無い。人生はこの連中に一顧をも與へない。この連中は地球の廻りを轟々と廻つてゐる調車に捲き込まれて、慄へ上つたり息を詰まらせたりすれば、直ぐに振り落されて微塵に碎ける。しかも誰一人としてこれを顧みる者も無い。いや他人の事を心配する時間も、金も、勇氣も、持合せがないので、同情などといふ事は一つの贅澤となつたのである。古い文化は破産した。そして大衆が殆んど一顧だに與へなくなつたものは、曰く藝術、曰く宗教、基督教の信仰療法派、神學、救世軍、接神術、いかさまの降神術——かういふものは、ほんの僅かの人間の精神的要

求を満たすに過ぎないものとなつた。安直な保養、芝居、活動寫眞、拳闘、寄席、かういふものが歓迎されて、轟々たる調車の休止した短かい時の間——廻轉によつて惹起された眩暈を忘れようとする。けれども多數の人々は、それもしないで、明日の旅路を續けるに十分な體力を養成する爲め、肉體を鍛へるのに忙しい。かういふ鍛錬を名づけてスポルトと云ふのである。

人生は暑苦しく、眼まぐるしい。氣違ひじみて殺人的だ。空虚で無意義だ。何千人の人間は呆れ返つて、人生の希望を放擲してゐる。どうか一つ、新しいメロデイが欲しい。古臭い流行歌はもう眞平だ。

アランは新しいメロデイを民衆に與へた。鐵と、飛び跳ねる電氣の火花との歌である。これこそ我等の時代の歌だ、と民衆は膝を打つて、頭上を走る轟々たる高架鐵道の音を聞いては、アランの峻嚴なタクトを耳にしてゐると感じた。

この男は天國の權利などを約束しない。人間の魂は七つの階梯を通らねばならぬなどとは決して言はない。又この男は、未來の事柄で、結局はといふと掴まへ所もない、始末におへない事柄を使つて、まやかしの手品なんぞ使はな

い、この男が言ふのは現在だ。この男の約束するものは手で掴める、何人にも分り切つた事柄である。地球に穴を一つ明けようといふ。それだけの話である。

けれども、これ程單純な事ではあるが、この男の計畫が思ひ切つて大膽不敵なものであるとは、誰も思つてゐた。だからこそ、何百萬の人心を魅了し盡したのである。

最初流れ込んで来た「しががない暮しの人間」の金は、極く僅かであつた。けれどもやがて滔々たる大河の勢ひとなつた。紐育、市俄古、桑港、全米を席捲する言葉は「トンネル株」であつた。ギクトリア金鑽株とか、大陸ラヂウム株とかいふものは、買つた奴は皆大金儲けをしたさうである。世人は皆これを知つてゐたから、トンネル株は一擧、從來の株をすべて蹴落してしまつたのである。ひよつとすると、見事開通——したら、大變、さあ行け、さあ買へ。問題は千弗殖えるとか、減るとかいふ小つぽけなものでは無い。老後の安息所を建てるか建てないかだ。顎から齒がすつかり脱け落ちない前に、準備をして置くことだ。

何週間も續いて、シンヂケエトの花崗岩の階段の上に、人間の激流が渦卷いた。餘所にいくらでも株券の買へる所があるのに、誰しも本元から直接買つて見たいものだ。御

者が来る、運轉手が来る。食堂のボオイ、昇降機係り事務員、女賣子、職人、泥棒、猶太人、基督教徒、亞米利加人、佛蘭西人、獨逸人、露西亞人、波蘭人、アルメニヤ人、土耳古人。あらゆる國民が、濃淡とり／＼の皮膚の色を見せて、シンヂケエト・ビルディングの前に押し掛けて、株券と坑道と配當金と利益金の話で逆上し切つてゐる。空氣まで金の匂ひがする。もしかしたら、本物の金貨や、本物の弗紙幣が、灰色の冬空からヨオル・ストリートに降つてゐたかも知れなかつた。

殆んど毎日この通りの大勢が押し掛けたから、係りの者は集まつた金を處理する暇もない。それは丁度、昔のフランクリン・シンヂケエトの、幸福な「五二〇パーセントのミラー」の日とそっくりであつた。係りの者は金を無造作に後の床へ抛り投げる。やがて蹠の邊まで金の洪水に浸るのであるが、しかも一方では、小使の男たちが間斷なしに、洗濯籠に金を入れて、引擦つて運んでゐるのである。かうした金の洪水は、減るところか増す一方で、窓口へ押しかける人々の眼は、この洪水を見ると、氣が狂つたやうな貪婪の光を帯びて来る。一掴みでいゝ——片方の手で掴めるだけはいゝ——それだけ貰へばもう占めたものだ、只の番號

であり、モオタアであり、自動人形であり、機械であるやうに酷使される連中が、人間らしく生活が出来たのだ。誰も彼も亂痴氣騒ぎの跡のやうに、頭をくら／＼させて歸つて行く。素晴らしい夢に酔つて、眼の中は熱がある。百萬長者になつた心持である。

市俄古、セントルイス、フリスコなど、合衆國にありとあらゆる大小の都會で、同様な場面が演ぜられた。百姓も、牧童も、坑夫も、一人残らずA.T.S株を買つて、一山かけたものである。

トンネルは呑み込んだ。金を飲んだ。まるで渴き切つた大洪水以前の巨大な怪物である。しかも大西洋兩岸の二つの口から呑み込むのであつた。

五

トンネル事業といふ大きな機械は、全速力を出して廻つた。アランは絶えず注意して、この機械のテムボを持続せしめた。アランの主義は、一切の仕事は何でも、それを完成するに必要だと考へた時間の半分で仕上げ得るといふのであつた。だから、この男と接觸してゐると、識らず知らず、このアランのテムボが傳染してしまふ。これがアラン

といふ男の偉いところであつた。

鐵筋コンクリートの三十二階建、人間の住む蜂の巢が、地下室の金庫から、平べつたい屋上の無線電信所に至るまで、汗と仕事の匂ひで一杯だ。その八百の部屋には、シンヂケエトの役員、事務員、タイピストが蠢いてゐる。二十臺の昇降機が一日中上下してゐる。連続式昇降機もある。幾つも箱が珠數つなかりになつてぐん／＼廻つてゐると、其處へ人が飛込むのであつた。中には又、第十階とか、第二十階とかまでは止まらない急行リフトといふ昇降機もある。最上階まで直通する昇降機もある。三十二階の上から下まで、遊んでゐる場所は少しも無かつた。郵便、電信、金庫、上部工事課、地下工事課、發電所課、都市建設課、機械課、船舶課、鐵課、鋼課、セメント課、材木課、プロオドエイの華やかな騒々しい雑沓の中に、夜の更ける迄、煌々と立つこの建物は、まるでお伽噺の塔である。

上から數へて四階迄の全部は、それが一つの巨大な廣告になつてゐる。ホッピーの立案で、色さまざまの電燈を何千と使つてゐる。大西洋の海圖だ、素晴らしい海圖だ。四方の縁は、星と條を見せる色電氣だ。大西洋は紺碧で、休む時なく打つてゐる波の線。左に北亞米利加、右に歐羅

巴、英國諸島がある。何れもべた一面に無数の電燈を並べてゐる。星の塊りだ。トンネル都市、ビスカヤ、アゾオル島、ベルムダ島、フィニステラは、紅玉色の電燈をぎつしり固めて探海燈のやうに光つてゐる。歐羅巴寄りの海上には、電燈を集めて上手に形どつた一隻の汽船が見える。この汽船はまるで動かない。紺碧の波の間には、赤い電球で綴い曲線が引いてゐる。ベルムダ群島、アゾオル群島を経て、西班牙、佛蘭西まで達してゐる。これがトンネルだ。しかもこのトンネルを通じて、絶えず猛烈な勢の列車が兩大陸の間を往來する。五秒置きに發車する六臺連結の列車だ。光の霧が、ぎら／＼した廣告の全面から立ち昇ると、上へ行つてびたつと納まつた、誇りに満ちた、太い、牛乳色の大きな文字となる。大西洋トンネル。

自分の周囲の空氣が熱狂的になればなるほどアランは益々愉快で耐らなくなつた。素敵な上機嫌となつた。何時も熱中し、興奮してゐるやうに見える、以前よりも一層元氣さうに健康さうに見えるのであつた。頭は肩の上に一層樂々と据つて居り、肩は又一層がしりと、幅が廣くなつた。子供らしい、人の好きさうな眼の色は消えて、眼付は、きつとして少しも散らない眼付となつた。以前は堅く結ばれ

てゐた唇までが、花のやうに綻びて、何とも形容し難い、目立たぬ微笑を湛へてゐる。如何にも健康さうな食欲で、眠ればぐつすり寝て、夢も見ない。そして仕事をした——急がず慌てず、終始變らない速力で、少しも休まな。

反對にモオドの方は、輝きと潑刺さを失つてしまつた。青春は去つて、少女から人妻となつたのである。頬にはもう昔の生々した赤みが無い。少し色が褪せて、少し瘦せた。緊張して、注意深い女となり、滑らかだつた額には思ひ餘つた皺が見える。

モオドは惱んでゐたのである。

二月と三月に掛けては、幾週間かの嬉しい日が續いた。冬の間の退屈と空虚とは、それで十分償へたのである。それは、アランと一緒に、ベルムダ群島や、アゾオル群島や、歐羅巴まで行つて來たからだ。殊に海上では、殆んど一日中、アランの傍にゐられたから、實に嬉しかつた。けれどもその代りには、歸つて來て又再びブロンクスに閉ぢ籠るのが一層辛くなつたのである。

アランは數週間ずつと旅行中であつた。バッファロオ、市俄古、ピッツバーク、トンネル都市、沿岸各地の發電所と廻つて、まるで急行車の中で暮してゐる。しかも紐育に歸

れば、また山のやうな仕事が続つてゐるのである。

勿論、そんな忙しい中でも、約束した通り、ブロンクスに来る回数が多くなつた。殆んど決つてくる、けれども殆んどいつでも、どうかすると日曜日でも、延せない仕事を待つて来る。時によると、唯、眠り、入浴し、朝飯を食べるだけに歸つて来て、そして又直ぐ出て行つてしまふ。

四月になると、太陽は大分に近くなつて、ひどく暑い日も二三日あつた。モオドは、エデイスを連れて散歩に出る。エデイスはもう元氣に、母親と並んでよちよち歩きをする。ブロンクス公園は、朽ちた土の匂いと若々しい青葉の匂ひでむせ返るやうである。去年の夏と同じく、今年もエデイスを抱き上げて立ち止まるのが、猿の檻の前だ。何時間も立ち止まつてゐる。又、小さいエデイスは可愛い小馬に乗つて、頬ぺたを眞赤にして喜んでゐる。それから又、大きく口を明いて鐵格子の所に蹲まつてゐる熊に、その口の中へパンの切れを投げて遣る。お次は獅子の子供を見に行く——こんな事をして午後は潰れる。時々、モオドは思ひきつて、雑沓と塵埃の下町へ、エデイスも連れて行くことがある。モオドは生き／＼した人間生活の空氣を呼吸したかつたのである。それから度々砲臺のある遊園地へも行つた。すると

遊んでゐる子供達の頭の上を、高架鐵道が雷のやうな音を立て、通つた。廣い紐育中でも、モオドの一番好きな場所は此處である。

水族館の傍には幾つもベンチが並んでゐる。そこへ腰を下したモオドは、廣い入江にうつとりと見入つてゐる。エデイスは、綺麗な玩具で砂を掬つて遊びながら、興に乗つて時々大きな聲を立てる。眞白な渡し船が、ホボケン、エリス島、ペドロオ島、ステエト島、紐育ブルックリンの間を、絶えずあちこちと通つてゐる。牛乳を流したやうに見える廣い入江にも、ハドソン川にも、よくよくと動き廻つてゐるその船の数は、どうかすると一時に三十位まで算へられる。どれを見ても、丁度秤の桿のやうな白い楨杆が、間斷なくその二本腕を上げ下げしてゐる。それに較べると、汽船はまるでお伽噺の七哩靴でも穿いてるやうに飛んで行く。ニュー・ジャアシー渡船會社のセントラル號が鐵道貨車を載せて來ると、曳船や税關のボートは、慌てふためいて一目散に逃げる。遙か向うに、日光の霧の中にうつす立つてゐる影が自由の像である。まるで波の上に浮んでゐるやうだ。その後長く引いてゐる一本の青い線がステエト島であるが、それは殆んど見えない位である。汽船の煙突から眞白

な蒸氣が一本光つた。暫くして、號笛がぼう／＼、びいびいと聞える。入江は音で一杯になる。一番鋭い曳船の悲鳴から、遠くの空氣まで顫はせる、重々しい大洋航路船の咆哮に至るまで、いろんな響きで一杯になる。間斷なく、鎖ががら／＼言ふ。それから何處か遠くで鐵を打つやうな音が聞える。高低強弱多種多様に入り混つた騒音が、一種異様な音樂會となり、人の心に或る幻想と沈思とを呼び起すのである。

だしぬけに、直ぐ近い所でぼうといふ號笛が鳴つた。大きな快速船が一艘、一杯に日を浴びて、ハドソン河の青濁りの水を分けて走つてゐる。甲板に音樂隊の奏樂があり、どのデッキにも人間の頭が點々と見えて、船尾の方の眞黒な塊は三等船客の一團である。

「エデイス、お船よ、お船にはいつちやひなさい。」
エデイスは眼を擧げて見る。さうしてブリキの小桶を振り廻して一生懸命叫ぶ——まるで曳船の笛と同じやうな聲である。

歸り路になると、決つてエデイスは、必ずお父ちゃんのお所へ行くんだと言ふ。するとモオドは、お父ちゃんのお邪魔になるからいけませんよと言ふ。

又モオドは、再び熱心にピアノの稽古を始めた。せつせと勉強して、再び教師にも就いた。實にすつかり忘れてしまつた。二三週間といふものを、モオドはあらゆる大きな音樂會に出掛けて行つた。月に二晩位は自分でも、女實子や肌着を縫ふ女工などの寄宿舎に行つて演奏した。けれども音樂の韻律と一緒に血の中へ流れ込む歡喜の情は、もう昔と違つて、何か重苦しいやうな氣持がまじつて來て、しかもその重苦しさは段々増すのであつた。だからその中にはピアノに向ふ事も稀となつて、遂には全く止めてしまつた。それから今度は育児、衛生、倫理、動物愛護などの講演を聴きに行つた。又モオドの名前は、癩疾者保護や孤兒養育を事業とする、いろいろな協會の婦人委員として現はれ出した。かういふ事業は、現代が生んだ野戰病院である。勞働といふ無情苛酷の戰爭に打ち倒された人々を介抱する所である。

けれども何としても、モオドの心の空洞は無くならない。この空洞には怨めしさと物足りなさが渦を巻いてゐる。夕方になると、必ずアランから電話である。その一聲を聞いただけで、モオドの氣持は安まつて來るのである。「ねえ、あなた、今夜は御飯に來て下さる。」

と尋ねるが、まだ自分がかう喋つてゐる中からもう、アランの返辭を読み取らうとして緊張する。

「今夜かい。駄目だなあ、今日はとても駄目だよ。だけど明日なら行くよ、さういふ都合にして置くからね。ところで、エデイスはどうしてる。」

「あたしよりもずつと元氣よ。」

と言つてから、一寸笑つて見せる。自分の失望し切つてゐることを、夫にかくさうとして笑ふのである。

「どうだね、あの子を電話口へ出して呉れないか。」

夫の注意が子供の方へ行つたので、モオドはほつとしながら、小さいエデイスを抱上げる。さうしてエデイスに何か片言で言はせるのであつた。

「ぢや、左様なら。今夜は我慢して上げますわ。でも明日は、どんな事があつても許して上げませんよ——よくつて。」

「よし／＼、分つたよ。明日はきつとだ。ぢやお休み。」

こんな事であつたが、その後になると、いくらリオンに吩咐けても、アランを電話口に出せないことが度々あつた。アランは全く一寸も手が放せなくなつたのである。

するとモオドは、すつかり厭になつて、ふん／＼怒つて受話器をひどく抛り付けて一生懸命涙を耐へるのであつた。

モオドは毎晩讀書する。書棚の本はすつかり読み盡した。

けれどもその結果モオドの發見した事は、大部分の書物は嘘の塊りだといふことであつた。いゝえ、違ひます。人生は決してそんなものではありません。とモオドは一人言ふのであつた。けれども時々、モオド自身の苦しい悩みを、そ

つくりその儘述べてゐる本があつた。そんな時は、眼に一杯涙を溜めて、人の居ない静かな部屋を選んで、彼方此方歩き廻る。到頭、モオドは素晴らしい事を思ひ付いた。自分で本を書いて見ようといふのである。まだ誰も書かなかつたやうな本——それを書いてアランを吃驚させようといふのである。

この考へがモオドの心を酔はせた。それから午後中町を走り廻つて、自分の考へた通りの本を探した。到頭、思つた通りのものが見付かつた。日記帳である。鱈革の装釘で薄い黄色い紙だつた。夕飯が済むと直ぐ仕事に掛かつた。

第一頁を開いてから書き入れたのである。

「わが愛する娘エデイスの生活と、その言へる言葉。母モオド認む。」

それから第二頁には、

「神よ、愛らしきエデイスを守らせ給へ。」と書きつけ、第三頁から本文にかゝつた。

「先づ第一に、わたしの可愛い娘が生れた時……」

この本は、クリスマスにアランへの贈り物とする積りであつた。この仕事はモオドを樂しませた。幾晩も幾晩も、淋しさを紛らしてくれた。幼い女の子の生活の、どんな些細な事でもその通り一々書き込んで行く。滑稽な片言や、あどけないお利巧な質問、油斷のならない注意力や、立派な一人前の意見だの、何でも書き加へて行く中に、どうかすると筆が逸れて、自分自身の心配や考へを述べ立てる事になつた。

モオドは日曜から日曜へと、日曜ばかり目當てにして暮した。日曜はアランが来る。モオドには祭日である。家中を美しく飾り付ける。特別念入りの獻立を作つて、アランに一週間分の取返しを一遍にさせようとする。けれどもその日曜さへ、やがてアランは時々來なくなつた。

或る日曜日にアランは、突然バッファロオの鋼鐵工場へ呼ばれて行つた。次の日曜日には、ブロンクスへ來たけれども、ベルムダ群島の工事現場を監督するシユロッセルと一緒に來て、二人で一日中専門の話ばかりしてゐたから、モオドにとつては夫が來ないも同然であつた。

そこで或る日の午後、モオドはひよつこり、意外な時間にシンヂケエト・ビルディングに現はれた。そしてリオンを

通じて、至急會ひたいからとアランに言つて遣つた。

モオドは食堂で待つてゐた。食堂はアランの事務室の隣りで、騒々しい太い聲が銀行の名前を續け様に呼んでゐる。

「——マンハッタン——モルガン會社シアマン——」

モオドにはすぐ分つた。大嫌ひなS・ウルフの聲である。急にその聲が止んで、アランが今大きな聲を立てる。

「直ぐだ、さう言ふんだ、リオン、直ぐだ。」

リオンが食堂に這入つて來て、囁くやうにアランの返辭を傳へる。

「待つてはゐられないのよ。」

この支那人は困つたやうな顔で眼をぱちくりさせたが、足音も立てずに出て行つた。

すると直ぐ、アランが這入つて來た。仕事に熱し切つた上機嫌の顔である。

來て見ると、モオドは手巾を顔に當て、激しく泣いてゐる。

アランは面喰つて、かう尋ねた。

「おい、モオド。どうしたんだ。エデイスがどうかしたのか。」

モオドの睨り泣きは一層激しくなつた。エデイス、エデイスつて、あたしの事なんかちつとも考へて下さらない。あた

しだつて、たまにはどうかする事もあるのに……。モオドは肩を震はせて泣くのである。

「あたしもういや。どうしてもいや。」

と、しやくり上げながら言つて、益々強く手巾を顔に押付けた。益々激しく泣聲を立てた。かうなるとモオド自身でも手が付けられない。赤ん坊が泣き出したも同然である。どうしても泣き止まない。怨みと苦しみをすつかり言ひ立てたのであるが、どうしても泣き止まない。

暫くアランは途方に暮れてゐた。やがてモオドの肩を撫でてかう言つた。

「だけどお前、聞いて呉れよ——この間の日曜はシュロッセル君に邪魔されたんだが、別に俺が悪い譯ぢやないよ。何しろシュロッセル君は遙々あつちから来た人で、二日以上こつちにあることは出来なかつたんだからね。」

「そんな事を言ふのぢやありません。この間の日曜一日ぼつちの事なんぞ——昨日は、だつて、エデイスの誕生日ぢやありませんか……お待ちしてました……あたし、きつといらつしやると思つてゐました……」

「エデイスの誕生日だつて。」
とアランは當惑し切つて言ふ。

「さうです。まあ、お忘れになつたの。」

これにはアランも閉口した。

「まつたく、どうしてゐたんだらうなあ。一昨日はちゃんどさう思つてたんだが。」

と言つてから、暫く間を置いて、

「ねえ、モオド、おれはこの頃、頭の中が一杯なんだ。ほんの暫くだよ、仕事がちやんと始まりさへすれば——」
と續けた。

するとモオドは跳び上がつて、地團太を踏んで、眞赤になつて夫を睨み付けた。涙が、頬を傳つてゐる。

「いつもそんな事を仰有るのね——もう何ヶ月も前からそればかり仰有つてゐるのね。——あゝ、いやだ、いやだ。」

としやくり上げながら、ぐつたり椅子に腰を下ろし、手巾で顔を蔽つてしまつた。アランは益々途方に暮れた。まるで叱り付けられた小學生のやうに突立つて、顔を眞赤にしてゐる。こんなに怒つたモオドを見るのは、これが始めてである。やがてアランは、

「だけれどね、まあ聞いてお呉れよ。」
と始めた。

「事業つてものはね、思つたよりも大變なものだ——だが、

もう少しでよくなるさ。」

かう云つて、今暫くの間おれの事は辛抱して、音楽會や芝居に行つたり、ピアノの稽古でもしたり、何か氣の紛れるやうにしてゐてくれと頼むのであつた。

「そんな事、もうみんな遣つて見ましたわ、どれもこれも退屈よ——もう／＼飽々してゐますわ——いつまで経つても待つて居ろなんて——」

アランは首を振つて、諦めたやうに、いかにも困り果つて、モオドの顔を見た。

「さうか、ぢや、どうしたら善いだらうね。——どうしたらお前の氣が濟むだらうね。」

と小聲に尋ねる。

「二三週間ばかり田舎へ行つたらどうだらう。バアクシャイアはどうだね。」

モオドは急に顔を振り擧げて、濡れて光つた眼で夫を見詰めた。

「まあ、あなた、あたしを追ひ出すつもりですよ。」
と、あけすけに訊き返した。

「そんな事があるもんか。おれは唯、お前に一番いゝやうに、と思つただけだよ。お前を見てゐると、氣の毒になる

んだ——ほんとだ、氣の毒に——」

「まあ、あなたから、氣の毒がられたりなんぞしたくはありませんわ、打つちやつて置いて下さい……」

かう言つてモオドは、又身を顛はせながら激しく泣く。莫迦のやうに泣く。

アランは妻を膝の上へ抱き寄せた。宥めようとして頻りに愛撫しながら、優しく色々と言つた。最後には、

「今夜行くよ、ブロンクスへ行くよ。」
と言つて、これでもう何も彼も片附いたといふやうな調子であつた。

モオドは一杯濡れた顔を拭いた。

「えゝ。でも、もし八時半より遅れていらしつたら、離婚して頂きますよ。」

かう言つた時のモオドは、ひどく眞赤な顔であつた。

「あたし、時々そんな事を考へたのよ——それは、あなた、可笑しかつたら笑つて頂戴、でも、あんな事つて、自分の妻といふものを、あんなにするつて事は無いわ。決して無いわ。」

モオドはアランに抱き付いて、熱しきつた頬を、夫の日に焦けた顔に押し付けて、かう囁いた。

「あゝ、マック、可愛いあたしの……まあ可愛い方。」
 モオドは眼を輝かせながら、三十二階の建物を昇降機で一息に降りた。もうすつかり好い氣持で、心も晴れ々としてはゐるが、何か少し恥かしくなつて來た。思ひ出せば、あの時アランは狼狽した。苦しうな眼の色だつた。途方に暮れた様子であつた。然し内々は、一體あゝいふ仕事が如何に大事なものとふ事に、あたしがまるで無理解なのに、呆れてゐるに相違ない。

「まあ、あたし、なんて莫迦な眞似をしたんでせう。」
 とモオドは考へた。——「あんな詰らない眞似をしたんだもの。マックはきつと、あたしの事を、勇氣も辛抱も無く、夫の仕事に理解も無い、下らない女だと思つてゐるに違ひないわ。——それにまあ、どうだらう、あたし、あんな嘘を言つたりして、離婚の事を度々考へてゐたなんて、まるで嘘の事を言つたりして。」これは今になつて、始めて氣が付いたのである。あの時は嘘とも思はず、喋りまくつたものである。

「まつたく、莫迦な事をしたものね、莫迦さ加減は、まるで鷺鳥だわ——本物の鷺鳥だわ。」

自動車に乗る時、モオドはかう口の中で言つた。それか

ら小聲で笑つた。莫迦らしい眞似をしたものだといふ恥かしい氣持を、その笑ひ聲で吹き飛ばさうとしたのである。アランはリオンに命じた。八時十五分前になつたら事務室の外へおれを抛り出して呉れ。きつちりその時間に、その通りになつた。八時數分前には、アランは大急ぎで或る店に飛び込んで、エディスへの土産をどつさり、モオドへのを幾つか、買ひ込んだけれど、別にあれこれと選り好みはしなかつた。かういふ物にかけては、さつぱり見當の付かないアランであつた。

「モオドの言ふ事に無理は無い。」とアランが考へてゐる時、アランの自動車は、六哩も長い眞直なレキシントン並木街を突進した。眞剣になつてアランは、今後どういふ遣り方をして、自分の家庭ともつと親しんで行かうかと、一生懸命考へた。けれどもいくら考へても、考へは付かなかつた。實際のところ、仕事の方は日一日と殖えるばかりで、減る見込は全然無い。「どうしたら宜からう。」と考へた。「シュロセルを誰かと替へたいものだ、あの男は少し依頼心が多過ぎる。」

その時思ひ出した。急用の手紙を二三通、ポケットに入れて來てある。ざつと讀み返して署名した。ハアレム川まで

來ると、それが済んだ。車を停めさせて、手紙を投函させた。八時半までにはまだ十分間ある。

「ポストン道路を通れ、ンディ、大急ぎだ。然し人を轢いちゃ困るぞ。」

そこでアンディはポストン道路を猛烈な勢ひで走らせた。通行人はよろけた。馬に乗つてゐた男は、ギャロップで車を追ひかけた。アランは向ひ側の座席へ足を載せて、葉巻を一本點けた。それから疲れ切つた眼を瞑る。殆んどもう少しで眠る所で、車がぐつと停つた。家中はすつかり明りが點いて、お祭りのやうである。

モオドが階段を駆け降りて來る。まるで小娘の足取りだ。いきなりアランの頸を抱く。まだ自動車まで來ない中、まだ前庭を走つて來る途中で、大きな聲でかう言ふ。

「ねえ、あたし、莫迦よ、莫迦よ。」

運轉手が聞いてゐるけれど、モオドは平氣でどしどし言ふ。

あんな莫迦はしたけれど、もう必ず辛抱して、これから決して泣言は言はないといふ。

「ねえ、きつとよ、あたし、本當よ。」

六

モオドはさう言つた言葉を反古にはしてゐない。けれども樂なことではなかつた。

アランが日曜に來なくなつても、或は來ても澤山仕事を持つて來て、殆んど一分とモオドとは話をしない時でも、モオドは決して泣言を言はなかつた。夫の仕事が超人的の事業である、といふことは、モオドにもよく分つてゐた。これが他の人間なら、精も根も盡き果て、しまふに違ひない、さういふ大事業をしてゐる夫であるから、妻としてはそれ以上の負擔を夫に負はせない心遣ひが必要である。それ所では済まされぬ。時たまの休息時間は、出来るだけ素晴らしい慰めを、夫に與へて遣らなければいけない。力めてさうしようとモオドは思つてゐた。

だからモオドは、夫が來てくれさへすれば、それでも満足して快活な様子を見せる。毎日々々、夫の事ばかり考へて、無茶苦茶に悲しく暮してゐるが、そんな事は氣振りにも見せない。ところで、不思議な事には——夫のアランの方でも、何とも訊ねないのである。それといふのは、この男は、妻がさぞ苦しいだらうなぞといふ事が、てんで頭

に無いからである。

夏が来た。秋になつた。ブロンクス公園の木の葉が黄色くなつた。やがてモオドの家の前の木の梢から、風も無いのに、幾枚も葉が塊つて落ちる。

アランがモオドに、どうだ、トネル都市に引越して住む気はないかと言ふ。モオドは呆れて驚いたが、その様子をうまく取繕つて隠した。アランの言ふのは、毎週二三次回は其處に用があつて行くし、今度からは日曜の午前は面會時間として、技師でも労働者でも、誰でも希望や心配事を一々聞いて遣るやうにしたいといふ。

「あつちへ移るのも、あなた次第よ。」

「おれはさうなつたら一番いゝんだよ。事務所をトネル都市に移したいと思つてゐた所だから、さうなれば勿論、直ぐさうする。たゞ心配なのはね、お前がちつと淋しいんぢやないか——」

モオドは微笑しながら答へた。

「でもねえ、ブロンクスよりもましでせう。」

引越しは新年早々といふ事になつた。その準備の最中、モオドは時々手を休めて考へるのである。「まあ、あんなセメントの沙漠へ行つて、何をしたらいいだらう。」

何か始めなければいけない。何か一生懸命にして、詰らない事を考へたり、空想したりする暇を作らないことだ。到頭素晴らしい事を考へ付いた。そしてその考へを實現するやうに努力し始めた。その考へはモオドを元氣付けた。モオドは機嫌がぐつと好くなり、モオドの微笑には一々何か秘密な影が付いて来た。そこでさすが無頓着のアランも妙だなと感付いたものである。

最初の中こそモオドは、しきりにアランが聞きたがるのを、いゝ加減にあしらつて獨り悦に入つてゐたけれどやがて到頭、秘密を自分だけに藏つて置く事が出来なくなつた。實はかうなのよ。何かして見たいのよ、何かちやんとした事を、立派な仕事を。決して遊び事ぢやないものを、と思つてゐる中、ひよいと思ひ付いたのは、トネル都市の病院で働く事。「笑つちやいやよ、マック。」

あたし、眞面目なんですもの。もう勉強も始めてゐるわ。ワッセルマン博士の小兒科臨床學を聴講してゐますのよ。といふ話である。

アランはぢつと考へ込んだ。

けれども、どうしても信じ切れなかつて、かう訊いた。「本當にもう始めてゐるのかい。」

「えゝ、さうよ、もう四週間も前からよ。來年になつてトネル都市へ行けば、あたし、ちやんと仕事をするのよ。仕事でも無かつた日には、とても堪らないんですもの。」

かう言はれて、アランは全く度膽を抜かれて、大眞面目な顔で考へ込んでしまつた。面喰つて眼瞼ばかりして、急には言葉も出ない有様である。モオドの方は一人で有頂天になつてゐる。やがて、アランは二三度頭をうなづいて見せた。「何かお前が働かうといふなら、それも好いだらう」と、アランは考へ、勿體ぶつて言つた。「だが何も、病院に限つた譯のもんぢや無からうと思ふが——」

と言ひかけて、いきなりぶつと噴き出した。このモオドが看護婦の白い服を着るんだ、と想像したからである。

「ところで、月給はうんと高いのかね。」

ところが、モオドは少しむつとしてゐる。あんまりひどく笑はれたからである。

アランはモオドの計畫を一時の氣まぐれの遊び事と思つてゐる。長続きはしないだらうと見てゐる。働かずにあられないモオドの氣持が全然分らないのである。だからモオドは妻の氣持を理解しようとする、ほんの僅かの努力もしてくれない夫が怨めしかつた。

「昔はこんな事も平氣でゐたわ。それがこんな氣になるのでは、あたし、少し變つて来たのか知ら。」と、翌日になつてから考へた。それから幾日も夜晝苦しんだが、その苦しみの原因は、唯自分の幸福の影が薄れてしまつたといふだけで、決して不幸が迫つたといふ譯ではなかつたのである。兎に角この苦しみの結果、モオドは次のやうな事が分り掛けて来た。妻といふものは、精神的な愛情や崇拜ばかりで満足するものではないといふ事が。

日が暮れると、モオドは一人閉ぢ籠つた。外はさつと氣持よく降る雨である。モオドは日記帳に書入れを始める。

小さいエディスの言葉を幾つか書き留めた。その言葉は殘忍性の萌芽と、子供らしい利己心をあらはしてゐるものであつた。こんなに可愛く思つてゐる娘でも、やはりこんな言葉を言ふのであつた。それをモオドは書き留めたが、又、どの子にも見える色々な性質も、忘れずに書いて置いた。それからモオドの考へをどしどし押し廣めて、こんな事も書いた。

「本當に自分を捨てゝ人に盡すといふ事は、母となり妻となる女ばかりの出来ることのやうに思はれます。男や子供にはさういふ性質が缺けてゐます。でも男は、子供よりも

ましな點が一つあります、それは、小さい、外面的な、言はず詰らない事柄にかけては、自分を捨て、人に盡すことが出来るものであります。けれども一番深い感動や一番大切な希望などは、どうしても諦めません。可愛く思ふ者があつても、その可愛い者がどうならうと一向にお構ひ無しであります。マックは男であります。さうして他の男の人達と同様、矢張り利己主義であります。わたしはマックをそれはそれは愛して居りますけれど、この勝手の強いといふ點を非難する事だけは、わたしはしないでは居られません。」

エデイスの眠つたのを確かめてから、肩掛を羽織つてゼラシダに出た。籐椅子に腰掛けて、雨の音に耳を澄ました。西南の空は一面にぼつと明るい紐育である。

やがて寢室に歸らうとした時、ふと、机の上に開かれた儘の日記帳が眼に這入つた。もう一度ざつと讀み返して見た。すると、つい先程は心の何處かの隅に、自分の知識に一寸得意になつたやうな氣持があつたけれども、今はモオドは首を振つてその下にかう書いた。

「一時間後、雨の音をおつと聽いてから。マックをあんなに非難した事は、わたしがいけなかつたのではないか知ら、わたしこそ、勝手の強い女ではないかしら。マックがわたしに

何か要求したことがあるか知ら。わたしこそ、マックに何か犠牲にしようと、せがんだのではないか知ら。さつき言つた事はみんな、莫迦なわたしの謔言でした。今夜はもう、わたしはどう言つたらよいか分らなくなりました。雨の音は好いものです。平和と眠りを與へてくれます。——マックの妻、莫迦なモオド。」

第三編

さて、この間にも五ヶ所の各工事中心地では、マック・アランの掘鑿機が眞暗闇の地底をもう何哩と掘り下げてしまつた。トンネルの入口は、まるで幽冥界へ行く恐るべき二つの門のやうに見える。

しかもこの門からは晝夜の別なく間斷なしに岩石を満載した長い貨物列車が、急行列車の勢ひで飛出して来る。又、晝夜の別なく間斷なしに同じやうな猛烈な勢ひで門の中へ飛んで行くのは、労働者を載せた列車と、材料を載せた列車である。このトンネルの二重坑道はまるで傷口である。眞黒に爛れた傷口である。一方では絶えず膿汁を噴き出しながら、他方に新鮮な血液を呑み込んでゐるのである。その中には、深い地底には、何千人が心を揃へて、一人の人間のやうに、必死になつてゐる。

アランの仕事は世間一般の仕事のやうな生温いものではない。無茶苦茶である、狂亂である。一秒を争ふ大變な戦争

である。アランは岩石を衝破つて突走らうといふのである。もしアランが、従來のやうな労働制度を採つたら、機械も同じ、掘鑿機の質も同じとして、この工事の完成には九十年を要したであらう。ところがアランは一日八時間制ではなく、二十四時間制を勵行した。日曜でも祭日でも、仕事を續ける。「掘進坑路」は一日六回交代で仕事をする。そして愚圖々々遣れば八時間かゝる仕事を、四時間で遣つてしまへと命令する。斯くしてアランは六倍の能率を擧げ得たのである。

掘鑿機の動いてゐる處が、即ち掘進坑路であるが、この場所はトンネルで働く連中の中で、「地獄」と呼ばれてゐた。とてもひどい騒々しい場所で、労働者は皆耳に綿を詰めてゐたが、それでも皆多少とも聾になつてしまふ。アラン式掘鑿機は海底の岩山に穴を明ける。鋭い響を發する。岩山は悲鳴を擧げる、まるで何千といふ子供が一遍に殺されかかつてゐるやうな騒ぎだ。續いて今度は、無數の氣違ひが笑ひ出したやうな音を立てたかと思ふと、熱病患者の病院全體が一度に嚙語を言ひ出したやうである。岩石の大瀑布の音である。煮え沸るやうに熱い地下道には、五哩の長さに互つて、恐ろしい、今迄聞いたこともない轟音とその干渉

音が鳴り轟いてゐたから、實際に岩山が崩れ落ちたとしても、誰一人それに気が付かなかつたであらう。凄じい雑音のため、指揮者の命令も合圖の音も、すつかり聞えなくなつて、命令は一切、光學的方法によつて傳へられることになつた。途方もなく大きな探照燈が、ぎら／＼した光の圓錐形を放射する。その光の色は或は白く、或は赤く、あたりの混沌たる状態を照らし出す。汗だらけの人間の塊りだ。處々にはちやんと人間の格好が見える。石が崩れ落ちて來ると、その石が人間の格好に似てゐる。反射鏡の投げる圓錐形の中に、まるで厚い蒸氣の雲のやうにもく／＼動いてゐるのは塵埃である。そしてこの、人間の身體が轉がり、石が轉がつてゐる混沌の真中には、塵まみれの灰色の怪物が、のた打ち廻つてゐる。まるで有史以前の怪物が泥の中に轉がつて出て來たやうな怪物である。これがアラン式掘鑿機である。

極く微細な點に至る迄、悉くアランの苦心に成る。丁度何の事はない、鐵甲を鍍つた巨大な鳥賊である。内臓は電纜と電氣モーターで、頭には素裸の人間の身體が幾つもたかつて、尾には電線と電纜を曳き摺つてゐる。急行機關車二臺に匹敵する勢ひで前へ／＼這ふ。觸角や、觸鬚や、ぎざ

ぎざの唇で岩山を探る。顎の間からは煌々たる光を吐いてゐる。原始獸の憤怒に身を顛はせ、破壊の樂しさに狂喜しながら、咆哮を擧げて、岩の中へ頭を突込む。やがて、觸角とぎざ／＼の唇を抜いて、その拵へた穴の中へ何か吐く。鳥賊が墨を吐く。觸鬚と唇は穴を穿つ大事な役目をするもので、尖はすつかりアラニット鋼で、中はがらんどろになつてゐて絶えず水で冷される。このがらんどろから穴の中へ吐き出すものは、爆藥である。ところで、實際の鳥賊と同じやうに、この怪物も急に身體の色を變へる。先づ、顎の中から眞赤な血が噴出する。背中の皺が不氣味に光る。その眞赤な煙に包まれながら、本當の鳥賊のやうに後退するが、實に物凄い。それからやがてまた前進が始まる。進んだり、退いたり、夜も晝も、何年間でも、少しも休まぬ。

怪物が體色を變へて後退りをする時、一隊の人間が岩壁に飛び付いて、穿たれた岩壁の穴にぶらさがつてゐる何本かの鐵の綱を、必死になつて一纏めにする。それが濟むと、まるで恐怖に追ひまくられるやうに、この一隊は逃げ歸つて來る。俄かに震動し、鳴動し、轟く。岩の破片は、遁げ歸る連中の後から、どつと追ひかけて來る。細かい破片はもつと先まで飛んで來て、掘鑿機の鐵甲にがら／＼當る。

埃りの雲は、怪物の眞赤な火の息に向つて、もく／＼押寄せ。忽ち、怪物の姿が再び眩い白光に照し出されると、渦巻く埃りの雲の中へ、半裸體の連中が躍り込んで、まだ煙つてゐるがらくたの山を駆け登つて行く。

飽く事知らず前進するこの怪物は、恐ろしい格好の道具を突出してゐる。大きな釘抜きだ、龍頭のやうな嘴だ。鋼鐵の下顎が前へ出たり、上方へ行つたりして、物凄い顔の、汗でてらく／＼光つてゐる何百の人間が怪物の口の中へ抛り込む。石でも岩でも破片でも、すつかりばく／＼と食つてしまふ。そしてこの恐ろしい怪物の顎は噛み碎き、呑み込みはじめ。地面まで垂れてゐる腹もぐい／＼呑み込んで、肛門の所からは、岩と石が後から後から、果てしもなく流れ出て來る。

上の方を見ると、崩れ落ちる岩石の間に、汗水垂らした惡鬼のやうな人間が、大勢よろ／＼してゐる。鎖を引張つてゐる。叫ぶ。咆える。がらくたの山は、この連中の足の下から、見る／＼中に減つて行く。融けるやうに低くなつて行く。さあ急げ、岩石は早くどけてしまはなければならぬ。岩石は怪獸の糞だ。

一方では又、泥だらけの一團の人間が、怪物の口の下を

潜つて、大鑿を揮ひ、穴を穿ち、掻き出してゐる。怪物の爲めに地均しをするのである。荒い呼吸を吐きながら、枕木やレールを運ぶ連中もある。枕木は横たへられ、レールは螺旋釘で止められる。すると怪物は前進するのである。

怪物の泥まみれの身體には、脇腹にも、腹にも、もつくり高い背中にも、ちつぽけな人間がぶら下がつてゐる。この連中は、坑道の天井でも、兩壁でも、底でも、突出して來る岩塊にでも、穴を明ける連中だ。必要があれば直ぐその穴へ爆發藥を詰めて、爆破する。

掘鑿機の頭の方では、こんな無茶苦茶な活動が演じられてゐるが、尻尾の方でもこれに劣らぬ無茶苦茶な活動が演じられる。尻尾から果てしなく流れ出る岩石を處分するのである。ぎり／＼三十分の間に片附けてしまはないと、この怪物は後退が出来ない。怪物は二百メートルづゝ後退して、爆破のすつかり収まる迄待つて控へてゐるのである。

それから、始終行つたり來たりしてゐる鐵格子の臺が、大きな岩を載せて怪物の腹の下に近づくと、直様それへ荒くれ男が一齊に跳び付いて、人間の力では持上げることが出来ない大きな岩塊にぶら下がる。この鐵格子の臺は、掘鑿機の後方十歩の所まで行くが、これに乗つてゐる連中は、

其處まで行く間に、大岩塊をぐる／＼巻きにしてゐる何本もの鎖を、怪物の背中から幾つも出てゐる起重機に引掛つけてしまふ。すると起重機は岩塊を持ち上げてしまふ。

ところで、始終行つたり来たりしてゐる例の臺は、さして大きくない石や岩の破片だと、鐵の低い貨車の傷だらけなやつへ、それをがら／＼ざら／＼投げ込む。この貨車は、炭坑に使ふ箱車とそっくりで、それが長い行列を作つて、半圓形の連絡レールによつて左から右へ廻つて来る。石や岩をすつかり積み込める程の數で、鐵格子の臺の向うにずらりと並んでゐる。この澤山の貨車を引くのは、蓄電池で動く坑道用電氣機關車である。眞蒼になつて、唇に泥の泡を吹いてゐる人間の塊りが、この臺や箱車の周圍によろけながら、掘り返し、轉がし、掬ひ上げ、嘔鳴り合ふ。その上々容赦なく探照燈の光が照らし付ける。嵐のやうに、通風機から吹き付けて来る。

掘鑿機の附近では慘たらしい闘闘が行はれてゐる。毎日負傷者が續出する。又屢々死人がある。

四時間に互る狂亂が終ると、皆に交代する。ぐた／＼に疲れて、自分の汗でうだつてゐる。心臓が弱つて、顔色は眞蒼で、まるで人心地は無い。貨車の中の濡れた岩の上に

ばつたり倒れる。その儘直ぐ死んだやうに眠ると、地上に來るまでは眼が醒めないのである。労働者達は歌を歌ふ、その歌は、いづれこの連中の一人が作つたものである。かういふ文句で始まる。

トンネルの奥地獄では
いつも神鳴り焦熱地獄
なんと兄弟、地獄の熱さ
一弗割増し一時間
一時間なら一弗増しよ
マックから出るおいらの汗代
……………

「地獄」を逃げ出してしまつた労働者の數は何百人とも知れない。又、一寸働くと、直ぐ全然の癡人になつてしまつた者も大勢あつた。けれども、後から／＼と新手はやつて來た。

二

小型の坑道機關車が、岩や石塊を積んだ箱車を引張つて、

トンネルの中を何キロメートルも、ごと／＼行くと、鐵道貨車の待つてゐる場所に着く。箱車は片端から起重機で吊上げられて空つぽにされる。貨車が満載されると、列車は出發する——一時間十二三回も列車が出る——同時に入れ違ひに、材料と人間を満載した新車の貨物列車が代りに入つて來る

亞米利加側の地下道は第二年の終り頃、九十五キロメートル進んでゐた。そしてこの長い全距離に互つて、死物狂ひの労働が行はれてゐる。アランは絶えず鞭撻して、最大の緊張を持續させてゐる。毎日、毎時、最大の緊張を續けさせる。命令されただけの能率を擧げ得ない技師はどし／＼罷めて貰ふ。息が續かなくなつた労働者は、どし／＼解雇する

鐵の箱車がまだがら／＼と走り廻り、爆破されたばかりの地下道に、土砂や石の破片が一杯で、百雷のやうな音響さへまだ歇まない中に、もう一方では反射鏡の光に照らされて活動してゐる一團がある。梁材や支柱や板などを引摺つて行つて、崩れ落ちる岩石に地下道が損じられないやうにする。又、電線を取付けたり、水や空氣の導管を一時的に引いたりしてゐる工夫連中もある。

貨物列車が來ると、處々で人夫團が飛びかゝる。材料を車から下して必要の場所へ配給するのだ。材料とは梁材、板、鋸、鐵の支柱、螺旋、管、電線、大鑿、爆發藥筒、鎖、軌條、枕木などである。

更に又、三百メートルの間隔を置いて、支柱と支柱の間に活躍してゐる薄汚ない格好をした一團がある。手に／＼鑿を揮つて、人間の背丈ぐらゐの凹みを岩壁から抉り取つてゐる。轟々と貨車が來れば、直ぐ支柱の間に避ける。間もなくその凹みが深くなると、もう貨車が來ても避ける必要が無くなる。更に五六日経つと、岩壁はがらんだやうの音がするやうになり、やがて崩れ落ちて穴が明き、出て見ると平行地下道で、この平行地下道にも列車が同様に走つてゐる。かうして一つ横穴が出來ると、更に三百メートルだけ進んで、又新しい横穴を穿ち始める。

この横穴は通風の爲めであるが、勿論、その他にも色々な役に立つ。

更にこの一團を追ひ蒐めて、後へ／＼と立廻る別の一隊がある。その任務は、この狭い連絡路をセメントで綺麗に壁張りする仕事である。年來り、年去つても、相變らず同じ仕事をしてゐる。けれども二十番目毎の横穴はその儘に

手を付けないで置く。進め、前進だ。

一つの列車が轟々と走つて来て、第二十番目の横穴の前で停まる。眞黒に汚れた連中が貨車から跳び降りて、鑿、鶴嘴、鐵の支柱、セメント袋、レエル、枕木等の材料を素早く横穴へ擔ぎ込む。その間にも、もう後から来た列車が何列車か停車して、待ち切れず、盛んに笛を鳴らして催促する。急げ、急げ。材料の運搬が終ると、この列車は出る。後からの列車も通つて行く。黒光りの連中は、すつかり横穴に入つてしまふ。鑿が鋭く叫ぶ。爆ぜる音がする。岩が裂ける。地下道はどん／＼擴がる。この地下道はトンネルの本道に斜めに掘られて、天井も壁も底も、鐵とコンクリートである。やがて線路が一本此處を通る。待避線である。かういふ待避線がどし／＼出來て、非常に便利となつた。即ち、絶えず往復してゐる材料列車と岩石列車とを、六キロメートル目の所で、一方の地下道から他の地下道へ、都合の好いやうに移すことが出来るやうになつた。

一口に言へば何でも無い、この待避線を作るといふ簡単な事によつて、工事設備一切を、六キロメートルの距離ごとに區切つて、進捗させるやうになつた。

大梁材と角柱と支柱と横木とで出來た六キロメートルの長い森は、その六キロメートルが一齊に變つて、鐵骨と鐵筋で組立てた六キロメートルの森となつた。

地獄があれば、煉獄もある。だから、トンネル工事に「地獄人」があつて、又「煉獄人」もあつた。即ち右に述べた工事の現場は「煉獄」と呼ばれてゐたのである。

この工事を始める事になると、この區域に列車の通行は禁じられてしまつて、何臺とも知れない貨車がぞろ／＼ごろ／＼入つて来る。貨車には人間が鈴生りである。忽ち色色な場所、一齊に戦闘が開始される。砲撃のやうな音、合圖の號笛、探照燈の稲妻。坑道が爆破されて、必要な大きさまで縦横に擴げられるのである。装甲戰艦に砲彈の命中したやうな音である。地下道の底にある鐵の支柱もレエルもが／＼／＼鳴る。地下道内は、朱を塗つた鐵の洪水だ。鐵骨と鐵板。皆ペンシルヴァニア、オハイオ、オクラハマ、ケンタッキー等各地の工場で鍛へ上げられたものである。使ひ古しのレエルは引き剝がされ、ダイナマイトやメリナイトが坑内一面を引裂いてしまひ、鶴嘴とシャブルがびゅうびゅう動く。危ねえぞ。咆える聲と喘ぐ音、歪んだ唇、膨れ上つた筋肉、びく／＼痙攣する頰頰の青筋は、蝮の蛇るやう

だ。身體と身體がぶつかり合ふ。この連中は底板を引摺つて來る。底板はT字形を二つ並べた格好のがつしりした鐵板で、トンネル列車のレエルを支へるものであるが、トンネル鐵道は單軌式であるから、T二つで好い譯である。さて又技師連中は、測量の機械器具を持つて、地面に腹這ふ。全身の神經を緊張させて働いて、半裸體の身體は汗が幾條も流れて縞になつてゐる。長さ四メートル、足の高さ八十センチ、底板は兩端を一寸上向きに曲げられると、コンクリートの中につたり浸けられる。船の龍骨が作られるやうな具合で、次々に底板が並べられ、それを片端から、コンクリートの洪水が沈めて行く。枕木が置かれる。それから、一本の槩を曳く蟻の群のやうに、大勢の男が息を切らし、膝を曲げて曳いて來るのは、三十メートルのがつしりしたレエルで、これが枕木の上に据え付けられる。その後から、重い鐵骨を、這ふやうにして曳いて來る一團がある。この鐵骨で、トンネル全體へ鐵の枠を張り廻さうといふのである。大體楕圓形に組立てられてあるが、底の方は少し平らである。鐵骨は四つの部分から成つてゐる。底が一本、兩側が二本（これは壁柱の部分だ）、それから天井が一本、圓天井である。どれもこれも一吋の太さの鐵で作られ、

がつしりした架構装置で組合されてゐる。綴釘機ががらがらと動き出すと、坑道全體が鳴動する。次々と鐵骨が箱め込まれて行く。朱塗りの鐵格子が、地下道の周圍を締め付けて行くかと思ふと、もう直ぐその後から左官が鐵骨の枠を攀ち登り始める。トンネルの内側全體をコンクリートで塗り潰す。一メートルも厚い鐵筋コンクリートの鐵を着せる。如何なる壓力にもびくともしないやうにする。

がつしりしたレエルの兩側には正しい間隔を置いて、大小の管が何本も置かれ、鍛接されたり、螺旋釘で緊めつけられたりする。電話線、電信線、電力線、途方もなく太い水道管と通風管。空氣はトンネルの外にある機械によつて一日中間断なく地下道内へ押し込まれる。それから、壓搾空氣による超特急郵便の特殊な管がある。かういふ色々な管は皆、砂と砂利で掩はれて、その砂利の上に敷かれる枕木とレエルとは、日常の工事の材料を積んだ貨物列車を走らせるものであるが、勿論、材料や岩塊を積んだ列車が急行しても大丈夫なだけの、しつかりした線路である。

つい今の今、一番最後の鐵骨が綴釘を打たれたばかりなのに、もうその六キロメートルの區域には、忽ち線路が出來てしまふ。すると列車がどし／＼入つて來て、どし／＼

通過して行く。けれども一方にはまだ左官の連中が、鐵骨の枠にぶら下つて壁塗りをしてゐるのである。

かくして、あの掘鑿機が鳴り轟いてゐる掘進坑路から、三十キロメートル迄の箇所はまだであつたが、それからこつちは全部、地下道の鐵の骨組が完成してしまつた。

三

かうしてどしどし出来て行くが、これだけでは濟まない。豫め考へて置くべきことが色々澤山ある。亞米利加からのトンネルと、ベルムダ群島から片麻岩を突破して来るトンネルとびつたり出會ふことが出来た時、その時始めて地下道全距離が役に立つやうになるのである。

アランの計畫は極く細かい事まで、すつかり幾年前から考へてあつた。

二十キロメートル毎に、岩山を切り開いて、小さい停車場を作り、線路番を配置する。六十キロメートル毎には、中ぐらゐの停車場を、二百四十キロメートル毎には大停車場を作ることにした。大中小何れの停車場も、豫備蓄電槽、機械、食料品を置く。大中の停車場には、別して變壓機、高壓線の機械、冷却装置、通風装置の機械を置くことにする。

更に又、列車の進む路を變へる爲めに、横に抜ける地下道も必要である。

かういふ種々の仕事に對して、それ／＼目的を異にした労働者團が編成され、海底の岩山に食つてかゝつて、素晴らしく多量の岩石を切り取つた。

トンネルの口は夜も晝も岩石を吐き出した。大活動の眞最中の火山のやうであつた。ぱくつと明いたトンネルの口から何か一杯積んだ列車が續々猛烈な勢ひで飛び出して來た。胸がすつとするやうな輕妙さで、坂を昇つて來て、忽ち上に昇り切つて、びたりと止まる。岩石やがらくたと見えたるものが、急に、貨車の上でむく／＼動いて、眞黒々に汚れた、誰とも見分けのつかない人間が、列車から飛び降りる。さて本當の岩石を積んだ列車は、幾度も待避線を通つて來るが、此處からもつと先まで行く。大迂廻しながらマック・シテイ(トンネル都市はニュー・ジャージーで俗にから言はれてゐる)を通り抜けて、やがて海岸にある無数の線路の一つに入れられて、其處で岩石をすつかり下ろすのである。この海岸にゐる連中は、海岸の終點へ來ると、皆景氣好く騒いでゐる。所謂「氣樂な仕事」をしてゐるからである。

マック・アランが今日迄に掘出した岩石は、延面積二百平方キロメートルあつて、紐育からバッファロ迄の石垣を作るに十分である。アランは世界一の石坑王となつた譯であるが、しかも、シャブル一杯の破片でも無駄にしない。廣大な地面の地均らしに使つてゐる。段々に侵蝕されてきた海岸を、これによつて平らにし、淺瀬々々を幾キロメートルかの遠方まで埋め立てゝしまつた。それから、深くなつた海の中へ、昔の沖合へ、どし／＼岩石を沈める。毎日何千車といふ岩石をぶち込む。その中に段々、巨大な突堤が海に突き出すやうになつた。これがアランの港の波止場である。アランの計畫はかういふものを幾つも作る事であるが、しかもそのアランは、未來の都市云々といふ大法螺を吹く男だと今迄は思はれてゐたのである。又此處から二哩の地點では、アランの部下の技師連が世界の何處にも無い最大のも、最も均齊のとれた海水浴場を建設してゐる。素晴しく大きい海水浴ホテルを建てることになつてゐる。

けれどもマック・シテイは一面の切石ばかりの廣大な原で一木一草も生えてゐない。一匹の獸も一羽の鳥もゐない。日光に照らされるとぎら／＼光つて、眼が痛くなる位である。ところが、この荒野には、ずつと遠くまで鐵道線路が敷

設された。兩側へ扇形に延びてゐる線路は鐵の粉が磁石の極の所で作る磁力線に似てゐる。何方を見ても汽車が走つてゐる。電氣機關車もあれば蒸氣機關車もある。何方を見ても機關車が濃い煙を立てたり、咆えたり、警鐘を鳴らしたり、號笛を吹いたり、警鈴を鳴らしたりする。沖を見れば、アランの計畫では臨時の港ながら、煙を立てる汽船や、高い帆を張つた帆船が何隻でも群がつかつてゐる。鐵、木材、セメント、穀類、家畜、あらゆる種類の食料品などを、市俄古、モントリオオル、ポオトランド、ニューポオト、チャアルストン、サワナ、ニューオルレアンス、ガルズトン等の各地から運んで來るのである。北東には煙が厚く壁のやうになつてゐて、先は全く見えない。材料列車の發着驛なのであるが、たゞ煙ばかり見える。

工事開始當時のバラックはすつかり無くなつてしまつた。線路の脇の高臺には硝子屋根が幾つも光つてゐる。機械工場と發電所だ。それに隣接するのは、塔のやうに高い事務所ビルディングだ。この石の原の中央に聳える二十階建のホテルは、「大西洋トンネル」といふ名である。眞白な、新築したばかりのこのホテルは、技師連中、大商會の代理人や、代表者などの宿に充てられるが、又日曜毎に紐育か

ら押掛けて来る何千人の見物もこれを利用する。

これと相對して、ワナメエカア會社が間に合せに建てた十二階建の倉庫がある。廣い通りも完全に出来上つて、眞直に荒野を貫いて走る。線路の上には、幾つも橋が架かつてゐる。この石の原の周圍には、打つて變つて住み心地の好さうな労働者町が出来てゐて、學校、教會、運動場は勿論、酒場もあれば飲み屋もある。かういふ店の經營者は、拳闘選手上りの男や、自動車競争の選手だつた男などである。この町からずつと離れて、低い松林の中にたつた一つ、置き忘れられたやうに、死んだやうに、一つの建物があつた。猶太人の集會堂みたいである。火葬場である。長いがらんとした廊下が幾つかある。一つの廊下にはもう骨甕が並んでゐる。その甕には英國人、佛蘭西人、露西亞人、獨逸人、伊太利人、支那人などの名前があつて、その名前の下にある文句は皆大抵同じである。大西洋トンネル工事に於て「爆破工事中遭難す——爆破の際、埋没さる——列車に轢殺さる」などがあるが、大抵似寄つてゐる事は、丁度戦死者の文句が似てゐるのと同様である。

海の直ぐ傍には、白い新しい病院が幾棟も立つてゐる。最新式の設計である。少し離れてその下に、新築の別荘が

ある。その庭もまだ作つてから間が無い様子である。モオドの住居であつた。

四

モオドは、華奢な手に出来るだけ澤山の仕事を引受けてしまつた。

第一に、マック・シテイの婦人子供療養所の所長だつたし、それから、醫師と女醫の組織する委員會の一人となつた。これは、労働者住宅の衛生問題やら、産婦及び乳兒の看護、養育などを目的とするものである。その他、モオドが主になつて經營してゐたものに、若い娘達の爲めの手藝及び家政學校、幼稚園、細君連と娘達だけの俱樂部等があつた。この俱樂部では、毎週金曜日に、一寸した講演や、演奏會などが行はれた。モオドは仲々忙しい身體であつた。アランと同様、「事務所」を持つてゐる。そして女祕書と、タイプストを一人づつ使つてゐる。かうした一切の事業にモオドの應援をする者は、大勢の看護婦、及び女教師——とは實は紐育上流社會の令嬢達——であつた。

モオドは誰に對しても出しゃばらない。遠慮深く、深切で快活で、他人の運命にはいつも心から同情したから、誰

もモオドを好いたものであるし、又モオドを尊敬する者さへ大勢あつた。

モオドは衛生委員會の一員として、殆どあらゆる労働者の家庭に出入した。伊太利人町、波蘭人町、露西亞人町では、不潔物と毒蟲退治に全力を注いで、しかも立派な成績を擧げることが出来た。どの家も時々消毒劑を撒布し上から下まですつかり綺麗に掃き出すことを強制してやらせた。どの家も殆ど大部分がセメントで出来てゐるから、まるで水洗場のやうにどしどし洗へた。度々労働者の家庭を訪問したから、皆との間も親密になり、そしてモオドは機會さへあれば、力の及ぶ限り皆の者に助力と忠告を與へて遣つた。やがて、モオドの家政學校は満員となつた。料理と裁縫には、優秀な女教師を雇ひ入れた。かういふ風に自分の經營する事業に就いては、常に目を放さないで、その管理や監督を忘れなかつた。又モオドは、必要な學理的知識を吸収しようと思つて、實に澤山の參考書を、悉く讀破して見た。すると、あらゆる方面に互つて優秀な成績を擧げることは、自分には少し荷が勝ち過ぎてゐる、とつくづく悟つた。殊に、生來あまり組織的才能に恵まれてゐなかつたモオドであるから、尙更樂ではないのである。それはともか

く、どうやらかうやら仕事は續いた。モオドの事業に對して各新聞が讚辭を呈すると、モオドは大いに得意になつた。

けれどもモオドが最も力を注いだのは、婦人子供療養所であつた。

療養所の建物は、モオドの別荘の直ぐ傍である。庭を二つ通り抜ければいゝ。毎朝九時になると、必ず遣つて来て、一わたり見廻る。自分が世話をして人間一人々々の事を、皆一々よく心に掛けてゐたから、療養所の豫算が無くなつた場合には、自分の財布からお金を出すことも屢々であつた。モオドがとりわけ優しい心遣ひを與へたのは、委託された子供達であつた。

かうしてモオドは、仕事と、喜びと、結果とを持つた。人間と人生に對する交渉は、一層度繁くもなるし、一層實績を結ぶものともなつたが、モオドの眞意を打割つて云へば、この一切を引括めても尙、結婚生活の幸福と引替へにはならないといふのである。

アランと結婚して、二三年は全く幸福に暮した——けれどもその中に、トンネルが出て来て、アランをモオドの手から奪ひ去つてしまつた。勿論、アランはまだモオドを愛

してゐる。それは確かである。慇懃で、優しくしてくれる。それには違ひない。けれども、もう、以前のやうな事は無い——これは決して嘘や偽りでない。

工事開始の當時から比べると、この頃の方が夫の顔を見る機会が多い。アランは勿論紐育の事務所を其儘に持つてゐたのであるが、トンネル都市に仕事部屋を設けてからは、ちよい／＼間を明ける事はあつても何週間も續けてトンネル都市にゐるのであつた。だからこの點に就いてはモオドから何の苦情も出ない筈である。けれどもアランの人柄が變つて來た。結婚當時モオドをあれ程に驚かせ、悦ばせた、あのアランの無邪氣さや心からの快活などは、どし／＼消えて無くなつた。家庭の中でも、まるで、仕事や集會の時のやうな眞面目臭つた顔をしてゐる。勿論自分でも以前のやうな快活な上機嫌な態度を見せようと力めてはゐるが、どうしてもうまく行かない。ほんやりしてしまふ、事業の事はかり考へるからである。アランの眼から離れないのは、いつもたつた一つの事を考へる爲めに生ずる、全く放心した眼付である。顔付は瘦せて刺々しくなつてしまつた。夫の膝に抱かれて愛撫された時代は、もう過ぎてしまつた。勿論、今も來たり歸つたりする度に、接吻はしてくれる

し、ちつと眼を見詰めてくれるし、微笑しても見せるけれど——何處か昔と違つた夫である。さう思つたモオドの感じは、當つてゐた。それは次のやうな事があつたからである。不思議な事には、眼が廻るやうに忙しいけれど、一年中の「重大な日」を、悉く一日たりとも忘れなくなつた。エディスの誕生日とか、モオドの誕生日とか、結婚日とか、クリスマスとか、さういふ日を忘れない。その中にモオドは、或る日偶然に發見した夫の手帳には、さういふ日だけ赤い線が引いてある——これを見てモオドは仕方無しに苦笑を洩らした。夫は機械的にその日を忘れまいとする。温かい心から毎日それを思つてゐるのではない。

これでは結局、モオドの立場はお友達同志の立場と變りが無い。お友達達の御主人は、一日中工場なり銀行なり實驗室なりでせつせと働く一方、随分大事にしてくれて、レースや眞珠や毛皮で飾つてくれたり、時には劇場へ案内してくれたりするけれど、その御主人の心といふものは、仕事ばかりを考へるものだ、と聞いてゐる。世の中は大抵さうしたものである。けれども、モオドは、その大抵さうしたものが、堪らなく恐ろしいのである。いつその事、貧乏で、人には知られず、世の中から懸け離れてゐたい——そ

の代り何時までも愛され、何時までも優しくされてゐたい。これがモオドの願ひであつた。時には莫迦らしい願ひだと思つたが、矢張り捨て切れない願ひであつた。

モオドはよく、仕事で済んでから、編物をしながら色々の考へに耽つた。そんな時いつも思ひ出すのは、アランに結婚を申込みれた頃の事であつた。思ひ出の中に現はれるアランは、いつも若々しく率直だ。婦人との交際法を全然知らないものであるから、戀を打明けるのに何か獨創的な事を考へ付く筈が無い。花束、書物、音樂會と芝居の切符、一寸した素振り——極く平凡な事ばかりであつた。而もアランのそんな態度は皆、モオドには嬉しかつた。現在では尙更の事、嬉しく思ひ出される。最初はそんなアランであつたが、その中に思ひ掛けなく、急に態度を變へて、それから現在のアランに似た點が、どん／＼出て來た。その變り目ばかりである。或る晩の事、モオドは兎角返事を避けたのであつたが、アランはきつぱりした調子で、殆ど不作法とも言へる位の調子でかう言つた。「よく考へて見て下さい。明日の五時まで猶豫して上げますがね、それでもまだ決心が付かないでしたら、僕はもう決してこの事は申上げない事にします。左様なら。」翌日、きつちり五時に遣つて來た。

……この時の場面を……思ひ出すと、モオドはいつも微笑してしまふ。けれども又忘れる事の出来ないのは、アランがあゝ言つて歸つてしまつたその夜から、その翌日の五時までの間、來るか來ないかの心配で大變だつた事である。

トンネルが夫を奪つてしまつて、遠くの方へ連れて行けば行く程、モオドの方では、益々頑固に、益々しつこく昔の事ばかり思ふのであつた。しつこく思へば思ふ程、嬉しくもあれば辛くもあるのだが、始めの頃の二人の散歩や、二人の話や、それから又、新婚當時のちよい／＼した經驗、皆たはいも無いがしかも意味の深い經驗、かう言つたものが、思ひ出されてならなかつた。モオドはトンネルが憎くなつた。自分よりも強いトンネルだからである。昔こそは、夫が偉くなつて呉れるやうにと思つたが、そんな虚榮心みたいなものは、今はもうモオドの心中にはほんの少しも無くなつた。アランの名が五大陸に響かうが響くまいが、もうモオドにはどうでも善くなつた。夜になると、火事のやうなトンネル都市の反射が、モオドの部屋から見えないやうに見える。すると憎くつて憎くつて堪らなくなつて、窓の戸をすつかり締めて、その照り返しが見えないやうにする。口惜しさ嫉まじさに泣きたくなる。又實

際人知れず涙を流すモオドであつた。地下道の中へ突進する列車を見ると、モオドは首を振つた。まるで氣違ひ沙汰ね、トンネルなんて。でもアランに見れば、これ程分り切つた話はないと言ふんだわね。けれども、色々かういふ事はあつたけれど、やがて又優しいアランになつて歸つて来て貰ひたい、といふ望みを懸けて、モオドは、その望みゆゑに氣を取直すのであつた。いつかは、トンネルもアランを返してくれる。最初の列車が通ることになれば……

「でもそれは、まだずつと先の事なんだわ。」モオドは溜息をついた。辛抱しませう。辛抱しませう。差當つてモオドには、あゝいふ忙しい仕事があつた。可愛いエディスもあつた。もう仲々小まつちやくれて、大人みたいになつて、世の中といふものを物珍らしさうに、伶俐な眼付で眺めてゐる。又アランの遣つて来る事も一頃と比べれば、餘程多くなつた。それにホッピーが来てくれる。殆ど毎日モオドの家で食事する。色々な常談を言ふホッピーで、話相手には持つて来いである。それから又、家の中の事も、モオドの身體が益々入用になつた。それはアランがよくお客を連れて来るからである。皆有名な人物で、アランはその有名な名前に敬意を拂つて、トンネルの中に這入る事を許して遣るの

であつた。かうした訪問客がある度に、モオドは悦んだ。名士といふものは大抵老紳士で、皆、言はず單純な人ばかりであつたから、實に附合ひ易かつた。中には大學者もあつて、地質學上、物理學上、工學上などの質問をアランに向つて發して見たり、又器械を携へて何週間も、海面下何千メートルの停車場に泊つて、何かしきりに探し出さうとしたりするのであつた。かういふ有名な人物に對しても、アランは妻やホッピーに對する態度と、同じやうにするのである。

けれどもこの偉い人物は、皆歸る時になると、アランに丁寧な頭を下げたり、握手したりして、非常に感謝して行つた。するとアランはいつもの通り、謙遜な、いかにも好人物らしい微笑を浮べて、

「いや、どうも、失禮しました。」

と言つて、又お大事にお歸りなさいなども言つた。かういふ人達は大抵遠方の人だつたからである。

或る時一人の貴婦人がモオドの所へ遣つて来た。

「エセル・ロイドでございます。」

その貴婦人はかう言つて、面纱を外した。

まつたく、本當にエセルであつた。エセルは顔を赤

くしてゐる。モオドとの間柄は、突然訪問してもいゝやうなものでは無かつたからである。モオドの方も矢張り顔を赤くした——相手のエセルが顔を赤くしたからでもあるし、又、エセルを見た瞬間、不躰な女だといふ考へが、ちらつと浮んだからでもあるし、その考へを眼付でエセルに讀まれてしまつたらうと思つたからでもある。

顔を赤くしたが、エセルは直ぐ立ち直つた。

「わたくし、あの、塵様のなすつていらつしやる學校の事を、いろ／＼な所で讀みましたの。」

と口を切つたが、話し振りは仲々上手に流暢である。

「ですから、わたくし、御經營の實際を見せて頂きたくなつたのでございますの。實はわたくしも、紐育で矢張り同じやうな事をして居るんでございますが。」

エセル・ロイドの様子には生れ付きの自尊心と、見るからに具はつた品位があるけれど、相手に決して不愉快な感じを與へるものではない。それに、わざとらしくない明けつ放し、所と情の深い所もあつて、誰もこれには感心するのである。數年前にアランの心を惹いた子供らしい所は無くなつて、すつかり一人前の貴婦人になりきつてゐる。以前の美しさは何處となく甘いやうな、なよ／＼とした風情で

あつたが、もう爛熟した美しさになつてゐる。數年前の印象は、バステル畫といふ風であつたが、今はもう眼も、口も、髪の毛も、何も彼もはつきりとして、一々光つてゐるやうに見える。頸の水疱疹は目立たぬ程に擴がつて来て、心持ち少し色が濃くなつたやうであるが、エセルはもう白粉で隠さうともしないのである。

モオドは案内に立つた。禮儀上から案内したのである。

エセルを連れて行つて見せたのは病院、學校、幼稚園、婦人俱樂部の質素な部屋々々などであつた。エセルは何を見ても嘆賞したが、よく若い貴婦人が言ふやうな、あんな大袈裟な讚辭を呈することはしなかつた。最後にエセルは、何かお手傳ひ出来ませんか、如何でせう、と訊ねた、これはエセルが實に好い氣持だつた事の證據である。エディスとおしやべりする事になると、エセルの話し振りは堂に入つたものであつたから、子供は忽ちこのお姉ちゃんが好きになつてしまつた。モオドはエセルに對して、何となく蟲が好かないといふ、別に理由も何も無い反感を抱いてゐたが、かうなるとその反感もどうやら無くなつて、エセルを晚餐に引留めたものである。エセルは「お父様」に電話を掛けて、御馳走になることにした。

食事にはアランがホッピーを連れて来た。ホッピーが来たので、エセエルは大いに助かった。黙んまりむつりのアランだけだったなら、とても助からない所だったのである。エセエルは話の中心になつた。モオドの施設を褒める調子が、午後は簡にして要を得てゐた——若い貴婦人流の大袈裟でなかつた——けれど、今度は無暗に褒め立てるのである。モオドは又疑ひ出した。「アランを目當てにおしやべりするんだわ。」と思つた。けれども何より嬉しかつた事には、アランのエセエルを見る態度は、やつと禮儀を失はない程度のものであつた。美しい、甘やかされたエセエルを見るアランの眼は、まるでダイピストを見るのと同じく、冷淡無頓着な眼である。

「わたくし、婦人倶楽部の圖書は、まだ少し足りないやうに存じますけど。」

と、エセエルは言つた。

「え、追々にすつかり揃へたいと思つて居ります。」

「では奥様、わたくしにも寄附させて頂けませんかしら、少しばかりの本でございますが。あの、ホッピーさん、あなたからも願ひして見て下さいな。」

「どうぞ、もし餘分の御本でも御座いましたら。」

とモオドは言つた——

すぐ其翌日、エセエルから届けたのは大變な荷物である。それが皆本で、五千冊ぐらゐある。モオドは心から禮を言つた。けれども、そんな丁寧な挨拶をするのではなかつたと後悔した。それ以來エセエルが足繁く遣つて来たからである。おまけにエセエルは、モオドとひどく仲好しになつたやうに振舞ふ。エディスちゃんにはお土産をどつさり持つて来る。やがてその内、アランに向つて、何時かトンネルに連れて行つて下さいませんかと言ふ。

アランは吃驚してエセエルを見詰めた。貴婦人からこんな事を言はれたのは、これが始めてだつたからである。

「それはいけません。」

アランの返事は簡單で、殆ど不作法とも言へるものであつた。

けれどもエセエルは別に氣を悪くしたやうな様子も見せない。屈託無さうに笑つてかう言ふ。

「まあ、お氣に障つたんでしたら、御免下さい。」

それ以來エセエルの足は少し遠くなつた。これにはモオドも不服は無い。エセエル・ロイドを好きになる事は到底出来ない。どう骨を折つて見ても、好きになれない。モオドと

いふ女は、又一方、本當に好きな人間だけを交際の相手とする、狭い料簡の女である。

この點から言つて、ホッピーに来て貰ふと、モオドは大變嬉しかつた。ホッピーは毎日モオドの家に遣つて来た。晝食も晚餐もした。アランが居ようと居まいとお構ひ無しである。その中にモオドは、ホッピーが來ないと何だか物足りないうやうになつた。アランが傍にゐてさへ、時々物足りなく思ふのであつた。

五

「ホッピーさんて、いつも御機嫌の好い方ね。」

と、近頃よくモオドが云ふのである。

「あれは昔から面白い男だよ。」

さう云つて笑つて見せる。そして別に氣振りも見せないが、アランはちやんと氣が付いてゐる。モオドが度々ホッピーの機嫌を云々する裏には、夫に對する軽い非難があるのだとは氣がついてゐる。けれどもアランは、ホッピーではない。ホッピーのやうに、始終にこ／＼してゐるといふ才能もなければ、あんな氣輕な氣持にもなれない。ホッピーの眞

似をして、十二時間の労働の後で黒ん坊ダンスや歌などを上手に遣つてのけたり、いろんな面白い莫迦騒ぎを演じることも出来ない。ホッピーといふ男は何時誰が見ても洒落や常談ばかりの男である。ホッピーは顔中を口にして笑ふ。口の中で舌を丸めると忽ち素敵な悪口が飛び出して来る。ホッピーの顔さへ見れば、誰も彼も直ぐもう笑ふ支度だ。人を笑はせる爲めに生れて來たやうな男である。だからアランは斷じてホッピーではない。アランの身上と言へば、たつた一つ、他人の遊びの邪魔をしない事だけで、自分でも始終それを心懸けてゐる。モオドに對しても、その遊びの邪魔をしないように力めたが、今はもう、まづい事になつてしまつてゐる。モオドとの關係が段々親密でなくなつたのである。アランは自分に嘘が言へない男である。だからかう思ふ、おれのやうな男は家庭を作らない方がよかつたのかも知れない——とは思ふけれど、矢張りアランは、モオドと娘が可愛くてならないのである。

ホッピーは一日の仕事をしてしまへば、それでもう用は済む。ところがアランは決して用が済むことは無い。トンネルが伸びて行くに連れて、仕事の方も伸びて行く。しかもその上に、誰にも打ち明けたことはないが、アランだけの

特別な心配があつたのである。

既にこの頃では、アランは、十五年間にトンネルを完成し得るかどうかと疑つてゐる。アランの計算によると、最も順調に運んだ場合には出来るといふのである。それなのに敢て十五年と限つてみたのは、實は自分の企てに對して、輿論の賛成と民衆の金が欲しかつたからである。萬一、二十年、二十五年の期限であつたなら、恐らく半分の金も集まらなかつたらう。

約東の期限内には辛うじて、ビスカヤ、フィニステラ間と、亞米利加、ベルムダ間の複道トンネルが、出来るか出来ないか知らぬのである。

工事開始第四年の終りには、亞米利加線の地下道が、亞米利加沿岸から二百四十キロメートル迄、ベルムダ島から八十キロメートル迄進んだ。佛蘭西線では、ビスカヤ灣から二百キロメートル迄、フィニステラから七十キロメートル迄掘つた。けれども大西洋中の線では六分の一も出来てゐない。果してどんな方法を取つたら、フィニステラ、アツォオラ間及びアツォオル、ベルムダ間の大距離を征服することが出来るのであらうか。

その上に財政上の困難が來た。ほんの豫備工事がらゐに

思つたベルムダ島の蛇紋岩を突抜けるのに、アランの計算よりもずつと超過して、非常に費用がかゝつてしまつた。けれども第二回目の三十億弗を募集することは、どんな事情があるにもせよ、工事開始第七年か、急いでも第六年かにならなければ、絶対にしてはいけない。しても見込は無い。だから今新たに借入れないで遣るとすれば、もう直き資本が心細くなつて、已むを得ず大西洋中の大距離は差當つて單道のトンネルを進める外はあるまい。工事の爲めには非常に損な單道であるが、どうも仕方が無い。單道式の工事では、岩石を運び出すのに一體どうしたら好いだらう。工夫がつかない。日一日とどしどし多くなる岩石で、今の複道トンネルでさへ塞がれてしまひさうな形勢である。岩石は何處にでも、線路の間にも、横穴にも、停車場にも轉がしてあるが、それを運ぶ列車の方は、もうへとへとに疲れてゐる。

アランは何ヶ月もトンネルで暮した。工事の能率を高める方法を發見しようとしたのである。色々な機械は、發明されたものでも改良されたものでも、先づ亞米利加線のトンネルで實驗されて、それから各地の工事現場に使用されることになつた。又亞米利加線で鍛へられて、立派な「地獄

人」や「煉獄人」となつた労働者は、その後各地へ「整速手」として送られることになつた。極く徐々にはあるが、労働者を急テムボと熱氣に慣らす必要があつた。かういふ訓練を経ない男が「地獄」に這入つて行けば、一時間しない中に、もうへたばつてしまふ。

どんな一寸した作業でも、すつかり熟練させようとした。これによつて體力と、金と、時とを極端に節約しようとした。最も嚴密な分業組織を行つて、一人々の労働者は明けても暮れても同じ作業をさせるやうにしたが、するとその労働者は遂には全く自動的になり、つまりずつと迅速に、その作業が出来るやうになつた。そして、それ／＼専門家を付けて、分擔の労働者團を訓練し教導し、色々な事（例へば貨車から貨物を下す事）で、レコオドを作らせ、すぐそのレコオドを以て正規の作業能率として一般に要求するのであつた。一旦失はれた一秒時間は、もう二度と取り返せない。取り返せないとなると、莫大な時と金を失つてしまふのであつた。一人の労働者が一分間に一秒でも失ふと、十八萬の全労働者中、六萬人が作業に従事するとして、日に失はれる總時間は、實に二萬四千時間である。アランは、一年毎に作業能率を五パーセントづゝ高めて行くことが出

來た。それでも尙、遅くつていけないと言ふのである。

アランが特に頭を悩ましたのは、掘進坑路であつた。一番奥のこの五百メートルの場所へ、更に人員を増加する事は絶対に不可能であつた。無理に増加すれば膝の皿をぶつけ合ふだけの話である。アランは色々な爆發薬を實驗して見て、到頭、適當なものを發見した。トンネル八號がある。岩山を爆破して、可なり一様な大きさの、皆樂に運搬出来る岩塊とするものである。アランは部下の技師連中の報告を何時間でもちつと聞いた。倦むことを知らず、技師の提案を議論したり、吟味したり、實驗したりした。

まるで海からでも上がったやうに、だしぬけに、アランがベルムダ群島に現はれた。するとシュロセルがゐなくなつた。マック・シテイの建設本部へ遣られたのである。代つて監督の位置についたのは、三十そこ／＼の英國人、ジョン・ファアベエといふ男であつた。アランは技師達を呼び集めた。それから既に現在のテムボでさへ息も絶え／＼の技師連中に向つて、仕事を四分の一だけ早くしろと宣告した。どうしてもさうしろと言ふ。アランの役目は聲明した期限を守る事である。どういふ方法にしる、仕事をしてしまふのが技師連中の役目だと言ふ。

續いてアランは不意にアゾオル群島に現はれた。此處の工事監督は獨逸人、ミヒヤエル・ミュツレルで、二三年海峽トネルの工事に重要な位置を占めてゐた男で實に適材適所であつた。二百五十磅の體重があつて、「肥つちよミュツレル」で通つてゐた。部下の人々から敬愛されてゐた——その原因は、見るからに笑ひ出したくなる程のでぶくが、人氣を呼んだからでもあるが、又疲勞を知らぬ精力家といふ點が皆から畏敬されたのである。今の所ミュツレルの地下道は、アラン及びハリマンのニュー・ジャシイの地下道よりも迅速に進行してゐた。始終高笑ひをし、太い聲でがらがら言ふ。山が動き出したかと思ふやうな、肥つちよのミュツレルは、素敵な幸運に矢繼早に見舞はれた。それは、ミュツレル受持の工事現場の地質が、非常に面白く、又甚だ生産的な地質であることが分つたからである。此處の地質によつて大西洋も嘗てはこの附近まで陸地だつたことが十分に證明された。素晴らしい大きな硝石層も發見されたし、鐵鑛脈にもぶつかつた。喜んだのはピツバア燐鑛精鍊會社である。一切の鑛物の採掘權を買占めてゐた會社であるからその株は六割上がった。會社は採掘に一仙の金も要らない。たゞ會社の技師連が、これと思ふ貨車に記號を付ければ、

その貨車だけ引離されるのである。會社の連中は毎日何時また何か空前の寶物が懷へ轉げこんで来るぞとばかり胸をわく／＼させてゐた。數ヶ月前ミュツレルは、厚さ五メートルの石炭層に掘り當てたが、この男の言ふには「惚れ惚れするやうな石炭」である。そればかりでは無い。この石炭層はトンネルの軸の方向に走つてゐて、しかも何時までも何時までも續いてゐる。ミュツレルは岩山の中をぶち抜いて突進した。唯一の敵、敵の首魁は水である。今やミュツレルのトンネルは海底から八百メートルも深い場所であるのに、尙且つ水にぶつかるのである。そこでミュツレルは巨大な旋回ボンプを幾つも幾つも並べて、汚水の激流を海中へ絶えず押し出した。

アランは又、フィニステラにもビスカヤにも現はれて、ベルムダ群島でやつたと同様、是非とも期限内に仕上げねばならぬから、工事を急ぐべしと要求した。佛蘭西線工事の技師長は、ゲエラアル氏といふ白髪の高雅な紳士で、非常に才能のある佛蘭西人であつたが、これをアランは臆首つて、その代りステファン・オリンミュウレンバアグといふ亞米利加人を任命した。佛蘭西の新聞は盛んに騒ぎ立てたけれど、アランは平氣であつた。

突然地から生えたやうに、アランは各發電所に現はれた。どんな小さい事でもすつかり調べた。だから技師連中はアランが行つてしまふと、やれ／＼助かつたと安堵の息を洩らした位である。

アランが巴里に現はれると、各新聞は何段抜きかの記事を掲げ、出鱈目な訪問記事を掲げた。それから八日後に發表された事は、佛蘭西の一會社が、巴里、ビスカヤ間の急行鐵道敷設を許可されたといふ事であつた。之によつてトンネル列車を巴里へ直通させようとするのである。丁度この時分、歐羅巴の各大都會に一舉無数のポストアが現はれた。そのポストアの畫は、ホッピイの奇想が描く魔都の一つ、「アゾオル」トンネル停車場の光景である。ホッピイの描く魔都は、或人々にはてんで信じられないで、見るといきなり頭を振るのだつたが、又他の人々には、熱狂的歡迎を受けた。すべて何時だかの亞米利加と全く同様である。ホッピイは再び自由自在の奇想を驅使したが、殊に人から嘆賞されたのは大ポストアの一隅に描かれたスケッチであつて、その地所の現在と將來を描いてある。シンデケエトは細長いサン・ジョルゴ島と、小島を二つ三つと、砂洲を幾つも／＼買ひ取つたのであるが、五六年後には四倍に擴張する豫定である。

島と島は、幅の廣い大防波堤によつて連結され、更にその集まりと砂洲と悉く合併されてしまふ。一見出鱈目みたいな話であるが、アランはちやんと考へて、或る工事現場では、四千平方キロメートルの岩石（もつと澤山土地を作りたかつたら、もつと澤山の岩石）を海中に投げ込めば、さうすれば不思議な格好の大きな島が立派に出來ると考へてゐる。

亞米利加の夢の都と同様に、將來の「アゾオル」にも、築堤、防波堤、燈臺などのある、巨大な立派な港を作る。そして特に人目を惹くものは、海水浴場の美しくいふ全景である。ホテル、高臺、公園、見渡す限りの砂濱。

ところで、それよりも、最も人の嘆賞したのは、言はず人の度膽を抜いてしまつたのは、このシンデケエトの要求した地價である。それは歐羅巴の經濟状態に取つては法外な値段であつた。人は騒いだが、シンデケエトの方は落着き拂つて、歐羅巴の大資本をちつと睨み付けてゐる。鳥を覗ふ大蛇といふ形である。勿論、將來のアゾオルが、南米方面の旅客を一手に吸収するに違ひない事は、誰にも分る話である。又見易い道理は、巴里から十四時間、紐育から十六時間で行けるこのアゾオルが、世界最大の海水浴

場となる筈であるといふ事や、英、佛、米三ヶ國の上流社會が集まる地點となるだらうといふ事である。

そこで、歐羅巴の資本は動き出した。皆争つて地所での投機をした。廣大な區域を買つて置いて、十年後にはそれを自乗した値段で賣らうといふのである。

巴里、倫敦、リバアプウル、伯林、フランクフルト、維納などから、金がどしどし流れ出して、S・ウルフの大きな衣囊に吞まれて行つた。S・ウルフのビック・ポケットと言へば、誰知らぬ者も無いことになつた。

六

S・ウルフはこの金をポケットに突込む。資本家と民衆から来たあの三十億弗も、ベルムダ、ビスカヤ、フィニステラ、マック・シテイの儲けた金も、皆突込む。別に有難うとも言はない。さて當時、次のやうな警告を發した者も無いではなかつた。こんな莫大な資本が一方に偏してしまふと、破産の雪崩が起ると豫言したのである。然るに經濟通のかうした豫言が的中したのは、ごく限られた一小部分だけであつた。へこたれてしまつたのは二三の工業だけであつたが、それもぢきに回復することが出来たのである。

それといふのも、S・ウルフが金に錆を生じさせなかつたからである。鏽一文も錆びさせない、寝かして置かない。金はウルフの手に這入ると、直ぐ忽ちに例の循環運動を始めるのであつた。

S・ウルフは金を全世界に送り出した。滔々たる黄金の潮は、大西洋を一跳びに、佛蘭西へ、英國へ、獨逸へ、瑞典へ、西班牙へ、伊太利へ、土耳其へ、露西亞へ行つた。ウラル山脈を跳び越えて、西伯利亞の森の奥、バイカルの山奥までも押寄せた。南阿弗利加、ケエブランド、オラニエ、濠洲、新西蘭を浸してしまつた。ミネアポリス、市俄古、セント・ルイスへ、ロッキイ連山の山奥へ、ネブダへ、アラスカへ、到る處へ押し寄せた。

S・ウルフの弗金貨は、何十億とも知れぬ勇猛な小兵士となつてあらゆる國民、あらゆる人種の金と戦争する。どの一片も小ウルフだ。ウルフの精神を體してゐる小兵士で、その合言葉は曰く「マネエ」。この大軍は海底電線を傳つて押し寄せる事もあれば、空中を飛んで行く事もある。何にしても戰場に到着するや否や忽ち變形する小さな鋼鐵のハンマと變じて、欲望を燃やして夜晝躍る。又、リバアプウルの活潑な校と變じ、又はホッテントット土人と變じて、

南阿ダイヤモンド産地の砂原を滑り廻る。何百馬力の機械の接續棒と變じたり、又きら／＼光る鋼鐵の巨大な棒と變じて、一日二十四時間、憤然押し返さうとする蒸氣を、力み返つて押へ付けてゐる。鐵道枕木を滿載した列車と變じて、オムスクから北京に通ひ、大麥を一杯詰め込んだ船腹と變じて、オデッサからマルセイユに向ふ。南エエルスに行くと、運炭籠に乗つて八百メートルの地底へ飛び込み、石炭と一緒に飛び上つて来る。世界各地の何千といふ建物の中に蹲つて利を生んでみたり、加奈陀へ出掛けて穀類の刈入れを試みたり、スマトラの煙草と變じて畑に立つたりする。

それが皆ウルフ部下の小兵士で、皆戦つてゐる。S・ウルフの命令一下、スマトラを引拂つて、ネブダへ行き、金を搗き碎く。忽ち濠洲を去つて、リバアプウルの棉花取引所に大學攻め入るのである。

S・ウルフは、片時の休息も許さない。夜晝何百回でも變形させて兵士をこき使ふ。S・ウルフは、事務所の安樂椅子に納まつて、葉巻を噛み、汗をかく。一遍に十二三本の電報や手紙を口授する。耳には受話器を當てながら或る課の係りの男を相手に話をする。右の耳で電話の聲を聞きながら、

左の耳では事務員の報告を聞き取つてゐる。事務員に一言喋つて、その次の一言は電話口へ呶鳴り込む。片方の眼で、速記者やタイピストを一わたり見て、續きを待つてゐる者があるかどうか確めると同時に、もう一方の眼で時計を見る。今こんな時間だとすると、ネリーのやつ、もう二十分も待ち呆けを食つてゐるし、晚餐が遅れて行つたらさぞひどい顔をするだらうと思ふ。S・ウルフであるが、同時に又こんな事も思ふ。あの係りの男は、金鑛株の事はからつきし駄目なんだが、ガルニエ兄弟株にかけてはとも目先の利く男だ。又それからS・ウルフは、もぢや／＼毛の生えた、湯氣の立つ頭の奥の奥で、明日は維納取引所にかゝつて行つて、見事大勝とやらかさうかな、などと考へる。

S・ウルフは毎週百五十萬弗以上の現金を用意しなければならぬ。貸銀である。又四半期毎に何億弗の現金を用意しなければならぬ。それから、三ヶ月利子と割引高である。かういふ時期になると、幾日も事務所から出て來ない。その時は戦闘の眞最中なので、やがてS・ウルフは勝利を博して出て來るが、汗と、脂肪と、呼吸とをひどく失つてしまつてゐる。

部下の軍團を呼び返す。すると歸つて來るが、どの一弗

も武勳赫々たる小勇士で、八仙十仙二十仙の分捕品を携へて来る。不具者となつて歸つて来る者も多いし、又戦場にあへない最期を遂げる者も少く無い——戦ひの常である。

かういふ息を繼ぐ暇もない猛烈な戦闘を、S・ウルフはもう何年も續けて来た。夜も晝も、正攻法、奇襲、退却のいづれを、何時行ふべきか、絶えず偵察してゐる。毎時間ごとに、五大陸にゐる部下の司令官達に向つて命令を發し、又毎時間ごとに、戦況報告を閲讀する。

S・ウルフの働き振りは實に素晴らしい。金の天才で、何哩も向うの金を嗅ぎ付ける。無数の株券や假株券を歐羅巴へ押付けた。萬一、黄金の豫備軍を召集しなければならぬ場合、亞米利加の金を確實に手に入れるためである。趣意書を書いたが、それを讀むとワルト・ホキットマンの詩集のやうである。丁度よい時に、適當な酒手を適當な人の手に握らせることにかけては、S・ウルフ程の名人は無い。

この戦術を用ゐてS・ウルフは、露西亞波斯など文化の程度の低い國々に於て、二十五割から四十割の利益を得る商賣、經濟界にばかり許されてゐるぼろい商賣をした。毎年の總會には斷乎として所信を貫いて行つたが、數年ならずしてシンヂケエトはこの男の俸給を三十萬弗に引上げた。これ

程の男は外に一寸無いのである。

S・ウルフは働きに働いて、肺がせい／＼言ふやうになつた。紙を手にとると、その紙には、皆指の指紋が付いてしまつた。一日に百遍手を洗つても、さうなるのである。今日までに何度脂肪除去手術を受けたか知れないのに、尙益々肥滿するばかりである。けれども、汗ぐつしよりの頭を冷水に突込み、髪の毛と髭にブラシを掛け、新しいカラアを付け替へて、事務所を出るや否や、もう違つたS・ウルフである。悠然たる、又泰然たる、實に堂々たる紳士となる。尤もらしい顔をして、しやれた黒塗の自動車に乗る、その車の銀色の龍が、まるで大洋航路船の警笛のやうに鳴つて、プロオドエイを疾走する。一夕の歡を盡しに行くのである。

大抵晚餐は、大勢ある若い妻の誰かの家で食べる。大食をすることが好きで、食慾増進のため、強い高價な葡萄酒を一杯飲む。

毎晩十一時には俱樂部に現はれる。そして二時間賭勝負をする。賭け振りは仲々考へて賭ける。多過ぎもしなければ少な過ぎもしない。口數は少く、眞黒な口髭の奥の、赤い、厚ぼつたい唇を脹らせてゐる。

俱樂部ではいつも珈琲を一杯飲む。それつきりである。

S・ウルフは紳士の典型である。

たつた一つ、悪い癖があつて、それを一生懸命世間に隠さうとしてゐる。その悪い癖といふのは、非常に女が好きなことである。S・ウルフの眼は暗い色で、動物的な光を帯び、眞黒な睫毛であるが、この眼が美しい女の肉體を見ると、ぢつと吸ひ付いて動かないのである。丸いお臀の若い綺麗な娘を見たが最後、血が耳の中で／＼言ふのである。少くとも年に四回、巴里と倫敦へ出掛けて行く。どつちの町にも一人か二人美しい娘が圍つてあつて、その贅澤な妾宅の寢部屋はすつかり鏡張りである。それから又若い可愛らしいのを十人から集めて、三鞭酒付きの晚餐を開くが、自分だけはフロックを着て女どもは眩しいばかりの眞裸である。又屢々、旅先から「姪」だといふ娘を連れて来て、紐育の何處かへ手植ゑの花とする。S・ウルフの女は必ず、美しく、若く、ふつくりして、しかも金髪でなければならぬ。特に大好きなのは英吉利女、獨逸女、スカンヂナ维亚女である。かうした事によつて、S・ウルフは可哀さうなザムエル・ラルフゾオンの爲めに腹いせの仇討をするのである。何年か前、ザムエル・ラルフゾオンは、美人を思ふと、直ぐ競争相手が現はれてその美人はいつも體格の立派な庭球

選手や月々の學費の豊かな連中などに取られてしまつた。その甲ひ合戦である。昔はおめ／＼と、金髪人種の土足に顔を踏み躪られてゐたものであるが、今はその復讐として、その人種の女を金で自由にするのである。けれども、それよりも何よりも、今ウルフは足り無いだらけであつた青年時代の埋め合はせをしてゐるのである。青年時代には、渴望を醫すべき時も金も無かつたけれど……

旅行する度に持つて歸るものは、澤山の戦勝記念品である。女の捲き毛や下つた毛である。種類は、冷たさうな銀色を帯びた金髪から、燃え立つばかりの赤まで、いろ／＼ある。それを皆、紐育の自宅にある日本製の漆塗りの箱に入れて藏つてある。けれども決して口外しないから、誰も何にも知らない。

ところで、ウルフが歐羅巴への旅行を好む理由は外にもあつた。年取つた父親に逢ふ爲めである。父親に對しては、奇妙なほどの感傷的な愛着を抱いてゐた。年に二回、二日間だけ故郷のツェンテスに歸る。電報を先に打つて置く。するとツェンテスの町中は大變な騒ぎになる。ラルフゾオン爺さんのでけえ息子がよ、あの果報者がよ、えれえ野郎がよ、歸つて来るだよ。

S・ウルフは父親に小綺麗な家を建て、美しい庭を拵へて遣つた。まるで別荘のやうである。音楽隊が呼ばれて来て、ワイオリンを弾いたり踊つたりする。ツェンテスの人間は皆、この庭の鐵格子の所で押し合ひ、へし合ひしてゐる。

「お前はまあ、えらくなつたなあ。誰だつて、まさかかうなるたあ、夢にも思はなかつただよ。えれえ子だ、おら、鼻がたけえ。おら、毎日、神様にお禮を申すだよ。」

偉くなつたS・ウルフではあるが、誰とも親しくするので町中の人に愛されてゐる。貴賤老若の別なく、亞米利加式の民本主義のざつくばらんで誰とでも交際した。あんなに偉くなつても、高ぶらねえだよ。

「おら、お逢ひしてえだよ。そのアラン様だ。逢うて見たいがのう、大した御仁だよ。」

「出来るよ、ぢきにアランさんはまた維納か伯林へ遣つて来る。さうしたら、電報でさう云つて寄越すよ。どんく

ホテルへ行つて、親爺だからつて云やあ、きつと吃驚して悦ぶよ。」

けれども、ユルフゾオン老人は、小つぼけな萎びきつた手を上に伸ばして、首を振つて泣くのである。

「止す。おら、アラン様にお目にかゝらねえだ。言葉をかけるなんて決してしねえだ。足が震へて堪つたもんぢやねえだ。」

別れる時はいつも二人とも辛かつた。ユルフゾオン老人は曲つた足でよろ／＼と、息子の乗つてゐる展望車の傍へ、もう二足三足近寄つて、大聲に泣き出すのである。ウルフの顔にも一杯涙が流れるのであつた。けれども窓を締め、涙を拭いてしまふと、再び元のS・ウルフに返つて、暗色の髪の毛の、猶太博士のやうな頭は、どんな間を掛けられても返事をしないのである。

長くもつたおれは、けいりやが、さういふ風で、

不幸な事にS・ウルフは、何でも解剖し穿鑿するといふたちで、おまけにブルマン會社式の寢臺車や汽船の椅子などに坐り込むと、そんな餘計な考へ事をする暇が、十分に出來たものである。今日までに出會つたあらゆる人間の事を考へて見る。活動寫眞のやうに次々と思ひ出されて來るがその一々の人間を皆比較して、やがて今度はその連中と自分とを比較して見る。すると莫迦ではないし、批判的の頭が鋭いから、自分は、全然平凡な人間であるといふ事に、忽ち氣が付いて、少からず愕いてしまふ。成程市場といふものに明るい。國際貿易に明るい。市況の報告みたいな、取引所の電報みたいな男で、足の爪先まで數字が一杯の人間であるが——それでどうだ、その外に何か持つてゐる男だらうか。所謂個性といふものを持つてゐる男だらうか。斷じて然らず、少しも持つてはゐない。二千年の昔の祖先と雖も、まだしも個性を餘計に持つてゐる。といふ風に何にも個性の無い男であるが、塊太利人になつて見たり、獨逸人、英國人、亞米利加人になつて見たりしたものである。かういふ變形の時は、一々皮を脱いだやうに見事に遣つてのけたけれど——その擧句の今は何になつてゐるのだ。今の自分は果して何であるか、全く自分でも分らないのであ

る。さて、このS・ウルフの記憶力は、異常な素晴らしい記憶力で、桑港から市俄古へ行く時に乗つた車室の番號を、何年経つても機械的に覚えてゐるといふ風で、物事を決して忘れないのである。だからちやんと知つてゐる。自分の獨創として發表する意見も、實は何處から出たものか、その出處も、帽子を脱ぐ手付も、話し振りの、微笑の仕方、お相手が厭になつた時相手を見る眼付も、皆出處があるが、それを皆知つてゐる。かういふ風に皆出處があると分つて見れば、あの落着き拂つた、威嚴をつく、つた、口數を利かない氣取つた様子も、皆ちやんと出處がある。これこそは、自分の本能が然らしめて、この最も間違ひの無い様子をするに至つたものと、心ひそかに得意になつてゐたけれど、それがちやんと出處があつて、色々な他人から借用した何百萬の要素が集まつて出來たものである。

それからアラン、ホッピイ、ロイド、ハリマンの事を考へる。それ／＼一箇の人間だ。ロイドは別として、他は皆どうも狭い人間だ。「四角四方」の事だけ考へる人間で、廣い世界の事は一度たりとも考へない狭い連中だ。然るに皆、それ／＼一箇の人間で、獨創的なものを持つてゐる。誰が見ても獨立的な個性と見える。これ／＼とはつきり言へな

いにしても兎に角さう見える。そこでS・ウルフは、アランの持つてゐる品位に就いて考へ始める。どういふ譯で品位が生じたんだ。何故あの男は威厳のあるやうに見えるか、誰かその理由の分つてゐる人があるか。誰も分つてはゐない。又あの男のおさへ付けるやうな力は、見る人が怖れてしまふあの男の力は、何に由来するのだ。誰にもその理由は分つてゐない。アランといふ男は、氣取つた態度なんぞ無い男だ。いつも明けつ放しで、單純で、ありの儘のアランであつたら、しかも人にあんな感じを與へるんだ。おれは度々、あの男の雀斑だらけな茶色の顔を、眺めたものだ。上品なところや天才的なところは一つも無かつたけれど、あの單純な顔付、はつきりした顔付を眺めてゐると、いくら眺めても見飽きないものだつた。アランが一寸何か言ふと、それつ切りでもう十分なのだ。その命令に背くは勿論の事、一寸聞き洩らすこともしまいとして、誰も皆あの男に恐れ入つてゐるんだ。

ところで、S・ウルフは、明けても暮れてもこんな事ばかり考へてゐる男ではない。ほんの時々、汽車が田舎道を走つてゐる間だけ、こんな事に耽るのである。時々ではあるが、これをすればする度毎に、必ず不愉快な、苛々した氣

持になるのであつた。

かういふ色々な事を考へてゐると、いつも必ず或る一點にぶつかつてしまつた。アランと自分との關係といふ一點である。アランは尊敬してくれる、丁寧な扱ひでくれる、同輩として扱ひてくれる——けれども他の連中に對する扱ひとは、何か違つた扱ひである。S・ウルフはそれがはつきり分つてゐた。

平生おれの聞くとくところでは、殆ど大抵の技師でも技師長でも社員でも、皆アランから名前だけで呼ばれてゐる。然るに何故だ。おれだけはいつても「ウルフさん」と、さん附けだ。しかも一度たりとも忘れずに、必ずさうするのだが、一體何故だ。敬意のつもりか。斷じてそんな事は無い。アランといふ男は、自分だけしか尊敬しない男だ。その男がどうして、どうして、なぞとウルフは考へるが、さて又我ながら莫迦らしいと思ふ望みを、心の奥底に秘めて持つてゐた。どうぞ何時か、アランがおれの肩を叩いて、「やあ、ウルフ、どうだい。」と呼んでくれよばい。莫迦らしい望みではあるが、かういふ望みを持つてゐた。——そして、何年かの間、待ちに待つても駄目であつた。

さうなるとS・ウルフは、今度はアランが憎くなつた。確

かにはつきり憎くなつた——大した理由も無さうであるが、無性に憎くなつたのである。アランの自信が崩れる所を見たい、アランの眼色が變ればいゝ、アランの方からおれに助けを乞ふ事があればいゝ、などと望んだものである。

かういふ考へが出て來ると、S・ウルフは身體中がかつと熱くなる。うむ、さういふ事もあるかも知れん。何時か、さういふ日が來るかも知れん、おれが、S・ウルフが——何時かはおれが、シンヂケエトの絶對支配權を握るかも知れん。さうはならんと誰が言ひ切れよう。

S・ウルフは、東洋人型の眼瞼を下して、眞黒な炯々たる眼をかくしてしまふ。そして肉がだぶぶの頬を細かく顫はせるのである。

これは、ウルフが今迄に思ひついでた中で一番大膽な考へであつた。そしてこの考へは、催眠術のやうに、S・ウルフをうつとりさせるのであつた。

譯は無いさ、株券の十億もあれば、それ位の軍資金へあれば——その時こそマック・アランめ、このS・ウルフがどんな人間か思ひ知らして遣るぞ。

S・ウルフは葉巻に火を點けて、満々たる野心に夢心地となるのであつた。

七

エヂソン・ピオ會社は毎週新しいトンネル映畫を提供して、層一層と素晴らしい成績を擧げて行つた。

映畫に現はれるものは、マック・シテイの材料列車發着驛の上、空を蔽つて動かない眞黒な煙の層雲である。又現はれるものは、見渡す限りの貨車の大軍で、濃い煙を吐く何千といふ機關車が、米國各州から牽き集めて來たものである。又現はれるのは、船荷の上げ下しに使ふ橋だ。廻轉起重機だ。滑車だ。高架鐵道用の起重機だ。又、映畫に現はれるのは、惡鬼のやうな人間が一杯の「煉獄」と「地獄」だ。この時は同時に、蓄音器で物凄く騒音を聽かせる。「地獄」の騒音は、後方二哩でもこれ位に聞えるといふ所を紹介する。装置で音寫したものであるが、それでも音響の烈しさ怖ろしさに、満堂の人は皆耳を塞いだ。

エヂソン・ピオ會社の映畫こそは、近代的勞働の聖書である。而も其映畫すべての目指す目標は唯一つ、トンネルだ。

さて觀衆は、たつた十分間ばかり前には、とてもひどい俗受け映畫を見て悦に入つたものであるが、このトンネル映畫を見ると、忽ち次のやうに感ずるのであつた。このス

クリインに躍る労働の實景、色様々に動き、煙を吐き、咆哮する労働そのもの姿、これぞ正しく、更に偉大な、更に力強い或る一つの劇の素晴らしい場面だ。その劇の主人公は、現代だ。おれ達の時代だ。

エヂソン・ピオ會社の大聲疾呼するものは、鐵を歌ふ叙事詩である。古代の叙事詩のいづれよりも、傑作であり力強い鐵の叙事詩だ。

スクリインに相踵いで現はれる西班牙北部のビルバオ、瑞典のゲリブラ、グレンゲスベルヒ、各地の鐵坑。オハイオ州の鑛山町、空は灰の雨、槍ぶすまのやうな煙突。炎々と燃える熔鑛爐は瑞典の何處かので、一面に眞暗な所へめらめら火の舌が一杯になる。地獄篇の一場面だ。エストファレンの製鐵工場。硝子ばかりで出来た宮殿、機械、人間の考へ出したこんな大したもの、このマンモスに附添つてゐる一寸法師は、マンモスを拵へた人と駭者だ。一群の惡魔、肥つた惡魔が、しかも塔よりも高い。おや、いぶる、熔鑛爐だ。鐵の帶を幾つもしてゐる。時々天に向つて火の唾を吐く。鑛石を積んだ手車が、がら／＼と昇つて来る。爐の中へすつかり鑛石を詰める。有毒瓦斯が、肥つた惡魔の腹を轟々と通り抜けて、空氣を一千度まで熱すると、石炭や

コオクスが白熱し始める。熔鑛爐一つが一日に熔かす鐵鑛の量は三百噸だ。爐の孔を衝いて落とすと、鐵の川が鑛造場へ流れ込む。人間が焼けて見える。死人のやうな顔がぎらぎら光る。梨みたいな形のベッセマア式及びトオマス式轉爐。膨れ返つた蜘蛛の腹だ。建物何階といふ高さだ。水の壓力で動いて、立つたり寝たりする。鐵の中へ空氣を吹き込むのだ。火焰の蛇と火花の束が頻りに外へ伸びる。烈火、灼熱の溫度、地獄、それから凱歌だ。マルチン式熔鑛爐廻轉爐、スチム・ハンマア、ロオラア、煙、火花の踊り、燃えてゐるやうに見える人間、一寸一分も皆天才に漲つて、人間の勝利だ。鐵の塊りが燃えて爆ぜる、圓筒の間の道を守る。そして延ばされる。まるで蠟のやうに伸びる。長くなる、長くなる、今出来たばかりの表面の上をまた走つて歸る。もう動かない。まだ熱くつて、汗をかいてゐるやうだ。眞黒になる。これで済んだ。征服されたのだ。「エッセンのクルップ工場、トンネル用のレエルを延ばして作る。」

最後に現はれるのは、或る炭坑の地下道だ。馬の顔の大寫し、馬の全身、大きな長靴を穿いた少年が傍について歩く。その後方には幾つも幾つも手車で、石炭を積んでゐる。馬は絶えず首を振つて来る。少年は踏み付け踏み付け歩いて

來て到頭觀衆の近くまで來る。すると眞黒に汚れた、血の氣の無い顔を此方へ向けて、齒をむき出して笑ふ。

説明者の言ふには、「トネルの建設者マック・アランも、二十年前にはかういふ炭坑の小僧でありました。」

猛烈な歡聲がどつと起る。世人の歡呼といふものは、精力と力とに向つて浴びせられる——自分自身に向つて、自分の希望に向つて。

エヂソン・ピオは三萬の映畫館で、トンネル映畫を毎日公開した。西伯利亞、波蘭の小屋でもこの映畫が見られた。當然の結果として、アランを始めトンネル工事の幹部連は皆、世界中に知れ渡つた。この人々の名は、民衆の記憶の中に刻み込まれた。丁度スチブソン、マルコニ、エエルリッヒ、コッホ等の名と同様に。

本人のアランだけは、まだトネル映畫を見なかつた。暇が無かつたからである。エヂソン・ピオは再三再四アランを誘つて見たのだが、どうも暇が無いと斷られた。

「マック・アラン、自身の活躍する映畫をエヂソン・ピオ會社に於て見物す。」かういふ映畫が出来ようものなら、それこそ大變な大儲けだからと思つて、エヂソン・ピオは躍起になつたのであるが、残念ながら右の次第である。

八

「アランさんはどちらへ。」とホッピーは訊いた。

モオドは椅子を揺つてゐたが、これを聞いて止めて、

「なんでも——さう／＼、モントリオオールよ。」

夕方である。二人は、海を見晴らす二階のゼランダにゐた。下を見れば庭は暗闇で、ひっそりしてゐる。海は波が少し大きいのか、鈍い音が一樣な間を置いて聞える。遙かに遠いぶん／＼言ふ音、かあんといふ音は工事の騒音だ。二人は、食事の前にテニスをして四ゲエムして、夕飯を済まして、一時間ほど休息してゐるのである。家の中は静まり返つて暗い。

ホッピーは疲れたやうに欠伸をする。口の上を叩きながらする。一樣な間を置いて聞える、静かな波の音で眠くなつたのである。

モオドの方は、椅子を揺つてゐて、眼はすつかり、はつきりしてゐる。

モオドはホッピーをしみ／＼と眺めた。派手な色の洋服、きら／＼光る金髪、その加減か暗かりの中で見ると、どこもかも眞白な男に見える。黒つぼいのは顔とネクタイだけ

である。まるで陰畫ネガチフにそっくりだ。モオドは微笑する。食事の時ホッピーから聞いた話を思ひ出したのである。——S・ウルフの「姪」の中の一人の事で、S・ウルフに棄てられたものだから、訴訟を起したといふ話である。だがモオドは、この話の事は一寸さう思つただけで、直ぐに考へをホッピーの事に戻してしまつた。モオドはこの男が氣に入つてゐる。いろんな莫迦ばかな眞似をする事まで、氣に入つてゐる。二人はすつかり仲好しで、どんな事でも打ち明けて話し合ふ。どうかするとこの男は、聞きたくもないやうな變な事を話し出すから、止して頂戴とお断りするのであつた。又ホッピーとエディスとは、これが又大變な仲好しで、まるで親子のやうである。そんな風だから、時々、この家の主人はホッピーではないかと思はれるのであつた。

「ホッピーを夫ちつとにしたらマックよりも好い夫かも知れない。」かう思ふと、モオドは身體が熱くなり、頬が赤くなつたやうに感じた。

するとその瞬間、ホッピーがくすつと笑つた。

「何故笑ふの、ホッピー。」

ホッピーは伸びをしたので、椅子がきし／＼鳴る。

「なあに、一寸ね、明日からの七週間をどうして暮さうか

と考へてたんですよ。」

「まあ、また負けたのね。」

「さうですよ。だが、フル・ハンドといふ手が付いてゐるのに、止める譯には行かないぢやありませんか。六千弗ふいにしちやつた。勝つたのはヴンダアスティフトですよ。金持は強いて。勝負はいつもかうだ。」

モオドは笑ひ出した。

「だつて、そんなら一寸アランに何とか言へばいぢやないの。」

「さうですね、それはさうですね——」とホッピーは答へて、また欠伸あくびだ。口を叩いて、あわ／＼をする。「人間が間拔まぬけだとかういふ目に遭ふ。」

それから二人とも、勝手に自分の考へに耽り始めた。モオドは一寸一つ、小細工を考へ付いた。揺れ椅子を揺ぶつて、前へ遣つたり後へ遣つたりする。一歩近づいたり、一歩遠くなつたりする。さうしながらいつもホッピーの顔を見詰めてゐるのである。

モオドの心の中は混亂してゐる。諦めあきらの氣持と欲望と、こんがらがつてゐる。

ホッピーは眼を閉ぢた。するとモオドの聲が、急に直ぐの

近くで、かう言ふ。

「ねえ、フランク、どうだつたでせう、もしあたしがあなたの奥様になつたら。」

ホッピーは眼を明けた。瞬間にすつかり眠氣ねひが覺めてしまつた。モオドにこんなことを言はれて、吃驚おどろしたのである。それに又、呼び名で呼ばれたにも驚いた。この何年來、呼び名で呼んでくれた人は一人も無かつたからである。又驚いた事には、見ればモオドの顔が眼の前に迫つてゐる。たつた今しがた、二歩は離れてゐたのに。モオドの柔かい小さな手は、今ホッピーの椅子の背に載つかつてゐる。

「そんな事が分るもんですか。」

とホッピーは有耶無耶うやむやに答へて小聲で笑はうとして見た。モオドの眼が直ぐ前に見える。その眼の奥から出て来る金色の光は、何かしら温かさうな、訴へるやうな光である。暗色の髪の毛の下には、顔が微かに光つて、青く見える。瘦せて見える。悲しみに曇つてゐる顔のやうだ。

「ねえフランク、何故あたし、あなたと結婚しなかつたんでせう。」

ホッピーは息を繼いだ。しばらくしてかう言つた。

「それはマックの方を好きだつたからですよ。」

モオドはお構ひなしに獨りで頷く。

「あなたと一緒になれば、きつと幸福だつたでせうねえ。」

ホッピーは益々面喰めんくつた。一寸でも動けば、モオドの身體に餘り近くなり過ぎるので、動くわけに行かない。それも弱つた。

「さあ、どんなものかね。」

と、ホッピーは微笑するばかりである。

「ねえフランク、あなた、あの時分、あたしを本當に愛してゐたの、それともたゞそんな風をして見せたの。」

と、モオドは囁くやうに言ふ。

「本當に愛してゐましたよ、え。」

「あたしと結婚したら、あなた、幸福になつて。あなた、さう思つて。」

「思ひますとも。」

モオドはまた頷いて、そのほつそりした眉が夢を見るやうに上上がった。そしてもつと低い聲で、「さうか知ら」と言つたが、嬉しさと悲しさの混り合つた氣持である。

ホッピーはこの状態を續けるに堪へられなくなつた。あんな昔の事を、何故またモオドは言ひ出したんだらう。かう思つてホッピーは、今更そんな事を言つても始まらない、と

口に出したかつた。何とか話を外へ向けたかつた。莫迦莫迦しいや、おれといふ奴は未だにこのモオドが好きなんだ、おまけにそれ以來、ずつとよくよくしてやがるんだ、おれは……

「でもねえ、モオド、もう仲好しのお友達になつたんぢやないか。」

とホッピイは、この場合出来るだけの平氣な、何でもないやうな調子で言つた。

モオドは殆んど分らない程度で頷いた、眼はまだホッピイを見つめた儘である。そして二人は、其儘一秒か二秒、眼と眼を見合つた。そして急に、大變な事になつた。先づホッピイが一寸動いた、ちつとしてゐるのがとても苦しかつたから、一寸身體を動かしたのである——がたつたそれだけに、どうだらう——

モオドは

。小さな、押し殺した

げて、すつと立つて、暫くは身動きもせず其處に立つてゐたが、やがて暗闇の中に消えて行つた。戸が一つ、締まる音が聞えた。

ホッピイはそろ／＼籐椅子から下りた。どきまぎした放

心したやうな微笑を浮かべながら、暗闇の中を見送つた。唇の上には、モオドの口がまだ柔らかに温かく感じられる。ホッピイの腕は疲れて、抜け落ちさうである。

やがて氣を取直した。すると波の音がまた聞える。遠くの方で汽車の響がする。何の氣無しに時計を出して見てから、眞闇な部屋を幾つか抜けて、庭へ下りて行つた。

「お別れだ——と考へた。「これでおしまひだ。モオドはもうおれに會つてくれやしない。」

帽子掛けから帽子を外して被り、顫へる手で葉巻に火を點けて、この家を出て行つた。まだ興奮してゐる。嬉しいやうな氣持で、混亂し切つた氣持でもある。

「それにしても、どうしてあんな事になつたのかなあ」と考へながら歩みを續けた。

その間にモオドの方は、燈火も點けない居間で、身體を曲げて腰掛けてゐた。兩手を膝に置いて、吃驚したやうな眼で、前の方の床を見詰めてゐる。さうして小聲で呟いた。「まあ、いやらしい——悪いことを——あゝ、マック、あなた。」かう言つてからモオドは、靜かに、時々齒をきりきり言はせながら、泣くのであつた。もう夫に合はせる顔は無い、もう無い。でも、打ち明けなさいけないわ。

離婚して貰ふんだわ。えゝ、さうよ。きつと、さうして貰ふわ。でも、さうしたらエディスは。物がわかる年頃になればエディスも、お母さまの處置が立派だつたと思ふでせう……

モオドは吃驚した。ホッピイが下を歩いてゐる。その足音を聞いて驚いたが、すぐかう思つた。そつと歩いてゐらつしやるわ、いつもそつとそつと歩くのよ、あの方は。モオドの胸はどき／＼躍つた。立ち上がつて、かう呼ばうか知ら、「ホッピイさん、いらつしやい——」と思ふと、モオドは顔を眞赤にして、兩手を握り緊めた。まあ、飛んでもない——いやらしい事——何だつて、あたし、あんな事をしたんでせう。あゝ、あたし、かうなればもう、何もかも言つてしまへば、——あの方が接吻したら、どんなでせうなんて、——そんな莫迦な事を今日の晝間一日中思ひ續けて、晩になると、やつぱりそんな事を考へながら、ホッピイさんをつつと見詰めてゐたんだわ……

寢床にはひつてからも、モオドは心配と後悔で涙を流した。その中に段々落着いて、やがて氣を取直した。「アラッが歸つたら、あたし、打ち明けて、どうか許して下さいと願つて、それから誓ひを立てよう……又アランに、どう

ぞこれからは、一人ぼつちにして行かないで頂戴、と言つて見るんだわ。でも一寸面白かつたわね、ホッピイさんたらとても吃驚したんですもの。眠りませう、眠りませう。」

翌朝エディスと一緒に水浴した時は、心の何處かにほんの少し重苦しい氣持が残つてゐるだけであつた。ほんの少しではあつたが、昨夜の事なんぞ、まるで思つてゐない時でも、少し重苦しいやうな氣がした。モオドの思つた事は次のやうな事であつた。いづれきつと、すつかり元通りになるでせう。きつと、いゝえ、もつと善くなるわ。だつて、あたし、アランを愛する氣持が、今迄よりもすつと強くなつたんですもの。モオドはこんな事を思つたけれど、その實、決してさうではなかつた。アランはモオドをなほざりにしてはいけなかつた。しかも矢張りなほざりにされてゐる。それからの二三日中、モオドは度々ちつと考へ込んで、うつろな眼で前の方を見詰めたが、あたしの愛してゐるものが本當はホッピイさんだつたら……と思ふのであつた。その烈しい思ひに耽つたかと思ふと、忽ちその思ひは消えて、不安な氣持が湧いて来る……

ホッピイは三日間遣つて來なかつた。晝の間は、遮二無二働いて、夜になると紐育へ出掛けて、勝負をし、ウイスキー

を飲むのであつた。何處からか四千弗借りて、それをすつかり使つてしまつた。

四日目になるとモオドは一筆書いて送つた。今夜きつとお出で下さい。お話ししたい事がありますから、といふ文句であつた。

ホッピーは遣つて来た。顔を見た時、モオドの頬は赤くなつたけれど、直ぐ快活に笑つて迎へた。

モオドはかう言ふ。

「もう決してあんな莫迦な眞似はしない事にしませうね、いゝこと。あたしねえ、随分苦しんだのよ、眠れなかつたの。もう止ませうね、必ずね。あたしよ、悪いのは。あなたが悪いんぢやないのよ。でも、あたし、決して自分に罪を着てるんぢやないの。本當にあたしが悪いのよ。そしてあたし、アランに白状しませうつて、初めはさう思つたの。でも今はもう何にも言ふまいと決心してゐるのよ。それとも、あなた、白状した方がいゝと思つて、」

「それは何時か折を見てするんだね。それとも僕から——」「いけないわ、あなたぢやいけないわよ。あなたがしちやいけないつてよ。さうね、折を見はからつて——ほんたうにさうねえ。ぢやこれで、また元通りの仲好しになりませ

うね。」

「宜しい、承知しましたよ。」

と言つてモオドの手を握つたホッピーはこんな事を考へた。モオドの髪の毛は、なんと綺麗に光るんだらう。一寸頬を赤くして、困つたやうな様子は、なんと似合つた様子だ。この女はなんといふ氣立ての好い、親切な女だらう。あゝ、あの接吻は、一、金四千弗なんだな。なあに、そんな事。

「球拾ひの小僧が來ましたよ。テニスをしませんか。」

かうして二人は元通りの仲好しになつた。たゞモオドだけは、時々ホッピーに一寸した眼付をして見せる。二人だけの祕密を持つてゐるんだわね、といふ事をホッピーに思ひ出させようとする眼付で、モオドにはどうしてもこれが止められなかつた。

第四編

—

マック・アランは、まるで地上に立つて鞭を打ち振ふ妖怪だ。鞭を揮つて工事をどしどし進めさせるのである。

全世界は緊張し切つて海底のその又下の息もつかせぬ死物狂ひの有様を見守つてゐた。各新聞は特別欄を設けた。すべての人の目は先づこの欄を見た。まるで戦場の報告でも見るやうに。

工事開始から第七年目に入ると、その第一週に、アランは運命にぶちのめされた。亜米利加側の坑道に十月の大惨事が起つたのである。この惨事の爲めにアランの工事は、大打撃を蒙つた。

小さい不詳事や故障は毎日のやうにあつた。崩れ落ちる岩石に埋められ、爆破の時に粉微塵にされ、列車に押し潰される労働者は、いくらでもあつた。死神はトンネルに入ると、いかにも氣樂になつて、ごく無難作にトンネルの中の連中を引張つて行つてしまふのである。方々の坑道は何

度も多量の水が浸入して來て、澤山の唧筒が動いてやつと

その水を喰ひ止めた。かうして何千人といふ人間が溺死し

さうな危険を冒した。この勇敢な連中は、時とすると胸の

あたりまで水に浸つてゐた。しかも時々この浸入して來る

水は、煮えたやうに熱かつたり、間歇泉のやうに蒸氣を立

てゐた。尤も大きな浸水といふものは大抵豫知されるの

で、その豫防策を講ずることが出來た。それはゲッティンゲ

ンのレイ博士が最初に唱へ出した方法に基いて、無線電

信の送信機に似たやうな特別な構造の装置で、岩山の中へ

電波が送られる。その電波は水或は鑛脈が、その中に在るとなると、忽ち反射されて來て、後から放射された電波と干渉を起すのである。又何遍も掘鑿機が滅茶々に壞れてその度に死者の無い事はない。最後の一秒に逃げ損つた人間は押し潰されてしまつた。一酸化炭素中毒や貧血症は極く珍しくない現象だ。更にこのトンネルでは、新しい種類の病氣までも出來た。それは潜水函の労働者に見られる潜函病によく似たものだ。この新しい病氣は、皆の中では「潜水夫病」、「背中曲り」と言はれた。アランはこの著しく目に立つて來た病人達のために、海岸にその病人だけの爲めの休養所を建てた。

度々こんな事はあつたが、全體として見れば、六年間にトンネルで死んだ犠牲者の数は、他の大工事に比べて決して多いものではない。總計一千七百十三人で、比較的少い數字を示してゐる。

けれども工事開始第七年十月十日は、アランの最大悪日であつた……

十月になると、毎年の例として、アランは亞米利加の工事場所をすつかり検査した。この検査は幾日もかゝつた。技師達や事務員達は、これを「最後の審判」と名付けたものだが、十月四日にアランは「市街」を検査した。労働者の住居、屠殺場、浴場、病院を見て廻つた。又細君のモオドの恢復患者療養所も見た。モオドは一日中何か興奮のし續けで、その療養所の監督振りについて、アランからお世辭を言はれると、眞赤になつてしまつた。翌日アランは事務所ビルディング、貨物専用停車場、工場などを見廻つた。その工場にはダイナモが振動し、爆音を立て、超急速唧筒やドリリングス唧筒や、坑内通風機や壓搾機が、無限に動いてゐた。

その次の日にアランはホッピー、ハリマン、技師のベエルマンと一緒に、トンネルへはひつて行つた。

トンネルの検査は幾日も續いた。アランは各停車場、すべての機械、すべての回避線、地下道中のあらゆる横坑、あらゆる倉庫を検査したからである。或る場所で用が済むと、シゲナルで列車を停めて、その貨物車に飛び乗つては、もう少し先へ進んだ。

地下道は穴倉のやうに眞暗だ。時々無数の光が傍を走り抜ける。その列車には組立てた鐵材とその鐵材の間に人間がぶら下がつて載つてゐる。赤いランプが一つ光つて列車の警鈴が鋭い音を立てる。すると人影が右左に逃げて散る。眞暗な坑道は、その中を突進する列車の音で鳴り轟いた。割れるやうな、折れるやうな、爆發するやうな音を立てた。鋭い叫喚が遠くの眞暗闇の中へ響いていつた。何處かで狼の吠える聲がする。水から出た河馬が、鼻息を吐くやうな、猛烈な吹く音がする。さうかと思ふと一つ眼の巨神の大きな荒つばい聲が、怒り哮つてどしどし遣つてくるやうにも聞える。お互ひの話は一言もはつきりとは聴取れない。地下道を貫いて、七面鳥の鳴くやうな大笑ひの聲が聞える。最後には、かういふすべての不思議な氣味悪い物音が、みんな一緒になつて、トンネルは何か白で挽くやうな音を立て、怒號し、號泣する。すると忽ち乗つてゐる列車は、鋭

い響と騒がしい音の暴風雨の中へ飛込んで、人のしやべる言葉さへ分らなくなつてしまふ。掘鑿機のうしろ四十キロメートルのあたりで、トンネルは猛烈に轟いてゐる。まるで巨大な天の羊の角の中へ、地獄全體がぶち込まれるやうだ。此處では電燈や探照燈が仕事場を照して、白熱した熔鑪でも見るやうだ。

アランがトンネルに来てゐるといふ通知は、忽ちばつと擴がつた。何處かベアランが遣つてくると……埃と泥で誰が誰やら分らない筈だが、それでも直ぐ分つて……その連中は「マックの歌」を歌ひ出すのである。

「萬歳三唱、まだ足らぬ

も一つおまけの萬歳だ

マックが來たら脱帽だ

マックはおいらの英雄だ

マックと來たら腕つきき

何でも出来る大將だ

豪勢な野郎よ、このマック

萬歳三唱、まだ足らぬ

マックにやおまけにもう一つ」

岩石輸送の列車には、交代して歸つて行く労働者の連中

が乗つてゐた。この列車からも歌聲が起つて、坑道の轟々と鳴り響いてゐる中を、奥の方へ反響した。

アランは人氣があつて、労働者と資本家との間の狂熱的な憎惡の許す限りに於ては、使つてゐる連中から好かれてゐた。アランは何百倍といふ力を持つてゐるのだが、みんなと同じ性の男だからである。

「マックかい……」と皆は言ふ。「あいつは、さうさ、好い野郎……」とかう言ふだけであつたが、これは最大級の讚辭であつた。

特にアランの人氣を助けてゐたものは、「日曜日の面會」である。この面會に就ても次のやうな意味の歌が一つある。「心配事があつたら、一筆書いてマックの所へ遣るがい。ちやんと物の分つた男だ。おれ達の仲間の一人だ。手紙より何よりもつと好いのは、日曜の面會に出掛けることだ。おれはよくあの男を知つてゐるが、あの男は、きつとお前の言ひ分を聞かないでは歸へすまい。あいつは労働者の心持を一から十まで心得てゐる男だ。」

この坑道の「煉獄」では、電氣綴釘機が、まるでプロペラが勢凄じく風を切る時のやうな、ぶん／＼いふ音を立ててゐた。鐵材が物凄じい音を立てた。此處でも皆は歌を唄つ

た。汚ない顔から、目ばかり眞白く輝いた。大勢の口は一樣に開くが、その聲は、さつぱり聞えない。

先に掘り進められた南地下道の、最後の三十キロメートルは、殆ど全部を徒歩で歩くか、のろ／＼と進む貨物列車に乗つて行つた。このあたりの坑道は、まるで粗削りの柱の森だ。無数の梁材の足場だ。何の音とも分らない、恐ろしい騒音に、あたりは揺れ通しである。その音のひどさを今忘れたかと思ふと、又直ぐ耳を打つ。又忘れるとすぐ繰返した。この邊の熱は攝氏四十八度で柱や梁を割つてしまつた。かういふ材木へは、度々水を掛けたり、絶えず通風機から新鮮な冷たい空氣が吹込まれたりしてゐたのだが、それでも駄目である。空氣は悪く、使ひ古された、とてもひどい坑内の空氣である。

或る小さな横坑に、油だらけの汚らしい半裸體の死骸があつた。卒中にやられた機械組立工である。その死骸のまはりには、大騒ぎの勞働だ。忙がしく往來する足は、その上を跨いで行つた。この死骸の眼を瞑らせてくれる人さへなかつた。

アラン一行は、「地獄」へ入つて來た。轟々たる砂塵の渦巻の眞中に、背の低い、土氣色の顔の日本人が一人、彫像

のやうに動かさずちつと立つてゐて、燈火を使つて命令を下してゐた。その日本人の持つ反射器は、赤く白く光を投げた。時々綠色の光線を、掘つてゐる一組の連中の處へ投げる。するとその連中はせつせつと働いてゐるのだが、死骸のやうに見えた。

此處では誰もこの一行に注意するものも無かつた。挨拶もしない。歌も歌はない。全く疲れ果てた人間が、半ば意識を失つて、無茶苦茶に動いてゐるのである。この連中はそんな一行に注意するよりも、仲間の者に注意しなければならぬ。喘ぎ／＼、石ころの上を引き摺つて行く柱だとか、まるで皮でも剥かれたやうな、筋だらけの六人の腕が、貨車の上へ投げ込まれた石塊だとか、そんなものに打ち倒されないやうに、他の人のする事をよく見てゐないといけないのである。

地下道もこの邊は餘程深い。海面下四千四百メートルである。燃えるやうに熱い空氣には、埃の粉が一杯交つてゐて、氣管を傷ける。ホッピイは新鮮な空氣に飢えて、絶えず欠伸をしたし、ハリマンの眼は、赤ら顔から突き出て來て、窒息でもしやうな様子である。けれどもアランの肺臓は、酸素に乏しい空氣でも平氣であつた。轟々と鳴り響いてゐる

る仕事、あちこち動き廻る人間の群、この中にはひつて來て、アランは元氣が出て來てゐる。アランの眼は、知らず識らず支配者のやうな、勝利に誇つてゐる輝きを帯びて來た。アランはいつもの沈着がなくなり、いつもの黙まり屋がさうでなくなつた。あつちこつち歩いたり、大聲を出したり、身振りをして見せて、やがてアランの筋肉隆々たる背中が、汗で光り出した。

ハリマンは岩石の見本のやうなものを片手に、アランの方へ俯ひ寄つて來たが、それを眼の前に突付けて見せてから、兩手を口に當て、アランの耳の傍で呷鳴つた。「これがあの、新發見の礦物だ。」

「礦物か」とアランはやつぱり同じやうにしながら大聲で問ひ返した。それは錆のやうな褐色で、無定形の塊であつた。ぢきに碎ける脆い質だ。このトンネル工事で見付けたのが、地質學上最初の發見である。この新發見の礦物は、サブマリウム(海底礦)といふ名を付けられたが、非常に多量にラヂウムを含んでゐて、熔鑛精鍊會社からは毎日のやうに、その礦物の大鑛脈に掘り當てはしないかと問合せが來てゐた。この事をハリマンはアランの耳の傍で呷鳴つた。アランは笑ひ出した。「勝手な事をいふ奴等だ。」

掘鑿機から滑り下りた一人を見ると、赤い髪、恐ろしく筋骨逞しい、ゴリラのやうな長い腕をした男だ。泥と油にまみれた一本の柱のやうだ。眠さうな眼蓋の上には、ひどい埃が糊のやうにべつとりくつ着いてゐる。一寸見た所は岩石運びの工夫のやうだが、實はアラン股肱の、最も偉い技師の一人で、オニールといふ愛蘭人だ。右腕から血が出てゐる。その血は泥とまじつて眞黒な塊りになり、車輪へ注す油のやうだ。しつきりなしに埃を口から吐き散らして、嘔みをする。一人の勞働者がこの男に水を掛けて遣つたが、どう見たつて象の水浴びといふ圖である。オニールは素裸で、飛んでくる水を浴びながら、身體を廻したり屈めたりしてゐたが、やがて水をだら／＼垂らしながら、アランの所へ遣つて來た。

アランはそれを迎へて、握手をしてから、オニールの右腕を指さした。

するとこの愛蘭人は頭を振つて、大きな兩手で、頭の髪の水を掻き落した。

「片麻岩の色がどし／＼濃くなつてくるよ。」とオニールは、アランの耳の傍で呷鳴つた。「色は濃くなるし、硬くなつて來た。例の赤い片麻岩なんか、これから見ればまるで

玩具だ。一時間毎に掘鑿機の頭を、新しく代へないといか
 なんて。それに又暑いなのんの、堪りやしない。」

「ぢきに上の高い所へ歸れるよ。」

オニールは齒を出して笑つて、「三年も経てばね」と呷鳴
 つた。

「先の方に水は無いかね。」

「無い。」

急に皆は緑色に、幽霊のやうな鉛色になつた。あの日本
 人が、燈火の光をこつちへ向けたのである。

オニールは物も言はずアランを傍に押しつけた。そこへ
 掘鑿機が歸つて来た。

交代が三組もあつた間、アランは待つてゐた。それから
 ハリマンやホッピーと一緒に岩石列車に乗つて、歸途に就い
 た。みんな疲れてすぐ眠つたが、アランは寝てゐながらも、
 この列車が、トンネルの外の方へ向ふ四百キロメートルの
 長い旅の間に受けたあらゆる障害を感じた。制動機がひど
 く鳴る。各車輛がぶつかり合ふ。そのため岩石が線路に轉
 げ落ちる。人影が車に攀ち登つてくる。叫び聲がする。赤
 い光がばつと射す。列車は或る回避線に入つて、長い間其
 處に停まつてゐた。アランは半ば眼を醒まして見ると、自

分の上を暗い人影が跨いで行つた。

「これはマックだぞ。踏み付けるなよ。」

列車は出發した。停車した。また出發した。急に猛烈な
 勢で走り出した。するとアランはトンネルの中へ突進する
 やうに思はれて、やがてそのまゝ深い眠りに落ちてしまつ
 た。

アランは目を覺ました。眞晝間の眩しい恐ろしい光が、
 きらきら輝くメスのやうに、眼の中へ飛び込んだ。

列車は停車場ビルディングの前に止まつた。アランの一行
 は、つと息をついて、「最後の審判」は終つた、しかも無事
 に濟んだと思つたのである。

技師達は浴室へ行つた。ホッピーは眠つたやうな格好で、
 湯槽に横たはつて、巻煙草をふかしてゐた。それと反對に
 ハリマンは河馬のやうに頬を膨らませて吹いたり、しゅつし
 ゆつ言つたりしてゐた。

「ホッピー、朝飯につき合つてくれんか。」とアランは訊い
 た。「モオドはもう起きてるだらう。七時だからな。」

「僕は寝なきやいかん。」とホッピーは巻煙草を口に啣へた
 まゝ答へて、「今夜又もう一度穴へはひらなきやならん
 だね。だが晩飯には必ず歸つてくるよ。」

「ところが生憎その時分には、僕はもうこゝにはゐないん
 だ。」

「紐育へ行くのかい。」

「いや、バッファロオだ。掘鑿機の錐の新型を試験するん
 だ。でぶのミツレルが発明したやつだ。」

ホッピーはそんな穿孔機なんぞには興味が無かつた。そこ
 ででぶのミツレルの事に話を移して、ホッピーは一寸笑つ
 て、眠さうに「昨日僕ん所へアツォオルのペンドルトンから
 手紙が来たがね、そのミツレルといふ男はひどい酒飲み
 だよ。」

「獨逸人なんていふ奴は、みんな底抜けの飲み助にきまつ
 てるよ。」

アランは一寸抗議するやうな調子で言つて、足をブラッ
 シで擦つた。

「ペンドルトンの手紙だと、そのミツレルの園遊會にでも
 招かれた日には、誰も彼も浴びるやうに飲まされて、ひど
 い目に逢ふんださうだよ。」

丁度此時に、例の小さい日本人がみんなの傍を通り過ぎ
 た。ちやんと身装りを整へてゐる。もう二度目の休息を終
 へてトンネルへ歸るのである。この日本人は丁寧な挨拶し

て通つた。

ホッピーは片方の眼を開けて、叫んだ。

「ジャップ、お早う。」

日本人が戸を締めて出て行つてしまふと、アランは言つ
 た。「どうして、仲々使へる男だぜ。」

それから二十四時間経つと、その使へる男はもう夙うに
 死んでゐた。

二

翌日の朝、四時數分前である。大惨事が起つた。

この不祥事が起つた十月十日に、南坑道の掘鑿機が、岩
 山を打ち砕いてゐた場所は、トンネルの入口から正に四百
 二十キロメートルの處であつた。その場所から後へ三十キ
 ロメートルの處には、平行地下道のいろんな機械が動いて
 ゐた。

丁度その四時數分前に、岩山は爆破された。昨日の日本
 人が、相變らず命令を下すあの探照燈は、轉がり落ちる岩
 石や、それを煙のやうに埃が騰つてゐる切石の山へ、どし
 どし積み上げてゐる半裸體の一團の人間を、眞白に照して
 見せた。丁度この瞬間だ。或る者は兩腕を高く舉げた。或

る者は仰向けにぶつ倒れた。或る者はがくんと倒れ伏した。煙が立つてゐる切石の山は、猛烈な勢で忽ちこつちの方へ崩れて来た。渦巻く雪崩のやうに、體も頭も足も呑込むのだ。あんなにひどい工事の騒音も、或る一つの殷々たる音に消されてしまった。その音は餘りに恐ろしく大きいので、人間の耳には聴き取れない位であつた。一つの壓力が頭の周圍を包んで、鼓膜が破れるやうであつた。小さな日本人は忽ち倒れた。邊りは眞黒な夜になつてしまつた。

この「地獄の連中」がその暗くなる瞬間に目に見たものは、すぐ傍の一人がよろめく姿や、歪んだ口や、倒れかけた一本の柱だけであつた。誰一人耳に何か聞いた者はない。掘鑿機は、急行列車の機關車二臺の力によつて前進する、全部鋼鐵製の戰闘艦とも言ふべきものだが、それがまるでトタン圍ひのバラックのやうに、線路から浮き上つて壁に叩きつけられ、へな／＼と壓し潰されてしまつた。人間の身體が岩塊の雨霰の中を飛ぶのは、空中を行く彈丸のやうであつた。鐵の岩石貨車は掃き飛ばされ、粉々に裂かれ、丸められた塊になつた。林立した柱は爆發して倒れ、落ちてくる岩石と一緒に、生命あるもの一切を埋めてしまつた。これがたつた一秒間の出來事である。一瞬間が過ぎると、

もうその後は静まり返つて、この爆發の轟きは、遠くの方へ響いていつた。

この大爆發が打ち砕いたのは、二十五キロメートルに互る距離の間であつた。トネルの中は、八十キロメートルの間唸り轟いた……丁度大洋が地下道中へ響いてくるやうであつた。大きな砲彈が遠くへ飛んで行くやうな物音が一度聞えると、その後は静寂がやつて来た、恐るべき静寂が……それから砂塵の雲が……その埃の後からは煙が来た。

トネルには火事が起つたのである。

列車が何臺も煙を衝いて、氣が狂つたやうに飛び出して来た。驚いて度を失つた人間が鈴生りだ。列車の後には、眞暗闇の中を突走つて来た、誰とも見分けのつかない幽靈のやうな姿だ。その後からは何にも出て来なかつた。

この慘事の起つたのは、運悪く丁度休憩の交代時間に當つてゐたから、トネルの突先の二キロメートルの間には、約二千五百人の人間が詰め込まれてゐた。その半分以上は一秒の間に、打ち砕かれ、引き裂かれ、ぶち殺され、埋められたが、叫び聲一つ耳にした者は誰もなかつた。

けれどもその次には……大爆發の轟きが遠方に消える頃には……眞黒な地下道の死のやうな静寂は、忽ち破られた。

破つたものは、絶望の叫びだ。苦痛を訴へる聲高い悲鳴だ。氣の狂つた高笑ひだ。臨終の苦みを泣き喚く聲だ。助けを呼ぶ聲だ。呪詛だ。咽喉を鳴らす音だ。動物的な唸り聲だ。隅といふ隅には、何かと掘り始めた。何か動き出した。石ころがころ／＼落ちる。板が破れ飛ぶ。滑り落ちる音。地面をずつて行く音。軋る音。恐るべき暗闇。落ちてくる砂塵は、濃い灰の雨だ。何處か一つの梁が傍へどけられて、人が一人喘ぎながら、その邊の穴から匍ひ出して来た。嘔みをして、砂塵の山の上に蹲つて呆然とした。

やがてこの男は叫んだ。「おうい、みんな、何處にゐるんだ。一體何處だ。」間斷なしに同じ事を叫ぶのだが、返辭といつては、只亂暴な叫びと動物のやうな呻き聲ばかりだ。それでもこの男は、益々大聲を上げて吼えた。驚愕と苦痛に吼える聲は愈々高くなるばかりだ。その聲は益々鋭く、益々氣の違つたやうになつて来た。

ところが急に、その男は黙つてしまつた。眞暗闇の中に火の光が閃いたからだ。一軒の家のやうな格好の滅茶苦茶な山の隙間から、焰がちら／＼見えたかと思ふと、忽ち矢を射るやうに高く、煙り燃える火の束が上がつた。この男は、黒ん坊で、大聲挙げたけれど、その叫び聲の尻は、驚

いて咽喉をごろ／＼言はせるばかりであつた。驚いたのも無理はない、その焰の眞中に一人の人間が現れたからである。その人間は、焰の中を上へ攀ち登つて行く。黄色い支那人のやうな顔で、身體一面から眞黒な煙を吐き出してゐる。恐怖を撒いて歩く幽靈だ。この幽靈は、音も立てず上へ／＼と匍ひ上がつて、到頭その山の天邊位の高さに行つたと見えたが、忽ち滑り落ちる音がした。この瞬間に、やつと黒ん坊のぼんやりした頭にも、記憶が浮んで来た。その幽靈は誰だかつた。

「ホッピー。」と黒ん坊は唸つた。「ホッピー。」

ホッピーの耳には、何も入らない。何にも返辭をしなかつた。よろめいた。膝を衝いた。着物から火の粉を叩き落した。咽喉を鳴らした。空氣を呑込まうと喘いだ。ホッピーは呆然として、暫く地面に蹲つてゐた。火の光が射してゐる所へ、黒い一點の塊だ。その内に倒れるやうな格好をしたが、兩手を衝いてやつと止まつて、それからゆつくり機械的に匍つて来て、自分の名をさつきから呼んでくれる聲の方へ、本能的に向つて来た。ホッピーはだしぬけに、何か黒いものに衝き當つて、それつきり進まなくなつた。其處には、黒ん坊が血が溢れさうになつた顔で、蹲つて唸つてゐ

る處であつた。ホッピーを注視してゐるものは、二つの白い眼でもあり、一つの白い眼でもあつた。黒ん坊の片方の眼にしよつちゆう血が一杯に充ちてくるものだから、黒ん坊はその眼を痙攣的に、ぐつと開かずにはゐられなかつたのである。

暫く二人は向ひ合つて蹲つて、お互ひの顔を見てゐた。「あつちへ行け。」

と暫くしてからホッピーは囁いた。けれども、自分でも何の事やら分らずにかう言つたのだ。それから自動人形のやうに立ち上がった。

その體へ黒ん坊がかじり付いた。

「ホッピー。」と黒ん坊は驚いて吼えた。「ホッピー、何が起つたんですか。」

ホッピーは唇を舐めた。何か考へようとする様子だ。

「あつちへ行け。」囁いた聲でかうホッピーは囁いたが、相變らずぼんやりしてゐる。

黒ん坊はホッピーに、しつかり抱き着いて起き上がらうとしたが、何か一聲叫びながら地面にぶつ倒れた。「おれの足は。」と黒ん坊は唸つた。「一體どうしたんだ……おれの足はどうなつ……」

ホッピーには何も考へる力が無い。全く本能的に動いて、倒れる人を助け支へて遣る動作をした。ホッピーは、黒ん坊を立ち上げらせようとしながら、黒ん坊と一緒に二人共ぶつ倒れてしまつた。

ホッピーは顔を梁にぶつゝけた。頭が割れたかと思ふ位痛かつた。この痛さがホッピーの目を覺ました。痙攣したやうにぼんやりしてゐながらも、顔のあたりを一つがんと遣られたと思つた。そして、も敵ひさうもないが、無茶苦茶に防いで遣れと思つて立ち上がった迄は、半ば無意識であつた。だが……だが氣が付いて見ると、ひどく妙な具合だつた。一人として相手は見えないのに、自分は砂埃の眞中で、両手の拳を振上げてゐる。ホッピーは眼が醒めた。急にはつきり分つた。今自分は地下道にゐて、しかも何か恐ろしい事が起つたに相違ないのだ……ホッピーは震へ出した。あらゆる背中の筋肉は、驚いた馬の筋肉が引き釣るやうに、ぎゆつと動いた。こんなに背中の筋肉が動いたのは生れて始めてだ。

ホッピーはやつと物を考へる事が出来るやうになつた。

「大惨事が……」と思つた。半ば身を起したが、見ると掘鑿機が燃えてゐる。驚くべ

き事には、あたり一面、素裸や半裸體の人間が山をなして、砂塵と土砂の上に、無様な格好に手足を曲げて横はつてゐる。ぢつと動かない。何處にもゐる。ホッピーの近くにも、周圍にも。口をぽかんと明けた人間だ。柱の間に締め付けられて、頭を押し潰され、長々と横に寝てゐる人間だ。刺し殺された人間だ。粉々に引き千切られた人間だ。何處にでもゐる。恐ろしさに、ホッピーの髪の毛は逆立つた。願まで埋められてゐる人間があるかと思ふと、絲玉のやうに丸められてしまつたのもゐる。あたりには無数の石塊、梁、柱、貨車の残骸が散らばつてゐるが、無数の頭、背中、長靴、腕、手が、そのごちや／＼の中から睨み付けてゐる。睨んでゐる方が多い、とホッピーは思つて、恐ろしさに身を縮めた。がた／＼震へ出した。ぶつ倒れまいとして一生懸命に立つてゐた。やつと今になつてホッピーは、半ば暗い地下道の遠くにも近くにも充ちてゐる、あの奇妙な音が耳に聞えた。猫が鳴く聲だ。何か動物が悲しんで泣いたり叫んだりする聲だ。鼻息を立てる。吼えてゐるらしい。……今迄に聞いた事のない、決して聞いた事のない音だ……それがみんな人聞の聲だ。ホッピーの皮膚は、顔は、手は、寒さに縮まつたやうに硬くなつた。足は痙攣してしまつた。直ぐ

傍には一人の男が坐つてゐて、その口の隅から血が泉のやうに湧き出てゐる。この男はもう息をしてゐないが、だらりとした腕は、丁度下まで届いて、體を支へてゐるやうだ。ホッピーの耳には、その血のびちや／＼言ふ音、さら／＼流れる音が聞えた。見るとそれは、あの背低の日本人だ。その日本人の手が急に折れたかと思ふと、頭が下がり出す。地面に跳ね返る。

「あつちへ行け、行け。」恐ろしさに震へながらホッピーはかう囁いた。「こんな所にゐられるもんか。」

黒ん坊は、ホッピーの帶革を掴んだ。傷を受けない片方の足で、せめて後押しでもしようといふものらしい。二人は塊りになつて、柱と死骸と岩石だらけの所を這ひながら、あの叫び、あの動物のやうな音を目蒐けて進んだのである。

「ホッピー。」と黒ん坊は呻いて、心配と驚きに噎り泣きし始めた。「ホッピーさん、神様があんたの魂にお恵み下さるやうに……わしを捨てないで、おくんせえ、わしを此處に置いて行かないで、おくんせえ。あゝ、神様、どうぞ……わしは女房と二人の小さい子供を、トンネルの外に残して来た……この可哀さうな黒ん坊を棄てないで、おくんせえ。どうぞ後生だから。」

燃えてゐる掘鑿機は、眞暗な混沌の中へ、眩い意地の悪い火の舌と、眞黒に動く影とを投げてゐた。ホッピーは石の間から手足や頭の出てるのが見えるので、それを踏まないやうに氣を付けた。顛覆した二臺の鐵材貨車の間に、突然一人の人影が現れた。それが手を伸ばして、ホッピーを探るやうにする。ホッピーはびつくりして身を引いた。そして誰とも分らない人の顔を見てゐると、その顔は又ホッピーを見詰めたが、白痴のやうな表情をしてゐる。

「どうする積りだ。」とホッピーは死にさうに愕きながらかう訊いた。

「出るんだ。」とその顔は喘ぐやうに言ふ。

「あつちだよ。」とホッピーは答へた。「それぢや方向があべこべだ。」

その顔の表情は少しも變らないやうに見えた。けれどもそろ／＼後へ退り始めた。するとその姿はふつと音も立てず消えてしまつた。ごちや／＼の山に呑み込まれたやうであつた。

ホッピーの頭は多少はつきりして來たので、考へを纏めようとした。方々の火傷が痛む。左の腕からは血が出てゐる。その外は大した事は無い。ホッピーはアランに頼まれて、オ

ニールへの傳言を言ひに來た事を思ひ出した。爆發の十分ばかり前、おれは岩石貨車の傍で、あの赤い髪の愛蘭人のオニールとまだ話をしてゐたつけ。それから掘鑿機に攀ち登り始めたのだが、何故そんな事をしたのか、それは思ひ出せない。掘鑿機に足を掛けるか掛けない内に、下の地面が急に揺れ出したと思つた。びつくりした眼が二つ三つ、おれには見えた……それつきりて後は何も見えなかつた。何もかも其處迄はつきり知つてゐるが、一體どうして掘鑿機の外へ出て來たものか、これはどう考へたつて不思議だ。爆發の勢で投げ出されたものかな。

呻いたり泣聲を出したりする黒ん坊を後に引摺り乍ら、ホッピーは状況をすつと考へて見た。全然望みが無いとも思へない。昨日機械組立工の死んでゐた、あの横坑までこぎつければ助かる。あそこには繃帯材料がある。酸素吸入装置がある。危急用の電燈がある。その電燈をアランが試してみた事さへ、ホッピーはつきり思ひ出した。あの横坑は右手にある。だがどの位離れてゐるだらう。三哩か。五哩か。それは分からなかつた。其處に達することが出来なければ、ホッピーは死ぬまでだ。煙は一分毎に濃くひどくなつて來た。ホッピーは自暴自棄に這つて進んだ。

すぐ傍から聲がした。喘ぐやうにホッピーの名を呼ぶものがある。止まつて耳を澄ますと、胸は早鐘を撞くやうだ。

「こつちだ。」その聲は喘いで言ふ。「僕だよ、オニールだ。」

オニールであつた。あの偉い愛蘭人であつた。あんなに場所ふさげだつたこの大男の體は、柱の間に挟まれて坐つて、顔は右の片面が血まみれで、左はすつかり灰色だ。灰をなすり付けたやうだ。眼は苦痛を堪へて、眞赤な二つの火だ。

「僕は駄目だ。」とオニールは喘いで言ふ。「何が起つたんだ。僕はもう駄目だ。たまらない。苦しい。僕を射ち殺してくれ。」

ホッピーは梁を一本傍に退けようとした。あらん限りの力を出して遣つてみたが、どうしたものか、突然地面に倒れてしまつた。

「そんな事、無駄だ、ホッピー。」とオニールは又言つた。「僕は駄目だ、苦しい。僕を射ち殺してくれ。君は助かれ。」

その通りオニールは見込がなさうだ。ホッピーにもそれが分つた。ホッピーは隠囊からピストルを取出した。手に取ると、この武器は、何といふ重さだ。ホッピーは腕を擧げることが出来ないやうに思つた。

「オニール、眼をつぶり給へ。」

「そんな必要はないぞ……」オニールは微笑したが、絶望の自暴自棄の微笑だ。「マックにさう言つて呉れ、僕に手落ちちは無いんだと……ホッピー、お世話になつたな。」

吹き付ける煙は目に痛かつたが、火光は段々薄くなつて來た。そこでホッピーは、もう下火だ、消えてくれよばいと思つた。さうなれば、もう危険は無い。ところがその時だ。短いけれど猛烈な爆發が、二度轟いた。「あれは爆薬だ。」とホッピーは思つた。

忽ちあたりがぐつと明るくなつた。高く立つ柱が、一本炎々と燃えて、地下道のずつと遠くまで照らしたのである。ホッピーの目に入つたものは、大勢の人間だ。地面からもくもく湧いて出る人間だ。のそ／＼少しづつ、少しづつ、前へ攀ちるやうに行く人間だ。裸の汚れ腐つた腕や背中。それが火光に照らされて硫黄のやうに黄色い。泣く聲や叫ぶ聲が、岩石の間から聞える。手がにゆつと出て、指を妙な風に握るやうにして何か合圖する。向うの方の地面は急に高く上がるやうだが、こつちのいろんな物が積み重なつた層は、反對に下がる一方のやうに思へたりする。

ホッピーはこそ／＼這つて進んだ。喘ぐ。顔から汗が流れ

る。しかも一生懸命のホッピーは半ば無意識だった。いろんな物の間から腕が突き出て、ホッピーの足を掴まうとするが、ホッピーは一向気が付かずに進む。天井から滴り落ちる血の雨の中を、まるで無感覚なホッピーは攀ぢるやうに進むばかりだ。一人の人間には、實に血が澤山あるものだ。ホッピーはさう思ひながら、腹這ひにころがった死人の身體の上を、構はず行く。

この恐るべき時に、運命の神がホッピーの背中に抱き付いたまゝ、苦痛と恐怖に吼えたり泣いたりしたが、時々ホッピーの髪の毛に接吻して、どうぞ棄てないでくれと哀願した。「わしの名前は、ウオシントン・ジャックスと云ひやす。」と黒ん坊は喘いで言ふ。「わしはジョオジア州のアゼンスの生れで、ダニエルズビル生れのアマンダ・ベルを女房にしやした。三年前からトンネルの仕事をする事になりやした。石運びでがす。二人子供がありやす、六つと五つでがす。」「こいつめ、黙れ。」とホッピーは叫んだ。「そんなにしつかりと抱き付くな。」

「あゝ、ホッピーさん。」とジャックスはお世辭に變つて、「あんたは好えお人だ、みんながさう言ひやす……あゝ、ホッピーさん……」と言ひながら、ホッピーの髪や耳に接吻した。

けれども、急にホッピーは黒ん坊の手を殴つた。黒ん坊は氣違ひのやうに怒り出した。ホッピーが自分を振り振つて行くのだと思つたからである。有りつた力の力で、黒ん坊はホッピーの頸を両手で締めつけて、喘ぎながら「やい、ホッピー、手前の積りぢやあ、おれを此處でくたばらせる事が出来ると思つてゐやがるな。手前の積りぢやあ……あつ。」と言つたが、黒ん坊は大きな聲を擧げて地面に倒れた。ホッピーが拇指を、黒ん坊の兩眼に突込んだからだ。

「ホッピー、ホッピーさん。」と黒ん坊は泣き聲になつて哀願したが、今度は本當に大聲で泣き出して、両手を差出した。「わしを棄てゝ行かないで、おくんせえ、あんたのおつ母さんに免じて、あんたの年取つた好えおつ母さんに……」

ホッピーは空気を吸ひ込まうと、大きく口を開いた。胸は固く螺旋で締められたやうだ。體全體が硬くなつて、長くなつて、もうこれでおれもおしまひかと思つた。

「こつちへ來い。」やつと又再び息をするやうになつてからホッピーはかう言つた。「仕様がな奴だ。おれ達はこの列車の下を潜り抜けるんだ。おれを締め付けるやうな事をもう一度してみろ、すぐ貴様をぶち殺すぞ。」

「ホッピーさん、あんたは好えお人だ。」それからジャックス

は、片手でホッピーの革紐にぶら下がつて、殴り泣いたり呻きながら、ホッピーの後を這つて行つた。

「莫迦、急ぐんだ。」ホッピーの頼頼はづき／＼して、今にも破裂しさうだ。

地下道は三哩の間が、殆ど破壊され、柱と岩石に埋められた。何處にも人が攀ち登つて進んで行くのが見えた。その人達は血まみれで、手足をもぎ取られて、號叫し、めそめそ泣き、物も言はずに、出来るだけ早く進まうと喘いでゐるのである。脱線してゐる岩石列車や、材料列車の上を攀ち登つて行く。滅茶苦茶になつたものゝ山を這つて上がつたり下りたりする。梁の重なつた間を、無理矢理に通り返ける。先へ進めば進む程、道連れが多くなつて、みんな大急ぎで進むのである。この邊になると四邊は眞暗で、時々弱々しい光りの火の舌が、こつちへ來るやうに見えるだけだ。煙 進んで來た。目でも何でも痛い。その煙の匂ひがして來ると、皆の者は無茶苦茶に足を早めた。

負傷してそろ／＼這つてゐる者に追ひ附くと、我武者羅にその體の上を乗り越えて行く。ほんの一步進みたいばかりに、拳を揮つて殴り合ひが始まる。やがて一人の有色人

種は小刀を振廻して、邪魔になる人間を片端から手當り次第に刺し倒した。顛覆した貨車が一臺と、散亂した柱の塊りがあつて、その間の狭い通路へ來ると、本當の戦争のやうな騒ぎが起つた。ピストルの音が何度もして、それに當つた者の叫喚は、取つ組合ひをしてゐる連中の怒號と交つた。けれども一人々々その隙間に消えて行つて、その後から負傷者が呻きながら這つて續いた。

その中に道は十分に樂になつた。この邊にはもう邪魔な列車も少しし、爆發で折れた柱も全部ではない。唯この邊は全くの暗闇だ。喘ぐ。齒軋りをする。汗と血を垂らして、滑り落ちたり攀ち登つたりして、逃げる連中が前へ／＼行く。梁に駈け寄つて叫ぶ。貨車から飛び下りて道を探す。前へ。前へ。やがて段々に自分だけは助りたいといふ本能の荒れが靜まつて來ると、仲間思ひといふ感情がそろ／＼甦つて來た。

「こつちへ來い、こゝは通れるぞ。」

「通り抜けられるのか、此處は。」

「貨車の右を行くんだ。」

大慘事から三時間経つと、破壊された木組の地下道を通

げ出した連中の最初の一組が、平行地下道に達した。此處まで来ても電燈線が切れてゐる。眞暗闇の夜だ。皆は憤慨して恐ろしい聲を出して呶鳴つた。列車も無い。電燈も無い。平行地下道の連中は、もう夙うに逃げ出して、列車はみんな出た後だ。

煙が遣つて来た。そこでまた例の氣が狂つたやうな競走が始まつた。

この一組は一時間ばかりの間、暗闇の中を只前の方へ滑つて行つた。走つた。突進した。やがて先頭の幾人かは、疲れて倒れた。

「莫迦々々しいぢやねえか。」と叫ぶ連中がある。「四百キロメートルなんて、とても駈けられつこねえぢやねえか。」

「そんならどうするんだ。」

「待つてるんだ、みんなが迎へにくる迄よ。」

「迎へにくるんだつて。誰がくるんだ。」

「その中に腹が減つて死んぢまわあ。」

「倉庫は何處だ。」

「危急用の電燈は何處だ。」

「さうだ、何處にある。」

「マック……」

「さうだ、待つてゐろ、マックが……」

すると忽ち皆の者の復讐心が燃え上つた。「待つてやがれ、マックの野郎。おれ達が出て行つたからにや……」

すると又煙が遣つて来た。皆は又突進を始めた。その中にまた足がひよろ／＼になつた。

「占めたッ。停車場があるぞ。」

停車場は暗く、人一人ゐない。機械はぢつとしてゐた。誰も彼もこの大爆發に吹き飛ばされたのである。

例の一群は停車場に侵入した。停車場は馴染の場所だ。其處へ行けば、鉛で封をした箱に、食料品が入つてゐる事を知つてゐた。その箱を一寸開けばよい。

暗闇の中がたびしひどい音がした。實際腹が減つてゐる者は一人も無い。驚愕の餘り空腹なんぞ忘れてしまつたからである。けれども貯藏品の眞中に立たされてみると、

誰しも胃の腑を一杯に詰め込みたいといふ狂暴な本能が目醒めて来た。皆は箱に向つて狼の如く突進した。皆てんで

に隠囊といふ隠囊に一杯食料品を詰め込んだ。その上にまた、驚愕と憤怒で何が何やら分らなくなつて、ビスケットや

乾肉の袋をそこら中に撒き散らしたり、饅頭を何百本も砕いたりした。

「此處に電燈があるぞ。」一人の聲がかう叫んだ。

乾電池の危急用電燈であつた。一寸電流を通ずれば好い。

「待て、スイッチを廻すと承知しねえぞ、このピストルがこはくねえか。」

「なぜ廻しちやいけねえ。」

「そんな事すると、爆發が起るかも知れねえぞ。」

この考へ一つが、皆の者を硬くしてしまふのに十分であつた。それが怖くて、皆はびつたり静まつてしまつた。

するとまた煙が来た。死物狂ひの疾走がまた始まつた。

突然皆の耳には、叫喚と發射の音が聞えた。光も見える。皆は一つの横坑を通つて、平行地下道に雪崩れ込んだ。すると其處でも、幾塊りもの大勢の人間が、たつた一つの貨車のたつた一つの座席を争つて、拳固、小刀、ピストルといふ騒ぎをしてゐるのが遠くの方に見えた。列車は出發してしまつた。すると皆は絶望して、地面にぶつ倒れて叫んだ。

「マックの野郎。マックの野郎。待つて居やがれ、今におれ達が出たら」

三

恐慌がトンネルの中を掃いて通つた。三萬の人間を地下

道の外へ掃き出した。損傷を受けなかつた地下道の連中は、爆發の喰るやうな雑音を聞くと、直ぐさま仕事をやめた。「海水がはひつて来たんだ。」と皆は叫んで、逃げ出さうとしかけた。技師達はピストルを擬して、その連中を引留めた。やがて煙の雲がこつちへ迫つて来た。呆然とした連中が、滅茶々に走つて来た。さうなると、何と脅しても引留めることは出来なかつた。

皆は岩石列車に飛び乗つて、一目散に其處を逃げ出した。或る回避線で、一列車が脱線した。するとその後には續いた十列車が、急停車をさせられた。

幾群も幾群も、平行地下道に雪崩れ込んで、其處の線路に一杯立ち塞がつて、わい／＼騒いだ。何臺も列車が立往生した。かう停めてみたが、その列車はもう人間の山だ。そこで一つの席を争つて、猛烈な争闘が初まつてゐるのだ。この恐慌はとても酷かつた。果して何事が起つたのか、誰にも分らない。分つてゐる事は、何か猛烈に恐ろしい事が起つたといふだけだから一層堪らない。技師達は皆の者を色々に説得して、どうにか落着けようとしたが、その中に列車がどん／＼こつちへ遣つてくると、どの列車にもまるで驚き切つた顔の連中が満載されてゐて、その連中は口を揃

へて「トンネルが火事だ。」と叫ぶ……眞暗な地下道からは煙が這つてくる。さうなると技師達も恐怖に襲はれて来た。ありつたけの列車が外へ向つて突進した。いろんな材料や交代の連中を積んだ列車が、奥の方へ向つて進んで来たが、擦れ違ふ列車の人間の山が、何か荒々しい叫びを擧げて行くので停車した。それから外の方へ逆戻りを始めた。

かうして大惨事から二時間すると、トンネルは百キロメートルの間が、全く何もかも打ち捨てられてしまった。トンネルの奥の、各停車場にゐる機械係も勿論逃げたので、機械はばつたり止まつてしまつた。たゞ所々の停車場には、勇敢な技師が幾人か踏み留まつてゐただけである。

技師のベエルマンは、最後の列車を守つて残つてゐた。この列車は全部で十車輦で、所謂「煉獄」の完成した部分にゐた。その部分は、もう鐵の肋材に釘が打たれてあつて、惨事の場所から後方二十五キロメートルであつた。照明設備は此處でも矢張り故障が起つてゐた。けれども豫めベエルマンが蓄電池燈を用意してあつたから、その明りは煙の中を向うまで照らした。

「煉獄」に働く人は三千人であるが、約二千人はもう行つてしまつて、あとの千人を、ベエルマンはこの列車で連れ

出さうとした。

みんな幾人も組になつて、息せき切つて遣つて来ては、驚いた餘りに氣違ひのやうになつて車に飛び込んだ。それがどん／＼遣つて来た。ベエルマンは辛抱強くいくらでも待つてゐた。「煉獄の連中」の申には、この列車まで戻つて来るのに、三哩も歩かねばならないのが大勢あるからである。

「出掛けろ。出せ。」

「みんなを待つて、遣らうぢやないか。」とベエルマンは呟鳴つた。「こんな場合にけちな眞似をするな。おれのピストルには六發あるぞ。」

ベエルマンは白髪頭の背の低い男で、足が短く、獨逸人だ。洒落も冗談も解しない、生眞面目一方の男だ。

それが列車に沿つてあちこち歩いては、列車の上で興奮して動く頭や拳が煙の中に見える、その方に向つて呪ふ言葉を呟鳴り散らした。

「見つともねえ眞似をするな。お前達はみんなどうせ出られるんぢやないか。」

ベエルマンはいつでも發射の出来るピストルを手に持つてゐた。(この惨事で分つたことだが、どの技師も、みんなピストルは立派に携帯してゐた。)

皆の口々から脅迫する言葉が段々酷くなると、ベエルマンは機關車の機關手の傍へ上つて行つて、その機關手を脅

かして、命令もないのに出發すると射ち殺すぞと言つた。この列車のあらゆる緩衝機、あらゆる鎖、そんな所にまで

一杯人がぶら下がつてゐて、みんな叫んだ。「出せ、出せ。」煙がとても我慢出来なくなつたが、ベエルマンは、まだまだ待つてゐた。

すると一發の音がした。ベエルマンは地上に打ち倒された。列車は出發した。

絶望した幾組もの連中が、その後を眞赤になつて怒りながら追つ駈けたが、やがて息を切らして、喘ぎながら口のあたりを泡だらけにして突立つてしまつた。

この取り残された連中は、四百キロメートルも續く枕木と石塊の道を歩き出した。先へ行けば行く程、益々脅かす調子を張り上げてかう叫んだ。「やい、マック、手前を生かしちや置かねえぞ。」

この連中の後には、ずつと後に、又他の連中が、もつと大勢後から／＼と、どし／＼遣つて来た。

トンネルの中では、恐ろしい競走が始まつた。命を助けたい必死の競走だ。この事に就いては、後に各新聞に一齊

に一杯の記事が出てゐた。

その走る連中が、駈けて遠くまでくればくる程、益々狂暴に、益々氣違ひじみて来た。倉庫でも機械でも、何もかもぶち壊した。それが電燈の輝いてゐる場所へ辿り着いても、まだこの連中の憤怒と心配は減らなかつた。又その中に最初の救助列車が遣つて来て、皆を外へ運び出すといふ事になると、もう全然危険が無くなつてゐても、一番先に列車に乗らうとして、小刀やピストルを持出して争つた。

トンネルのずつと奥で大惨事が起つた時、マック・都市はまだ夜であつた。陰氣な空模様であつた。空の雲は一面に重く低く垂れてゐる。眠ることの無い時代に、最も眠りの無いこの都市が夜の汗をかくやうに、明るく光を投げているのを反射して、空はうす暗く赤らんで光つてゐた。

マック・都市は晝間と同様に、熱病に浮かされたやうに騒音を立てゝゐた。見渡す限りの地面が永遠に動揺しながら、燃え續ける熔岩流にでも覆はれたやうに、火花と火焰と蒸氣とを立騰らしてゐた。何萬と群る燈火は、所々から遠くまで光を放射してゐて、町全體は丁度顯微鏡で見た滴蟲類のやうに見えた。トンネルへ線路が入つて行く入口に近い

高臺には、各工場が立つてゐる。その工場の硝子屋根は緑色に見えて、冬の牙え返つた月光に照らされた氷のやうであつた。警笛と警鈴がけたましく鳴り響き、あたりには到る處に鐵槌の音がして、地面は揺れ通した。

いつもと相變らず、矢を射るやうな列車が、何臺もトンネルの中へ下りて行き、又こつちへ上つて來た。眩しいやうに明るい工場には、ダイナモ、唧筒、通風機などの巨大な機械が、音を立てゝ動いてゐた。

冷たい天氣である。麵麩燒籠のやうに熱いトンネルから戻つた連中は、寒さに縮み上がつて、列車が停まると、いきなり齒をがた／＼させながら酒保に飛び込んで、熱い珈琲を飲んだり、湯で割つた火酒を呷つたりした。それから喧しく騒ぎ立てながら電車に飛び乗つて、寄宿舎や家へ運んで行つて貰つた。

四時を數分過ぎると、忽ちトンネルに不幸が起つたといふ噂が擴まつた。四時十五分にハリマンは起こされて、中央事務所へ遣つて來たが、さすがに疲勞で殆ど倒れさうな様子で、まだ眠さうであつた。

ハリマンは元來が精力的な男で、かう決心したからには挺でも動かぬといふ性であつたが、勞働の戰場で鍛へられ

くると、その群集は自然にかう叫び出した。「ハリマンを出せ。何が起つたのか聞きに來たんだ。」

一人の書記が現はれた。癢に觸る程よそ／＼しい顔付である。

「我々だつて何もはつきりした事は知らんのだ。」

「何だ、書記か。書記なんか引込め。ハリマンに用があるんだ……ハリマンを出せ。」

益々集まつて來た。四方八方から眞黒な束のやうなものが匍ひ寄つて來て、中央事務所前の群集と一緒になつた。

遂にハリマン自身が現れた。蒼白い、年をとつた顔で、疲れて、眠さうである。そのハリマンに向つて、何百人の聲が、「何が起つたのか。」といふ同じ質問を、あらゆる國語、あらゆる調子で浴びせかけた。

ハリマンは何か言はうとする合圖をした。すると一同は靜かになつた。

「南地下道で、掘鑿機の所に爆發が起つた。それ以上は分らん。」ハリマンはかう言ふのも、やつとの事であつた。舌は硬ばつて、口の中に金屬の棒でもあるやうであつた。

狂暴な怒聲が、そのハリマンに答へた。「嘘つけ。詐欺師め。おれ達に教へねえな。」

て、嚴格一方の人間である。けれども今日はひどく意氣銷沈してゐた。夜中を泣き明かしたからだ。昨夜電報が着いてハリマンの何よりも大事な獨り息子が、熱病に罹つて支那で死んだと知らせて來たからであつた。ハリマンは恐ろしく苦悶した。やがて眠りに就かうとして、催眠劑の散藥をいつもの二倍量飲んだのである。だからハリマンはまだ半分眠つてゐるやうな様子で、トンネル内へ電話を掛けて、大慘事の詳しい模様を聞かうとした。詳しい事どころか、確かな事を少しでも知つてゐる者はない。そこでハリマンは無感覺な無頓着な顔付で、安樂椅子に腰掛けて眼を開いてゐながら眠つてゐた。それと丁度同じ時刻に、勞働者住宅地の何百軒といふ家々に燈火がついた。町の通りでは話し聲がし、囁く聲がした。あの驚いた人達の囁きである。さういふ囁きは、ぐつすり寝てゐる人の耳にも、不思議と聞えて來た。女達が走り寄つてかたまる。南住宅地からも北住宅地からも、幾組も女や男が、眞黒に塊まつた組が、高臺のきら／＼光る硝子屋根を目覓けて、中央事務所へ押寄せて來た。

何喰はぬ顔で、徒らに高く突立つてゐるビルディングの前に皆は集まつたが、その内に非常に大勢の群集になつて

ハリマンの顔には、かつと血が上つた。その眼は、顔から飛び出しさうに怒つた。ハリマンはちつと考へた。何かしやべらうと思つた。けれども頭が言ふ事をきかない、考へる力が無い。そこでハリマンはそこを退いて、扉を強く締めて行つてしまつた。

すると一つの石が空中を飛んで、地階の硝子戸を一枚破つた。一人の書記が、驚いて其處を逃げ出すのが見えた。

「ハリマン。ハリマンを出せ。」

ハリマンはまた戸口に現れた。ハリマンは冷たい水を浴びてきて、いくらかはつきりした氣持になつて來たのである。その顔は白髪の下で、蟹のやうに赤く見えた。

「何で莫迦な事をする。窓をぶち割つたりするんだ。」とハリマンは聲高く叫んだ。「先刻言つた事の外は、それ以上何も分らんのだ。聞き分けが無くつては困るぢやないか。」

あつちこつちで叫んだ。「死人が幾人か、それを聞かせろ。誰が死んだのか。その名前を。」

「君達はみんな莫迦の集まりだぞ、君達女は。」とハリマンは怒つて、「そんな事が今分つてたまるもんか。」と言つてから、ゆつくり後を向いて、齒の間で何か呪ふやうな言葉

を言ひながら、また建物の中へ戻つて行つた。

「ハリマン。ハリマンを出せ。」

女達は押寄せた。

急に石が雨霰と飛んだ。平生は何も考へずに法律に従ふ民衆も、かういふ場合には生れ附いて持つてゐる正義の感情で、勝手な法規を拵へて、しかもそれを即座に用ゐるものである。今の場合がそれだ。

ハリマンがまた現れた。大いに怒つてゐる。けれども一口も口を利かない。

「その電報を見せてくれ。」

ハリマンは突立つたまゝである。「電報か。電報は受取らん。電話で報告があつたんだ。」

「それを見せろ。」

ハリマンは顔色一つ變へない。「よし、見せよう。」二分ばかりすると、また出て来た。手には電話の覚え書の帳面から剝がした一枚の紙切れを持つて、それを大聲に讀み聞かせた。遠くの方の人にも、ハリマンの張り上げて言ふ言葉が聞えた。「掘鑿機……南地下道……爆破の際に爆破……死者二十乃至三十名及び負傷者……ホッピイ。」

讀んでしまふと、ハリマンはその紙切れを直ぐ傍の連中

に渡して、また中へ戻つて行つた。

その紙切れは忽ち細かく引き裂かれてしまつた。大勢が同時に讀まうとしたからだ。暫くの間群集は落ち着いたやうであつた。死者二十乃至三十名……これだけでも相當恐ろしいが、大した惨事ではない。だから今度もいつかのやうに助かつてゐるかも知れない。それに丁度うちの人、掘鑿機の所で仕事してたつて、誰も言つてやしないもの。こんな事を思ふと、ホッピイが電話で報告したといふ状態に皆は安心した。

けれどもまだ女達は家へ歸らない。どうも、變だ。女達の前の不安が戻つて来た。眼は血走り、胸は動悸がする。何か重いものがみんなの頭の上に載つかつてゐる。皆びくびくしたやうな視線で、互ひに見合つてゐた。

もしハリマンの言葉が嘘であつたら……

こつちへ上つて歸つて来る列車の停車場へ、皆はどつと押寄せた。體は震へ、寒さに縮こまりながら、頭巾や毛布を冠つて待つてゐた。その停車場から見ると、線路がずつと下つて行つて、そこでトンネルの入口になる。濕つたレエルはアアク燈の光に照らされて輝いて、レエルの先が合して細い一本の線になるあたりまで見える。ずつと下の方

に、二つの灰色の穴が明いてゐる。その一つの穴に光が射した。はつきりしないが、つと明るく射した。一つの箭光が出て来たと思ふと、忽ち一つ眼の巨神のやうなきら／＼光る一つ眼が見え出した。列車が線路の上を、こつちの方へ昇つて来た。

列車の往來は、まだ平生と少しも變りは無い。材料列車は同じ間隔を置いて、何度も中へ下りて行つた。ただ岩石列車の方はその間隔が不規則で、或る時は一列車、或る時は三列車、五列車、十列車も續いてくる事があるが、その不規則はいつも同じである。全然いつもの通りだ。六年間夜晝やつて来た通りだ。その光景は、誰も彼もが何千度も見たことのある同じ景色だ。けれども皆は昇つてくる列車を一々ぢつと見詰めて、心は益々緊張して来た。

或る列車で交代の連中が着くと、その連中は忽ち取巻かれて、質問の暴風雨に會つた。けれどもこの連中は何も知らない。その時分には、發車してゐたからだ。

惨事の後十分も経たない中に、その噂が知れ渡つたのは、どういふ譯か説明がつかなくかつた。後で分つたが、それは或る技師が不注意にも一言洩らして、思はず知らず電話口へ叫んだからである。けれどもこんな事情は、今誰も知ら

なかつた。あの報告以上の事は何一つ知らなかつた。その報告は、いかにも大事さうに、口から口へと傳へられた。

材料列車も、交代の人数を載せた列車も、六時迄は、規則正しく時間を置いて、トンネルの中へはひつて行つた。(これらの列車は、命令によつて、五十キロメートルの所まで送られた。)

六時になると、出發準備の出來た連中に向つて、材料列車が一つ脱線したから、それを片付けるまで待つて居る、だが出發準備は整へて置けと傳へられた。もう何度も經驗のある古株連は頷いて、お互ひに眼と眼を見合はせた。中の様子はどうも悪いらしい、困つたな、とその眼は言つた。

女達には停車場を立退けと命令されたが、その命令に従はうともしない。身動きもせず立つてゐる。レエルが蜘蛛の巢のやうに集つてゐるその場所へ、本能の力で螺旋でねぢ付けられたやうだ。そして線路のずつと下の方を見詰めたまゝだ。群集は益々大勢増して来た。子供達、大きい少年、勞働者、見物人。

この間にもトンネルは、絶え間なく、岩石を吐き出してゐた。

突然群集が氣が付くと、材料列車の入つて行く回数が少

くなり、何か頻りにがや／＼騒ぐ聲が渦巻き上つて来た。やがてその次には、もう材料列車は一輛も入つて行かなくなつた。群集は益々不安になつた。もう誰も、脱線した一列車が線路を塞いでゐるといふ、お伽噺のやうな話を本氣にする者は無くなつた。毎日そんな脱線があつても、列車は同じ敷だけトンネルに入つて行くからだ。そんな事は誰も知つてゐた。

やがて夜が明けた。

紐育の各新聞は、早速この大惨事を記事にした。「大西洋の海水トンネルに侵入す。死者一萬人。」

日光が冷たく光つて、海の上をこつちへ射して来た。電燈は一時に消えてしまつた。唯ずつと向うの波止場には、急に汽船の煙突から黒煙が上ると見ると、其處にまだ廻轉式燈臺が消すのを忘れたやうに廻轉してゐた。暫らくするとその光も消えてしまつた。輝いてゐる時は、童話の中の都のやうなこの都市も、今はひどく見すばらしい町に見えた。冷たさうなレールの網。列車の海。電信柱。所々に無暗に高いビルディングがあつて、その上に灰色の雲が低く垂れこめてゐる。誰の顔も、徹夜したやうに黄色く、硬ばつ

て、寒さに蒼くなつて見える。海からは冷たい光と共に氷のやうな氣流と冷たい霧雨が遣つて来た。女達は自分の子供を、上衣や頭巾や毛布を取りに家へ遣つた。けれども自分達は、その場所から一足も離れようとしなかつた。

この時分になると、下から飛び出す岩石列車には、どれも人間が乗つてゐた。たつた今出發したばかりの材料列車や労働者列車も戻されて来た。

興奮は愈々高まつて来た。

けれども、上つて出て来た連中は、惨事のあつた場所がどれ位の延長なのか、その點は全く知らない。その連中の言ふのには、向うからどし／＼出てくる連中があるから、それでおれ達も先に出来たばかりだといふ。

さうなると女達はまた不安になつた。とても堪らなく心配になつて、下の方の、あの小さい黒い二つの穴を見詰めた。まるでその穴は、二つの腐つた眼だ。狡猾な眼だ。そこから不幸や恐怖が目を剝いて睨んで、上を向いてゐるらしく見えた。

九時頃に来た列車が皮切りで、それから後ののは皆さうだが、九時の列車には人と人がぎつしり詰まつて乗つて、それが皆興奮して、列車の停まるか停まらぬうちから何か身

振りをしてゐる。この連中はトンネルの奥から来たのだ。奥ではあるが、あの恐慌の事實が傳はつて、それに恐れ震へて出て来た最初の連中だ。みんな嗚鳴る。吼える。「トンネルが火事だぞ。」

恐るべき叫喚、恐るべき咆哮が擧がつた。群集は轉がるやうに前に出た。あつちでもこつちでも前へ出た。

そこへハリマンが貨車の上に現れて、帽子を振つて何か叫んだ。朝の光りにハリマンは死骸のやうに見える。眞蒼な顔で、血の氣はない。その様子を誰も惨事の爲めだと思つた。

「ハリマンだ。靜かにしろ。何か言ふんだ。」

「わしは誓ふ。これからわしの言ふ事は眞實の眞相だぞ。」群集が靜まると、ハリマンはかう叫んだ。その言葉毎にハリマンの口から濃い湯氣が飛び出した。「トンネルが火事だなんぞと、そんな莫迦な話はない。コンクリイトも鐵も、燃える筈はないぢやないか。爆破によつて掘鑿機の後柱が二三本、少し參つてゐた柱が燃えたんだ。その話が傳はり傳はつて、あんな大層もない恐慌になつたんだぞ。もう既に技師連中が消しにかゝつて居る。だからみんなも、別に……」

かう聞いても、皆はハリマンを終りまでしやべらせなかつた。狂暴な叫びと口笛が起つて、ハリマンの言ふのを妨害し、女達は石を擲んだ。ハリマンは貨車から飛び下りて、停車場へ戻つて、ぐつたりと椅子に力無く腰掛けた。

ハリマンはかう思つた。もう何もかも、おれには手の付けようが無い。今此處で、この地上で、ひどい惨事が起らんやうにする者は、たゞアランばかりだ。

けれどもアランは、晩にならなければ此處へは歸つては來ない。

殺風景な寒い停車場のホオルには、技師や醫者や事務員が集まつてゐた。皆救助作業の準備を整へようとして、大急ぎに駆け付けて来た人達である。

ハリマンは催眠藥の力を消してしまはうと、眞黒な珈琲を一リットルも飲んだ。嘔吐をして、二度ばかり卒倒した。

大體ハリマンのすべき事は、どんな事だ。ハリマンが耳に入れた事の中で、たつた一つ信用して好い報告があつた。それはベエルマンからの知らせだ。ベエルマンに代つて、或る技師が第十六停車場から電話で言つて寄越した知らせだ。

ベエルマンの意見によると、木造地下道の柱が、熱のた

め自然發火をして、その火が爆薬に移つて爆發をさせたものだらうといふ。それは一應領ける理窟だ。けれどもさうならさうで、その爆音は、第十二停車場まで聞えた位、あんなひどい音である筈がない。

ハリマンは救助列車を中へ送つたが、その列車は皆戻つて来た。四本の平行線上を走る列車が、すべてトンネルの外に向つてゐるので、押し戻されて出て来たのである。

ハリマンは四時三十分のアランに電報を打つたが、その電報は、紐育、バッフロ間を走る列車の寢臺車にゐるアランに届いた。アランは返電を打つた。特別列車で急いで歸る。爆發などする筈はない。爆薬は火の中で初めて燃え出すものだ。しかもその爆薬さへも、機械の中にある量は實に少い。救助列車をどし／＼出せ。各停車場に技師を配置せよ。燃えてゐる地下道を、水びたしにしてしまへ。

アランはさう言ふだけだから、何とでも言へよう。差當りたつた一列車でも、トンネル内へ送る事は全然不可能であつた。けれども一方にハリマンは早速手配させて、外に向つて走る線の列車だけでも、整然と出てくるやうにしたのである。

もう誰からも電話がかゝらない。たゞ第十五、第十六、

第十八の停車場には、まだ技師がゐて、そこから報告は来たが、どの列車もどの列車も通過するといふ事だけであつた。暫くすると、線路には何も走らなくなつた。そこでハリマンはトンネルの中へ救助列車を四列車續け様に送つた。群集はさういふ列車が前を通るのを、陰鬱な顔で見送つた。

女達は幾人も、技師達に向つて口汚く罵つた。皆の氣持は、一分々々と興奮して来た。けれどもその内に、十時近くになると、「煉獄」からの労働者を載せた、最初の列車が到着した。

さうなると、この大惨事は、誰が想像したよりもずつと恐るべき結果だといふ事が分つて来て、誰一人疑ふ者もなくなつた。

次第に幾列車もやつて来た。その中には、こんな事を囁鳴る連中がゐた。「一番先つぼの三十キロの間の奴は、みんなくたばつたぞ。」

四

トンネルから歸つた連中は、黄色い顔を泥や埃で滅茶滅茶に汚してゐるが、その連中は皆に取巻かれて質問の暴風

雨に逢つた。けれどもその質問の一つにも答へることは出来ない。訊かれる事は、まるで知らない事ばかりだ。仕方がないからこの大惨事について知つてゐる限りの事をしゃべると、それを又何百回もしやべらねばならなかつた。しかもその事は二口か三口で言へてしまふ事だ。亭主に逢へた女房達は、頸へかじり付いて、その喜びを平氣で見せた。誰にも隠さない。まだ恐ろしい不安に包まれてゐる、外の女達に向つても隠さない。心配を顔に浮べた女達は、何度でも同じ事を、誰かうちの人を見掛けた者はないかといふ事を訊いてみた。ちつとして靜かに泣いてゐるかと思ふと、あつちこつち走り廻る。叫ぶ。呪ふ。その内にまたちつと立止まつて、下の線路の方から目を放さない。やがて又心配に追立てられて、もう一度走り廻る。

皆はまだ／＼望みを失はないでゐた。あの「先つぼの三十キロの間の人は皆死んだ。」といふ話は、大袈裟に言つた話だと分つたからだ。

やがて遂にあの列車が到着した。技師のベエルマンが誰かに射ち殺されるまで頑張つて、長い間出發させまいとした、あの列車だ。この列車は伊太利人の死骸を一つ載せて来たが、これが列車の運んで来た最初の死骸であつた。けれ

どもこの伊太利人は大惨事の爲めに命を取られたのではない。この男は同じ伊太利人の友達と小刀を揮つて猛烈な斬り合ひを演じた。それは貨車の上の席を争つたのだ。この男が勝つて、その同國人を刺し倒した。するとこの友達は跳ね起きると飛びかゝつて、この男の體を引裂いたといふ位にひどく遣つ付けた。この伊太利人は出坑の途中で死んだのである。兎も角、この男が最初の死者だ。エヂソン・ピオ會社の撮影技師は、ハンドルを廻した。

この死骸が停車場ビルディングに擔ぎ込まれると、群集の間に爆發が起つた。精神的爆發だ。憤怒が燃え上がったのだ。忽ち皆はトンネルの中にある連中と同じやうに叫んだ。「マックは何處だ。マックの奴、思ひ知らせて遣るぞ。」するとこの時に、ヒステリックの甲高な聲を擧げて、一人の女房が女連の間を掻きわけて来て、髪の毛をかき捲り、寢巻を引裂きながら、その死骸の方へ駈け寄つた。

「チエザレ、チエザレ、まあお前は……」さうだ、やつぱりチエザレだ。

ベエルマンの列車に乗つて来た、興奮した労働者達の大部分は、伊太利人と黒人であつたが、後からはもう一列車も来ないと言つた時には……びつたり靜まつてしまつた。

「汽車はもう来ないのか。」

「おれ達が一番おしまひだ。」

「お前さん達が何だつて。」

「一番おしまひだ。おれ達が一番おしまひだ。」

散弾の霰が、群集の上へ落ちたやうな騒ぎになつた。皆あつちこつちに走つた。夢中で、ぼんやりして、弾丸が頭に當つたやうに顛顛を両手で押へてゐる。

「一番おしまひだ。あの連中が一番おしまひだ。」

女達は地面に伏して悲嘆に暮れた。子供達はわつと泣出した。けれども他の人達には、すぐ復讐心が燃え立つた。

この凄大群集は急に動き始めた。群集の上を雲のやうに包んでゐるものは、叫喚と騒音の交つた音だ。

軍人らしい髭をした、皮膚の色の浅黒い、角張つた體付の波蘭人が、石塊の上昇つて吼えた。「マックの奴が、みんなを鼠捕りにかけやがつたんだ……鼠捕りによ……仲間連中のため復讐しろ。」

群集は暴れ出した。急に手といふ手には、皆石を持つた。石は民衆の武器だ。その石は此處に澤山あつた。(大都市の往來をアスファルトにしたがる理由の一つは、或はこの邊だらう。)

三秒経つと、停車場ビルディングには、一つとして満足な窓が無くなつた。

「ハリマンを出しやあがれ。」

ハリマンは姿を見せない。

ハリマンはたつた今軍隊に電話をかけたところである。僅かばかりのトンネル都市の警官では、無力に等しいからだ。今ハリマンは片隅に蒼然たる顔で喘ぎながら腰掛けてゐる。考へようとしても、何も考へることが出来ない。

群集はハリマンを罵つて、この建物を襲撃しようとする勢を見せた。けれどもその時だ。波蘭人はもつと他の事を提議した。技師の連中もみんな同罪だ。だからその連中の家の天邊へでも火をつけて、女房子供を焼き殺さうといふのである。

「何千人も、何千人も死んだ。」

「あいつ等をみんな遣つ付けちまふんだ」と叫んだのは、夫を殺された、あの伊太利女である。「一人残らずだ。チエザレの敵打ちだ。」さう言つてこの女は、先に立つて走つた。着物は裂け、髪は掻き捲られ、ひどい形相になつた。

群集は何とも分らない騒音に包まれた一團となつて、石塊の原の上を、灰色の雨を衝いて轉がるやうに進んだ。夫

が、一家の稼ぎ手が、父が、それが死んだ……困つた。情無い。敵打た。騒々しい叫喚の間に歌が切れぎれに聞える。いろんな場所の一塊りづつが、同時にマルセイユ、インタアナショナル、合衆國の歌を思ひくく歌ひ出した。「死んだ、死んだ、何千人も死んだ。」

興奮した群集には、破壊しろ、打倒せ、殺せといふ盲目滅亡な憤怒が燃えた。レエルは引起された。電信柱は押倒された。見張小屋は掃き飛ばされたやうに無くなつた。碎けたり折れたりする音が聞える。粉々になつて飛んでしまふのが見える。荒々しい鬨の聲が、どつと擧がる。警官達は石ころを投げ付けられ、口笛を吹かれ、追ひまくられた。誰も彼も急に自分達の悲みを、怒りの餘りに忘れたやうであつた。

けれども先頭に突進するのは、最も亂暴な連中だ。野獸のやうになつて、氣の狂つたやうな女達だ。それがみんな技師連の家や別荘を目がけた。

この時海底の下では、あの無茶苦茶な競走が續いてゐた。轉がり落ちる岩石と火と煙の中を、まだ生きてゐる連中は絶えず前へへと走つた。熱い息を吹きかけながら追つか

けてくる死神に、追ひ附かれないやうに走つてゐるのだ。トンネルの奥には、時々たつた一人の人間が髪を逆立て、齒を噛み合せながら、よろ／＼前へ遣つて来る。二人宛の組が喚いたり泣いたりして来る。幾人も塊まつて續いて、肺臓をひゅう／＼言はせて喘いで遣つて来る。負傷者や手足を取られた者は、地面に倒れて助けを呼ぶ。この恐ろしい長い旅を歩いて行ける人間は無いと思ふと、もう痲痺したやうに立止まる者がうんとあつた。諦めてしまつて、其處に横になつて、死ぬのを待つものが澤山ある。けれども又どし／＼走る者もあつた。その連中は股を馬のやうに振つて、ひよろ／＼と草臥れた連中から、羨しがられ呪はれながら、ずん／＼人を追ひ越して行く。

救助列車が警鈴をけたましく鳴らして、こつちへ来いと合圖をした。暗闇の中から幾人も飛び出して、助かつた事に興奮して駈泣きながら列車に飛び付いた。けれどもこの列車は、トンネルの奥へ入つてゆくので、その連中は暫くすると驚いて跳び降りた。第二の列車の處まで歩いて行かうとするが、その第二の列車は、五哩の向うに待つてゐた。

その救助列車は、實にのろ／＼と前進した。最後にトンネルを出た列車に乗つてゐた狼狽した連中は、貨車の上の

場所を廣くしようとして、構はず岩石を投げ出したので、さういふ線路を先づ綺麗に片付けなければならなかつた。そこへ煙が来た。目でも何でも痛む。ひり／＼する。呼吸が苦しくなる。けれども列車は前進した。濃い煙が壁のやうになつて、照明燈の光りが、その煙の壁を突抜けられないやうな邊まで達した。この救助列車には、命を物とも思はない勇敢な技師達が乗つてゐた。技師達は列車から飛び降りて、防煙マスクを着けて、煙の籠つた地下道をもつと奥へ急いで行つた。手に／＼警鈴を振つた。この連中が進んで行くと、何もかも諦め切つて、疲れ果てた小人数の組に出逢つた。そこでもう千メートル歩けば、列車に着くのだと激励して、最後の努力を出させることが出来た。

ところがこの列車も後退りしなければならなくなつた。技師連の中で大勢煙の中毒に襲はれた。その中の二人は、夜に入つて病院で死んだ。

五

この日の朝、モオドは大いに寝坊をした。看護婦が旅行に出たので、その代りに病院で働いて、やつと二時頃に寢たのである。そして目を覚ますと、小さいエディスは、自

分の小さい寢床の上に坐つてゐて、退屈紛れに、綺麗なブルンドの髪を、細いお下げに編んでゐた。

二人がおしやべりを始めたかと思ふと、そこへ女中が入つて来て、モオドに電報を渡した。女中は不安さうな眼をしながら、トネルに大變な事が起りましたと言つた。

「なぜ、この電報を早く持つて來なかつたんだい。」モオドは多少腹が立つてかう訊いた。

「わたくしの所へも旦那様から電報でございまして、奥様をお起しなないように、といふ事でございましたので。」

電報はアランが途中から寄越したものであつた。「トネルに大變事起つた。家を離れるな。夕六時歸る。」

モオドは眞蒼になつた。ホッピーは、とモオドは思つた。

モオドの頭に最初に浮んだのはホッピーであつた。ホッピーは夕食をすますと、トネルに入つて行つた。モオドと別れる時のホッピーは、上機嫌で冗談などを言つてゐたが……

「母ちゃん、どうしたの。」

「トネルで何か大變な事があつたのよ。」

「大勢死んだの。」如何にも可愛らしい、子供らしい身振りで、お下げを編みながら、エディスは歌ふやうな聲で軽くかう訊いた。

モオドは何とも返辭しない。前の方をぢつと見てゐるばかりである。あの時分あの方は、トネルのずつと奥の方へ行つてらしたか知らん。

するとその時エディスは、モオドの頸筋へ抱き附いて、慰め顔にかう言つた。

「心配しなくつていゝ事よ。だつてパパは、バッファロオにいらつしやるんですもの。」

エディスは笑つた。パパは大丈夫だといふ事を、モオドに信じさせよう爲めである。

モオドは水浴用の外套を急いで着て、中央事務所へ電話をかけた。随分暫く経つて、やつと電話が繋がれた。けれども其處の人達は何にも知らない、といふより何にも知らうと思はないらしいのである。ホッピーさんはと聞けば、ホッピーさんに就いては、まるつきりまだ報知はありませんと言ふ。

モオドの眼には涙が出て來た。何人に見られても悪い涙である。慌だしく拭ふ涙である。モオドは不安になつて興奮しながら、エディスと一緒に水浴をした。二人はこの樂みを毎朝するのである。モオドも矢張りエディスと同様に子供らしい喜びを感じては、水の中で水を撥ね飛ばすので

ある。浴室で笑つたり叫んだりする。さうするとその聲は實によく反響する。又湯氣のやうに煙が立つてゐる灌水栓からしやあ／＼と水を出す……すると身體は冷たく、段々冷たくなつて來る。小さいエディスは、水のやうに冷たくなるので、まるで誰かに擦られてもゐるやうに笑ひ出してしまふのである。その次には朝のお化粧、それから朝食。かういふ一時間は、モオドの一番楽しい時間で、決してこれだけの事を缺かしたことはなかつた。朝食の後で、エディスは「學校」へ行く。その學校といふのはエディスの部屋で、それが教室で、黒板がある……エディスの望みでさうしたのである……それから、小さい本當の學校用の腰掛がある。かうでもして無ければ學校でも何でもないだらう。

今日ばかりはモオドは水浴を早々に切り上げたが、氣持が好いといふ事は全然無かつた。エディスは考へられるだけの智慧を搾つて母の元氣を付けようとしたが、そのいぢらしい心盡しにはモオドはもう少しの所で涙が出る位だつた。水浴が済むと、モオドはまた中央事務所へ電話をかけた。やうやくの事でハリマンと話をすることが出来たが、その話によると、今度の慘事は残念ながら今迄に無い大き

いものだと言ふ。

モオドは益々不安になつた。この時やつとアランの變な注意を思ひ出した。「家を離れるな。」何故だらう。アランといふ人はどうも分らない人。そこでモオドは庭を通つて病院へ出掛けて行つて、仕事をしてゐる看護婦達と囁くやうな小聲で話をした。此處にも亦、不安な氣持と、驚いて呆然とした様子がある。モオドは又子供の患者と少しばかりお喋りしたけれど、何が何だかすつかりぼんやりしてゐたから、丁度うまい言葉は少しも出て來なかつた。結局モオドは、不安と興奮が一層増したゞけの事で、自分の部屋へ歸つて來た。

「何故あたしが家を離れちやいけないんでせう。」とモオドは考へた。「出てはいけないなんて事を、あたしに指圖するのは、アランもあんまりだわ。」

もう一度電話をかけてみたが、どうしても通じなかつた。そこでモオドは頭巾を手を取つた。「あたし、見て來よう。」と小聲でモオドは獨言をいつた。「アランが何て言つたつて構やしないわ。何故あたしが家にゐなきやいけないんでせう。こんな時なのに、みんなのお上さん達はきつと心配してゐる、丁度今誰かゞ遣つて來て話し掛けてくれ、

ばい」と思つてるに違ひない。」

モオドは頭巾を手から放した。そして寢室からアランの電報を持つて來て、何度も何度も讀み返した。成程さうは書いてあるが、一體何故だらう。どういふ譯なんだらう。

慘事があんまりひどかつたから知ら。

さうかも知れない。だけどそれならその時こそ引込んでほられない。大急ぎでお上さん達や子供達の所へ行つて遣るのが、モオドの務めなのだ。かう思つて來ると、モオドは忽ちアランが憎らしくなつた、出掛けようと決心した。どんな事が起つたか實際を知りたいのである。けれどもまだモオドは躊躇してゐた。アランの不思議な指圖に背くことは思ひ切つて出來ないのである。するとその次にはモオドの心にひそかな或る心配が湧いて來た。自分でも何故かわからない心配である。到頭決心してモオドは黄色のゴム引外套をすりと着て頭巾を頭に巻き付けたのである。

モオドは出掛けた。

けれども戸口まで來ると、急に何だか心配になつて來た。丁度かういふ日に小さいエディスを獨りぼつちにして置いて行くことが心配になつて來た。あゝ、アランよ、あんな電

報を寄越したばかりに、飛んでもない事が起つてしまつた。その凶變はお前が起したやうなものだ。

モオドは「學校」からエディスを連れて來て、合羽を着せて遣り、それに付いてゐる頭巾を、喜び勇んでゐる娘のブルンドの髪の手へ冠せて遣つた。

「一時間ばかりで歸つて來ますよ。」モオドはかう言つて、二人連れで出て行つた。

濕つてゐる庭の小徑へ、蛙が一匹跳び出して來た。それを踏み付けさうになつたので、モオドはびつくりした。

エディスは喜んで叫んだ。「あ、ちつちやい蛙よ、ママ。なんて濡れてる身體でしよ、雨が降ると何故出て來るの。」

その日はじめな、厭な、呪ひたくなるやうな日だつた。通りへ出ると風がひどく吹き付けて來るので、雨は斜めに落ちて來て冷たかつた。「昨日はあんなに暖かだつたのに。」とモオドは思つた。エディスは大悦びで、大膽に水溜りを踏み付けて行つた。數分経つとトネル都市が見えて來た。事務所のビルディングがある、煙突がある、森のやうに澤山の電信柱がある。その都市は雨と泥の中で灰色に

淋しく見えてゐた。すぐにモオドが氣が付いた事には、岩石を積んだ列車が一つも走つてゐない。こんな事は何年に

もない話である。尤も煙突からはいつものやうに煙が上つてゐた。

丁度慘事の起つた場所にあの方がいらしたなんて、そんな事はない、とモオドは心に思つた。トネルは随分大きいんだもの。けれどもモオドの心の中には、様々な脅かすやうな考へが滅茶々に駆け廻つてゐた。急にモオドは立ち止つた。

「聞いて、御覽。」とモオドは言ふ。エディスは耳を傾けながら母を見上げた。

ざわ／＼した聲が聞えて來る。やがて直ぐ人間までも見えて來た。灰色の一群だ、何千といふ頭がある一群だ。それが動いてゐる。しかし、どの方向へ向つてゐるのか、雨に煙つてさつぱり分らない。

「何故みんな大きい聲を出してるの。」とエディスは訊いた。「大變な事があつたのでみんな心配してるのよ、ねえ。ちつちやい子供達のお父ちゃんやんが危い目に逢つてゐると、みんなお母さん達が心配するのよ。」

エディスは頷いたが、暫くしてかう言ふ。「きつとねえ、随分ひどい事があつたのねえ。」

モオドは身體が震へ出した。

「やうかも知れないわね。」心には、いろんな事を思ひながら、モオドはかう答へた。「随分酷い事だつたらしいわね。さあ、もつと早く行きませうよ。」モオドは歩き出したが、何をしようと思つてゐたかといへば……さうだ、何をしようと思つてゐたのであらう。モオドは何かしらしたくつて堪らなかつたのである。……

モオドは急に気が付いてびつくりした。大勢の人達がこつちの方へ来るではないか。叫び聲は大きくなつた。又モオドが見ると、たつた今迄眞直ぐに立つてゐた一本の電柱が、倒れて消えてなくなつてしまつた。モオドの頭の上の電線がふるへてゐる。

頻りとエディスは質問を發したが、そんな事にモオドは構ひ付けなかつた。たゞ興奮して早足に進んで行つた。みんな何をしたんだらう。何が起つたんだらう。モオドの頭の中は熱くなつた。ほんの一寸の間だけはかう思つた。家へ歸つて、アランの命令通り家に閉ぢ籠つてゐよう、と。

けれどもモオドには、他人の不幸を目の前に見たくないばかりに、不幸な人達の所から逃げ出すのは卑怯な事のやうに思はれた。大して役に立つといふ程ではないが、何かしらあたしだつてきつと出来る。みんな女でも男でもあ

たしを知つてゐて、いつも何處へ行つても、みんなが一寸した用事をあたしに頼む位だ。アランがこの場合此處に居合せたら、どうするだらう。きつとアランはみんなの眞中に飛び込んで行く……とモオドは思つた。

轉がるやうに群集はこつちに遣つて来る。

「何故みんな、あんなに大きい聲をするの。」エディスは心配し始めて、かう訊く。「それから、ママ、何故みんな歌を歌ふの。」

さうだ、本當にみんなは歌を歌つてゐる。咆えてゐるやうな滅茶苦茶な歌が、群集と一緒に遣つて来る。嗚鳴る聲や叫ぶ聲が、その中から出て来る。それは一つの大軍だ。それが思ひ／＼に、灰色をした瓦礫の野原に散らばつて来るのだ。するとモオドは、その一分隊が石を投げ付けて、一つの機關車を破壊するのを見た。

「ママ……」

「あれはどうした事だらう。出て来なければよかつた。」とモオドは思ひながら、びつくりして立ち止つてゐた。もう今となつては歸つて行けない、遅過ぎる……

二人は見付けられた。モオドの目にはかう見えた。先頭の者達が兩腕をこつちへ差伸ばして急に道を變へてこつち

へ遣つて来るのである。又モオドが驚いた事には、その連中は走つて来る、駈けて来るのである。だがモオドは連中の大部分が女だと分つたので、また気がしつかりした。「女ばかりなんだもの……」

急にこの憐れな女達に對する限りない同情の念が湧いて来て、モオドはみんなの方へ向つて行つた。……何かきつと恐ろしい事が起つたに相違ないわ……

先頭の女の一隊は、息せき切つて遣つて来た。

「一體どんな事が起つたの。」とモオドは叫んだが、このモオドの同情には微塵も偽りは無かつた。それなのにどうだらう、女達の顔付は、モオドは見て驚いて眞蒼になつた。誰も彼も氣違ひのやうに見える、只ならぬ様子だ。雨をぼた／＼垂らして、まるで半分裸である。誰の眼にも荒々しい火が燃えてゐる。

モオドの言葉は誰も耳に入れはしなかつた。誰も返辭をしなかつた。みんなは口を曲げて、勝ち誇つたやうに鋭く嗚鳴つた。

「みんな死んだよ。」かう言ふ聲が、あらゆる調子、あらゆる國語でモオドの耳へ響いて来た。やがて、急に一人の女の聲が叫んだ。「こいつ、アランのお上さんだよ、ぶち殺

せ。」

その時モオドの見たものは……自分の目を疑つた位であつたが……かうであつた。襦袢を下げた女が、ずた／＼になつた襦袢一枚で、憤怒のために數腕になつたやうな目をして、石を一つ拾つたのである。石は空中を音を立て、飛んで来た。それがモオドの腕をかすつた。

モオドは本能的に、小さい青くなつてゐるエディスをしつかり引寄せて、身體を眞直に立つた。

「一體お前達にアランが何をしたといふの。」と叫んだ。その眼は心配しきつて、あたりを見廻した。誰もモオドの言葉を聞いてくれない。

狂つてゐるやうなみんなは、荒れ狂ふ群集の全部の者は、悉くモオドが今前にゐるといふ事を知つた。たつた一人の咆えてゐるやうな叫びが上つた。急にあらゆる方向から、石が飛んで来た。モオドは恐怖に襲はれて、身體中が震へた。皆がしてゐる事は、本氣なのだ今分つたのである。

モオドは後を向いた。けれどもどこにも群集が居た。十歩ばかりの距離を置いてゐる。モオドは包圍されてゐるのだ。モオドは周圍の眼といふ眼の中へ助けを乞ふやうに、迷つたやうな驚いてしまつた視線を送つたが、その眼は悉く

同じ火の光に憎悪と狂気に燃えてゐるのである。モオドは祈り始めた。冷たい汗が、その額から流れ落ちた。「神様……神様……この子をお守り下さいまし。」
けれども一人の女の聲が叫び續けて止まうとしない。鋭い警笛のやうに、「ぶち殺してしまへ。アランに思ひ知らせて遣れ。」

その中エデイスの胸へ、石ころが一つ當つた。あまり激しく當つたのでよろ／＼した。

小さいエデイスは泣かなかつた。只その小さな手がモオドの手に握られてゐながら、びくつと動いたばかりで、エデイスは驚いて母の顔を見上げた。びつくりした眼付で。

「まあお前さん達は何をやるの。」とモオドは叫んで、蹲つてエデイスを抱き緊めた。すると心配と絶望で、涙がモオドの眼から流れ出た。

「アランに思ひ知らせて遣れ。」

「アランの奴、かうだつて事を知るがい。」

彼處にも、此處にも、みんな狂ひ出したやうな身體と無慈悲な眼付。手に手に石を投げる……

モオドが卑怯な女だつたなら膝を衝いて手を差し伸べたかも知れない。恐らくモオドはこの氣違ひのやうな人々の

心の中に、人間的感情を呼び返すことが、最後の危い瀬戸際にも出来たであらう。けれどもモオドは、小柄な感傷的なモオドは、急に勇氣が出て來た。口から血を出して死人のやうに蒼白くなつたエデイスを見たからである。石は雨霰と飛んで來た。けれどもモオドは決して憐れみを乞ひはしなかつた。

急に狂つたやうになつてモオドは眞直ぐに立ち上つた。子供をぐつと引寄せて、憎みに一杯になつた周囲の顔を一火の出るやうな眼付で見返しなからモオドは叫んだ。「お前達は畜生だ。卑しい人達だ。汚らしい下司の畜生だ。あたしにピストルがあつたら……お前達を打殺して遣る。犬のやうに打殺す。あ、畜生。卑怯な下劣な畜生。」

この時モオドの顛顛へ恐ろしい勢で投げた石が當つた。モオドは両手で空を掴みながら、一言も言はずに倒れて、エデイスの上へ折重つた。モオドは小柄で軽かつたが、材木でも倒れて水が撥ね上がった時のやうな音がした。

荒々しい咆えるやうな勝鬨が響き渡つた。嗚り聲だ。哄笑だ。口々にいろんな事を叫ぶのだ。「アランに思ひ知らせて遣れ。さうだ、思ひ知るがい、自分の身に思ひ知るがい……みんなをペテンにかけたあいつだ……何千人と

いふ人間を……」

もうかうなると石一つ投げる者はなかつた。狂つたやうな群集は急に遠退いて行つたのである。「その儘にして置けば、その内勝手に起きて行くよ。」地上に仆れてゐる二人の者へ、唯一人熱狂した伊太利の女が、胸を出して乳房を垂らしながら屈み込んで、唾を吐き掛けた。今度は技師の奴等の家だ。行け、進め。どいつもこいつも思ひ知らせて遣るんだ。ところがモオドを襲撃してしまふと、怒りの焰は冷めてしまつた。誰の心にも、今此處で何か順序に外れたやうな事が起つたらしいといふ暗い氣持が蟻つた。一群一群と離れて行つて、石ころの野原の上に散りぢりとなつてしまつた。何百人か残つたけれど、大して目に立たなかつた。その連中は躓きながら鐵道線路を横切つて行つた。例の伊太利人の女が率ゐてゐる先頭の怒り狂つてゐる一隊が、技師連中の別荘に達した頃には、もう皆溶けてなくなつたやうに少くなつてゐて、たつた一人の警官に喰ひ止められてしまつた程である。

みんな段々に散らばつてしまつた。

そこで又再び始まつたのは苦痛である。みじめな氣持である。絶望である。到る處に女達が前掛を顔に當て、泣き

ながら走つてゐた。雨の中を、風の中を走つてゐた。何かに躓くが、地面を見ようともしなかつた。

そのみんなも先程は何か得體の知れない群集的な狂氣といふやうなものに引摺られて、荒々しい、殘忍な、人を害しながら好い氣味と思ふやうな氣持で、モオドとエデイスの傍から離れて行つたのである。その二人の身體は暫くの間雨に打たれて、石ころの原の眞中に、誰にも顧みられずに横たはつてゐた。

やがて其處へ十二ばかりの女の子が、赤い靴下は下の方へずり落ちた儘で遣つて來た。この女の子は、みんなが「アランのお上さん」に石を投げてゐる所をずつと見てゐた。この子はモオドをちやんと知つてゐた。去年この子は幾週間も病院に入つてゐたからである。

偽りの無い人間的の衝動に驅られて、この女の子は傍へ遣つて來た。ずり落ちた靴下のまゝ立つて見てゐたが、近寄る勇氣はとも無かつた。少し離れた處に幾人かの男や女が立つてゐた。やはり近くへ寄るだけの元氣が出ないのである。到頭女の子は恐ろしいので眞蒼になりながら、もう少し近くへ寄つて行くと、低い呻き聲が聞えた。